

# HP Connect-It Software

ソフトウェアバージョン : 3.80

---

ユーザガイド



## 法的制限事項

### 保証

HP製品およびサービスに対する保証は、当該製品またはサービスに付帯する明示的保証条項でのみ規定されます。

本規定のいかなる部分も、他の保証を構成すると解釈されるものではありません。

HPは本書の技術上または編集上の誤謬、欠落についての責任を負わないものとします。

本書に含まれる内容は、予告なく変更される場合があります。

### 限定保証条項

機密コンピュータソフトウェア。

所有、使用、または複製するには、HPからの有効なライセンスが必要です。

FAR 12.211および12.212準拠。商用コンピュータソフトウェア、コンピュータソフトウェアマニュアル、技術データは、ベンダの標準商用ライセンスに基づき、米国政府にライセンス供与されています。

### Copyrights

© Copyright 1994-2007 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

### ブランド

- Adobe®, Adobe Photoshop® and Acrobat® are trademarks of Adobe Systems Incorporated.
- Corel® and Corel logo® are trademarks or registered trademarks of Corel Corporation or Corel Corporation Limited.
- Java™ is a US trademark of Sun Microsystems, Inc.
- Linux is a U.S. registered trademark of Linus Torvalds
- Microsoft®, Windows®, Windows NT® and Windows® XP are U.S. registered trademarks of Microsoft Corporation.
- Oracle® is a registered US trademark of Oracle Corporation, Redwood City, California.
- UNIX® is a registered trademark of The Open Group.

# 目次

<b>はじめに</b> . . . . .	<b>11</b>
Connect-Itの使用目的 . . . . .	11
Connect-Itの対象ユーザ . . . . .	12
本書の使用方法 . . . . .	12
<b>1. インストール</b> . . . . .	<b>15</b>
サポートされる動作環境 . . . . .	15
Connect-Itのインストール . . . . .	16
Connect-It Webのインストール . . . . .	20
メンテナンスバージョンのインストール . . . . .	30
認証証明書を入力する . . . . .	30
インストール内容 . . . . .	31
ハードウェア構成 . . . . .	36
インストールされるプログラム . . . . .	37
<b>2. 基本概念</b> . . . . .	<b>39</b>
データ処理 . . . . .	39
<b>3. Ergonomics</b> . . . . .	<b>41</b>
Scenario Builder . . . . .	41
メニュー . . . . .	48

<b>4. 統合シナリオのインプリメンテーション</b>	<b>59</b>
ウィザードでシナリオをインプリメントする	59
手動でシナリオをインプリメントする	60
シナリオオプションの編集	64
設定ファイルの編集	72
生成用または取り込み用ドキュメントタイプの定義	78
ドキュメントタイプのマッピングの定義	96
マッピングスクリプトの定義	124
管理モニタの定義	159
Connect-Itサービスの定義 (Windows環境)	174
コマンドラインサービスの定義	180
スケジュールの作成	181
シナリオを保存する	192
シナリオ文書	193
<b>5. 統合シナリオの管理</b>	<b>199</b>
既存シナリオを開く	199
シナリオの導入 (UNIX)	200
コマンドラインからのConnect-It	201
Connect-It Webの使用	209
お気に入り	216
シナリオの履歴	221
統合シナリオのテストとデバッグ	221
シナリオのトラッキングをServiceコンソールで管理する	254
シナリオの性能を最適化する	256
<b>6. モニタデータベース管理</b>	<b>271</b>
サポートされるDBMS	271
Connect-Itデータベースを設定するステップ	271
ユーザの管理	275
データベースの操作	276
後方互換性	276
<b>A. 問題点の報告方法</b>	<b>277</b>
一般的な情報	277
問題固有の情報	279
<b>B. 用語解説</b>	<b>281</b>
Connect-It用語	281
主要用語	292

索引 . . . . . 295



# 図の一覧表

1. Connect-It - アプリケーションのコンポーネント . . . . .	11
2.1. Connect-Itで、あるデータベースから別のデータベースへデータを転送する . . . . .	39
3.1. Scenario Builder - メインウィンドウ . . . . .	42
4.1. Scenario BuilderのToolbox . . . . .	60
4.2. シナリオでのツールのリンク . . . . .	61
4.3. リンクの作成またはコネクタの移動 . . . . .	62
4.4. ドキュメントタイプの要素 . . . . .	79
4.5. ドキュメントタイプのコレクション . . . . .	81
4.6. ドキュメントタイプのツリー構造 . . . . .	82
4.7. ServiceCenterコネクタの取り込み用ドキュメントタイプの編集 . . . . .	83
4.8. 使用可能なドキュメントタイプのゾーン . . . . .	84
4.9. 生成用ドキュメントタイプのデータプレビュー用ウィンドウ . . . . .	93
4.10. Edit mappingウィンドウ . . . . .	101
4.11. 作業枠上のマッピングスクリプトの要約 . . . . .	102
4.12. AssetCenterのコレクションを更新する . . . . .	104
4.13. マッピングスクリプト内のソース要素 . . . . .	112
4.14. コレクション . . . . .	113
4.15. コレクションからドキュメントへのマッピング . . . . .	116
4.16. フィールドからコレクションへのマッピング . . . . .	117
4.17. マップテーブルのエディタ . . . . .	125
4.18. テキストエディタの設定 . . . . .	128
4.19. 複数のフィールドをドラッグ&ドロップで移動させる . . . . .	154
4.20. Service Console . . . . .	176
4.21. Scheduler editor . . . . .	182

4.22. Schedule editウィンドウ . . . . .	186
4.23. マッピングの順番 . . . . .	187
5.1. Connect-Itログ . . . . .	223
5.2. Scenario Builder - Document logタブ . . . . .	224
5.3. 処理中に起こった問題 . . . . .	226
5.4. ドキュメントログ内のトラッキング項目へのフィルタ . . . . .	227
5.5. トラッキング項目のフィルタ . . . . .	227
5.6. ドキュメント内の記述文字列 . . . . .	228
5.7. ドキュメントタイプ詳細内のコレクションと、ドキュメント詳細内のコ レクション . . . . .	229
5.8. ServiceCenterコネクタによって取り込まれたpcsoftwareドキュメント の詳細部分 . . . . .	230
5.9. ノード下にトラッキング項目があることを意味する灰色のトラッキング 項目 . . . . .	233
5.10. ドキュメント詳細内のトラッキング項目用フィルタ . . . . .	233
5.11. コネクタ - キャッシュ使用を示すアイコン . . . . .	252
5.12. コネクタ - オフラインセッションを示すアイコン . . . . .	253
5.13. ドキュメントの処理 - 進行状況バー . . . . .	260



# 表の一覧表

1.1. オペレーティングシステムに従った推奨される最小メモリサイズ . . .	36
1.2. Connect-It Webの最小メモリ量 . . . . .	37
3.1. Scenario Builder - 一般ツールバーのアイコン . . . . .	43
3.2. Scenario Builder - お気に入りのツールバーのアイコン . . . . .	44
3.3. Scenario Builder - Scenario builderのツールバーのアイコン . . . . .	44
3.4. Scenario Builder - ビューのツールバーのアイコン . . . . .	44
3.5. <b>File</b> メニューのコマンドの機能 . . . . .	49
3.6. <b>Edit</b> メニューのコマンドの機能 . . . . .	50
3.7. <b>Display</b> メニューのコマンドの機能 . . . . .	50
3.8. <b>Favorites</b> メニューのコマンドの機能 . . . . .	50
3.9. <b>Scenario</b> メニューのコマンドの機能 . . . . .	51
3.10. <b>Tools</b> メニューのコマンドの機能 . . . . .	52
3.11. <b>Monitors</b> ファイルコマンドの機能 . . . . .	53
3.12. <b>Administration</b> メニューのコマンドの機能 . . . . .	53
3.13. <b>Java</b> メニューのコマンドの機能 . . . . .	53
3.14. <b>Help</b> メニューのコマンドの機能 . . . . .	54
4.1. テキストエディタ - <b>Toolbar</b> . . . . .	127
4.2. 日付型フォーマットの例 . . . . .	138
4.3. 数値のユーザフォーマットの例 . . . . .	139
4.4. E-mail/変数モニタ . . . . .	167
5.1. 処理レポートの内容 . . . . .	235
5.2. Mappingマッピングボックスに生成されたProcessReportFromMapping 処理レポートと、HP Desktop Discoveryコネクタによって取り込まれる SuccessReportMappingドキュメントタイプ間のマッピングの詳細 . . .	237

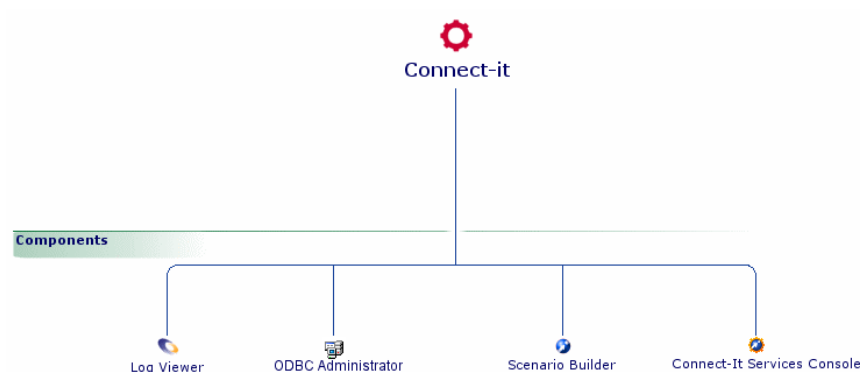
5.3. ProcessReportFromUpdate Asset Managementコネクタによって生成  
される処理レポートと、HP Desktop Discoveryコネクタによって取り込ま  
れるSuccessReportMappingドキュメントタイプ間のマッピングの詳細

..... 238

# はじめに

Connect-Itは、HPのアプリケーションで、以下の図にあるコンポーネントから構成されています。

図 1. Connect-It - アプリケーションのコンポーネント



## Connect-Itの使用目的

Connect-Itは、EAI（Enterprise Application Integration）グループの一部を成す統合プラットフォームです。EAIソリューションでは、データを企業の内部（内

部サポートや機器管理ソフトウェア等) や外部 (ERP、B2B、B2C) で取得または提供する様々なアプリケーションを統合することができます。

Connect-Itは、データだけではなく企業アプリケーションのプロセスも統合します。

Connect-Itには以下の用途があります。

- あるデータベースから別のデータベースへデータを転送する。
- 2つの異種のデータベース間でデータを複製する。
- Eメール、区切り文字で区切られたテキストファイル、XMLファイルやその他のフォーマットのデータを、データベースにインポートする。
- データベースから、Eメール、区切り文字で区切られたテキストファイル、XMLファイルやその他のフォーマットへデータをエクスポートする。
- NTセキュリティ情報をデータベースにインポートする。
- その他

---

## Connect-Itの対象ユーザ

Connect-Itは、企業内で使用する様々なアプリケーションとHewlett-Packardのアプリケーション間の統合を担当するIT技術者を対象としています。

Connect-Itを使用するには以下の知識が必要になります。

- 統合されるアプリケーションに関する高度な知識
- マッピングスクリプトで使用されるBasic言語の知識

---

## 本書の使用方法

### 「インストール」の章

この章では、Connect-Itのインストール方法が説明されています。

### 「基本概念」の章

この章では、Connect-It機能の概要が説明されています。

### 「Ergonomics」の章

この章では、統合シナリオ作成用のScenario Builderのレイアウトとメニューについて説明されています。

## 「統合シナリオのインプリメンテーション」の章

この章では、統合シナリオのセットアップ方法が説明されています。以下の操作を実行します。

- ソースコネクタとターゲットコネクタを選択する  
コネクタ（Databaseコネクタ、E-mailコネクタなど）は外部アプリケーションと通信し、Connect-Itがこれらの外部アプリケーションを統合します。
- コネクタの生成用ドキュメントタイプと、取り込み用ドキュメントタイプを作成する  
外部アプリケーションが生成するデータ全体（データベーステーブル、Eメール、テキストファイル、プロパティフォーマットなど）をXML形式に変換したものが、ドキュメントタイプに当たります。
- マッピングとマッピングスクリプトを定義する
- 使用モニタをセットアップする
- サービスの宣言とスケジュールのインプリメントによって作成されたシナリオの操作を自動化する

## 「統合シナリオの管理」の章

この章では、統合シナリオを使用する方法が説明されています。

- UNIX下にシナリオを導入する
- コマンドラインフォーマットでアプリケーションを使用する
- テストとデバッグ
- 性能の最適化

## 「問題点の報告方法」付録

この章では、HPサポートチームに問題を報告する方法が説明されています。

「Connect-Itに関する問題を報告する場合 [ 献 279]」の節では、Connect-Itで起きた問題についての報告方法が解説されています。

## 「用語解説」の章

この用語解説では、Connect-It特有の専門用語の一部が説明されています。



# 1 インストール

本章ではConnect-It統合プラットフォームのインストール方法を説明します。

## サポートされる動作環境

Connect-ItはWindowsと互換性があります。

### ▶ HPサポート互換性マトリクス

Connect-ItをUnix上（Linux、Solaris、AIX）にインストールすることは可能ですが、この場合非グラフィックモードでしか機能しません。

Connect-Itは、使用予定のシナリオに関連するアプリケーションにアクセスできるコンピュータ上に、インストールされなければなりません。一般的に、シナリオに関連するアプリケーションのクライアント部分を、コンピュータに完全インストールする必要はありません。しかし最初のテスト段階などでは、外部アプリケーション内へ書き込まれるデータを確認するために、コンピュータにアプリケーションをインストールしておく便利です。

ログに割り当てられたメモリ容量は、Scenario BuilderのEditメニューのOptionsコマンドで指定できます。ログに割り当てられたデフォルトのメモリ容量は5MBです。

ドキュメントログとドキュメントのトラッキング管理についての詳細は、「Ergonomics [ 献 41]」の章の「ドキュメントログ [ 献 223]」の節、および「管理モニタの定義 [ 献 159]」を参照してください。

---

## Connect-Itのインストール

### Connect-ItをWindows上でインストールする

1 管理者権限があることを確認します。

インストールCD ROMを挿入すると、インストールプログラムが自動的に起動します。

自動的に起動しない場合はcd-rom drive内でautorun.exeファイルを検索し、プログラムを起動します。適当なインストールオプションを選択します。

インストールプログラムではいくつかのインストールタイプを選択できます。

- 標準インストール
- カスタムインストール

### Integration Pack

Connect-Itのインストールには、Integration Packのインストールが含まれます。

Integration Packは以下の要素で構成されます。

- コネクタ
- 関連シナリオ
- お気に入り
- データキット
- 文書



**警告:**

Integration Packのインストールは中断しないでください。

### 標準インストール

標準インストールに含まれるのは、

- すべてのConnect-Itアプリケーション：Connect-It、Connect-It Web、およびConnect-Itサービスコンソール
- PDFおよびCHMフォーマットの文書

以下はインストールされません。

- モニタ用のMSDEデータベース

### カスタムインストール

カスタムインストールの場合、デフォルトでインストールされるのは、

- Connect-Itとコネクタの完全セット

カスタムインストール時に、以下のコンポーネントのインストールを選択できません。



- モニタ用のMSDEデータベース
- PDFフォーマットの文書
- Connect-It Web

このインストールでは、コネクタを追加または削除できます。

## コマンドラインからのインストール/アンインストール



### 警告:

コマンドラインからのインストールまたはアンインストールは、HPではサポートされません。

## インストールの変更

Connect-Itが既にインストールされている場合、コントロールパネルのプログラムの追加と削除ユーティリティによってコンポーネントを追加または削除できます（Connect-It行を選択して、**変更**をクリックします）。

### Integration Pack

コントロールパネルのプログラムの追加と削除ユーティリティによってコネクタを追加または削除できます（Connect-It Integration Pack行を選択して、**変更**をクリックします）。

Integration Packは、Connect-Itと別々に変更して、更新できます。

新しいコネクタ、新しいシナリオと同様に、コネクタおよびシナリオの更新もIntegration Packによって配布できます。Integration Packのインストールによって、Connect-Itバイナリは変更されません。

デフォルトで、Integration Packを更新する場合は、以前のインストール時に選択したコネクタが保持されます。以前にインストールしたコネクタが自動的に選択されます。更新をカスタムモードで行う場合、新しいコネクタを選択および追加できます。

新しいコネクタは、追加コネクタのリストから選択することによって追加できます。



### 警告:

以前にインストールしたコネクタが選択されなくなったか、新しいIntegration Packで新規インストール時にそれが参照されない場合、コネクタが削除されてConnect-Itで使用できなくなります。そのコネクタのすべての依存性（シナリオ、マップテーブルなど）と、シナリオまたは他のファイルに行われたすべてのユーザ変更が失われます。



### 警告:

Integration Packを使用して更新を実行するには、Integration Packに含まれるすべての要素を更新する必要があります。部分的な更新は実行できません。

## 更新

Connect-Itの更新時に、以前のバージョンのファイルすべて（シナリオ、マップテーブル、モニタなど）が削除されます。また、シナリオまたは他のファイルに行われたすべてのユーザ変更が失われます。

## プログラムの削除

Windowsでは、Connect-Itを適切にアンインストールするために、コントロールパネルのプログラムの追加と削除ユーティリティを使用する必要があります（Connect-It Integration Pack行を選択して、**変更**をクリックします）。必ず、シナリオとカスタマイズのバックアップコピーを作成してください。

## Integration Pack

Integration Packのみをアンインストールすることはできません。Integration Packは、Connect-Itのアンインストールによってアンインストールされます。

## MSDEモニタデータベース

モニタに必要なConnect-Itデータベースを使用するには、MSDEデータベースコンポーネントをインストールする必要があります。

モニタデータベースのインストール時に、データベースサーバ設定ウィンドウが表示されます。このウィンドウに以下の情報を指定します。

- データベースサーバ
- 接続IDとパスワード

AssetCenterが既にインストールされている場合は、インストール済みのMSDEインスタンスを使用できます。

パラメータ	値
インスタンス名	ASSETCENTER
管理者権限があるユーザ	sa
saユーザアカウントに関連付けられたパスワード	saacpassword
セキュリティシステム	SQL
ネットワークプロトコル	有効

▶ モニタデータベース管理 [ 献 271]

## Connect-ItをUNIX上でインストールする

Connect-ItをUNIX上にインストールするには、以下のコマンドラインを実行して付属の.tgzファイルを圧縮解除します。

```
tar -xzf cnit-[オペレーティングシステム]_[バージョン].[ビルド]_[言語の接頭文字].tgz
```

### 注意:

コマンドライン**tar**には、コマンドラインオプション**v**を追加できます (tar-xvzf)。このオプションを使用すると、冗長モードが有効になります。

使用可能な接頭文字は、英語版では*en*、フランス語版では*fr*です。

UNIX上のConnect-Itのインストールは、常に完全インストールになっています。このインストールには以下のコンポーネントが含まれています。

- ベースコネクタ [ 献 32]
- オプションコネクタ [ 献 33]
- データキット [ 献 34]
- 文書
- 用例シナリオ

### 注意:

コネクタの中には、Windows 環境でしか機能しないものもあります。コネクタの互換性に関する詳細情報については、HPのサポートサイト <http://support.openview.hp.com/support.jsp>を参照してください。

## SOLARISおよび Linux下のダイナミックライブラリ (.so)

Connect-Itでは、Connect-Itのインストール先フォルダのbinフォルダにあるダイナミックライブラリ (.so) を使用します。パス[Connect-Itのインストール先フォルダ]/binを、環境変数LD\_LIBRARY\_PATHに追加する必要があります。

csh (csh, tcsh)のインタプリタには、以下のコマンドラインを実行します。

```
setenv LD_LIBRARY_PATH=[Connect-Itのインストール先フォルダ]/bin
```

sh (ash, ksh, bash, etc.) のインタプリタには、.profile ファイルで以下のコマンドラインを実行します。

```
LD_LIBRARY_PATH=[Connect-Itのインストール先フォルダ]/bin export LD_LIBRARY_PATH
```

## AIX下のダイナミックライブラリ (.so)

Connect-Itでは、Connect-Itのインストール先フォルダのbinフォルダにあるダイナミックライブラリ (.so) を使用します。パス[Connect-Itのインストール先フォルダ]/binを、環境変数LIBPATHに追加する必要があります。

C (csh) コマンドなどのインタプリタには、以下のコマンドラインを実行する必要があります。

```
setenv LIBPATH=[Connect-Itのインストール先フォルダ]/bin
```

K (ksh) またはBourne (sh) コマンドなどのインタプリタには、.profileファイルの以下のコマンドラインを実行する必要があります。

```
LIBPATH=[Connect-Itのインストール先フォルダ]/bin export LIBPATH
```

---

## Connect-It Webのインストール

### 重要項目:

Connect-It Webのインストールには、Webサーバの設定方法について知識が必要です。

## 前提条件

Connect-It Webをインストールする前に、以下に示すコンポーネントを設定および開始し、コンポーネントの各エディタで規定される推奨事項に従ってインストールする必要があります。

### ■ Tomcat

互換性マトリクスを調べて、サポートされるTomcatバージョンを探します。

Tomcatは、ネットワークのインフラストラクチャ（ファイヤウォール、プロキシなど）によって保護する必要がありますが、インターネットブラウザから接続できる必要があります。

### ■ 以下のコンポーネントがインストールによって提供されます。(Connect-It インストール先フォルダのwebフォルダ):

- **ddl**フォルダ：Connect-It Webデータベースをサポートされる別のデータベースエンジン用に作成するために使用する.ddlファイル

- **webapp**フォルダ：

- **ovcit.war**ファイル、Webアプリケーションファイル

- **ovcit.xml**ファイル、Connect-It Webアプリケーション用のサンプルTomcatコンテキストファイル

- **licenses** フォルダ：サードパーティのコンポーネントすべてと、使用されるサードパーティのライブラリのソースコードに対するライセンス
- **install** フォルダ：
  - **install.bat**、Windowsインストールスクリプト
  - **install**、LinuxおよびUNIXインストールスクリプト
  - **crypt.bat**、Connect-It Web認証モジュール用パスワードを暗号化するWindowsスクリプト
  - **crypt**、Connect-It Web認証モジュールのパスワードを暗号化するLinuxおよびUNIXスクリプト

#### 重要項目:

<http://support.openview.hp.com/support.jsp>で互換性マトリクスを調べて、以下のコンポーネントのどのバージョンがサポートされるかを確認します。

- Tomcatサーバ
- Webサーバ

## Connect-It Webを自動的にインストールする

- 1 Connect-Itインストールによって提供されるインストールスクリプトを使用します。ターゲット環境（Windows、LinuxまたはUNIX）に応じて、**install.bat**または**install**を使用します。
- 2 インストールタイプをテストデータベース付きのクイックインストール、クイックインストール、またはカスタムインストールから選択します。

#### 注意:

インストールプログラムによって提供されるすべてのデフォルト値は、表示されるコマンドライン上の括弧の間に配置されます。

デフォルト値を有効にするには、Enterを押します。

### データベース付きのクイックインストール

供給されるテストデータベースは、サーバが不要であり、生成時に必要になりません。

このデータベースはモニタに使用するデータベースと異なります。

- 1 **install.bat**インストールプログラムを開始します。
- 2 Connect-Itインストールフォルダを指定します。
- 3 Tomcatのルートフォルダを指定します。



#### 注意:

互換性マトリクスを調べて、サポートされるTomcatバージョンを探します。

- 4 Connect-It Webインストール先フォルダを指定します。  
このフォルダはTomcatのwebappsフォルダとします。  
このフォルダには、Webアプリケーションで必要になるファイルが含まれません。  
指定フォルダが空でない場合、エラーメッセージが表示されます。



#### 重要項目:

SunのJRE 5.5に既知の問題があるため、Connect-It Webフォルダへのパスにはスペースを入れないでください。

- 5 Connect-It Webにアクセスするユーザー名とパスワードを指定します。このデータは、関連する認証ファイルに保存されます。
- 6 実行された操作の要約。  
以下の要素がインストールされました。
  - コンテキストファイルovcit.xmlが作成され、[Tomcatルートディレクトリ]/conf/Catalina/localhost/の下に保存されました。
  - Connect-It Webフォルダが作成され、アプリケーションに必要なデータが入ります (conf) 。
    - log4j.properties、log4j 設定ファイル、標準的な作業環境Javaアプリケーション。このファイル内のlog4j.appender.file.fileセクションで、ログファイル作成場所を定義します。
    - log4j\_jmx.properties、log4jの設定ファイル、各サービス用に異なるログファイルを作成するために、サービスのサブプロセスによって使用されます。各サービスのログファイルの名前は、主要ログファイルの名前がovcit.logである場合、ovcit\_<service\_name>.logのフォーマットを使用します。各サービスに関連付けられたログファイルは、主要ログファイルの横に配置されます。
    - jaas.config、JAAS設定ファイル (<http://java.sun.com/products/jaas/>) 。  
JAASは、Javaアプリケーション内で使用される認証基準です。Connect-It Webでは、パスワードファイルを使用するデフォルトのモジュールを提供します。パスワード管理ポリシーを変更したい場合は、JAASポリシーのセクションを参照してください。
    - users、Connect-It JAASモジュール用ユーザーパスワードが保存されたファイル。
  - ovcit.policy、Connect-It WebをセキュアJava環境に簡単に導入できるようにするサンプルファイル。

## Connect-It Webを手動でインストールする

Connect-It Webは、Tomcatサーバでのみ機能します。

### Connect-It Web用にカスタムデータベースを使用する

Connect-Itによってデフォルトで提供されるデータベース以外のデータベースを使用することができます。

- 1 <Connect-It installation folder>/web/ddlフォルダにあるデータベースエンジンに対応するDDL作成スクリプトを使用して、データベースを作成します。
- 2 使用予定のデータベースに対して、JDBCドライバを選択します。このドライバは、通常はアプリケーションの環境変数によって定義されたJavaライブラリ (jar) です。
- 3 JDBCドライバをConnect-It Webのクラスパスとして定義します。  
これは、以下のいずれかの方法で行います。
  - Tomcatの共有環境変数
  - Connect-It Webアプリケーションフォルダ (<Connect-It Web installation folder> /webapp/WEB-INF/lib)
- 4 データベースのアクセスに使用するURLを検索します。URLは、使用するJDBCドライバによって異なります。
- 5 Connect-It Webをインストールします。
- 6 インストールプログラムでは、JDBCドライバの名前、データベースにアクセスするURL、Connect-It Web用のデータベースにアクセスするユーザ名およびパスワードが要求されます。

### JDBC設定タイプ

以下の設定変更は、データベースエンジンに応じて行う必要があります。以下はサンプル設定です。

#### Oracle

JDBCドライバは、Oracleクライアントインストールによって提供されます。このドライバは、<Oracleクライアントインストール先フォルダ>/client/jdbcフォルダにあります。

- Oracle 9以降では、ojdbc14.jarライブラリを使用します。
- JDBCドライバ：oracle.jdbc.driver.OracleDriver
- データベースにアクセスするURLは、以下のフォーマットを使用します。

```
jdbc:oracle:thin:@<server address>:<port>:<service name>
```

Connect-It設定ファイルは、以下のフォーマットを使用します。

```
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.driver" override="false" type="java.lang.String" value="oracle.jdbc.driver.OracleDriver"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.url" override="false"
```

```
type="java.lang.String" value="jdbc:oracle:thin:@oraclesrv.hp.com:1521:orcl"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.username"
override="false" type="java.lang.String" value="CIT37"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.password"
override="false" type="java.lang.String" value="password"/>
```

## MS SQL

MS SQLドライバは、MicrosoftのWebサイトで利用可能です。

- sqljdbc.jarライブラリを使用します。
- JDBCドライバ：com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver
- データベースにアクセスするURLは、以下のフォーマットを使用します。

```
jdbc:sqlserver://serverName;instanceName:portNumber;property=value[;property=value]
```

Connect-It設定ファイルは、以下のフォーマットを使用します。

```
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.driver" override="false"
type="java.lang.String" value="com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.url" override="false"
type="java.lang.String" value="jdbc:sqlserver://localhost;databaseName=CITDemo37;instanceName=MSDE"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.username"
override="false" type="java.lang.String" value="CIT37"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.password"
override="false" type="java.lang.String" value="password"/>
```

## MS SQL 2K

MS SQLドライバは、MicrosoftのWebサイトで利用可能です。

- sqljdbc.jarライブラリを使用します。
- JDBCドライバ：com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver
- データベースにアクセスするURLは、以下のフォーマットを使用します。

```
jdbc:microsoft:sqlserver://server1\instance1;User=test;Password=secret
```

## MySQL

ドライバはwww.mysql.comで使用可能です。

- mysql-connector-java-5.0.4-bin.jarライブラリを使用します。
- JDBCドライバ：com.mysql.jdbc.Driver
- データベースにアクセスするURLは、以下のフォーマットを使用します。



```
jdbc:mysql://[host][,failoverhost...][:port]/[database]
[?propertyName1][=propertyValue1][&propertyName2][=propertyValue2]
...
```

Connect-It設定ファイルは、以下のフォーマットを使用します。

```
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.driver" override="false"
type="java.lang.String" value="com.mysql.jdbc.Driver"/>
<Environment name="log.properties" override="false"
type="java.lang.String" value="E:/CITWEB/conf/log4j.properties"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.jaas.loginConfig"
override="false" type="java.lang.String" value="file:E:/CITWEB/conf/jaas.con
fig"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.api.library.path" override="false"
type="java.lang.String" value="E:/Program Files/HP OpenView/Connect-It 3.
70 en/bin"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.username"
override="false" type="java.lang.String" value="admin"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.url" override="false"
type="java.lang.String" value="jdbc:mysql://16.16.63.44/test"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.jmx.scenario.jar.location"
override="false" type="java.lang.String" value="E:/Program Files/HP OpenVi
ew/Connect-It 3.70 en/lib"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.connectionProperties"
override="false" type="java.lang.String" value=""/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.password"
override="false" type="java.lang.String" value=""/>
```

## DB2

DB2ツールのバージョン8を使用します。

- db2jcc.jarライブラリを使用します。  
b2jcc\_license\_\*.jarライセンスファイルが必要です。
- JDBCドライバ：com.ibm.db2.jcc.DB2Driver
- データベースにアクセスするURLは、以下のフォーマットを使用します。

```
jdbc:db2://<server>[:<port>]/<database>[;<property>=<value>[;...]]
```

デフォルトのポートは5000です。

Connect-It設定ファイルは、以下のフォーマットを使用します。

```
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.driver" override="false"
type="java.lang.String" value="com.ibm.db2.jcc.DB2Driver"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.username"
override="false" type="java.lang.String" value="db2admin"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.url" override="false"
```

```
type="java.lang.String" value="jdbc:db2://localhost:5021/CITWEB"/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.connectionProperties"
override="false" type="java.lang.String" value=""/>
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.db.password"
override="false" type="java.lang.String" value="password"/>
```

## JAASモジュール

### JAAS : はじめに

Connect-It Webでの認証は、JAAS (Java Authentication and Authorization Specification) に基づきます。

Jaasは、Javaアプリケーションで使用される認証基準です。JAASは、1つ以上の認証モジュールの関連付けが可能な設定ファイルで定義されるコンテキストに基づきます。詳細については、JAAS Webサイト

<http://java.sun.com/products/jaas/>を参照してください。

### 提供されるJAASモジュール

Connect-It Webでは、JAAS認証モジュールが提供されます。

このモジュールは、Connect-It Webのクイックインストール時にデフォルトで設定されます。

提供されるJAASモジュールでは、パスワードファイルを使用します。このパスワードファイルは、ユーザ名/パスワードの組み合わせで構成されます。

パスワードファイル内のパスワードは、標準MD5アルゴリズムを使用して暗号化されています。

デフォルトのインストール時に、パスワードを含むusersファイルが<Connect-It Webインストール先フォルダ>/confフォルダに作成されます。このファイルは、インストール時に要求されるユーザ名/パスワードの組み合わせで構成されます。

このファイルには、必要な数のユーザを追加できます。

以下に、シンタックスを示します。

```
user1:encrypted_password1
user2:encrypted_password2
(...)
```

'admin'という名前のユーザと'st'という名前のユーザの場合、以下のようになります。

```
admin:5f4dcc3b5aa765d61d8327deb882cf99
st:627fcdb6cc9a5e16d657ca6cdef0a6bb
```

提供されたcryptスクリプトを使用して、パスワードを暗号化します。スクリプトは、<Connect-Itインストール先フォルダ>\web\installの下のConnect-Itインストール先フォルダにあります。

例：

```
crypt.bat password
>5F4DCC3B5AA765D61D8327DEB882CF99
```

## 他のJAASモジュールの使用

他のJAAS認証モジュールをConnect-It Webで使用することができます。

### 重要項目:

この認証を定義するには、JAAS設定方法について知識が必要です。

Connect-It Webでは、以下の2ファイルを使用してJAAS設定を定義します。

- Tomcatコンテキストファイル
- JAAS設定ファイル

最初のステップでは、使用するJAAS設定ファイルを作成します。

JAASファイルには、1つ以上のセクションがあります。各セクションでは、認証コンテキストを定義します。各認証コンテキストには、識別子があります。

```
default {
com.hp.ov.cit.jaas.FileLoginModule required file="E:/web/conf/users";
};
```

最初のステップでは、JAAS設定ファイルを見つけるためにConnect-Itで探す場所を指定します。このステップは、context.xmlファイル内の'com.hp.ov.cit.console.jaas.loginConfig'環境プロパティによって実行します。

```
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.jaas.loginConfig"
value="/path/to/jaas.config" type="java.lang.String" override="false" />
```

Connect-Itでは、使用する認証コンテキストを区別する必要があります。このステップは、context.xmlファイル内の'com.hp.ov.cit.console.jaas.loginContextName'環境プロパティによって実行されます。

```
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.jaas.loginContextName" value="
configurationName"
type="java.lang.String" override="false" />
```

最後のステップでは、Connect-It Web管理者に対応するJAASプロファイルを指定する必要があります。

デフォルト値はCIT\_ADMINであり、Connect-It WebのJAAS認証モジュールによって生成されるプロファイルに対応しています。ユーザ専用のJAAS認証モジュールの使用を選択する場合は、ユーザの認証モジュールによって生成された、Connect-It Web管理者に対応するプロファイル名を指定する必要があります。

このステップは、context.xmlファイル内の'com.hp.ov.cit.console.admin.role'環境プロパティによって実行します。

```
<Environment name="com.hp.ov.cit.console.admin.role" value="administrato  
rs"  
type="java.lang.String" override="false" />
```

## コンテキストファイル

Tomcatでは、コンテキストファイルを使用してWebアプリケーションを設定します。

このファイルは通常、Tomcatのインストール先フォルダ（<Tomcatインストール先フォルダ>/conf/Catalina/localhost）にあります。

サンプルのコンテキストファイルは、Connect-It Webによって提供されます（<Connect-It>/folder/web/webapp/ovcit.xml）。設定パラメータごとにコメントが記載されています。

- **com.hp.ov.cit.api.library.path**  
Connect-Itダイナミックライブラリへのパス（<Connect-Itインストール先フォルダ>/bin）。
- **com.hp.ov.cit.jmx.scenario.jar.location**  
Connect-It Javaライブラリを含むフォルダへのパス（<Connect-Itインストール先フォルダ>/lib）。
- **com.hp.ov.cit.jmx.scenario.java.path**  
Connect-It Webによるシナリオ起動時にJavaを実行するために使用するコマンド。  
このコマンドはJRE 5以降のバイナリを参照する必要があります。  
Javaがパスに含まれているとすると、デフォルト値は'java'です。Javaがパスに含まれていないか、デフォルトJREがJRE 5でない場合、値を更新する必要があります。
- **com.hp.ov.cit.jmx.scenario.jvm.options**  
Connect-It Webによってシナリオを起動するときに使用する追加JVMオプション。
- **com.hp.ov.cit.jmx.scenario.management.port**  
シナリオは、JMXプロトコルを使用して起動します（クライアント/サーバプロトコル）。  
変数は、JMXサーバによって使用される通信ポートを定義します。
- **com.hp.ov.cit.console.jaas.loginConfig**  
JAAS設定ファイルにアクセスするためのURL。  
クイックインストールは、<Connect-It Webフォルダ>/conf内の設定ファイルを作成します。
- **com.hp.ov.cit.console.jaas.loginContextName**  
使用する認証コンテキスト

- 使用するJAASコンテキストの名前。このコンテキストは、JAAS設定ファイルで定義する必要があります。  
Connect-It WebのJAASコンテキスト名を定義するために使用するプロパティ。クイックインストール時に生成されるデフォルト設定ファイルでは、コンテキスト名として'Default'が使用されます。
- `com.hp.ov.cit.console.admin.role`  
Connect-It Web管理者に対応するJAASプロファイル名。  
Connect-It Web JAAS認証モジュールによって生成されたプロファイルに対応するデフォルト値は、CIT\_ADMINです。  
ユーザ専用のJAAS認証モジュールの使用を選択する場合は、ユーザの認証モジュールによって生成された、Connect-It Web管理者に対応するプロファイル名を指定する必要があります。
- `com.hp.ov.cit.console.db.driver`  
Connect-It Webデータベースのアクセスに使用するJDBCドライバのクラス名。
- `com.hp.ov.cit.console.db.url`  
Connect-It WebデータベースのURL。URLのフォーマットは、使用するJDBCドライバによって異なります。
- `com.hp.ov.cit.console.db.username`  
データベースに接続するためのユーザ名。
- `com.hp.ov.cit.console.db.password`  
データベースに接続するために使用するパスワード。
- `com.hp.ov.cit.console.db.connectionProperties`  
追加のJDBCドライバ設定プロパティ。  
プロパティは、`name=value`ペアを1つのスペースで区切ったリスト内で定義されます。
- `log.properties`  
`log4j`設定ファイルのパス。  
クイックインストールによって生成されたファイルは、<Connect-ItWebインストール先フォルダ>/confフォルダ内にあります。
- `com.hp.ov.cit.jmx.log.properties`  
サービス用の`log4j`設定ファイルのパス。  
サービス用のデフォルト設定ファイルは、クイックインストールによって生成され、<Connect-Itインストール先フォルダ>/confにあります。

---

## メンテナンスバージョンのインストール

Connect-Itのメンテナンスバージョンをインストールする場合は、以下の作業が必要です。

- 1 カスタマイズされたすべての要素のバックアップコピーを作成します（シナリオ、.iniファイル）。

### 重要項目:

カスタマイズされたすべての要素のバックアップコピーを作成することを強くお勧めします。

- 2 新しいバージョンをインストールして、以前のバージョンを更新します。

### 注意:

メンテナンスバージョンにより、ワークステーションに存在する以前のバージョンの全ファイルが消去されます。

---

## 認証証明書を入力する

Connect-Itのインストールが終了した後、HPから入手した認証証明書をScenario Builder内に入力する必要があります。

認証証明書は以下の内容を含むテキストファイルです。

- 使用が許可されているオプションコネクタのリスト
- 各オプションコネクタの有効期限
- 暗号化された認証キー

### 認証証明書の入力方法

- 1 Connect-ItのScenario Builderを起動します。
- 2 **Administration**から**Edit authorization certificate**メニューを選択します。
- 3 表示されるダイアログボックスに認証証明書を入力します。
- 4 **OK**をクリックします。

このアクションは、Connect-Itインストール先フォルダ内にlicense.txtを作成します。

 **注意:**

UnixバージョンのConnect-Itにはグラフィカルインターフェースがありません。認証証明書を入力するには、以下の手順に従います。

- 1 ライセンスファイルの内容を新規テキストファイルにコピーします。このファイルの内容は変更しないでください。
- 2 このファイルにlicense.txtと名前を付けてから保存します。
- 3 license.txtをConnect-Itのインストール先フォルダにコピーします。

## インストール内容

本節では、ツールと、インストールされるファイルについて説明します。

これらのファイルがコンピュータにインストールされるかどうかは、選択したインストールの種類（最小インストール、完全インストール、カスタムインストール）によります。

### インストール先フォルダのファイル

Connect-Itインストール先フォルダのファイルの構成は、以下の表の通りです。

 **注意:**

あるフォルダは、特定のオペレーティングシステムにのみ存在します。

フォルダ名	主なファイル
bin	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 実行可能ファイル (conitgui.exe、conitsvc.exe、console.exe、logview.exe)</li><li>■ ダイナミックライブラリ(.dllまたは.so files)</li><li>■ Connect-It専用のテキストエディタの設定ファイル (CodeEdit.cfg)</li><li>■ 付属シナリオとConnect-Itの機能に必要な多種のファイル</li></ul>
config	全シナリオ内のコネクタに関連したファイル <ul style="list-style-type: none"><li>■ .mpt (マップテーブル)</li><li>■ .str (文字列テーブル)</li><li>■ .bas (Basic関数とグローバル変数)</li></ul>
datakit	Connect-Itツールで使用されるデータキット
dbb	<ul style="list-style-type: none"><li>■ cit33.db : デモ用データベース</li><li>■ gbbase.xml : データベースの説明</li></ul>

フォルダ名	主なファイル
doc	Connect-Itの文書は下記のフォーマットをとります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ .pdf</li> <li>■ .chm</li> <li>■ .html (<i>javadoc</i>ドキュメントに特有)</li> </ul>
lib	JARファイルには次の内容が含まれています。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ HPによって開発されたJavaクラス</li> <li>■ Javaサードパーティクラス</li> </ul>
scenario	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ Connect-Itのサンプルシナリオを含んだ.scnファイル</li> <li>■ 用例シナリオ用のコネクタに関連したファイル</li> </ul>
web	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>ddl</b>フォルダ: Connect-It Webによって使用されるデータベースの作成に必要な.dllファイル</li> <li>■ <b>ovcit.war</b>ファイル: webアプリケーションで使用されるファイル</li> <li>■ <b>ovcit.xml</b>ファイル: Tomcat コンテキストファイル</li> </ul> <p><b>webapp</b> フォルダ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>install</b>フォルダ: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ <b>crypt</b> および<b>crypt.bat</b>ファイル: パスワード暗号化ファイル</li> <li>■ <b>install</b> および<b>install.bat</b>ファイル: データベース込みのクイックインストールレーションファイル</li> </ul> </li> <li>■ <b>licenses</b>フォルダ: .txt、html、および.zipフォーマットのライセンスファイル</li> </ul>
wizards	Connect-Itの機能に必要なファイル

## ベースコネクタ

ベースコネクタは、Connect-Itのインストールモードに関わらず必ずインストールされるコネクタです。

ベースコネクタは以下の通りです。

- OpenView Asset Managementコネクタ
- OpenView BizDocコネクタ
- Command-lineコネクタ
- OpenView Enterprise Discoveryコネクタ
- OpenView Service Deskコネクタ
- Inventory Managerコネクタ



- Management Portalコネクタ
- OpenView Network Inventoryコネクタ
- Service Eventsコネクタ
- Usage Managerコネクタ
- OpenView Operations for Unixコネクタ
- NT Securityコネクタ
- OpenView Desktop Inventoryコネクタ
- OpenView Decision Centerコネクタ
- SCAuto listeningコネクタ
- OpenView ServiceCenterコネクタ
- OpenView ServiceCenter Web Serviceコネクタ
- Delimited-textコネクタ
- XMLコネクタ

## オプションコネクタ

オプションコネクタは、Connect-Itの完全インストールを選択した場合、またはカスタムインストールでオプションコネクタを選択した場合にインストールされます。

オプションコネクタは以下の通りです。

- Action Request Systemコネクタ
- Altirisコネクタ
- Databaseコネクタ
- E-mailコネクタ
- XML listeningコネクタ
- iInventoryコネクタ (Lan Auditor)
- JMSコネクタ
- LANDeskコネクタ
- LDAPコネクタ
- Lotus Notesコネクタ
- Mercuryコネクタ
- MQSeriesコネクタ
- SAP ALEコネクタ
- SAP BAPIコネクタ
- SAP IDocコネクタ
- SMS 2.xコネクタと2003コネクタ
- Tivoli Enterprise Consoleコネクタ
- Tivoli Inventory (バージョン4.0) コネクタ
- Tivoli Configuration Manager for Inventoryコネクタ

- Tivoli Configuration Manager for Distributionコネクタ
- Unicenter AMOコネクタ
- Web Servicesコネクタ

## データキット

次の表はインストールされるデータキットの内容を説明しています。

フォルダ	説明
ac/ac4	Asset Managementアプリケーションにカテゴリとフィーチャを作成できるインポートスクリプトが含まれます。
ac/stdfeat	スクリプトファイル (sdtfeat.scr) をインポートする場合、Asset ManagementアプリケーションのFeaturesテーブルでレコードを作成します。これらのフィーチャは、Asset Managementコネクタが発行するドキュメントタイプに表示されます。
doctrans	このフォルダには、シナリオの自動生成および文書化に必要なファイルが含まれます。
hprovsd	このフォルダには、AssetCenterからService DeskとService DeskからAssetCenterへのシナリオに必要なファイルが含まれます。
javasamples	このフォルダには、以下が含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ XML listeningコネクタによって使用されるサンプルサブレット</li> <li>■ SDKのインプリメント方法を示す例</li> </ul>
mail	このフォルダには、AssetCenterシナリオに必要な.xmlファイルが含まれます (scenario/mailフォルダ)。
mqseries/acimport	このフォルダには、AssetCenter用のMQSeriesシナリオに必要なファイルが含まれます。
merq	このフォルダには、MercuryからServiceCenterへのシナリオに必要な.unlファイルが含まれます。
mqseries/scunload	このフォルダには、MQSeriesからServiceCenterへのシナリオに必要なファイル.unlファイルが含まれます。
pdi/pdi7	このフォルダには、AssetCenterまたはServiceCenter用のDesktop Inventory 7シナリオに必要なファイルが含まれます。
pdi/pdi8	このフォルダには、AssetCenterまたはServiceCenter用のDesktop Inventory 8シナリオに必要なファイルが含まれます。

フォルダ	説明
sap/common/IDOC	このフォルダには、AssetCenterに必要とされるSAP IDOCコネクタおよびフィーチャに必要なファイルが含まれます。
sap/feat	
sc/sc61	このフォルダには、AssetCenter-ServiceCenter複製シナリオに必要な.unlファイルが含まれます。
sc/sc62	
tecevent	このフォルダには、コネクタの使用に必要な自己解凍ファイルが含まれます。
tim	このフォルダには、Tivoli Inventory Managementコネクタ設定ウィザードのパラメータが含まれます。

### 関連したファイル

数種のファイル（.mpt、.str、.bas、.scp）は、シナリオに関連付けられています。シナリオを別のフォルダへ移す場合は、これらのファイルもフォルダと同時に同じ位置に移す必要があります。例：複数の用例シナリオに共通のファイルはsharedフォルダにあります。このフォルダはシナリオの移動先にも作成されなければなりません。



#### 注意:

ファイルマネージャを使用してシナリオを移動させるよりも、可能な限りScenario Builder内で直接移動先に保存することをお勧めします。これにより、シナリオに関連した全ファイルは、移動後も適切に参照されるようになります。

## Connect-Itに関する情報

Connect-Itでは、ソフトウェアと動作環境に関する情報にアクセスできます。

情報にアクセスするには：

- **Help/ About**メニューを選択します。
- **More**をクリックします。
  - 以下の情報が表示されます。
    - ソフトウェア
    - システム情報
    - データベースエンジン

インストールされたIntegration Packに関連する情報にアクセスするには（Windowsインストール）：

- **プログラムの追加と削除**ツールを選択します。
- **HP OpenView Connect-It Integration Pack**プログラムを選択します。
- **サポート情報を参照するには、ここをクリックしてください。**を選択します。ウィンドウが開いて、以下の情報が表示されます。

- ベンダ
- サポート
- インストールされたIntegration Packのバージョン

## ハードウェア構成

以下に示す別々の構成は、情報提供のみを目的として記載されています。互換性に関する情報については、HP Software WebサイトまたはHPサポートサイトの互換性マトリクスを調べてください。

Connect-Itの性能レベルは、使用するコンピュータの読み書き（I/O）機能ではなく、主にCPU速度によって決まります。

以下に、Connect-Itの推奨ハードウェア要件を示します。

- Windows構成
  - CPU : Pentium 4、2 GHz
  - RAM : 512 MB
- UNIX構成
  - CPU : SunFire V240、1GHz Ultra SPARC IIIi
  - RAM : 1 GB

シナリオは、強力でないハードウェア構成でも実行できます。その場合は、性能レベルのみが影響を受けます。

使用メモリ量は、シナリオ内で使用されるコネクタおよびマッピングボックスの数によって決まります。複数のシナリオが同時に実行しているか、シナリオでさらに多くのコネクタが使用される場合は、メモリサイズを増やす必要があります。

表 1.1. オペレーティングシステムに従った推奨される最小メモリサイズ

オペレーティングシステム	メモリサイズ
Solaris 9	RAM (推奨) :
■ conitsvc	■ 7 MB
■ cntrsrv *	■ 8 MB
AIX 5.1	RAM (推奨) :
■ conitsvc	■ 7 MB
■ cntrsrv *	■ 6 MB
Linux	RAM (推奨) :
■ conitsvc	■ 4 MB
■ cntrsrv *	■ 5 MB

オペレーティングシステム	メモリサイズ
Windows	RAM (推奨) :
<ul style="list-style-type: none"> <li>■ conitsvc</li> <li>■ cntrsrv *</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ 6 MB</li> <li>■ 7 MB</li> </ul>

表 1.2. Connect-It Webの最小メモリ量

ソフトウェア	メモリサイズ
Tomcat	256 MB

conitsvcのメモリは、処理されたドキュメントのサイズによって決まります。

\* : Javaコネクタによって使用されるメモリは、Java Virtual Machineのために記載より多くなる場合があります。

コネクタに必要なDLLファイルのメモリは、指定されたメモリサイズに追加する必要があります。

## マルチプロセッサ

Connect-Itでは、ターゲットのコネクタでマルチプロセスの実行を並列処理することができます。性能は、シングルCPUシステムとマルチCPUシステムの両方で向上します。マルチCPUコンピュータを使用すると、シングルCPUコンピュータよりもドキュメント処理時間が短くなります。

### 注意:

並列化に関連する性能向上は、生成速度とドキュメント取り込み速度との違いによって決まります。例えば、シナリオがドキュメントを取り込むよりも生成速度が遅い場合は、取り込み処理を並列化してもメリットはありません。データベースアーキテクチャ、ネットワークの問題など他の要因によって、性能に影響を及ぼすことができます。

## インストールされるプログラム

Connect-Itアプリケーションに加えて、以下のプログラムがインストールされます。

- サービスコンソール

## サービスコンソール

Connect-Itソフトウェアスイートのこの要素については、「Connect-Itサービスの定義 (Windows環境) [献 174]」の章の「統合シナリオの管理 [献 199]」の節に記述されています。

## 2 基本概念

### データ処理

図 2.1. Connect-Itで、あるデータベースから別のデータベースへデータを転送する



Connect-Itは、コネクタ（コンポーネント）を使用して外部アプリケーションと相互に作用します。あるデータベースから別のデータベースへデータを転送する場合、

- ソースコネクタはXML形式のドキュメントを生成します。

生成される各ドキュメントは、ソースアプリケーション内の1データ集合に一致します。

- マッピングボックスが、ソースコネクタにより生成されたドキュメントの構造を再構築し、ターゲットコネクタがドキュメントを取り込めるようにします。
- ターゲットコネクタがXML形式のドキュメントを取り込みます。

取り込まれた各ドキュメントは、ターゲットアプリケーション内の1データ集合に一致します。

データベース型のコネクタでは、各ドキュメントは1データベーステーブルのレコード（または別のテーブルへのリンク）に対応しています。例：

**AssetCenterDatabase**コネクタのドキュメントは、資産のテーブルのデータを含みます。

他のコネクタの場合、データ集合は、Eメールメッセージ、区切り文字で区切られたテキストおよびセキュリティ情報などに当たります。

コネクタの選択、コネクタ間の関係、そしてソースドキュメントとターゲットドキュメント間のマッピングの定義が、統合シナリオを構成します。テストとデバッグを経た後、シナリオはスケジューラに関連付けられ生産段階に入ります。

どの統合過程でも起こるように、ドキュメントの一部または全体が拒否されることもあります。しかし処理レポートやドキュメントログを使用すると、統合シナリオ全体を定義し直すことなく、拒否されたドキュメントを再処理することができます。



## 3 Ergonomics

**Scenario Builder**は統合シナリオを作成するためのグラフィカルインタフェースです。本章では**Scenario Builder**の主要部分と、**Connect-It**のオプションウィンドウについて説明します。

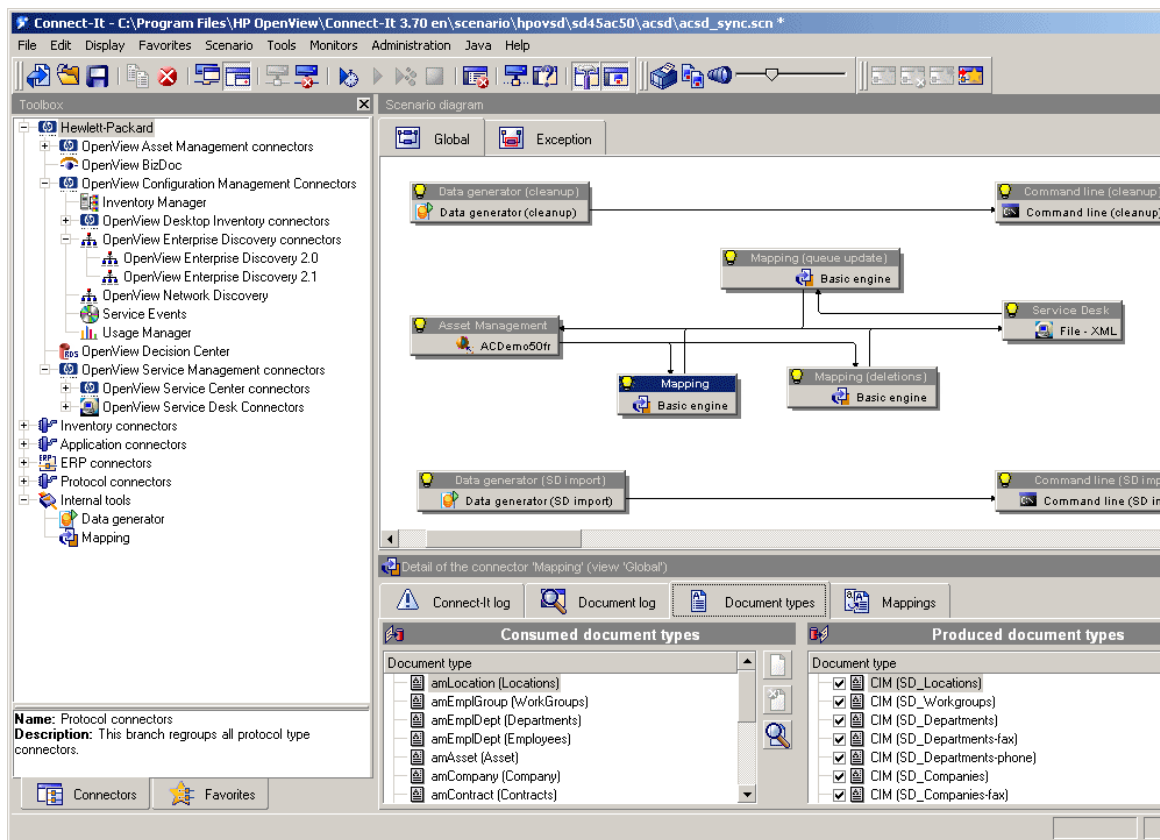
---

### Scenario Builder

**Scenario Builder**のメインウィンドウは以下の要素で構成されています。

- メニューバー  
メニューの詳細については、本章の「メニュー[ 献 48]」の節を参照してください。
- ツールバー
- パネル (枠)

## 図 3.1. Scenario Builder - メインウィンドウ



### ツールバー

頻繁に行う操作は、**Scenario Builder**のメニューバーを使用せずにツールバーで実行できます。使用可能なツールバーは以下の通りです。

- 一般ツールバー
- シナリオ図のバー
- ビューのツールバー
- お気に入りのバー

表 3.1. Scenario Builder - 一般ツールバーのアイコン


アイコン	機能
	ウィザードを起動し、1つのソースコネクタと1つのターゲットコネクタを使った最小シナリオを作成できるようにします。
	既存シナリオを開きます。
	シナリオを保存します。
	Connect-Itのテキスト要素をコピーします。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Toolbox内のコネクタの名前</li> <li>■ ログ内のメッセージ</li> <li>■ その他</li> </ul>
	シナリオ内で選択したコンポーネントを削除します。
	選択したツールの設定ウィザードが起動します。
	高度な設定ページを表示する設定ウィザードを有効にします。(例: <i>Parallelize consumption</i> ページ)
	シナリオの全てのコネクタを開きます。
	シナリオの全てのコネクタを閉じます。
	シナリオをスケジュールモードで起動します。
	シナリオをテストします (非スケジュールモード)。
	シナリオをデバッグモードで起動します。
	シナリオを停止します。
	<b>Connect-It log</b> と <b>Document log</b> の項目を削除します。
	作業のオフライン/オンラインモードを変更します。
	ターゲットコネクタを外部アプリケーションと相互作用させずに、シナリオをテストします。 トランザクションをサポートするデータベース型のコネクタでは、エラーメッセージが表示されます。エラーメッセージは、このオプションを使用しない場合に取得されるメッセージに相当します。
	<b>Toolbox</b> 枠を表示/非表示にします。
	<b>Scenario diagram</b> 枠を表示/非表示にします。

表 3.2. Scenario Builder - お気に入りのツールバーのアイコン





アイコン	機能
	Toolboxの <b>Favorites</b> タブ内で選択したお気に入りを再設定できるようにします。
	Toolboxの <b>Favorites</b> タブ内で選択したお気に入りを削除します。
	Favorite.favファイルを、選択したフォルダにインポートします。
	Favorite.favファイルを、選択したフォルダにエクスポートします。 これらのお気に入りを別のユーザが使用できるようにするには、Connect-Itのインストール先フォルダのbinフォルダ内に、このファイルをインポートします。

表 3.3. Scenario Builder - Scenario builderのツールバーのアイコン



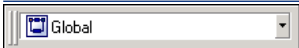
アイコン	機能
	scenario diagramを印刷します。 (印刷前のプレビュー用ウィンドウで、印刷のパラメータを設定できます。)
	scenario diagramをクリップボードにコピーします。
	このアイコンの横のレバーでscenario diagramを縮小／拡大します。

表 3.4. Scenario Builder - ビューのツールバーのアイコン

アイコン	機能
	マッピングを作成する前にこのアイコンでビューを選択すると、マッピング作成後に、マッピングのソースコネクタとターゲットコネクタがビュー内に表示されます。

#### ツールバーを表示／非表示にする

- 1 **Display**メニューを選択します。
- 2 以下のツールバーを必要に応じて選択または非選択にします。
  - ツールバー (一般)
  - (scenario) Diagramのバー
  - ビューのツールバー

## ツールバーを移動させる

- 1 ツールバーの取っ手アイコン (📏) をクリックします。
- 2 ツールバーを希望の位置に移動します。

ツールバーは、以下の位置に配置できます。

- Scenario Builderの4つの隅
- 画面上の全領域 (フロート状態で)

## フロート状態のツールバーを画面の端に固定する

- 1 ポインタを、フロート状態のツールバーの端に置きます。
- 2 ポインタの形状が変化するのを待ちます (↖) 。
- 3 ダブルクリックします。  
ツールバーは、自動的に元の場所に戻ります。



## 枠

Scenario Builderのメインウィンドウは、サイズ変更可能な3つの枠から成っています。

- シナリオのコンポーネントやお気に入りを選択するためのToolbox
- シナリオ内のツールとツール間のリンクがグラフィックで表示されるScenario diagram部分
- 以下のタブを含む詳細画面
  - Connect-Itlogタブ
  - Document logタブ
  - シナリオ内で選択したツールに関連するタブ：生成用、または取り込み用ドキュメントタイプ、マッピングなど。

## 枠を表示／非表示にする

以下の枠を表示／非表示にすることが可能です。

- Toolbox枠  
この枠を表示／非表示にするには、以下のアクションのいずれかを実行します。
  - **Display/Toolbox**を選択／非選択にします。
  -  をクリックします。
- Scenario diagramの枠  
この枠を表示／非表示にするには、以下のいずれかを実行します。
  - **Display/Scenario diagram**を選択／非選択にします。
  -  をクリックします。

## 枠を移動させる

- 1 枠の上端にマウスポインタを置きます。
- 2 枠を希望の位置に移動します。

## Scenario-diagramのビュー

**Scenario diagram**枠には、2つのタブ**Global**と**Exception**があります。Globalタブは、現在のシナリオの全コンポーネント（ソースコネクタ、ターゲットコネクタ、リンクとマッピングボックス）を表示します。**Exception**タブにはデフォルトでは何も表示されませんが、このタブはシナリオのエラーの管理用に用意されています。


**Scenario diagram**枠内で異なるビューを作成できます。これらのビューでは1つ、または複数の与えられたマッピングによって使用されるツールのみが表示されます。

**例：**複数のソースコネクタを使用するシナリオで、1つのソースコネクタのみを含むマッピングを選択すると、このソースコネクタのみが表示されるようになります。

### scenario-diagramのビューを使用する

あるシナリオ用にビューを作成すると、このシナリオをScenario Builder内で開くたびに、そのビューが表示されます。

### scenario-diagramのビューを作成する

- 1 シナリオを開きます。
- 2 **Scenario/ View manager**を選択します。
- 3 表示されるウィンドウで、をクリックします。
- 4 ビューに名前を付けます。ビューの名前はシナリオ内で固有の名前でなければなりません。
- 5 scenario-diagramのビューで表示するマッピングを選択します。
- 6 **Create**をクリックします。

view editorを閉じると、**Scenario diagram**枠内にビューの名前がついたタブが表示されます。

### scenario diagramのビューを変更する

- 1 シナリオを開きます。
- 2 **Scenario/ View manager**を選択します。
- 3 ビューを選択します。
- 4 ビューの名前やマッピングの選択／非選択を変更します。
- 5 **Modify**をクリックします。

- 6 **Close**をクリックします。

#### scenario-diagramのビューを削除する

- 1 シナリオを開きます。
- 2 **Scenario/ View manager**を選択します。
- 3 ビューを選択します。
- 4 をクリックします。


このビュー用のタブが**Scenario diagram**枠に表示されなくなります。

#### scenario diagramのビューを印刷する

scenario diagramの各ビューを印刷することが可能です。

プリントアウトには、スケジューラに定義されたパラメータが含まれます。

#### scenario diagramのビューを印刷する

- 1 ビューを選択します。  
例：**Global**
- 2 以下の操作のいずれかを実行します。
  - をクリックします。
  - **File/Print scenario diagram**を選択します。
- 3 印刷プレビュー用ウィンドウが表示されるまで待ちます。
- 4 **Print**をクリックします。

#### ビューの印刷を設定する

- 1 ビューの印刷を開始します。
- 2 **Configure**をクリックします。
- 3 Windowsの印刷設定用ウィンドウが表示されます。
- 4 設定パラメータを変更します。

#### ページ設定を変更する

- 1 ビューの印刷用メニューを選択します。
- 2 **Page setup**をクリックします。
- 3 **Page setup**ダイアログボックスが表示されるのを待ちます。
- 4 ページ設定の以下のパラメータを変更します。
  - Left margin
  - Top margin
  - Right margin
  - Bottom margin
  - Header margin

- Footer margin
- Zoom  
使用される単位はセンチメートルです。
- ページ番号 (#)
- 現在の日付 (**date**)
- 現在の時刻 (**H**)
- .scn ファイルの完全パス

**Header...**と**Footer ...**ボタンを押すと、別のダイアログボックスが表示されます。ここでヘッダーとフッターに印刷する以下の情報を指定できます。

**A**ボタンを押すと、印刷する情報の文字のフォントを選択できます。

### Scenario diagramのビュー - 動作

Scenario-diagramのビューは以下の規則に従います。

- **Global**以外のビュー内のコンポーネントを、ドラッグすることはできません。
- ビュー内の1つのマッピングを削除しても、対応するSCNファイルの<LAYER>要素はなくなりません。
- マッピング、コネクタおよびリンクの編集は、**Global**ビューのみで実行可能です。
- ビュー内のツールをクリックすると、ドキュメントログ内に関連するトラッキング項目のみが表示されるように、フィルタを設定できます。
- ビューは、**Connect-It**の他の機能には影響しません。

---

## メニュー

本節では以下の内容について説明します。

- Scenario Builderのメニューツールバー
- Scenario diagramのショートカットメニュー

### Scenario Builderのメニューツールバー

#### Fileメニュー

**File**メニューのコマンドのリストは以下の通りです。



表 3.5. Fileメニューのコマンドの機能

コマンド	機能
New	Configure the scenarioウィザードを起動します。このウィザードでは、ソースコネクタとターゲットコネクタを選択と設定を行います。ウィザードは2つのコネクタをリンクし、マッピングボックスを置いて、新しいシナリオを作成します。
Open	既に作成されたシナリオファイル (.scn ファイル) を開きます。
Save	シナリオを保存します。
Save as	開いたシナリオの元の名前とは別の名前を付けて、シナリオを保存します。
Scenario history	現在のシナリオ用の情報を入力するためのウィンドウを表示します。
Print scenario diagram	scenario diagramの印刷用パラメータを入力するためのウィンドウを表示します。
Copy scenario diagram	scenario diagramの画像をクリップボードにコピーします。この画像をJasc Paint Shop ProやAdobe Photoshopなどのグラフィック用アプリケーション内に貼り付けることができます。
Create scenario documentation	シナリオ文書をXML、DBKまたはHTMLフォーマットで作成できます。 この機能の使用方法については、「シナリオ文書 [ 献 193]」章の「シナリオ文書の作成 [ 献 195]」の節を参照してください。
View the HTML scenario documentation	現在のシナリオ文書をインターネットブラウザ内に表示します。 この機能の使用方法については、「シナリオ文書 [ 献 193]」章の「HTMLフォーマットによるシナリオ文書の表示 [ 献 195]」の節を参照してください。
Properties of the scenario documentations	この機能の詳細については、「シナリオ文書 [ 献 193]」の章の「シナリオ文書のプロパティを編集する [ 献 196]」の節を参照してください。 'Properties of the scenario documentations'ウィンドウが起動します。
Exit	Scenario Builderを終了します。
Enumerated list	最近編集したシナリオを表示します。リストの1要素をクリックすると、シナリオを直接開くことができます。

## Editメニュー

**Edit**メニューのコマンドのリストは以下の通りです。

表 3.6. **Edit**メニューのコマンドの機能

コマンド	機能
Cut	なし
Copy	Connect-Itログまたはドキュメントログの項目を、コンピュータのクリップボードにコピーします。
Paste	なし
Delete	シナリオから選択したツールを削除します。
Options	Scenario Builderのオプションウィンドウを表示します。

### Displayメニュー

**Display**メニューのコマンドのリストは以下の通りです。

表 3.7. **Display**メニューのコマンドの機能

コマンド	機能
Toolbox	コネクタのリストを含む枠を表示／非表示にします。
Scenario diagram	Scenario diagramを表示／非表示にします。
Toolbar	Toolbarを表示／非表示にします。
Diagram bar	Scenario diagram用のツールバーを表示／非表示にします。
Favorites sidebar	お気に入りのツールバーを表示／非表示にします。

### Favoritesメニュー

**Favorites**メニューのコマンドのリストは以下の通りです。

表 3.8. **Favorites**メニューのコマンドの機能



コマンド	機能
Configure	このコネクタを定義してから、コネクタに関連付けられたお気に入りを設定する
Delete	コネクタに関連付けられたお気に入りを削除する
Export	シナリオに関連付けられたお気に入りをエクスポートする
Import	現在のフォルダからお気に入りをインポートします。

フォルダ使用の詳細については、「お気に入り [ 献 216]」の章を参照してください。

## Scenarioメニュー

**Scenario**メニューのコマンドのリストは以下の通りです。

表 3.9. Scenarioメニューのコマンドの機能


コマンド	機能
Open all connectors	シナリオの全てのコネクタとマッピングボックスを開きます。
Close all connectors	シナリオの全てのコネクタとマッピングボックスを閉じます。
Synchronize the caches	シナリオ内で開かれた全コネクタのキャッシュファイルの同期をとります。
Delete the caches	シナリオ内で開かれた全コネクタのキャッシュファイルを削除します。
Manage views	ビューエディタを表示します。 ビュー管理の詳細については、本章の「Scenario Builder [ 献 41]」の節の「Scenario-diagramのビュー [ 献 46]」を参照してください。
スケジューラ	<b>schedulers edit</b> ウィンドウを表示します。
Scheduling	関連するスケジューリングを開始します。
String tables	<b>String table editor</b> ウィンドウを表示します。
Maptables	<b>maptables editor</b> ウィンドウを表示します。
Global functions	グローバル関数と変数の編集ウィンドウを表示します。
Script constants	スクリプト定数エディタを表示します。
User formats	マッピングスクリプトで使用される日付と数値のフォーマットを作成できます。
Work offline	オフラインで作業できるようにします。 ツールバーの  をクリックすると、このオプションをオンにすることができます。 オフライン作業の詳細については、「統合シナリオのテストとデバッグ [ 献 221]」章の「オフラインで作業する [ 献 253]」の節を参照してください。
Test mode	シナリオをテストする際に、ターゲットコネクタが外部アプリケーションにデータを転送しないように設定します。 ツールバーの  をクリックすると、このオプションをオンにすることができます。
Start all schedulers	シナリオのソースコネクタの生成用ドキュメントタイプに関連するスケジューラを起動します。

コマンド	機能
Stop	シナリオを停止します。

## Toolsメニュー

**Tools**メニューのコマンドのリストは以下の通りです。

表 3.10. **Tools**メニューのコマンドの機能

コマンド	機能
Configure	選択したコンポーネントの設定ウィザードが起動します。
Advanced configuration	コンポーネントのconfigurationウィザードで advanced configuration ページを表示します (F2)。 ツールバーの  クリックすると、このオプションをオンにすることができます。
Modify the relational model	コネクタが発行するドキュメントタイプの構造体を定義できます。 詳細については、「設定ファイルの編集 [献 72]」の章を参照してください。
Open	選択したコンポーネントを開きます。
Close	選択したコンポーネントを閉じます。
Cache/Synchronize the cache	選択したコネクタのキャッシュファイルの同期をとります。
Cache/Delete the cache	選択したコネクタのキャッシュファイルを削除します。
Wizard/Manage processing report	特定のコネクタに、フィードバックループを作成できます。 詳細については、「Manage processing reports ウィザード [献 243]」の節を参照してください。
Edit document type	<b>Select document type</b> ウィザードが起動します。選択したツールの生成用、または取り込み用ドキュメントタイプを選択します。
Edit mapping	<b>Select mapping</b> ウィザードが起動します。選択したマッピングボックスからマッピングを選択できます。
Produce now	ドキュメントタイプが作成されているコンポーネントのドキュメントを生成します。

## Monitorsメニュー

**Monitors**メニューのコマンドのリストは以下の通りです。

表 3.11. **Monitors**ファイルコマンドの機能

コマンド	機能
Configure monitors	ドキュメントログ(ドキュメントログ、データベース、ファイル、電子メール)を設定するためのウィンドウを表示します。
Refresh tracking lines (F9)	ドキュメントログ内の内容を更新します。
Clear displayed tracking lines	<b>Document log</b> タブから、表示されているトラッキング項目全体を削除します。
Manage saved sessions	アクティブなシナリオの保存済みセッションすべてを示すウィンドウを表示します。
Import saved sessions	保存済みセッションを現在のシナリオにインポートします。 詳細については、「保存されたセッションのインポート [ 献 174]」の節を参照してください。

#### Administrationメニュー

**Administration**メニューのコマンドのリストは以下の通りです。

表 3.12. **Administration**メニューのコマンドの機能

コマンド	機能
Edit authorization certificate	認証証明書の編集ウィンドウを表示します。
Administer the monitors database	モニタによって使用されるデータベースを管理できるウィンドウを表示します。

#### Javaメニュー

**Java**メニューのコマンドのリストは以下の通りです。

表 3.13. **Java**メニューのコマンドの機能

コマンド	機能
Configure JVM	Javaクラスのパスを指定するためのウィンドウが表示されます。

#### Helpメニュー

**Help**メニューのコマンドのリストは以下の通りです。

表 3.14. Helpメニューのコマンドの機能

コマンド	機能
Online help	Connect-Itのオンラインヘルプを表示します。
Tip of the day	Connect-ItTip of the Dayウィンドウを表示します。 <b>Show at startup</b> オプションがクリアできません。
About	使用中のConnect-Itのバージョンに関する一般的な情報を含む <b>About</b> ウィンドウを表示します。

## Scenario Builderのメインウィンドウ内のショートカットメニュー

Scenario Builderのメインウィンドウ内では、以下の場合に右クリックメニュー（ショートカットメニュー）を表示します。

- マウスポインタがScenario diagram部分にある場合
- マウスポインタがConnect-Itログのタブ内にある場合
- マウスポインタがDocument logのタブ内にある場合

### マウスポインタがScenario diagram部分にある場合

ポインタをScenario diagram枠に置いた場合に表示されるショートカットメニューのコマンドのリストは、以下の通りです。

コマンド	機能
Configure connector	選択したツールを設定するための <b>Configure the connector</b> ウィザードが起動します。
Open connector	選択したコンポーネントを開きます。
Close connector	選択したコンポーネントを閉じます。
Favorites/Add to the favorites without association	コネクタ設定を関連付けなしでお気に入りに追加します。
Favorites/Add to the favorites with association	コネクタの設定をお気に入りに追加して、それを関連付けます。お気に入りを再設定すると、すべてのシナリオ内で関連コネクタが再設定されます。
Cache/ Synchronize the cache	選択したコネクタのキャッシュファイルの同期をとります。
Cache/ Delete the cache	選択したコネクタのキャッシュファイルを削除します。
Edit a document type	<b>Select document type</b> ウィザードが起動します。選択したツールの生成用、または取り込み用ドキュメントタイプを選択します。

コマンド	機能
Edit a mapping...	<b>Select mapping</b> ウィザードが起動します。選択したマッピングボックスのマッピングを選択できます。
Produce now	選択したツールで、ドキュメントタイプが作成されているドキュメントの生成を行えます。この機能は、少なくとも1つのコネクタがデータを生成可能な場合のみ有効です。複数のコネクタがデータ生成可能な場合は、エラーメッセージを表示します。
Delete	選択したコンポーネントを削除します。
Show tracking lines	選択したコンポーネントに関連するトラッキング項目をドキュメントログ内に表示します。
Show toolbox	Toolboxを表示／非表示にします。
Show scenario diagram	Scenario diagramを表示／非表示にします。

### ポインタがConnect-Itlogタブ内にある場合

コマンド	機能
Unfold one level	トラッキング項目を1レベル分表示します。
Unfold all levels	トラッキング項目を全レベル表示します。
Collapse all levels	トラッキング項目の全てのレベルを非表示にします。
Show toolbox	Toolboxを表示／非表示にします。
Show scenario diagram	Scenario diagramを表示／非表示にします。

### ポインタがDocument logタブ内にある場合

Document logタブ内には2つのショートカットメニューがあります。

- トラッキング項目上にポインタがある場合
- ソースドキュメントの詳細の一要素上にポインタがある場合

### トラッキング項目上にポインタがある場合

コマンド	機能
Copy this XML document	コンピュータのクリップボードに、トラッキング項目に対応するXML文書をコピーします。
Copy this XML DTD	コンピュータのクリップボードに、トラッキング項目に対応するXMLのDTD（文書型定義）をコピーします。
Open this XML document	オペレーティングシステムで指定されている、XMLファイルに関連したアプリケーションでXML文書を開きます。（例：Internet Explorer）
Show toolbox	Toolboxを表示／非表示にします。

コマンド	機能
Show scenario diagram	Scenario diagramを表示／非表示にします。

### ソースドキュメントの詳細の一要素上にポインタがある場合

コマンド	機能
Copy this XML document	コンピュータのクリップボードにXML文書をコピーします。
Copy this XML DTD	コンピュータのクリップボードにXML文書をコピーします。
Open this XML document	オペレーティングシステムで指定されている、XMLファイルに関連したアプリケーションでXML文書を開きます。（例：Internet Explorer）
Copy path	コンピュータのクリップボードに、選択した要素のパスをコピーします。
Find	ドキュメントログのドキュメントの詳細内で要素を検索できるようになります。
Find next	次の要素を探します。
Find prev.	前の要素を探します。
Change the column sort order	ID、日付、ドキュメントタイプ、コネクタ、またはドキュメントの内容で並び替えます。
Show toolbox	Toolboxを表示／非表示にします。
Show scenario diagram	Scenario diagramを表示／非表示にします。

## マッピングボックスからアクセスできるショートカットメニュー

マッピングボックスから以下のメニューにアクセスできます。

- Script constants
  - Global functions
  - User formats
  - Change history
  - Options
  - String tables
  - Mapping tables
- マッピングボックスで選択された要素に応じて、以下のタブを使用できます。
- ルートドキュメント：
    - Generalタブ
    - Mappingタブ
    - Additional scriptsタブ
    - Reconciliationタブ
  - タイプフィールドの複雑要素：
    - Mappingタブ



- Reconciliationタブ
- Reconciliation scriptsタブ
- タイプ構造体の複雑要素：
  - Mappingタブ
  - Reconciliationタブ
- タイプコレクションの複雑要素：
  - Mappingタブ
  - Reconciliationタブ
  - Advanced reconciliationタブ



## 4 統合シナリオのインプリメンテーション

統合シナリオのインプリメンテーションでは以下の手順に従います。

- ツールを選択する。
- ツール同士をリンクする。
- 必要に応じて新しい設定ファイルを作成する。
- 生成用ドキュメントタイプと取り込み用ドキュメントタイプを定義する。

---


### ウィザードでシナリオをインプリメントする

**Scenario implementation**ウィザードでは以下の操作を実行できます。

- シナリオのソースコネクタとターゲットコネクタを選択する。
- 2コネクタの設定を実行する。

ターゲットコネクタの設定が終了すると、2つのコネクタはマッピングボックスにリンクされます。コネクタとマッピングボックスは、**Scenario Builder**の **Scenario diagram** 枠内に表示されます。

### Scenario implementationウィザードを起動する

- 1 以下のアクションのいずれかを実行します。
  - **Scenario Builder**のツールバーで  をクリックします。または、
  - **File**メニューから **New** を選択します。

## 手動でシナリオをインプリメントする

シナリオを手動で作成するには：

- 1 Scenario diagram内にシナリオツール（コネクタおよびマッピングボックス）配置します。
- 2 ツールをリンクします。

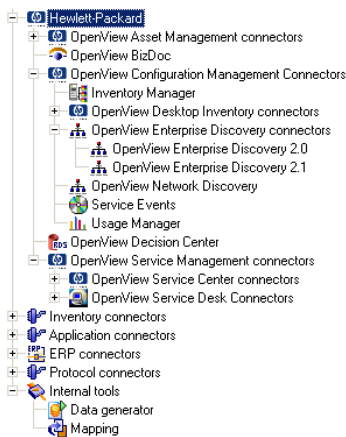
### Scenario diagram内にツールを配置する

ツールをScenario diagram内に置くと、自動的に**Configure the connector**ウィザードが起動します。

### Scenario diagram内にコンポーネントを配置する

- 1 ToolboxからScenario diagramへコンポーネントをドラッグします。またはツールを選択しダブルクリックします。
- 2 表示される**Configure the connector**ウィザードに値を入力して、設定を行います。  
コネクタの設定については、マニュアル『コネクタ』の「コネクタの設定」の章を参照してください。

## 図 4.1. Scenario BuilderのToolbox



### scenario diagram内にある既存のツールを設定し直す

- 1 Scenario diagram内でツールを選択します。
- 2 以下のアクションのいずれかを実行します。

- **Tools/ Configure**メニューを選択します。
- 右クリックし、表示されるショートカットメニューから**Configure connector**を選択します。

## ツールをリンクする

コネクタをリンクする方法により、どのコネクタがソースコネクタまたはターゲットコネクタになるかを定義できます。

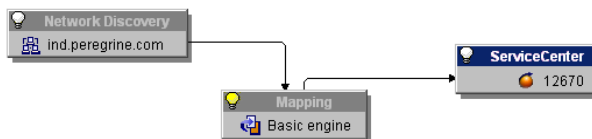
- コネクタが外にリンクを送信する場合、このコネクタはソースコネクタになります。
- コネクタがリンクを受信する場合、このコネクタはターゲットコネクタです。

### 注意:

ソースコネクタをターゲットコネクタに直接リンクすることは稀です。原則としてソースコネクタをマッピングボックスに連結し、マッピングボックスをターゲットコネクタに連結します。

以下の例では、**Network Discovery**コネクタはソースコネクタで、**ServiceCenter**コネクタはターゲットコネクタです。**Network Discovery**コネクタがドキュメントを生成すると、ドキュメントはまずマッピングボックスで変換され、その後**ServiceCenter**コネクタに取り込まれます。

## 図 4.2. シナリオでのツールのリンク



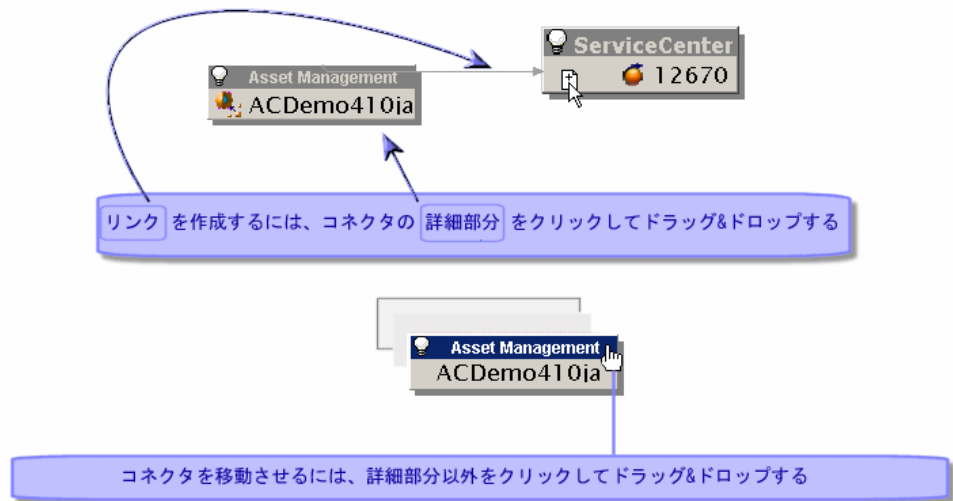
## ツールを別のツールにリンクする

- 1 ツールの下の部分をクリックします。
- 2 ツールの詳細部分が白で表示されます。
- 3 マウスの左ボタンを押したままにします。
- 4 表示されるリンクを別のツールヘドラッグします。

### 注意:

ツールの詳細部分以外をクリックしてドラッグすると、ツールをシナリオ内で移動させることになります。

図 4.3. リンクの作成またはコネクタの移動



### マッピングボックスを通さずに2コネクタをリンクする

2つのコネクタをリンクすると、Connect-Itは自動的にその2つのコネクタ間にマッピングボックスを作成します。マッピングボックスが作成されない場合は、**Shift**キーを押したまま2コネクタをリンクしてください。

2コネクタ間の直接リンクを使用するのは、一部のコネクタ（TextコネクタやXMLコネクタ）のみです。直接リンクにより、ソースコネクタに生成されるドキュメントの構造を利用して、ソースコネクタのデータを直接エクスポートすることができます。

### ツールを削除する

Scenario diagram内のコネクタ、リンクまたはマッピングボックスを削除するには、

- 1 ツールを選択します。
- 2 以下の操作のいずれかを実行します。
  - **Edit/ Delete**メニューを選択します。
  - キーボードの**Del**を押します。
  - 右クリックして表示されるショートカットメニューから、**Delete**を選択します。

## Java仮想マシン (JVM) を設定する

Connect-Itが使用するJVMは、Scenario Builderで直接設定可能です。

JVMで定義された設定はすべてのシナリオに有効ですが、特定シナリオのコンポーネントの特別な設定を上書きしません。

### JMVの設定方法

- 1 Scenario Builderを起動します。
- 2 **Java/Configure JVM**メニューを選択します。
- 3 **Classpath**フィールド (jarまたはzipファイル) に、Javaクラスのパスか、または.classファイルを含むフォルダを入力します。
  - Javaライブラリ (jar) を選択するには、**File**アイコンをクリックします。
  - クラスフォルダを選択するには、**Folder**アイコンをクリックします。
  - Classpath要素を追加するには、**Plus**ボタンをクリックします。



注意:

Classpath定義では、順序が重要です。

- 4 **Options**フィールドにJVMオプションを入力します。  
例 : `-DmyDefine=value`
- 5 **Debug mode**オプションをオン/オフにします。  
このオプションにより、デバッグのメッセージ (**PrgnLog.debug**) と例外のスタックトレース (**stacktrace**) を表示できるようになります。
- 6 **Specify the JRE to use**オプションをオン/オフにします。このオプションはconit.iniファイルを変更して、値は次回仮想マシンが開始するときに使用されます。  
デフォルトで、Connect-Itによって使用されるJREは、Windowsレジストリで指定されたデフォルトJREであり、**Specify the JRE to use**オプションは選択されません。  
このオプションによって、以下のフィールドが有効になります。
  - **JRE saved in the Registry** : ローカルマシンのレジストリに定義されたJREのバージョン番号を検証するには、このフィールドを選択します。IBM JREは値 (IBM) の接頭辞が付きます。
  - **Path of the JRE dynamic library** : レジストリに登録されていないJREを使用するには、このフィールドを入力します。このライブラリは通常、jvm.dllという名前です。この場合、JREルートフォルダ (JAVA\_HOME) も指定することをお勧めします。

場合によっては、JRE仕様に別の制約条件が含まれることがあります。

- レジストリ内にJREが記録されない : この場合は、ユーザが使用JNIダイナミックライブラリのパスを示すことによって、使用JREを指定する必要があります。

ります。 **Path of the JNI dynamic library of the JRE**と同様に、 **Specify the JRE to be used**オプションをオンにします。これは、読み取り専用です。

- レジストリにデフォルトJREが指定されない：この場合、Connect-Itは使用するデフォルトJREを特定できません。そのため、ユーザが指定する必要があります。 **Specify the JRE to use**オプションをオンにします。これは、読み取り専用です。

#### 追加情報

- Sun JREは、レジストリ内に以下のキーで記録されます。  
HKEY\_LOCAL\_MACHINE/SOFTWARE/JavaSoft/Java Runtime Environment
- IBM JREは、レジストリ内で以下のキーの下に保存されます。  
HKEY\_LOCAL\_MACHINE/SOFTWARE/IBM/Java2 Runtime Environment

---

## シナリオオプションの編集

Scenario Builderのオプションには以下のカテゴリがあります。

- **Display**
- **Confirmations**
- **Connector**
- **Documents**
- **Logs**
- **Lists**

Scenario Builderのオプション用ウィンドウを開くには、**Edit**メニューから**Options**を選択します。

このウィンドウでは、**Value**列からセルを選択してダブルクリックし、オプションを変更します。表示されるテキストゾーンに値を入力します。

#### 注意:

デフォルトのオプション値を変更すると、変更した値の名前は赤色になります。これにより、値を変更したオプションを素早く検索できます。

## Display

この項目には、Scenario Builderの表示オプションがまとめられています。



### Display reconciliation properties by document type

このオプションを使用すると、ドキュメントタイプ要素の更新プロパティを表示できます。表示された複雑要素によって、ビューは異なります。

- ドキュメントタイプのルートノードの場合、更新キー（フィールド、コレクション、または構造体）と共に複雑要素が表示されます。
- コレクションまたは構造体の複雑要素の場合、更新キーと共にそれらの要素すべてが表示されます。

### Display licensed connectors only

このオプションにより、Scenario BuilderのToolboxには、認証証明書に使用を許可されたコネクタのみが表示されます。

### Change the color of wizard descriptions

このオプションを使用すると、ウィザード内の説明の色を変更できます。例：コネクタのconfigurationウィザードに表示されるテキストの色を変更できます。

### Disable the 'Esc' in fields

Windows上では、**Esc**キーを使用すると編集ウィンドウが閉じるようになります。例：document-type editウィンドウ。

Scenario Builder内では、安全のために**Esc**キーは現在編集している要素のみに適用されます。例：mapping editウィンドウでのコレクションからコレクションへのマッピングの編集。

Escキーの動作をWindowsのデフォルトに戻すには、このオプションを選択してください。

### Windows graphics

このオプションでは、Scenario Builderの表示をフラットまたは標準にできます。

### Number of documents recovered in a block during the preview

このオプションでは、ドキュメントのプレビューウィンドウで表示するドキュメントの数を指定できます。デフォルトのドキュメント数は20です。

### Maximum number of child elements of an element to be unfolded automatically

このオプションにより、ドキュメントタイプとドキュメント内の親ノード下に表示される子ノードの数を指定できます。ドキュメントタイプのノードに多数の子ノードがある場合、このオプションは非常に有用です。

### Maximum number of child elements displayed at one time

このオプションにより、ドキュメントタイプとドキュメント内の親ノード下に表示される子ノードの数を指定できます。例：ルートノード下ではドキュメントタイプの最初の3コレクションのみを表示する。

### Maximum number of lines to display in the Connect-It log

このオプションにより、Connect-Itログに表示されるトラッキング項目の最大数を制限できます。


### Maximum number of levels (recursive) to map automatically

このオプションでは、テーブルからテーブルへのマッピングまたはノードからノードへのマッピング時に、自動的にマップされるノード（構造体またはコレクション）のレベル数を指定できます。

## Tabs

Connect-Itのタブを以下のオプションを用いて変更できます。

- **Display image**

このオプションでは、タブ名の横にあるアイコンの表示／非表示を選択します。例：Document logタブの  アイコン。

- **Display ToolTip**

このオプションでは、タブの上にポインタを置くと現れるヒントの表示／非表示を選択します。

- **Tab representation style**

このオプションでは、生成用ドキュメントタイプ用ウィンドウのタブの表示スタイルを変更できます。

### Display ToolTip

このオプションを使用すると、Connect-It内でメニューやコンポーネントなどの上にポインタを置くとヒントが表示されます。

## Confirmation

一定の操作の後に、プログラムがダイアログボックスを通じてユーザに確認を行うように設定するオプションが、このグループにまとめられています。

### Display a warning whenever a collection-to-collection mapping is needed

このオプションにより、コレクションからコレクションへのマッピングが必要な場合に、警告が表示されます。例：ソースコレクションのフィールドがターゲットコレクションのフィールドにマップされても、2つのコレクションがお互いにマップされていない場合、警告が表示され、2つのコレクションのマッピングが必要であることをユーザに知らせます。

### Display a message each time the JVM parameters are modified

このオプションを使用すると、JVM（Java Virtual Machine）パラメータが変更されるたびにメッセージが表示されます。

### Warn when the license is approaching expiration

このオプションを選択すると、ライセンスの期限切れが近づくときにConnect-Itによって警告されます。警告が発行される前に、遅延を指定できます。この遅延をゼロに設定すると、警告は定期的に発行されます。

### Keep the backup copy of the scenario

シナリオを保存すると、シナリオのフォルダ内に拡張子.bakでバックアップコピーが一時的に作成されます。このオプションを使用すると、現在の保存操作が正常に行われた場合にコピーを保存または削除することができます。

### Disable the new scenario wizard

このオプションでは、新しいシナリオの作成時に自動的に表示されるウィザードを無効にすることができます。

### Do not authorize the validation of a script that includes compilation errors

このオプションを選択すると、シンタックスエラーを含むスクリプトの認証は許可されません。

### Open all connectors of current scenario when starting a connector

このオプションにより、1コネクタの起動時に現在のシナリオの全コネクタを開くことができます。このオプションにより、コネクタを1つずつ開くことなくシナリオのマッピングを素早く起動することが可能になり、非常に便利です。

### Use a dialog box to select the document type to edit

このオプションにより、開かれたマッピングボックスやコネクタをダブルクリックすると、ダイアログボックスが表示され、ドキュメントタイプやマッピングを選択できるようになります。

## Connector

以下のコネクタ用のオプションがあります。

- Databaseコネクタ
- LDAPコネクタ
- ServiceCenterコネクタ
- XMLコネクタとDelimited-textコネクタ

その他に、全コネクタ用のオプションがあります。

- **Show queries in tracking lines**

このオプションは、ドキュメントログ内（メッセージ枠）にクエリを表示します。これはシナリオのテスト／デバッグ時に役立ちます。

- **Calculate number of documents to be processed**

このオプションは、処理されたドキュメント数をステータスバーに表示します。例：200のドキュメントのうち4つのドキュメントが処理された場合は、ステータスバーに *4/200 documents processed* と表示されます。

 **警告:**

処理するドキュメント数が多大な場合にこのオプションを使用すると、コンピュータの性能が低下する可能性があります。

■ **Adjust dates in relation to the time difference with the server**

このオプションを使用すると、読み取りおよび書き込み日付についてサーバの時間差を補うことができます。

 **注意:**

この調整はConnect-It 2.7.1までは自動的に実行されていました。サーバとの時間差のオプションについては、マニュアル『コネクタ』の「コネクタの設定」の章の「サーバとの時間差を指定する」の節を参照してください。

このオプションがオフになっていると、コネクタの設定時にサーバとの時間差を指定するたびに、読み取られたり書き込まれたりする日時は時間差の値に応じて調整されます。

■ **Favorites file**

このオプションを使用すると、デフォルトで使用するお気に入りのファイルを定義できます。

■ **Number of documents to produce in a test production of documents**

このオプションでは、ドキュメントの生成テスト中に生成するドキュメントの数を指定できます。（テストモードでは、シナリオのソースコネクタはドキュメントを生成しますが、ターゲットコネクタは外部アプリケーションとは相互作用しません。）ドキュメント数を制限するには、チェックボックスをオンにする必要があります。

このオプションは、生成用ドキュメントタイプをテストする際に自動的に使用されます。しかし、シナリオがWindowsのサービスとして実行されると、このオプションは自動的に無効になります。

■ **Maximum number of documents in the reconciliation cache**

更新キャッシュをマッピング内で使用する場合、このオプションを使用すると、ドキュメントの最大数に到達したときにキャッシュを空にすることができます。

■ **Validate by default the option to use a configuration wizard cache.**

このオプションにより、新しいコネクタの作成時にキャッシュをデフォルトで使用できます。キャッシュを有効にすると、コネクタによって使用可能に

なったか取り込まれたドキュメントタイプが保存されるので、コネクタを開くたびに自動的に記述を実行することがなくなります。

キャッシュオプションについては、マニュアル『コネクタ』の「コネクタの設定」の章の「キャッシュを設定する」の節を参照してください。

## LDAPコネクタ

**Read LDAP server schema from file** オプションでは、リモートサーバの記述スキーマのローカルコピーを作成できます。

**Display attributes defined at the DSE root** オプションでは、現在のサーバの日付の取得を可能にする属性を、LDAPサーバが表示するかを指定できます。

**Save the LDAP server schema to file** オプションでは、リモートサーバの記述スキーマのローカルコピーを保存できます。

**Certificate** オプションでは、LDAPサーバに関連付けられた証明書のアクセスパスを定義できます。

**Certificate folder** オプションでは、LDAPサーバへのセキュアなアクセスを可能にする証明書を含むフォルダを指定できます。

## ServiceCenterコネクタ

**Display a warning for events used in asynchronous mode** オプションでは、シナリオを開くときとドキュメントを処理するたびに、シナリオが非同期モードで動作していることをユーザに警告できます。

**Check data type in filter** オプションでは、ServiceCenterのフィールド値タイプが、クエリ作成者が指定されたタイプに一致するかどうかを調べることができます。例えば、**date**型のフィールドが、整数に関連付けられているsysmodtime > 3フィルタは無効です。この場合エラーメッセージが表示され、コネクタはドキュメントを生成しません。

**Display progress information while connector publishes document types** オプションを使うと、Connect-Itログ内に、開いたコネクタが発行する使用可能なドキュメントタイプの名前を表示することができます。

**ServiceCenter code pages** オプションでは、自分で選択したコードページ番号を選択できます。デフォルトではこのオプション値は「0」です。この値は、ServiceCenterのコードページが、Connect-Itがインストールされたコンピュータのコードページであることを意味しています。



### 注意:

このオプションは、ServiceCenterバージョン3.x、4.x、5.x以下にのみ適用します。ServiceCenter 6以降の場合、内部UTF-8文字コードによるマルチリンガルサポートを使用できます。英語、フランス語、または日本語（Windows1252互換の言語全般）以外の言語を操作するには、Connect-ItのUnicode英語言語バージョンを使用する必要があります。このバージョンは、使用条件（使用する言語とコネクタ）の確認後にカスタマサポートから入手可能です。

## Database

**Display a message when the data type of a field is not supported** オプションを使用すると、フィールドがコネクタによってサポートされていない場合、Document log内にメッセージが表示されます。

## Delimited text and XML

**Display the URL being processed in the Connect-It log** オプションを選択すると、XMLコネクタまたは区切られたTextコネクタが処理しているURLを、Connect-Itログ上に表示することができます。

**Copy locally the files to read from FTP server** オプションは、接続をファイル処理に必要な時間維持できない場合に役立ちます。

**Backup the existing file before starting in mode 'Append to the same file'** オプションを使用すると、2つのConnect-Itセッション間でファイルの重複コピーを作成できます。

## Documents

注意：この項目の文書は、コネクタに処理されるドキュメントではなく、シナリオを含むSCNファイルのことを指しています。

この項目は、.scnファイルの読み込みに関するオプションをまとめています。

- **At startup, automatically load last document used**
- **Default path of scenarios**

このオプションを使用すると、シナリオフォルダのデフォルトパスを指定できます。
- **Ask for confirmation before saving**

このオプションにより、Connect-Itで保存を実行する前にダイアログボックスが表示されます（マッピング、シナリオ、スケジューラなどの保存）。
- **Maximum number of recently opened documents to store in File menu**

このオプションは、**File**メニューのリストに表示されるSCNファイルに関するものです。

## Logs

ログに関連付けられたオプションを以下に示します。

- **Write a Java log file**  
このオプションを使用すると、Javaコネクタで生成されるすべてのメッセージを含むログファイルを作成できます。このログファイルは、アプリケーションと同じ名前であり、接尾辞`_java`が付きます。
- **Log file**  
このオプションを使用すると、ログファイルの名前を指定できます。
- **Verbose mode**  
このオプションを使用すると、`verbose`モードが有効になります。

### 注意:

このオプションは、アプリケーションが`!-verbose`オプションで起動された場合は考慮されません。

- **Log-file size (MB)**  
.logファイルのサイズを指定できます。サイズの最大値に達するたびに、新しいデータが最も古いデータを上書き保存します。

## Lists

ログに関連付けられたオプションを以下に示します。

- **Auto-close delay after selection (milliseconds)**  
このオプションを使用すると、ドロップダウンリストの自動終了に遅延を設定できます。0を指定することによって、自動終了が無効になります。
- **Refresh delay after keyboard selection (milliseconds)**  
このオプションを使用すると、選択をキーボードで行った場合にリスト内のナビゲーションが遅くならないように更新を遅くすることができます。
- **Arrow keys used to open and close nodes in tree structures**  
このオプションを使用すると、矢印キーを使用してツリー構造内でノードの開閉が可能になります。キーボードを使用して別の列に移動するには、**SHIFT**キーを押し下げます。

---

## 設定ファイルの編集

一部のコネクタには、コネクタによって表示されるドキュメントを拡張または変更するために拡張ファイルが含まれます。Databaseコネクタの場合、拡張ファイルでは、例えばデータベースのリレーショナルモデルの定義と、スケジュールポインタの定義が可能です。

コネクタのconfiguration file editorを使用すると、リレーショナルデータベースモデルを作成またはカスタマイズできます。

Configuration file editorは、以下に利用します。

- Databaseコネクタ
- inventoryコネクタ

Configuration file editorにアクセスするには、ショートカットメニューを使用します（コネクタを右クリックしてから**Modify the relational model**を選択します）。このメニューは、コネクタが設定された後に使用できます。



### 警告:

1つ以上のシナリオで既に使用されているコネクタのリレーショナルモデルを変更すると、シナリオが影響を受けて変更の必要が生じます。

Configuration file editorによって生成されたファイルには、.cfgというファイル拡張子が付きます。

## 設定ファイルエディタの制限事項

このエディタでは、複雑なamo.cfgファイル、iInventory.cfgファイル、ist.cfgファイル、およびtscdb.cfgを編集できません。

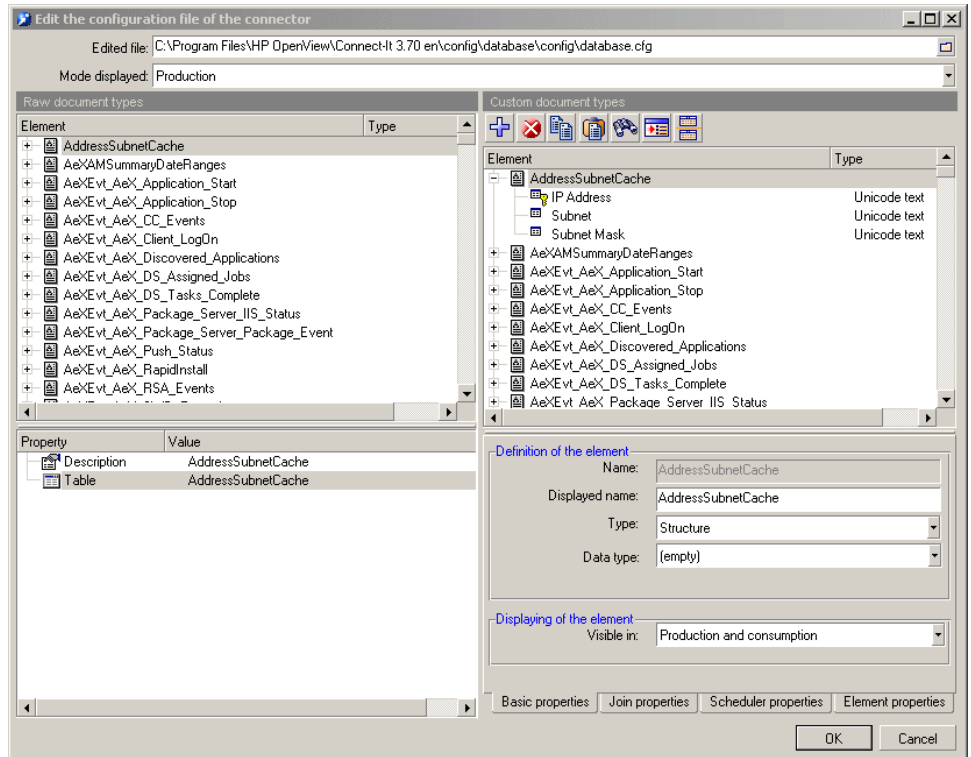
## エディタウィンドウ

エディタには、以下の2つの部分があります。

- 右側：リレーショナルデータベースモデル



- 左側：データベースからカスタマイズされたドキュメントタイプ、コネクタによって生成



選択した要素のプロパティは、以下のタブで定義されます。


- **Basic properties**  
このタブを使用すると、複雑要素の表示名、タイプ、データ型（バイナリ、テキストなど）、および表示条件を定義できます。
- **Join properties**  
このタブを使用すると、要素の結合およびフィルタを定義できます。
- **Scheduler properties**  
このタブを使用すると、要素のスケジュール条件を定義できます。
- **Element properties**  
このタブは、選択した要素のすべてのプロパティを表示します。

## 新しいドキュメントタイプの作成

**Configuration file editor**を開くと、ウィンドウの左側にソースデータベース構造が表示されます。この構造は、自動的に右側にコピーされ、コネクタによって使用可能になるドキュメントタイプを示します。

ソースデータベースから生じるドキュメントタイプを**Raw**ドキュメントと呼びます。コネクタによって変更され使用可能になるドキュメントを**カスタムドキュメント**と呼びます。

新しいカスタムドキュメントタイプを作成して、右側に表示された要素を編集するには：

- カスタムドキュメントタイプ内の要素を削除するには、それを選択してから  をクリックするか、**Del**を押します。
- 要素を生ドキュメントタイプからカスタムドキュメントタイプのルート位置に挿入するには、**CTRL**キーを押しながら要素をドラッグします。
- 項目間に結合を作成するには、要素を**Raw**ドキュメントタイプからカスタムドキュメントタイプ内の必要要素までドラッグするか、カスタムドキュメント内の要素をカスタムドキュメントタイプ内の別の要素までドラッグします（右側のみで操作が実行されます）。

### 注意:

すべての変更は、ショートカットメニューから**Restore the element**コマンドを使用することによって元に戻すことができます（カスタムドキュメントタイプ内でルート要素を右クリックします）。


すべての変更は、以下のタイミングで検証されます。


- 設定ファイルに新しい名前を付与する（**Edited file**フィールド）
- **Configuration file editor**を終了する（**OK**ボタン）

## ドキュメントタイプのカスタマイズ

ドキュメントタイプのカスタマイズは、それを構成する複雑要素ごとにプロパティを定義することです。

### 注意:

 ボタンを使用し、ウィンドウを2つに分割してソース要素とターゲット要素を一度に表示します。

カスタマイズされた要素は、 アイコンで表します。

要素に行うすべての変更は、ショートカットメニューから**Restore the element**コマンドを使用することによって元に戻すことができます（カスタムドキュメントタイプ内でルート要素を右クリックします）。

## カスタムドキュメントタイプの基本プロパティ

- **Name** : 要素のシステム名 (フィールド、構造体、またはコレクション) 。このフィールドは編集できません。
- **Displayed name** : このフィールドを使用すると、要素 (フィールド、構造体、またはコレクション) の表示名を変更して、リスト内での位置を定義できます。システム名に影響を与えません。
- **Type** : このフィールドを使用すると、複雑要素 (フィールド、構造体、またはコレクション) のタイプを定義できます。構造体またはコレクションを定義する場合は、関連する結合を必ず確認してください。
- **Data type** : このフィールドを使用すると、要素のデータ型を定義できます。使用可能なデータ型は、バイナリフィールド、ロングテキストフィールド (メモ)、**Long Unicode** テキストフィールド、日付、日付および時刻、時刻、倍精度数、8ビット整数、16ビット整数、32ビット整数、浮動小数点数、テキスト (255文字以下)、およびUnicodeテキストです。  
このフィールドを使用すると、データベースエンジンがデータ型を認識しない場合にデータ型を指定できます。
- **Visible in** : このフィールドを使用すると、要素の表示条件を定義できます。つまり、生成時、取り込み時、または生成および取り込み時に表示するかどうかを定義できます。要素の表示は、設定フィールド内に定義された値によって異なります (**Edited file** フィールドの下に表示される **Mode displayed** フィールド) 。

## カスタムドキュメントタイプの結合プロパティ

■ アイコンは、結合を使用する要素を指定します。これらの要素は、**produced document-types edit** ウィンドウと **document-type customization** ウィンドウに表示されます。

結合は、2つのドキュメントタイプ要素を作成している階層に関連付けます。結合を可能にするために、2つのドキュメントタイプには子要素が存在する必要があります。例えば、**AssetCenter** からポートフォリオ品目ユーザを取得するために、**amPortfolio** ドキュメントタイプの **lUserID** フィールドが **amEmplDept** ドキュメントタイプに共通です。

### 注意:

この結合は、例としてのみ示します。Databaseコネクタは、AssetCenterデータベースに接続するために使用しないでください。

結合を実行するには:

- 1 ドキュメントタイプを別のドキュメントにドラッグします。
- 2 表示された構造体を選択します。
- 3 必要な場合は、構造体をコレクションに変更します。
- 4 **Join properties** タブで、**Suggest** をクリックします。

- 5 必要ならば、表された結合条件を変更します (ⓧボタン)。
- 6 結合条件を検証します (✓ボタン)。

### 結合シンタックス

以下に、結合シンタックスを示します。

```
<expression><operator><expression>
```

例：

```
{..Device_ID}*={Object_ID}
```

この例は、DeviceテーブルとEnterprise Discovery NMIDテーブルの間の結合に使用するシンタックスを示します。

式は以下になります。

- 相対フィールド ( {<フィールドの相対パス>} )
- 定数  
定数は、一重引用符 ( ' ) の中に指定し、文字列、数値、または日付でなくてはなりません。キーワード 'null' のみは、一重引用符の中に指定しないでください。

```
{DeviceId}=null
```

演算子は比較演算子になります ( = , \*= , > , >= , < , <= ) 。

#### ヒント:

相対パスの記述に間違いがないようにするには、結合条件を記述するために右側からフィールドをドラッグします。

#### 注意:

特定の \*=クエリは、データベースエンジンが演算子をサポートしていなければ、失敗するか、単に処理性能を低下させます。

### サンプルクエリ

- このクエリは、'demo'で始まる一意のIDすべてを返します。

```
{DeviceId} like "demo%"
```

- このクエリは、'demo'で始まらない一意のIDすべてを返します。

```
not({DeviceId} like "demo%")
```

## 結合サブクエリ

**Perform a sub-query** オプションを使用すると、サブクエリを強制的に実行できます。

このオプションは、1対1結合が多いためにクエリがデータベースエンジンに対して大きくなり過ぎた場合に特に役立ちます。この場合、メインクエリを分割するためにサブクエリを強制的に実行できます。このオプションを選択するのは、データベースエンジンで外部結合をサポートしていない場合です。

## ソート式

このコントロールを使用し、データを返すクエリの順序を指定します。

以下の順序でデータのソートを実行できます。

- 昇順（デフォルト動作）
- 降順（**DESC**命令）

以下に、シンタックスを示します。

```
{<relative path1> [desc], {<relative path2> [desc]...}
```

相対パスの後ろに命令が指定されない場合は、降順ソートが行われます。降順ソートの場合は、**desc**命令を使用します。

以下の例では、**DateSold**という名前のデータ型フィールドを使用します。**DateSold**フィールドを使用してレコードを昇順でソートします（最も古いレコードから最新日付のレコードへ）。

```
{DateSold}
```

以下の例では、**Name**という名前のテキスト型フィールドを使用します。**Name**フィールドを使用してレコードを降順でソートします（ZからAへ）。

```
{Name} desc
```

## スケジューラプロパティ

ポイントは、スケジューラプロパティに関連付けられます。このプロパティは、日付および時刻型フィールドをスケジュールポイントとして定義する場合に表示されます。

### スケジュールポイント

スケジュールポイントの定義とは、**Connect-It**でスケジューラの参照要素を定義することです。

スケジュールポイントを定義するには：

- 1 スケジュールポイントとして使用するフィールドを選択します。

このフィールドは、ドキュメントタイプのルートにあり、その複雑要素のいずれかに（構造体またはコレクション）に含まれないことが必要です。

- 2 右クリックして、ショートカットメニューから**Pointers/ Define**を選択します。  
フィールドの横にスケジュールポインタを表す🕒アイコンが表示され、**Scheduling properties**タブが有効になります。
- 3 **Pointer expression**枠で、フィルタをフィールドに適用できるスケジュールクエリ（WHERE句）を定義します。  
スケジュールクエリに使用するシンタックスは、結合の定義に使用するシンタックスに似ています。

```
{CreationDate} >= "[SWLastScanDate]"
```

この例では、CreationDateフィールド（中括弧内に定義）の値がスケジュールポインタ（角括弧内に定義されてドキュメントタイプの名前とその後ろにフィールドの名前を含む）の値（引用符の間に定義）と比較されます。

**Suggest**ボタンを使用すると、シンタックスのサンプルを表示できます。

---

## 生成用または取り込み用ドキュメントタイプの定義

生成用または取り込み用ドキュメントタイプはテンプレートの役目を果たしており、コネクタはシナリオの実行時に、このテンプレートを使用してドキュメントを生成したり取り込んだりします。生成用または取り込み用ドキュメントタイプは、コネクタが発行する使用可能なドキュメントタイプから選択されたフィールドの集まりです。

---

例：

ed\ed2ac44\ediac.scnシナリオのAsset Managementコネクタによって取り込まれた**amPortfolio**ドキュメントタイプには、同じAsset Managementコネクタによって使用可能になった**amPortfolio**ドキュメントタイプに見られる少数のフィールドがあります。

---

コネクタの生成用ドキュメントタイプ、または取り込み用ドキュメントタイプを作成するには：

- コネクタが発行する使用可能なドキュメントタイプから、1つのドキュメントタイプを選択します。
- 選択したドキュメントタイプから必要なフィールドを選択します。

---

例：

Asset Managementコネクタが発行する全部の使用可能なドキュメントタイプから、**amProduct**ドキュメントタイプを選択します。次に、必要なフィールド（バーコード、メーカー、価格、カタログ番号など）を選択します。

---

## ドキュメントタイプの説明

### XMLファイルとDTDファイル

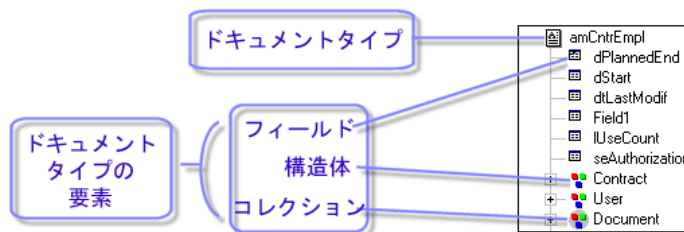
Connect-It内で使用されるドキュメントはXML (Extensive Markup Language) ファイルに相当し、これらのファイルテンプレートとして使用するドキュメントタイプが、DTD (Document Type Definition、文書型定義) に相当します。

Connect-ItのScenario Builderでは、全てのドキュメントをXMLファイルに転換し、全てのドキュメントタイプをDTDに変換することができます。

### ドキュメントタイプの要素

各ドキュメントタイプはツリー構造になっています。ツリー構造内には、単純な自立型要素 (フィールド) と、複数レベルの構造を持つ複雑な要素があります。後者には更に、ルートノードや、単純または複雑な要素を含む構造体やコレクションが含まれています。

図 4.4. ドキュメントタイプの要素



単純要素には以下のものがあります。

- フィールド (■)  
フィールドは、数、倍長整数、固定長テキスト、日付、などの特定のデータ型を含みます。
- BLOB型フィールド (■)  
BLOB (binary large object) 型フィールドは、画像、音声、ビデオなどの保存される必要のあるバイナリオブジェクトを含んでいます。
- メモ型フィールド (■)  
メモ型フィールドは可変な長さのテキストを含んでいます。

複雑な要素には以下のものがあります。

- 単純要素または複雑要素を含む構造体 (🌈)

例1：データベーステーブル用のドキュメントタイプでは、各構造体は別のテーブルを指しています。構造体は、2つのテーブル間のリンクが1対1であることを示しています。つまり1番目のテーブルのレコード1つは、別のテーブルのレコード1つにのみリンクされています。

例2：受信されたEメールメッセージ用のドキュメントタイプでは、構造体はメッセージの送信者に関する情報に当たります（1つのメッセージには1人の送信人しかいません）。

- 単純要素または複雑要素を含むコレクション (🌈)

例1：データベーステーブル用のドキュメントタイプ内にコレクションがある場合、このコレクションはデータベース内の別のテーブルを指しています。コレクションでは、2つのテーブル間のリンクは1対N、またはN対Nです。1番目のテーブルの1つのレコードは、2番目のテーブルの1つまたは複数のレコードにリンクされており、2番目のテーブルのレコードも、1番目のテーブルの1つまたは複数のレコードにリンクされています。

例2：送信されたEメールメッセージ用のドキュメントタイプでは、コレクションはメッセージの受信者に当たります（1つのメッセージの受信者数は、何人にでもなり得ます）。



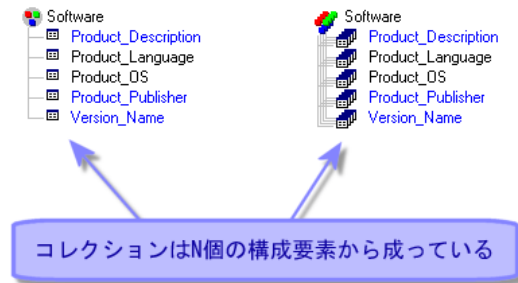
**注意:**

属性のコレクションは、1つのフィールドのみを含むコレクションです。フィールドは属性に当たります。コレクション内の各構成要素は、1つの要素がN回繰り返された構造体です。

コネクタがドキュメントを処理する前に、ドキュメント内の各コレクションには不定数の構成要素があります。これらの構成要素の正確な数を処理前に知ることはできません。そのため、コレクションは $n$ 個の構成要素から成っている、と定義します。



## 図 4.5. ドキュメントタイプのコレクション



例：

Desktop Discoveryコネクタが発行する使用可能なドキュメントタイプ*Machine*では、コンピュータにインストールされたソフトウェアはコレクションで示されています。これは、各コンピュータにインストールされているソフトウェアの数は不定なため、この種のデータはコレクションの形を取る必要があるからです。コレクションの各構成要素はソフトウェアの内容を説明しています（名前、開発元、バージョンなど）。

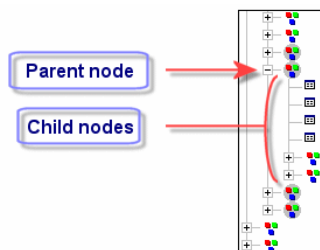
### ドキュメントタイプ内の親ノードと子ノード

ツリー構造内では、階層を持つ要素下には子要素があります。ドキュメントタイプでは、これを親ノードと子ノードと呼びます。

 **注意:**

親ノードと子ノードの概念はドキュメントの処理中に重要です。例えば、子ノード内のフィールドが拒否された結果、親ノードも拒否されることがあります。

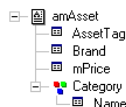
図 4.6. ドキュメントタイプのツリー構造



### ドキュメントタイプの処理

Connect-Itで処理されるドキュメントタイプとドキュメントの関係は、次の表の通りです。

使用可能なドキュメントタイプ	生成用または取り込み用ドキュメントタイプ	生成されるドキュメントタイプ
----------------	----------------------	----------------



### 設定

コネクタが発行したドキュメントタイプのなかから、統合シナリオ内で使用する1つのドキュメントタイプを選択します。

### ドキュメントタイプの作成

生成用、または取り込み用ドキュメントタイプを作成するには、使用可能なドキュメントタイプから必要な要素を選択します。

### シナリオの起動

コネクタが、ドキュメントの生成または取り込みを実行します。

## 生成用または取り込み用ドキュメントタイプのeditウィンドウにアクセスする

生成用または取り込み用ドキュメントタイプのeditウィンドウは、2つのゾーンから成っています。

- 生成用または取り込み用ドキュメントタイプを作成するための、画面右側の作業枠

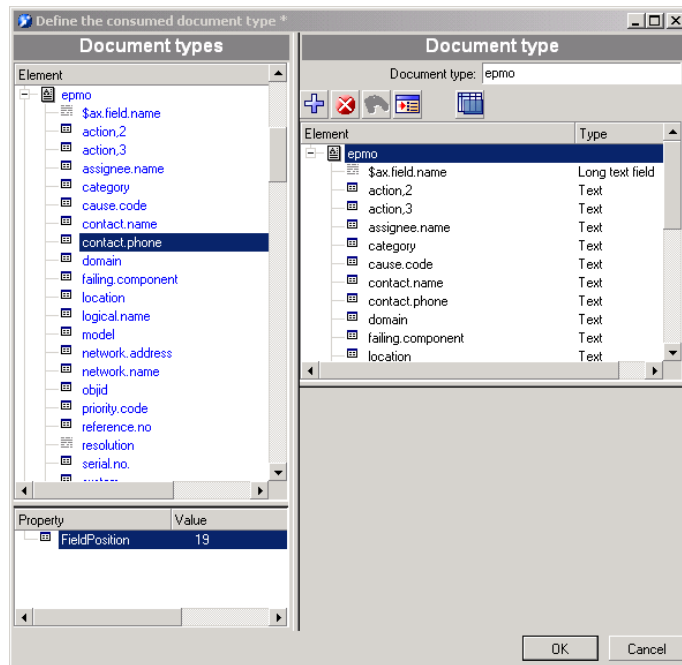
この作業枠の下にはディレクティブ用のタブが表示されます。ディレクティブのないコネクタもあります。

- コネクタが発行する使用可能なドキュメントタイプが表示される画面左側のゾーン。このゾーンは2つの部分に分かれています。
  - 使用可能なドキュメントタイプのルートノードが表示される枠 (罫)。この枠内でドキュメントタイプのノード (ルートノード、構造体、コレクション) 内を全部表示すると、ノード内の全要素を参照できます。各ノードと各フィールド (端末ノード) には要素の名前とタイプ (テキスト、整数、日付...) が表示されます。ドキュメントタイプ内で1ノードを選択すると、このノードは現在の選択項目になります。
  - 現在の選択項目のプロパティと値を表示する枠。これらのプロパティは、選択項目の意味やプロパティを理解するのに役立つ技術的情報です。

 **注意:**

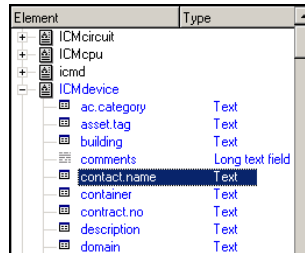
Asset ManagementまたはSAP BAPIコネクタなど、特定のコネクタでは、選択したフィールドの説明が表示されます (**Description**プロパティ)。

図 4.7. ServiceCenterコネクタの取り込み用ドキュメントタイプの編集





例：以下の画面では、*ICMdevice*ドキュメントタイプの**contact.name**フィールドのタイプは、*text*です。

図 4.8. 使用可能なドキュメントタイプのゾーン



Element	Type
+ ICMcircuit	
+ ICMcpu	
+ icmd	
- ICMdevice	
ac.category	Text
asset.tag	Text
building	Text
comments	Long text field
<b>contact.name</b>	<b>Text</b>
container	Text
contract.no	Text
description	Text
domain	Text

### 生成用または取り込み用ドキュメントタイプのeditウィンドウにアクセスする

- 1 Scenario diagram部分でコネクタを選択します。
- 2 **Document types**タブを選択します。またはコネクタをダブルクリックします。
- 3 生成用ドキュメントタイプ、または取り込み用ドキュメントタイプの枠を選択します。
- 4 をクリックすると、ドキュメントタイプを新規に作成できます。をクリックすると、選択した既存のドキュメントタイプを編集できます。

### 生成されたか取り込まれたドキュメントのタイプ

生成されたドキュメントのタイプには、いくつかの種類があります。

- 各コネクタ固有
- 処理レポート  
処理レポートの詳細については、「[処理レポートの使用 \[ 献 235\]](#)」の章を参照してください。
- フィードバックドキュメント

### 自己生成ドキュメント

自己生成ドキュメントは、別のドキュメントの取り込み時にコネクタによって生成されるドキュメントです。

この自己生成ドキュメントは、アイコンによって示されます。

以下のコネクタで、自己生成ドキュメントを使用します。

- Web Service
- SAP BAPI

- Command line
- MQSeries

マッピングが複数のドキュメントタイプを対象とする場合、取り込み時に自己生成ドキュメントを発生させるドキュメントを選択できます。 **Produce this document type on consuming** のドロップダウンリストから選択します。

 **注意:**


自己生成ドキュメントタイプを使用するコネクタは、取り込みの結果としてのみ開始でき、直接開始することができません。

## 生成用または取り込み用ドキュメントタイプを作成する

生成用または取り込み用ドキュメントタイプを作成するには、ルートノードまたは1つまたは複数の要素（コレクション、構造体、フィールド）を、ドキュメントタイプのeditウィンドウの作業枠内に移動させます。

### 生成用または取り込み用ドキュメントタイプを作成する

生成用または取り込み用ドキュメントタイプを作成するには、

- 1 ルートノードまたはドキュメントタイプの1つまたは複数の要素を、以下の方法で作業枠内に置きます。
  - 選択した要素を、作業枠にドラッグ&ドロップします。
  - 必要な要素を選択し、 をクリックします。
  - 要素またはルートノードを直接ダブルクリックします。

 **注意:**

ノード（ルートノード、構造体、コレクション）下にある多数のフィールドを使用する場合は、ノードを直接右の作業枠に移動させる方法を取ると便利です。ノード下の全フィールドも自動的に作業枠へ移るので、ここから不必要なフィールドを削除してドキュメントタイプを作成します。

選択が終了したら、ドキュメントタイプに名前を付けます。（デフォルトでは、画面左から右の作業枠に移した使用可能なドキュメントタイプのノードの名前が付いています。） **OK** をクリックします。


 **注意:**

マッピングボックスでマッピングを作成すると、マッピング内で使用されたソースコネクタの使用可能なドキュメントタイプの要素は、生成用ドキュメントタイプに自動的に追加されます。ドキュメントタイプの編集は以下の場合に便利です。

- マッピングで使用されなくなった要素をドキュメントタイプから削除する場合
- マッピングで使用されないが不可欠な要素を追加する場合

### 生成用または取り込み用ドキュメントタイプを変更する

生成用または取り込み用ドキュメントタイプを変更するには：

- 1 ドキュメントタイプを選択してをクリックするか、ドキュメントタイプをダブルクリックします。


 **警告:**

既存のドキュメントタイプを変更すること、特にその複雑要素（コレクション、構造体、フィールド）の1つを変更することは、このドキュメントタイプにリンクされたマッピングを変更することです。結果として、別のマッピングを適合する必要があります。

ドキュメントタイプの変更には、以下が含まれます。

- 複雑要素の1つの削除  
生成用または取り込み用ドキュメントタイプの要素を削除することは、特にこの要素がマッピングで使用されなくなった場合、ドキュメント処理の性能向上に役立ちます。
- 複雑要素の追加  
生成用または取り込み用ドキュメントタイプの要素に複雑要素を追加することは、以下の場合に役立ちます。
  - シナリオの実行時、これらの要素は通常、OpenView Network Discovery コネクタのスケジュールポイントを更新するためにソース内に値を取得する必要があります。

### 作業枠から要素を削除する

- 1 要素を選択し  をクリックするかまたは **Delete** を押します。
- 2 要素を画面左側の使用可能なドキュメントタイプ枠へドラッグして戻します。

## 生成用または取り込み用ドキュメントタイプのDTDをコピーする

Connect-It内の各ドキュメントタイプは、それぞれXML形式のドキュメントに対応しています。Connect-Itでは、このドキュメントに関連したDTDをコピーできます。

### 生成用または取り込み用ドキュメントタイプのDTDをコピーする

- 1 生成用ドキュメントタイプを作成または編集します。
- 2 ポインタを作業枠に置きます。
- 3 右クリックします。
- 4 **Copy this XML DTD**をショートカットメニューから選択します。

ドキュメントタイプのeditウィンドウが開いている場合、右クリックするとショートカットメニューが表示されます。このメニューで、DTDをクリップボードへコピーできます。

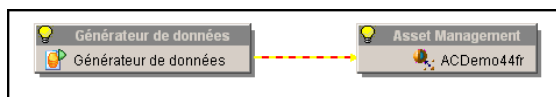
## データジェネレータの使用

データジェネレータを使用すると、静的に定義されたデータをコネクタに送信できます。

この内部ツールは、取り込み時に生成されるドキュメントに開始パラメータを入力する場合に特に役立ちます（Web Serviceコネクタ、ServiceCenter Web Serviceコネクタ、SAP BAPIコネクタ、およびコマンドラインコネクタ）。スケジュールをこのツールに関連付けることができます。

### データジェネレータの独自機能

データジェネレータは、生成モードのみで機能し、データを取り込まず、このツールと異なり専用のドキュメントタイプを表示しないコネクタと比較することができます。



ドキュメントタイプを表示できるようにするには、データジェネレータを開かれたコネクタに関連付ける必要があります。

### コネクタ付きのデータジェネレータの動作

- データジェネレータとコネクタを関連付ける場合、マッピングボックスが作成されません。
- データジェネレータは、マッピングボックスに関連付けることができません。

- データジェネレータは、1つ以上のターゲットコネクタに接続されない限り、生成用ドキュメントタイプを作成できません。
- データジェネレータによって生成されたドキュメントタイプを編集する場合、ターゲットコネクタを開く必要があります。

### データジェネレータによって生成されたドキュメントタイプ

データジェネレータによって生成されたドキュメントタイプを編集する場合、左側のパネルにターゲットコネクタの取り込み用ドキュメントタイプが表示されます。ルール（ディレクティブ）パネルには、データジェネレータに固有のフィールドがターゲットコネクタの取り込み用ルール（ディレクティブ）と共に表示されます（**Reconciliation**タブなど）。

データジェネレータには、値を受け入れる要素ごとに生成用ルール（ディレクティブ）（**Value**列）が表示されます。このルール（ディレクティブ）の値は、ドキュメントがデータジェネレータによって生成されるときに要素に割り当てられる値です。

生成用ルール（ディレクティブ）の値**Value**は、型編集コントロールによって編集できます。型編集コントロールは、数値型用の数値エディタ、日付/時刻型用の日付/時刻エディタ、文字列用のシンプルテキストエディタ、ロングテキストフィールド用のマルチラインエディタ、およびBLOB用ファイルセクタです（生成用BLOBの値はファイルの内容になります）。

コネクタによって取り込まれたドキュメントタイプを削除する場合、それがデータジェネレータによって生成されたのであれば、ダイアログボックスにデータジェネレータによって生成されたドキュメントも削除されることが示されます。

### コレクションの複製

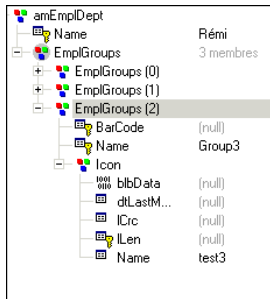
コレクションは、1-Nタイプの関連です。コレクションをデータジェネレータで使用する場合、同じ要素を別々の値で複数回入力するために、必要に応じた回数を複製することができます。例えば、AssetCenterデータベースをテストするために、部署と従業員のテーブルに関連付けられた情報を生成できます。これを行うには、各コレクションで別の名前を使用するように毎回従業員の名前を変えます。

複製された各コレクションは、コレクション名の後ろに複製番号（0、1、2、3など）が付けられた構造体として確認されます。

コレクションを複製するには、コレクションを右クリックしてショートカットメニューから**Add collection element**を選択します。コレクションに含まれる各要素には、デフォルトでNULL値が割り当てられます。追加された各々のコレク



ションまたはサブ要素は、ショートカットメニューの**Delete / Cancel an element**コマンドを使用して削除できます。



ドキュメントの生成時、**Do not produce null elements**コマンドによって要素をNULL値で生成しないことを選択できます。

### データジェネレータによるシナリオの例

天気Webサービスを問い合わせるシナリオを作成して、このWebサービスによって提供される情報をAssetCenterで使用します。

以下にステップを示します。

- 1 Web Serviceコネクタを設定します。
- 2 データジェネレータを設定します。
- 3 AssetManagementコネクタを設定します。
- 4 データジェネレータによってWebサービスに送信するデータを定義します。
- 5 Web ServiceコネクタとAssetManagementコネクタ間のマッピングを定義します。

Web Serviceコネクタを設定します。

- 1 Scenario Builderでコネクタをドラッグアンドドロップします。
- 2 使用するWSDLアドレスを指定します（または、UDDIブラウザで検索し、%weather%をキーワードとしてフィルタを適用します）。SOAPプロトコルは、デフォルトで使用されます。

この例では、以下のアドレスで入手できるcapescienceのWSDLサービスを使用します。 <http://live.capescience.com/wsd/AirportWeather.wsdl>

- 3 選択を検証して、**OK**をクリックし、このコネクタの設定を完了します。
- 4 適切に設定したコネクタを開きます（コネクタを右クリックしてショートカットメニューから**Open connector**を選択します）。

データジェネレータを設定します。



#### 注意:

データジェネレータは、リンクされたコネクタが開いている場合のみ接続可能です。

- 1 Scenario Builderで、データジェネレータ (**Internal tools** ツールボックス) をドラッグアンドドロップします。
- 2 データジェネレータをWeb Serviceコネクタに関連付けます。
- 3 必要に応じて、名前を変更します (コネクタを右クリックしてショートカットメニューから**Configure connector**を選択します)。

AssetManagementコネクタを設定します。

- 1 Scenario Builderでコネクタをドラッグアンドドロップします。
- 2 ウィザードの**Define the connection parameters**ページで、使用するデータベースを指定します。
- 3 Finishをクリックし、設定を有効にします。

データジェネレータによってWebサービスに送信するデータを定義します。

- 1 データジェネレータを選択します。
- 2 データジェネレータを開きます。
- 3 新しい生成用ドキュメントタイプを作成します。
- 4 **getSummary**ドキュメントを選択して、値VHHHをarg0に割り当てます (空港のICAO識別子に相当する値)。

この値は、Asset Managementコネクタのマッピング内で再使用されます。

- 5 OKをクリックします。

データジェネレータが香港国際空港の天気レポートを送信するように設定されました。GET命令は変わりません。スケジューラは、AssetCenterへの送信情報を更新するために定期的に命令を実行する目的で使用できます。

Web ServiceコネクタとAsset Managementコネクタ間のマッピングを定義します。

- 1 Web ServiceコネクタをAsset Managementコネクタに関連付けます。
- 2 新しいマッピングを作成します。
  - ソース : Web Serviceコンポーネント、ドキュメントタイプ : getSummary
  - ターゲット : AssetManagementコンポーネント
- 3 このマッピングでは、bAllgroup、bChildGrps、dtEnd、dtStart、Msg、Name、Topic、Author.BarCode、Author.IDNo、Author.Nameの要素が必要になり、マッピング内で使用されます。

以下に示すように、値を要素に割り当てます。

- bAllGroups : retval =1  
全従業員グループに対して、message broadcastオプションがオンになります。
- bChildGrps : retval =1

全従業員サブグループに対して、**message broadcast**オプションがオンになります。

- **bBlink : retval =1**  
メッセージに対して、**blink**オプションがオンになります。
- **dtEnd : DateAdd(Now(),1800)**  
メッセージの有効期限は、現在の日付（ニュースが送信された時刻）に基づき0分を追加して定義されます。
- **dtStart : retval = Now()**  
メッセージ開始日は、**Connect-It**サーバの現在日付です。
- **メッセージ :**

```
retval = [return.location] & " " & "Humidity: " & [return.humidity] & " " & "Barometric pressure: " & [return.pressure] & " " & "Sky: " & [return.sky] & " " & "Temperature: " & [return.temp] & " " & "Visibility: " & [return.visibility] & " " & "Wind: " & [return.wind]
```

送信されるメッセージには、**Web**サービスによって提供されるすべての情報がスペースで区切られて記載されます。

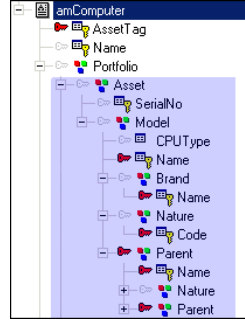
- **名前 :**

```
retval = "WEATHER" & [$ParentDoc$.arg0]
```

メッセージの名前は、文字列**"WEATHER"**と、データジェネレータで定義され**\$ParentDoc\$**変数によって取得された**ICAO**名（**arg0**要素）を連結したものです。

- **トピック : "Weather"**  
**"Weather"**という名前のカテゴリが**AssetCenter**に作成されます。
- **Author.BarCode: RetVal = "CIT"**  
メッセージの作成者のバーコードは、**Connect-It**アプリケーションです。
- **Author.IDNo: RetVal = "CIT"**  
メッセージの作成者の**ID**番号は、**Connect-It**アプリケーションです。
- **Author.Name: RetVal = "Connect-It"**  
メッセージの作成者の名前は、**Connect-It**アプリケーションです。

- マッピングが下図のようになっていることを確認して、検証します。



以下の照合更新キーが定義されます。

- **Element Name** : 連結された名前が変わらないため、照合更新キーがこの要素に定義されます。
- **Author.BarCode** : メッセージの作成者のIDが変わらないため、照合更新キーがこの要素に定義されます。

マッピング動作を定義します。

- ルート要素の場合 : **Update or insert**照合更新タイプが定義されます。シナリオが生成されると、最初のメッセージが作成され、メッセージが更新されます。
- *Author*構造体の場合 : **Update or insert**照合更新タイプが定義されます。シナリオが生成されると、作成者が作られ、その情報が変更されなくなります。

#### 4 マッピングを検証して、シナリオをバックアップします。

このマッピングは、以下の処理を行います。

- **amNews**テーブルにレコードを作成します。Webサービスによって提供される天気データ (amMsgフィールド内に含まれる) と、メッセージの表示形式 (タイトル、カテゴリ、グループ、サブグループ、ブリンク表示のオプション、開始日付と終了日の付表示) で構成されます。
- メッセージの作成者用に、**amEmpIDept**従業員と部署テーブルにレコードを作成します。

同じ作成者と同じカテゴリでレコードが既に存在する場合は、最新情報で更新され、古い情報が破棄されます。

## 生成用ドキュメントタイプのデータを表示する

Connect-Itでは、生成用ドキュメントタイプの要素に対応するデータを表示できます。表示されるのは、コネクタの接続先の外部アプリケーション内に記録されているデータです。

表示されるデータは、ドキュメントタイプとコネクタタイプの両方に応じて決まります。

- すべての生成用ドキュメントタイプとすべてのソースコネクタの場合、データはソースデータベースから得られます。
- すべての取り込み用ドキュメントタイプとすべてのターゲットコネクタの場合、データがターゲットコネクタに使用可能なドキュメントタイプから得られます。つまり、データがターゲットデータベースで使用可能です。この機能は、特定のコネクタでは使用できません。

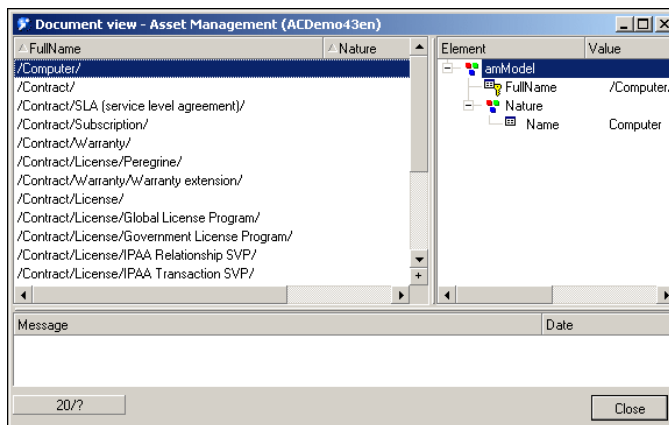
### 注意:



データの表示に一定以上の時間がかかると、進行中のアクションを中断するためのウィンドウが自動的に開きます。表示の中断を選択すると、既にロードされたデータにアクセスできるようになります。⏏ をクリックすると、中断したアクションを再開できます。

例:


Databaseコネクタの生成用ドキュメントタイプのデータは、データベースの1つのテーブルにある複数のレコードに一致します。

## 図 4.9. 生成用ドキュメントタイプのデータプレビュー用ウィンドウ




view window内に読み込まれるドキュメントの数は、**Edit/Options**メニューの**Display**セクションの**Number of documents recovered in the block during the preview**オプションで指定します。デフォルトでは、最初の20のドキュメントが取得されます。次のドキュメントを読み込むには、 ボタンを押します。全ドキュメントが表示されると、 ボタンはグレースアウトされます。

 **注意:**

 ボタンは一部のコネクタでのみ使用可能です。

## 生成用ドキュメントタイプを表示する

- 1 生成用ドキュメントタイプを作成または編集します。
- 2 以下の操作のいずれかを実行します。
  -  をクリックします。
  - ポインタを作業枠内に置いて右クリックし、ショートカットメニューから **View data** を選択します。

ドキュメントタイプのデータのプレビュー用ウィンドウは、2つの部分から成っています。

- 画面左側の枠には、ドキュメントタイプの要素に対応する外部アプリケーションの全レコードが表示されます。  
画面左の各列は、生成用ドキュメントタイプの各要素に対応します。
- 画面右側の枠には、生成用ドキュメントタイプと、左側の枠で選択したレコードの値が表示されます。

 **注意:**

表示するドキュメントの数は、表示パラメータによって決まります。表示パラメータの詳細については、「[Number of documents recovered in a block during the preview \[ 献 65\]](#)」の節を参照してください。


## データの読み込みを中断する

- 1 以下の操作のいずれかを実行します。
  - 現在のクエリを中断するかを確認するダイアログボックスが表示されたら、**OK** をクリックします。
  - キーボード上の **Esc** を押します。

## ドキュメントタイプ内の要素を検索する

検索機能を使用すると、ドキュメントタイプ内の要素を検索する際に、ドキュメントタイプの全ノードを開く必要がなくなります。

## ドキュメントタイプ内の要素を検索する

- 1 作業枠内または使用可能なドキュメントタイプのゾーンで、ドキュメントタイプの1要素を選択します。
- 2 以下の操作のいずれかを実行します。
  - 右クリックして、ショートカットメニューから**Find (Ctrl+F)**を選択します。
  -  をクリックします。
- 3 **Find what** フィールドに、検索する要素の名前を入力し、以下のオプションが必要に応じて選択します。
  - **Case sensitive**
  - 検索方向 (upまたはdown)
- 4 **Find** をクリックします。

次の要素または前の要素を検索するには：

- 1 以下の操作のいずれかを実行します。
  - 右クリックして、ショートカットメニューから**Find next (F3)**を選択します。
  - 右クリックして、ショートカットメニューから**Find prev. (Ctrl+F3)**を選択します。

### 注意:

検索の範囲は、使用可能なドキュメントのウィンドウに表示されている要素に制限されます。サブノード内でも検索する場合は、検索の前にサブノードを開いておく必要があります。

## document-type editウィンドウでのショートカットメニュー

document-type editウィンドウには、2種類のショートカットメニューがあります。

- 使用可能なドキュメントタイプのゾーン（画面左側）にポインタが位置する時のメニュー
- 作業枠にポインタが位置する時

### 使用可能なドキュメントタイプのゾーン（画面左側）にポインタが位置する時のメニュー

コマンド	機能
Find	文字列検索用のダイアログボックスを表示します。
Find next	ダイアログボックスに最後に入力された文字列を、ウィンドウの下方向に検索します。

コマンド	機能
Find prev.	ダイアログボックスに最後に入力された文字列を、ウィンドウの上方向に検索します。
Copy this XML DTD	コンピュータのクリップボードに、ドキュメントのDTD（文書型定義）をコピーします。
Copy path	コンピュータのクリップボードに、選択した要素のパスをコピーします。
Add this element	作成中の生成用または取り込み用ドキュメントタイプに、選択した要素を追加します。
Filter unused document types	作業枠内には、編集される生成用または取り込み用ドキュメントタイプのみが表示されます。

### 作業枠にポインタが位置する時

コマンド	機能
Find	文字列検索用のダイアログボックスを表示します。
Find next	ダイアログボックスに最後に入力された文字列を、ウィンドウの下方向に検索します。
Find prev.	ダイアログボックスに最後に入力された文字列を、ウィンドウの上方向に検索します。
Copy this XML DTD	コンピュータのクリップボードに、ドキュメントのXMLのDTD（文書型定義）をコピーします。
Copy path	コンピュータのクリップボードに、選択した要素のパスをコピーします。
Remove this element	作成中の生成用または取り込み用ドキュメントタイプから、選択した要素を削除します。
View data	生成用ドキュメントタイプの要素に対応するデータを表示します。
Filter unused document types	作業枠内には、編集される生成用または取り込み用ドキュメントタイプのみが表示されます。

## ドキュメントタイプのマッピングの定義

ドキュメントタイプをマップすると、ソースコネクタが生成したドキュメントをターゲットコネクタが取り込めるようになります。**Scenario Builder**では、2つのコネクタ間に位置するマッピングボックスで、生成用ソースドキュメントタイプと取り込み用ターゲットドキュメントタイプ間の、マッピングを編集できます。マッピングを作成するには、ソースドキュメントタイプの要素と、ターゲットドキュメントタイプの要素を関連付ける必要があります。

本章の読解を容易にするために、**ソース要素**や**ターゲット要素**、更にソースまたはターゲットのフィールド、構造体、コレクションの概念を本章で用います。



ソースドキュメントタイプの要素を、ターゲットドキュメントタイプの要素に直接関連付けられない場合は、マッピングスクリプトを作成しなければなりません。

マッピングスクリプトの詳細については、「マッピングスクリプトの定義 [ 献 124]」の章を参照してください。


## マッピングボックス

マッピングボックスでは、ソースコネクタの生成用ドキュメントタイプと、ターゲットコネクタの取り込み用ドキュメントタイプ間のマッピングを編集できます。

### マッピングボックスの設定


Connect-Itのマッピングボックスの設定はウィザードで実行できます。

マッピングボックスのconfigurationウィザードを起動するには、以下の方法があります。

- マッピングボックスが*Scenario diagram*内に位置しない場合
  - 1 Toolbox内のマッピングボックスをダブルクリックします。
  - 2 Toolboxから*Scenario diagram*へマッピングボックスをドラッグします。
- マッピングボックスが*Scenario diagram*内に位置する場合
  - 1 マッピングボックスを選択してから**Tools/Configure**メニューを選択します。
  - 2 マッピングボックスを選択し、キーボード上の**F2**を押します。
  - 3 マッピングボックスを選択し、右クリックしてショートカットメニューから**Configure connector**を選択します。
  - 4  をクリックします。

マッピングボックスのconfigurationウィザードは2ページから成っています。詳細は次節で説明されています。

#### 注意:

Scenario Builderのツールバーで をクリックしなかった場合は、2番目のページは表示されません。

### マッピングボックスに名前を付け、説明を加える

configurationウィザードの1ページ目では、以下の内容を指定できます。

- マッピングボックスの名前
- マッピングボックスの役割の説明

## Name

コネクタに名前を付けます。フィールドのデフォルト値は`Mapping`です。1つの同じシナリオ内でこの名前は固有の名前でなければなりません。

## Description

コネクタの役割を説明するテキストを入力します。

### Advanced configuration

このページでは、以下の作業を行うことができます。

- このページでは、マッピングスクリプト内の演算子`[..]`の動作を指定できます (**Verify the existence of the element under which the `[..]` operator applies**)。

このオプションの設定を以下に説明します。

- オン：角括弧`[..]`内のドキュメントタイプノードごとに、このノードが空であると、ドキュメントが拒否されます。
- オフ（デフォルトオプション）：ドキュメントタイプ要素の存在が検証されません。

ドキュメントタイプの存在を検証する場合は、角括弧`[..]`を中括弧`{..}`に置き換える必要があります。

Connect-Itバージョン3.2以降では、`{..}`演算子を`[..]`演算子の代わりに使用できます。このシンタックスは、生成されたドキュメントの要素の存在を確認します。

- Basicスクリプトで、変数を明示的に宣言します。宣言されたすべての変数は、前に**Dim**命令が付く必要があります。

このオプションは、デフォルトで選択されます。

## `[..]` と `{..}` 演算子の使用例

以下の表のスクリプトは、`FamilyName`フィールドの値が存在するかどうかをテストします。このフィールドに値がある場合、戻り値は常に`Doe`です。

### Check the existence of the element to which the `[..]` operator applies

オプションが選択されているか否かによって、またスクリプトで使用されている演算子のタイプに応じて、取り込まれるドキュメントに送信される値は異なります。

#### 重要項目:

空の値に関する概念は、関連するフィールドのタイプに応じて変化します。

- テキストタイプのフィールドの場合、空の値は "" に等しいです。
- 数値型のフィールドの場合、空の値は0に等しいです。
- その他

### オプションが選択されない場合

	FamilyName = ""	FamilyNameは存在しない	FamilyName = "値"
RetVal = "Doe" If [FamilyName] = " " Then RetVal = [FamilyName] End If	空の値	空の値	<i>Doe</i>
RetVal = "Doe" If {FamilyName} = " " Then RetVal = [FamilyName] End If	空の値	空の値	<i>Doe</i>
RetVal = "Doe" If {FamilyName} = " " Then RetVal = {FamilyName} End If	空の値	空の値	<i>Doe</i>
<b>オプションが選択されている場合</b>			
RetVal = "Doe" If [FamilyName] = " " Then RetVal = [FamilyName] End If	空の値	スクリプトに関連するノードは、 <b>Scenario Builder</b> に拒否されます。メッセージ "" がドキュメントログ内に表示されます。	<i>Doe</i>
RetVal = "Doe" If {FamilyName} = " " Then RetVal = [FamilyName] End If	空の値	スクリプトに関連するノードは、 <b>Scenario Builder</b> に拒否されます。メッセージ "" がドキュメントログ内に表示されます。	<i>Doe</i>
RetVal = "Doe" If {FamilyName} = " " Then RetVal = {FamilyName} End If	空の値	NULLの値	<i>Doe</i>

## マッピングの編集

本節では、統合シナリオのマッピングを編集することができる様々な手順を説明します。

## Edit Mappingウィンドウ

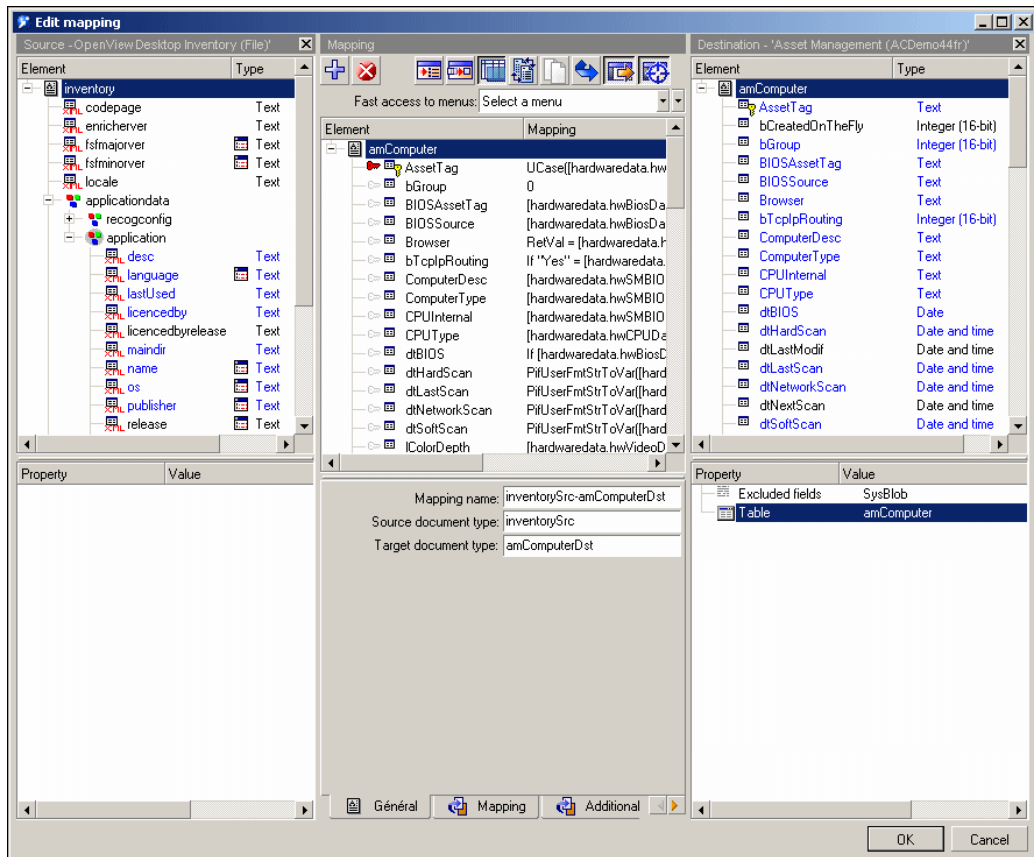
**Edit mapping** ウィンドウは3つのゾーンに分かれています。

- 選択されたソースコンポーネントが発行する全ての使用可能なドキュメントタイプが表示される部分（画面左）

**Select source and destination** ダイアログボックスで既存の生成用ドキュメントタイプを選択すると、このドキュメントタイプのルートノードの全レベルが表示されます。

- 選択されたターゲットコンポーネントが発行する全ての使用可能なドキュメントタイプが表示される部分（画面右）
- **mapping zone**（画面中央）。ここには以下のゾーンがあります。
  - ソース要素とターゲット要素をマップするための作業枠
  - ターゲットコンポーネントのルール（ディレクティブ）タブと、マッピングの各ノードを説明するためのタブが現れる部分

## 図 4.10. Edit mapping ウィンドウ



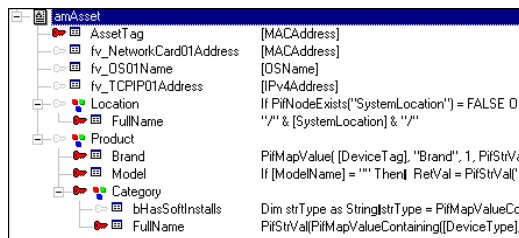
mapping-boxのツールバーでは、頻繁に行う操作を実行できます。

アイコン	機能
	作業枠内に要素を置きます。
	作業枠内から選択した要素を削除します。
	ターゲット要素をソース要素に関連付けます。
	マッピングで使用されていないソースとターゲットドキュメントタイプに、フィルタを適用します。
	作業枠内にあるターゲット要素を複製します。
	マップされたターゲット要素を探します。
	ソースコネクタの使用可能なドキュメントタイプを表示/非表示にします。

アイコン	機能
	ターゲットコネクタの使用可能なドキュメントタイプを表示／非表示にします。
	要素が選択されているゾーン内に、検索用のダイアログボックスを表示します。
	マッピングの作業枠内に、検索と置換用のダイアログボックスを表示します。

mapping ウィンドウの作業枠には、ソース要素とターゲット要素のマッピングの詳細が表示されます。スクリプトが使用されていると、スクリプトの関連付けられているターゲット要素の横に要約された形で表示されます。

図 4.11. 作業枠上のマッピングスクリプトの要約



マッピングボックスには、ソースコネクタとターゲットコネクタが発行する全ての使用可能なドキュメントタイプが表示されています。このため、mapping edit ウィンドウでマッピングを作成すると、ソースコネクタの生成用ドキュメントタイプとターゲットコネクタの取り込み用ドキュメントタイプを、マッピングと同時に自動的に作成することができます。

**注意:**

同じマッピング内で、1つのソースドキュメントタイプの要素を、複数のターゲットドキュメントタイプの要素に関連付けることはできません。またその逆（1つのターゲットドキュメントと複数のソースドキュメント）も不可能です。そのため、マッピングの編集集中にドキュメントタイプの1つを変更すると、新規のマッピングを作成することになり、以前に作成したマッピング情報は失われます。1つのソース要素を複数のターゲットドキュメントタイプの要素に関連付けるには、複数のマッピングを作成し、各マッピングに同一のソースドキュメントタイプを使用します。

複数のマッピング用に同じソースドキュメントを使用すると、ソースコネクタ用に実行するクエリの数をもっと抑えることができます。


また、1つのターゲットドキュメントタイプを選択して、そのドキュメントタイプ内の1つのノードを作業枠内にドラッグした後、ソースドキュメントに関連付

けないでおくことも可能です。このノード下にあるフィールドは作業枠内に表示されます。


#### 注意:

ソース要素またはターゲット要素上に表示される**View data**ショートカットメニューを使用すると、ソースデータやターゲットデータを表示できます。

#### ソースドキュメントタイプの枠を表示／非表示にする

- 1 以下の操作を実行します。
  -  をクリックします。
  - マッピングの作業枠内で右クリックし、**Show source**を選択／非選択にします。

#### ターゲットドキュメントタイプの枠を表示／非表示にする


- 1 以下の操作を実行します。
  -  をクリックします。
  - **Edit mapping**ウィンドウで右クリックし、**Show destination**を選択／非選択にします。

#### Edit mappingウィンドウの各枠を移動させる

- 1 枠の上端にマウスポインタを置きます。
- 2 濃淡のバーをクリックすると、枠の周囲を囲む黒線の長方形が表示されます。
- 3 希望の位置に黒線の長方形を移動させ、右クリックします。
- 4 枠を囲む黒線の長方形が希望の位置に移ったら、マウスボタンを放します。

#### マッピングを作成する

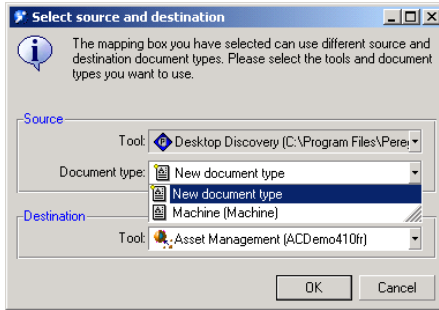
- 1 **Scenario diagram**内でマッピングボックスを選択します。
- 2 以下の操作を実行します。
  - **Mappings**タブを選択します。
  - ダブルクリックします。  
ダブルクリックすると、**Mappings**タブと同じ内容のダイアログボックスが表示されます。

- 3  をクリックします。

マッピングを新規に作成すると、**Select source and destination**ダイアログボックスが現れます。ここでは以下の要素を選択します。

- Source tool
- Source document-type
- Destination tool

## 図 4.12. AssetCenterのコレクションを更新する




### 注意:

次の場合このダイアログボックスは表示されません。

- マッピングボックスが、1つのソースツールと1つのターゲットツールにのみリンクされている場合
- ソースツール用に、生成用ドキュメントタイプが作成されていない場合

### 既存マッピングを変更する

- 1 Scenario diagram内でマッピングボックスを選択します。
- 2 以下の操作を実行します。
  - **Mappings**タブを選択します。
  - ダブルクリックします。  
ダブルクリックすると、**Mappings**タブと同じ内容のダイアログボックスが表示されます。
- 3 以下の操作を実行します。
  -  をクリックします。
  - 編集するマッピングをダブルクリックします。


### マッピングを非アクティブにする

マッピングを非アクティブにすると、コネクタがこのマッピング用にドキュメントを生成するのを妨ぐことができます。例えば、あるマッピングは、ソースアプリケーション内で除去された資産に対応するレコードを、ターゲットアプリケーション内で削除できるとします。レコードを1度だけ削除する場合は、レコードの削除が終わった時点でこのマッピングを非アクティブにします。

マッピングを非アクティブにする場合は、**Mappings**タブ内で、非アクティブにするマッピングのチェックボックスをオフにします。



## マッピングを削除する

- 1 Scenario diagram内でマッピングボックスを選択します。
- 2 以下の操作のいずれかを実行します。
  - **Mappings**タブを選択します。
  - ダブルクリックします。  
ダブルクリックすると、**Mappings**タブと同じ内容のダイアログボックスが表示されます。
- 3  をクリックします。

## 複雑要素と自動マッピングの識別

2つのドキュメントタイプ間にマッピングを作成する場合、アプリケーションは同類のフィールド、つまり同じ名前のフィールドを識別します。これらのフィールドは自動的にマッピングされます。

例えば、ServiceCenterコネクタの**location**ドキュメントタイプをAsset Managementコネクタの**amLocation**ドキュメントタイプにマッピングする場合、**Address**フィールドが自動的にマッピングされます。

## ドキュメントタイプ要素のパス

ドキュメントタイプの要素の場所を**Source for the collection mapping**フィールドなどに入力するには、この要素のドキュメントタイプ内でのパスを指定する必要があります。ドキュメントタイプの要素の親子関係はピリオドで表現されます。以下のスキーマは関連付けられた要素を表しています。

コレクションXのパスを指定するには以下の様に記述します。

**Structure\_A.Structure\_B.Collection\_X**

このシンタックスは、コレクションXは構造体Bの子要素であり、構造体Bは構造体Aの子要素であることを示しています。

以下のシンタックスも使用できます。

```
'Structure A'. 'Structure B'. 'Collection X'
```

---

例：

Desktop Discovery - AssetCenterシナリオの**inventorySrc-amComputerDst** マッピングでは、ターゲットドキュメントタイプ**amComputer**のコレクション **Document**は、**storedfile**コレクションにマップされています。このコレクションは**inventory**ドキュメントタイプの**storedfiles**構造体の子に当たるため、**Source collection**フィールドには次のパスが表示されます。

storedfiles.storedfile.name

要素の名前にピリオド、角括弧、または括弧'[]()'が含まれる場合は、シングルクォーテーションマーク（'）で要素名を囲みます。

'Element.A'

---

例：

**ServiceCenter**コネクタの使用可能なドキュメントタイプの要素名の多くは、ピリオドを含んでいます。**ServiceCenter**コネクタの使用可能なドキュメントタイプ**ICMDevice**内にある、**sw.vendor**コレクションの**sw.vendor**フィールドを指すには、以下の用にパスを記述します。

'sw.vendor'. 'sw.vendor'

ピリオドが名前に含まれていない場合、シングルクォーテーションマークはつけてもつけなくても構いません。つまり、

ElementA または 'ElementA'の両方の書き方が可能です。

---

## ドキュメント要素のパス

ドキュメント要素のパスの表記法は、ドキュメントタイプに使用されている表記法と同じです。コレクションの構成要素に関してのみ相違点があります。

ドキュメント内では、コレクションの構成要素は0から番号が付けられています。第1の構成要素には番号0が、第2の構成要素には番号1がついています。

パス内で特定の構成要素を指定するには、以下のシンタックスを用いて構成要素の順位を使用します。

**コレクション名 [構成要素の順位]**

例：**Software**コレクションの第1番目の構成要素の**VersionName**フィールドのパスは、以下の通りです。

Software(0).VersionName\nコレクションの第2構成要素用のパスは、Software(1).VersionNameになります。

変数を使用して特定の要素を指定することもできます。

```
Dim lId as Long
lId = 3
[Software(lId).VersionName]
```

このシンタックスは、コレクションの要素を閲覧する場合に特に役立ちます。以下の例では、**Software**コレクション内の要素（この例ではソフトウェア Connect-It）をテストします。

```
' Get number of members in the "Software" collection
Dim lCount As Long
Dim lCur As Long
lCount = PifGetItemCount("Software")
lCur = 0

Dim bFound As Integer
bFound = 0

While lCur < lCount AND iFound = 0
If [Software(i).Name] = "Connect-It" Then
bFound = 1
End If

lCur = lCur + 1
Wend
```

### 属性のコレクションのパス

属性のコレクション（1つのフィールドしか含まないコレクション）の特定の構成要素を指すには、パス名に必ず属性の名前を入れます。例えば、**address**属性を含む**Address**コレクションの構成要素を指定するには、Address(1).Address, Address(2).Address, Address(3).Address と記述します。

#### 注意:

コレクションからコレクションへのマッピングを実行する場合は（**Source for the collection mapping**フィールドに入力します）、コレクションの構成要素の番号を指定する必要はありません。

例：

```
[Software.Version]
```

### セッションのオープンおよびクローズ時にマッピングスクリプトを実行する

マッピングスクリプトは、セッションのオープンおよびクローズ時に実行される追加スクリプトによって補足することができます。

これらの追加スクリプトは、ほとんどの場合、*OpenSession()*および*CloseSession()* プロシージャによって呼ばれるグローバル変数です。

これらのプロシージャでは、以下のシンタックスを使用する必要があります。

```
Sub OpenSession()  
rem add your code  
End Sub
```

```
Sub CloseSession()  
rem add your code  
End Sub
```

*OpenSession()* プロシージャの後に宣言されたすべてのスクリプトは、セッションのオープン時に最初のドキュメントが生成される場合に実行されます。

*CloseSession()* プロシージャの後に宣言されたすべてのスクリプトは、セッションのクローズ時に最後のドキュメントが取り込まれた後に実行されます。

追加スクリプトとグローバル変数の詳細については、「マッピングスクリプトの定義 [ 献 124]」の章の「Additional scripts [ 献 ?]」の節を参照してください。

### 複数のマッピングを並べ替える

編集するマッピングは、ソースコネクタの生成用ドキュメントタイプを基準にして並べられています。複数のマッピングが同じドキュメントタイプを含む場合、ドキュメントの生成時にマッピングが実行される順番を指定することも可能です。例えば、最初のマッピングはターゲットアプリケーション内にレコードを作成し、2番目以降のマッピングはこのレコードを更新する、というようにも設定できます。

- 1 マッピングを選択します。
- 2 ▲または▼をクリックして、リスト内でマッピングを上下に移動させます。

### ドキュメント生成とマッピング実行の順番

以下の規則が適用されます。

- コネクタに書き込まずにシナリオを実行する（テストモード）  
適用されるのは、**Produced document types**タブ内に表示されている、ソースコネクタのドキュメント生成の順番です。
- スケジュールモード  
適用されるのは、**Scheduling edit**ウィンドウ内で定義されているドキュメントの順番です。このウィンドウでは、1つのスケジューラが複数のドキュメントタイプに関連付けられることがあります。このため、複数のドキュメントタイプがスケジューラに関連付けられる順番が、参照する順番として適用されます。この場合、**Produced document types**タブ内で指定される順番は、考慮されません。

### マッピング説明の記述方法

**Scenario Builder**ではマッピングの各ノードに説明を加えることができます。

**例：**構造体またはコレクション内に要素が存在するかどうかをテストするために使用されるマッピングスクリプトの説明

- 1 マッピングを編集します。
- 2 マッピングのノードを選択します。
- 3 作業枠の**Mapping**タブを選択します。
- 4 **Description**テキストゾーンに説明を加えます。
- 5 マッピングを保存します。

説明は.scnファイル内に保存されます。

### マッピングをコピー／貼り付けする

ソースドキュメントタイプからターゲットドキュメントタイプへのマッピング全体、またはマッピングの一部を、コピーできます。その後、このコピーしたソースからターゲットへのマッピングを、最初のマッピングと同じターゲットドキュメントタイプを持つ別のマッピングにコピーします。（例：Asset Managementコネクタを含むシナリオ内で、ターゲットドキュメントタイプが**amAsset**になっているマッピングの一部をコピーします。そしてこのコピー内容を、ターゲットドキュメントタイプが同様に**amAsset**である別のマッピングに貼り付けます。）この機能は、同一のマッピングまたは類似するマッピングを多数作成する場合に便利です。

- 1 既存シナリオのマッピングを開きます。
- 2 マッピングの作業枠内で、ターゲットドキュメントタイプの以下の要素上にポインタを置きます。
  - ルートノード
  - 構造体
  - コレクション
  - フィールド
- 3 右クリックします。
- 4 **Copy mapping**を、表示されるショートカットメニューから選択します。
- 5 コピーされたマッピングのターゲットドキュメントタイプを含む別のマッピングを開きます（ターゲットドキュメントタイプは、ルートノード、構造体またはコレクションとして含まれています）。
- 6 作業枠内で、マッピングを追加または結合する場所（ルートノード、構造体、コレクションなど）にカーソルを置きます。
- 7 右クリックして、ショートカットメニューから**Paste mapping**を選択します。
- 8 以下の操作を実行します。
  - **Yes**をクリックするとマッピングを結合できます。選択された要素は、マッピングにより変更されます（2つのマッピングが結合し、1つになります）。
  - **No**をクリックするとマッピングを追加できます。マッピングは、既存のマッピングに新規の構造体またはコレクションの形で追加されます。

## ソースとターゲットのデータをプレビューする

**Edit mapping** ウィンドウでは、ソースアプリケーションとターゲットアプリケーションのデータを、プレビュー表示することができます。注意：ターゲットデータのプレビューは一部のコネクタでのみ可能です。

- 1 マッピングを編集します。
- 2 ソースまたはターゲットドキュメントタイプのウィンドウ内に、ポインタを置きます。
- 3 右クリックします。
- 4 **View data** ショートカットメニューを選択します。  
データのプレビュー用ウィンドウが表示されます。




### 注意:

データがないので、使用可能になる前のデータの値は、以下のようになります。

- (null) : 複雑要素がデータベースからなくなっている
- (空の文字列) : 複雑要素に値が代入されていない

## データのプレビューを編集する

**edit** ウィンドウでマッピングのソースドキュメントタイプを編集し、選択した一部のデータのみをプレビューすることも可能です。


- 1 マッピングを編集します。
- 2 **source document-type** のウィンドウにポインタを置きます。
- 3 **Edit a document type to preview data** を選択します。
- 4 マッピングの **source document-type edit** ウィンドウが表示されます。
- 5 作業枠で要素を追加または削除します。
- 6  をクリックします。
- 7 ソースデータをプレビュー表示します。
- 8 **Close** をクリックして、**Edit mapping** ウィンドウに戻ります。

**重要**：ソースドキュメントタイプを編集するためには、この機能を使用しないでください。

ソースドキュメントタイプに加えられた変更事項は、プレビューウィンドウを閉じると同時に失われます。

## マッピング編集ウィンドウ内で要素を検索する

- 1 ソースおよびターゲットドキュメントタイプのゾーン、または作業枠内で、1要素を選択します。
- 2 以下の操作のいずれかを実行します。
  - 右クリックして、ショートカットメニューから **Find** (Ctrl + F) を選択します。


-  をクリックします。
- 3 **Find what** フィールドに、検索する要素の名前を入力し、以下のオプションを必要に応じて選択します。
    - Case sensitive
    - 検索方向 (upまたはdown)
  - 4 **Find** をクリックします。
- 次の要素または前の要素を検索するには：
- 1 以下の操作のいずれかを実行します。
    - 右クリックして、ショートカットメニューから **Find next (F3)** を選択します。
    - 右クリックして、ショートカットメニューから **Find prev. (Shift+F3)** を選択します。

### Find - 使用上の規則

ドキュメントタイプのツリー構造内での検索は、以下の規則に従います。

- 検索の範囲は、使用可能なドキュメントのウィンドウに表示されている要素に制限されます。サブノード内でも検索する場合は、検索の前にサブノードを開いておく必要があります。
- 作業枠内で検索すると、ターゲットドキュメントタイプとマッピングスクリプト内で検索が実行されます。

### マッピングスクリプト内で要素を検索し置換する

- 1 要素を作業枠内で選択します。
- 2 以下の操作のいずれかを実行します。
  - 右クリックして、ショートカットメニューから **Replace (Ctrl + H)** を選択します。
  -  をクリックします。
- 3 **Find what** フィールドに、検索する要素の名前を入力し、以下のオプションを必要に応じて選択します。
- 4 **Replace with** フィールドに、この要素の代わりに使用する文字列を入力します。
- 5 オプションを選択します。
  - Case sensitive
  - 検索方向 (upまたはdown)
- 6 **Find**、**Replace** または **Replace all** をクリックします。

### マッピングの種類

本節では、Scenario Builderのマッピングの種類について説明します。

## フィールドからフィールドへの直接マッピング

フィールドからフィールドへの直接マッピングを作成するには、ソースフィールドをターゲットフィールドへマップします。データが処理される時、ソースフィールドの値が、マッピングボックスに生成されるドキュメントのターゲットフィールドに入力されます。この操作はBasicエンジンの介入なしに実行されます。

---

例：

ソースドキュメントタイプの**Name**フィールドは、ターゲットドキュメントタイプの**Name**フィールドに関連付けられます。


---

フィールドからフィールドへの直接マッピング作成には、2つの方法があります。

### 1 ドラッグ&ドロップによる方法

- **Source**または**Destination**ウィンドウで、フィールドを1つ選択します。
- フィールドをターゲットまたはソースウィンドウにドラッグします。

### 2 アイコンによる方法

- 関連付ける2つのフィールドを、画面のソースゾーンとターゲットゾーンで選択します。
-  をクリックします。

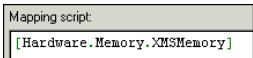
### 3 2段階のドラッグ&ドロップ方法

- ターゲットフィールドを選択します。
- 作業枠にフィールドをドラッグ&ドロップします。
- ソースフィールドを選択します。
- 作業枠内のターゲットフィールドと同じ項目へソースフィールドをドラッグします。

### 4 ドラッグ&ドロップと、マッピングスクリプトを使用する方法

- ターゲットフィールドを選択します。
- 作業枠にフィールドをドラッグします。
- **Mapping script**フィールドに、直接ソースフィールド名を入力します。フィールドからフィールドへの直接マッピングをすると、ソース要素名は自動的に**Mapping script**フィールドに表示されます。手動でソース要素名を入力する場合は、要素名を角括弧（ [ ] ）で囲む必要があります。

## 図 4.13. マッピングスクリプト内のソース要素



```
Mapping script
[Hardware.Memory.XMSMemory]
```



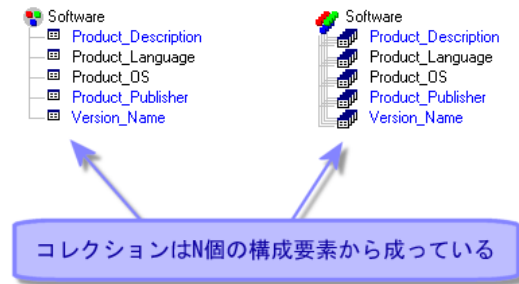
## コレクションからコレクションへのマッピング

コレクションは要素（フィールド、構造体、またはコレクション）から成り立っており、要素が何回繰り返されるかは不定です。

コレクションの各要素は、コレクションの構成要素にあたります。

例：特定のドキュメントタイプでは、コンピュータにインストールされたソフトウェアがコレクションで示されています。このコレクションの各構成要素は、ソフトウェアアプリケーションを説明しています（名前、ソフトウェア会社、バージョンなど）。

### 図 4.14. コレクション



ソースコレクションをターゲットコレクションへマップすると、Connect-Itはデータの処理時に、ソースコレクションにある構成要素の数を計算し、ターゲットコレクション内に同数の構成要素を作成します。

例：

Desktop Discovery - AssetCenterシナリオでは、**inventory**ドキュメントタイプの**application**（ソフトウェア）コレクション内の要素が**amAsset**ドキュメントタイプの**Softinstall**（ソフトウェアのインストール）コレクション内の要素に関連付けられています。

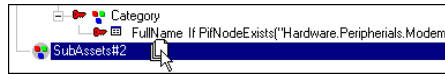
コレクションからコレクションへのマッピング作成には、2つの方法があります。

- ドラッグ&ドロップによる方法
- キーボードによる方法

#### ドラッグ&ドロップによる方法

- 1 ターゲットコレクションを作業枠内にドラッグします。

- 2 ソースコレクションを選択し、これを作業枠内のターゲットコレクションと同じ行にドラッグします。ドラッグする時には、マウスの左ボタンとキーボードの**Ctrl**キーを同時に押したままにします。
- 3 マウスポインタ下に3重の文書の形をしたアイコン（コレクション構成要素の重複を表しています）が表示されたら、マウスの左ボタンを放します。



**Source for the collection mapping** フィールドには、自動的にコレクションのパスが記入されます。

#### 注意:

コレクションの1要素のマッピングを実行するたびに警告が表示され、多くの場合**Source for the collection mapping** フィールドに入力する必要があることをユーザに知らせます。**Edit/Options**メニューの**Display a warning every time a collection-to-collection mapping is needed**オプション（**Confirmations**セクション）で、警告を非表示にできます。

#### キーボードによる方法

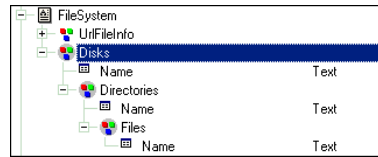
- 1 作業枠内にターゲットコレクションをドラッグします。
- 2 ソースコレクションのパスを、マッピングスクリプトの**Source for the collection mapping** フィールドに直接記入します。このコレクションの値を呼び出すわけではないので、名前は角括弧で囲みません。

#### サブコレクションのマッピング

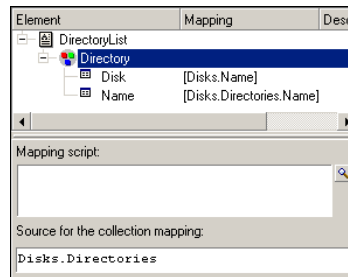
生成用ドキュメントタイプは、コレクションで構成され、そのコレクションが他のコレクションで構成される場合があります。

生成用ドキュメントタイプのサブコレクション要素をターゲットドキュメントタイプの第1レベルコレクションにマッピングする場合、生成用ドキュメントタイプのサブコレクションのパスをソースとして指定できます。

例えば、生成用ドキュメントタイプ **FileSystem** は、コレクション **Disks** で構成され、さらにこのコレクションはコレクション **Directories** で構成され、これはコレクション **Files** で構成されます。



以下の取り込み用ドキュメントタイプにマッピングを作成して、すべてのフォルダのリストを取得します。




**Directory** コレクションに使用されるマッピングを以下に示します。

#### Disks.Directories

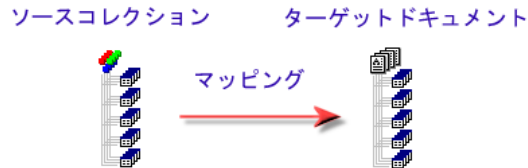
親要素（コレクション）に含まれるすべてのコレクションは、ターゲット内の第1レベルコレクション（親ドキュメントなし）と同じ数のコレクションを作成します。

### コレクションからドキュメントへのマッピング

Connect-Itでは、ソースコレクションをターゲットドキュメントタイプのルートノード（)に関連付けることができます。データの処理時に、Connect-Itはソースコレクションにある構成要素と同じ数のターゲットドキュメントを作成します。

コレクションからドキュメントへのマッピングは、コレクションからコレクションへのマッピングと同じ方法で作成されます。ルートノードが、ターゲットコレクションの代わりになります。

## 図 4.15. コレクションからドキュメントへのマッピング



コレクションからドキュメントへのマッピングでは、コレクションの  
N個の構成要素はN個のドキュメントを作成する

例：

scac\sc4ac41\scac.scnシナリオでは、**Software**コレクション（コンピュータにインストールされたソフトウェアを記録します）は、**pcsoftware**ドキュメントタイプにマップされています。データの処理時に**Software**コレクションのN個の構成要素は、N個の**pcsoftware**ドキュメントを作成し、これらのドキュメントは更にN個の入カイベントをServiceCenterに送信します。

### シンタックス

コレクションとドキュメントタイプ間のマッピングスクリプトは、以下のシンタックスに準拠する必要があります。

[Collection.Element( valeur )]

括弧内の値は、コレクションの要素の値です。

例：

[Machine.Name(0)]

### フィールドからコレクションへのマッピング


フィールドからコレクションへのマッピングでは、コレクションに所属していない1つまたは複数のソースフィールドが、コレクションに所属する1つのターゲットフィールドにマップされます。このターゲットフィールドを含む構造体は、1つの構成要素のみから成るコレクションと見なされます。

例：

**InstalledCards**フィールドは、コンピュータにインストールされた全カード（マザーボード、グラフィックアダプタ、サウンドカード）をまとめています。ソースドキュメントタイプでは、この情報が別々のフィールド（**Motherboard**、**GraphicsCard**、**SoundCard**フィールド）になっています。

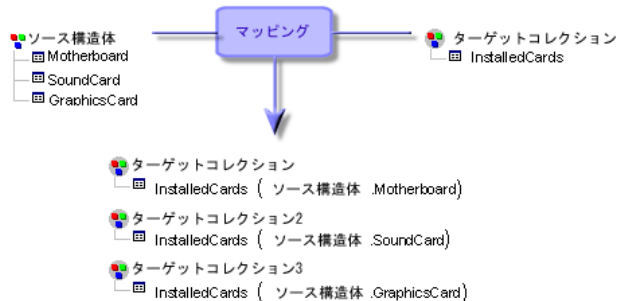
コレクションを作業枠内にドラッグした後、必要なだけコレクションを複製し、複製したコレクションの**InstalledCards**フィールドをそれぞれ、ソースフィールドにマップします。

作業枠内のコレクションを複製するには：

- 1 コレクションを選択します。
- 2  をクリックします。

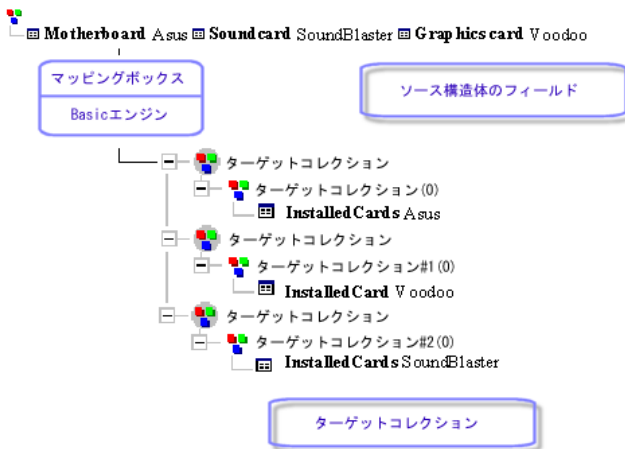
コレクションの1番目の複製には接頭辞#1が付き、2番目には#2が付きます。

## 図 4.16. フィールドからコレクションへのマッピング



フィールドからコレクションへのマッピングでは、ソース構造体のフィールドは複製されたターゲットコレクションの構成要素にマップされる

データの処理時に、マッピングボックスは1つの構成要素のみを含むターゲットコレクションを複製された数だけ生成します。各構成要素はそれぞれ1つのソースフィールド値を含みます。



## Blobタイプのフィールドのマッピング

**Blob** (binary large object) タイプのフィールドはバイナリデータ (サウンド、ビデオ、画像ファイル) のフィールドです。

Blobフィールドは別のBlobタイプのフィールドにのみマップされます。

2つの可能性があります。

- 1 ターゲットBlobフィールドをソースBlobフィールドにマップします。  
この場合バイナリファイルは、シナリオのコネクタを経由してソースアプリケーションからターゲットアプリケーションへ転送されます。
- 2 **Connect-It**とターゲットアプリケーションの共有ファイル内にあるバイナリファイルの名前を指定するフィールドに、ターゲットBlobフィールドをマップします。

この場合、マッピングスクリプトの編集ゾーンにある**Load Blob from file** オプションを使用する必要があります。

## ソースコレクションに要素がない場合でもドキュメントまたはコレクション要素を作成する

このオプションを選択すると、ソースコネクタに生成される構成要素がコレクションにない場合、以下の操作が実行されます。

- コレクションからドキュメントへのマッピングを実行すると、コレクションは、ターゲットコネクタに取り込まれるドキュメントを作成します。

本節の「コレクションからドキュメントへのマッピング [ 献 115]」を参照してください。

- コレクションからコレクションへのマッピングを実行すると、コレクションは、ターゲットコネクタに取り込まれるドキュメント内に、コレクションの1構成要素を作成します。

本節の「コレクションからコレクションへのマッピング [ 献 113]」を参照してください。

コレクションの構成要素やドキュメントの作成を強制すると、値がないことをターゲットアプリケーションに通知できるようになります。

### Load Blob from file

このオプションでは以下の内容を指定できます。

- **Blob**ファイルはConnect-Itとターゲットアプリケーションの共有フォルダ内にあります。

例：[ネットワーク上の共有フォルダ名]/blob/pictures

- ターゲットアプリケーションがこの共有フォルダから**Blob**ファイルを読み込みます。

ターゲットアプリケーションが共有フォルダからファイルを読み込むようにするには：

- 1 マッピング内で、ソースの**Blob**ファイルの名前をターゲットアプリケーションの**Blob**タイプのファイルへ関連付けます。

ソースアプリケーションのファイル名は、ソースアプリケーションで**Blob**ファイルに関連付けられているnameフィールド (icon.name)、または共有フォルダ内のファイルの完全パス ([ネットワーク上の共有フォルダ名]/blob/pictures/monimage.png) になります。

- 2 **Load Blob from file**オプションを選択します。

シナリオの起動中に、ターゲットアプリケーションは共有フォルダ内で**Blob**ファイルを取得します。

### Convert a hexadecimal string to a Blob

このオプションを使用すると、16進文字列を**Blob**に変換できます。

このオプションをオンにする場合、使用するコードページを指定する必要があります。

### Blobをファイルにエクスポートする

**Blob**フィールドに含まれるデータを内容確認のためにエクスポートする場合があります。

**Blob**フィールドの内容をエクスポートするには：

- 1 生成されるデータをプレビューします。

- 2 Blobフィールドを右クリックし、ショートカットメニューから**Copy this Blob to a file**を選択します。
- 3 保存するファイルの名前とその性質を入力します。

## マッピングオプション

使用するコネクタに応じて、マッピングボックス内に表示されるタブは異なります。

以下のタブは、すべてのコネクタに共通です。

- 1 General
- 2 Mapping
- 3 Blob

このタブは、**Blob**ファイル进行处理するすべてのコネクタに使用可能です。詳細な照合更新については、「マッピングスクリプトの定義 [ 献 124]」の章の「**Additional scripts** [ 献 159]」の節を参照してください。

### 4 Additional scripts

このタブは、すべてのコネクタに使用可能です。詳細な照合更新については、「マッピングスクリプトの定義 [ 献 124]」の章の「**Additional scripts** [ 献 159]」の節を参照してください。

以下のタブは、専用のタブです。

#### ■ Reconciliation

このタブは、データベースタイプのコネクタに使用できます。詳細な照合更新については、マニュアル『コネクタガイド』の「コネクタのルール (ディレクティブ)」の章の「照合更新」の節を参照してください。

#### ■ Advanced reconciliation

このタブは、AssetManagementコネクタ専用です。詳細な照合更新については、マニュアル『コネクタガイド』の「コネクタのルール (ディレクティブ)」の章の「照合更新」の節を参照してください。

#### ■ Reconciliation script

このタブは、AssetManagementコネクタ専用です。詳細な照合更新については、マニュアル『コネクタガイド』の「コネクタのルール (ディレクティブ)」の章の「照合更新」の節を参照してください。

## 照合更新キー

マッピングの詳細の**Reconciliation**タブ内で更新ツールにアクセスできます。

照合更新操作の実行とは、旧データと新データを統合することです。

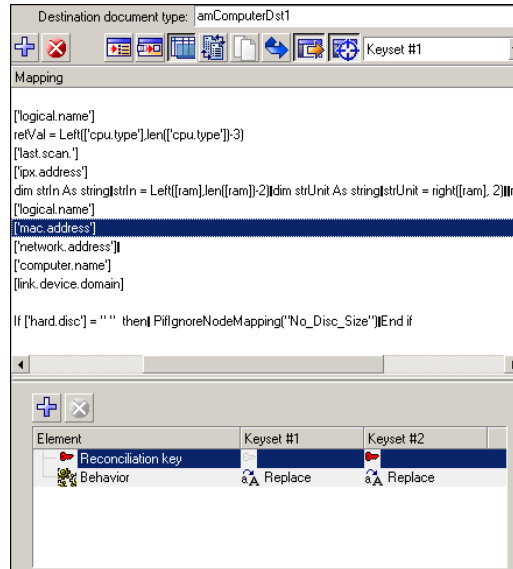
照合更新は、コネクタが作成または更新するテーブル内のレコードを一意に識別できるようにするフィールドを定義する必要があります。



データの照合更新を行うために使用するフィールドは、データはフィールドは、照合更新キーと呼ばれます。

複雑マッピング要素は、場合によって複数の照合更新キーがあります。各キーはキーセットに属します。

例えば、特定の照合更新では、*AssetTag*がキーセット#1に属し、*PhysicalAddress*がキーセット#2に属します。



各々の更新およびキーセットに対して、以下の動作のいずれかを選択します。

- Update or insert
- Update only
- Insert only
- Delete

マニュアル『コネクタ』の「コネクタのルール（ディレクティブ）」の章を参照してください。

### 照合更新キーの表示

フィルタは、2セットのキーを区別するために使用できます。

キーセット#1またはキーセット#2にフィルタを適用するには、マッピングボックスのアイコンバーに表示するキーセットの番号を選択します。

## キーセット加重の方法

各キーセットには、デフォルトで100の重みが割り当てられており、特定の更新操作に優先度を設定できます。

キーセットが機能する方法は、それぞれに定義された動作とそれぞれの重みによって決まります。

### 更新または挿入のキーの機能

すべての照合更新が**Update or insert**である場合、最初のキーセットには、3種類の動作があります。

- 1 最初のキーセットがレコードを照合して一致しない場合、次のキーセットが使用されます。
- 2 最初のキーセットがレコードに一致する場合：
  - さらにキーセットの重みが100以上の場合、このレコードは更新されます。
  - それ以外の場合、レコードとその重みが更新候補のリストに保存され、後続のキーセットが検査されます。
- 3 最初のキーセットが複数のレコードに一致する場合、レコードとそれらの重みが更新候補のリストに保存され、次のキーセットが検査されます。

前のキーセットがいずれも1つのレコードを特定できなかった場合の後続のキーセットの動作：

- 1 後続のキーセットがレコードを照合して一致しない場合、次のキーセットが使用されます。
- 2 1つまたは複数のレコードをキーセットが特定すると、新しいレコードごとに以下の処理が行われます。
  - 1つまたは複数の前のキーセットが既に一致しているかどうかを検査するために、チェックが実行されます。候補リスト内のレコードは、フィールドの値が同一であれば、処理対象の新しいレコードと同じであると見なされます（フィールドのメインIDが同じであることをチェック **Asset Management** コネクタの場合を除く）。
  - レコードが既に候補リストにある場合、キーセットの重みが前の値に追加されます。
  - レコードが候補リストにない場合、キーセットの重みと共に追加されます。
  - すべての候補について、重みが100以上のレコードが1つしかない場合、このレコードは更新されます。
  - 重みが100以上のレコードが複数ある場合、キーセットで1つのレコードが特定されないことがエラーメッセージに表示されます。
  - すべてのレコードの重みが100未満の場合、後続のキーセットが使用されます。

すべてのキーセットが検査された後に、レコードが処理によって選択されずリスト内に1つしか候補（重みが100未満）が残らない場合、このレコードが更新されます（重みが100未満であっても）。

---

例：

3つのキーセットが使用され、重みはそれぞれ40、70、50です。

最初のキーセットは、レコードA、B、およびCに一致します。そのため、重みが以下ようになります。

A = 40

B = 40

C = 40

2番目のキーセットは、レコードC、D、E、およびFに一致します。そのため、レコードの重みが以下ようになります。

A = 40

B = 40

C = 110

D = 70

E = 70

レコードCは、重みが100以上になる唯一のレコードであり、キーセット#3を使用せずに更新されます。

---

例：

3つのキーセットが使用され、重みはそれぞれ40、70、50です。

最初のキーセットは、レコードA、B、およびCに一致します。そのため、重みが以下ようになります。

A = 40

B = 40

C = 40

2番目のキーセットは、レコードB、C、およびDに一致します。そのため、レコードの重みが以下ようになります。

A = 40

B = 110

C = 110

D = 70

レコードBとCは100以上である同じ重みがあるため、一意に特定することができず、エラーメッセージが生成されます。

---

## マッピングスクリプトの定義

フィールドからフィールドへの直接マッピングが不可能な場合、マッピングスクリプト (**Mapping script** フィールド) が必要です。このスクリプトは、データまたはソース要素がターゲット要素に値を与えるためにどのようにソース要素を操作するかを指定します。

統合シナリオのマッピングでは、スクリプトで以下の操作を実行できます。

- 固定値をターゲット要素に関連付ける
- 計算された値をターゲットドキュメントタイプのフィールドに関連付ける
- 構造体またはコレクションのフィールドの処理を、条件の検証に従属させる

例：

あるBasicスクリプトは2つのソース要素の連結を可能にします。この連結の戻り値は、データの処理時にターゲット要素に関連付けられます。

## 関連ファイルの編集

マッピングスクリプトは、場合によって関連ファイルを必要とします。

これらの関連ファイルには、以下の要素が含まれます。

- 文字列テーブル
- マップテーブル
- グローバル関数と変数

これらのファイルは、.scnファイルとは別に、それぞれの内容に対応する拡張子の付いたファイル名で保存されます。

ファイル名の拡張子	説明
.str (文字列用)	文字列テーブル
.mpt (マップテーブル用)	マップテーブル
.bas (Basic用)	グローバル関数と変数
.scp (スクリプト定数用)	スクリプト定数
.usr (ユーザ用)	ユーザフォーマット

### 注意:

関連する.str、.mpt、および.basファイルのないシナリオ (.scnファイル) は機能しません。シナリオを移動するたびに、必ずこれらの関連するファイルも同時に移してください。また、これらのファイルの存在を簡単に確認できるように.scnファイルのすぐ隣に配置すると便利です。関連するファイルを移動すると、データの処理時にシナリオがファイルの内容を取得できなくなります。

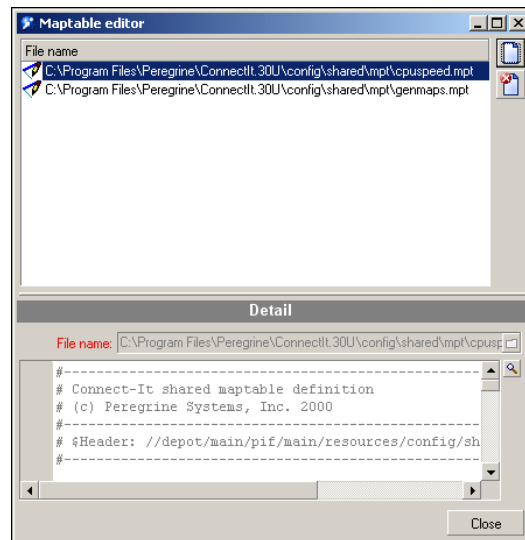
## 関連ファイルの編集

Connect-Itのエディタを使用してこれらの要素を編集します。  
エディタを表示するには**Scenario**メニューを使用します。

**Scenario**メニューでエディタにアクセスすると、ウィンドウが開きます。ウィンドウは2つの部分から成っています。



- 現在のシナリオに関連したファイル (.str、.scp、.mpt、.usr、または.bas)を示す枠
- ファイルの編集用の枠（文字列テーブル、マップテーブル、グローバル関数と変数）

### 図 4.17. マップテーブルのエディタ



上記3つのエディタは、マッピングスクリプトで使用するエディタと同一のテキストエディタを使用します。

### 新規関連ファイルを作成する

- 1 ツールバーの  をクリックします。
- 2 **File name** フィールドにファイル名を入力します。  
ハードディスク内を検索し、ファイルを作成するフォルダを直接指定するには、 をクリックします。
- 3 **Create** をクリックします。



#### 注意:


ファイルが既に存在する場合は、既存ファイルが代わりに開きます。

### 既存の関連ファイルを開く

現在のシナリオに関連するファイルの枠内にあるファイルを開くには、ファイルをクリックします。

### 関連ファイルを削除する

現在のファイルに関連するファイルを削除するには：

- 1 関連ファイルのウィンドウ内でファイルを選択します。
- 2 toolbarの  をクリックします。

### スクリプトの認証


スクリプトの一貫性は、Connect-Itによりデフォルトで検査されています。スクリプトの認証では、Basicシンタックスが検査され、また、マッピングスクリプト内で参照されている要素がソースドキュメントに存在するかどうかテストされます（検証では、ソースドキュメントの構造内で表示されている要素のみが「存在する」と見なされます）。



#### 注意:

**Do not authorize the validation of a script that includes compilation errors** オプション（**Confirmations** セクション）では、上記のスクリプトの認証を有効または無効にできません。

### 関連ファイルのテキストを編集する

 アイコンをクリックすると、テキストエディタにアクセスできます。このアイコンは、各エディタ内と、mapping editウィンドウ内の **Mapping script** フィールドの横にあります。

このテキストエディタでは、Basicスクリプトと.str、.mptと.basファイルを容易に編集できます。通常のエディタの機能（コピー、貼り付け、現在のアクション

をキャンセルする、など) を備えています。これらの機能には、**Edit**メニューまたはツールバーからアクセスできます。

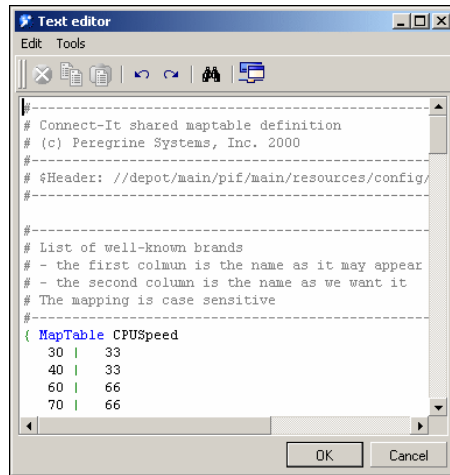


表 4.1. テキストエディタ - Toolbar

アイコン	機能
	選択したテキストを切り取ります。
	テキストをコピーします。
	クリップボードにテキストを貼り付けます。
	現在のアクションをキャンセルします。
	キャンセルしたアクションをやりなおします。
	テキストエディタの設定用ウィンドウを表示します。

### テキストエディタの設定

テキストエディタを設定するには：

- をクリックします。  
または
- **Tools**から**Options**メニューを選択します。

テキストエディタを設定すると、ファイル作成用のテンプレートを変更できます。



**警告:**

テキストエディタで使用可能なテンプレートのいずれかを編集するために、Connect-Itのインストール先フォルダのサブフォルダbinにあるcodeedit.cfgファイルが読み取り専用でないことを確認してください。

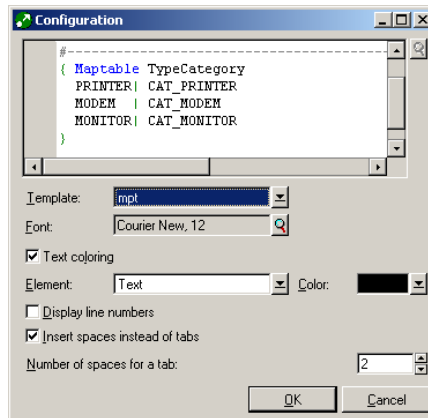
各エディタ用のテンプレートを使用する必要があります。例えばマップテーブルを編集している場合、mptテンプレートがテキストエディタに使用されます。

テンプレート名	編集する要素
bas	マッピングスクリプト グローバル関数
str	文字列テーブル
mpt	マップテーブル
sql	SQLクエリ
scn	Connect-Itシナリオ
Default	上記以外の全ファイル

テンプレートには以下の設定項目があります。

- 文字のフォントを変更する（タイプ、太さ、スタイル）
- 要素の色を選択する
- 行番号を表示／非表示にする
- 1から8個のスペースをタブの代わりに挿入する

## 図 4.18. テキストエディタの設定





## テンプレートの変更

テンプレート内で使用されているフォントを変更するには、**Font**フィールドの横にある拡大鏡アイコンをクリックします。ダイアログボックスが現れ、コンピュータにインストールされているフォントから選択できるようになります。

テキスト内の要素の色も変更できます。色を変更できる要素は以下の通りです。

- テキスト
- 背景
- 選択されたテキスト
- 選択されたテキストの背景
- 行番号
- 数値
- 区切り文字
- コメント
- 文字列
- キーワード
- オペレータ

要素に色をつけるには、**Element**フィールドで1項目を選択し**Color**フィールド内で色を選択します。

テキストに色をつけない場合は、**Text coloring**チェックボックスをオフにします。

行番号を表示し、タブの代わりにスペースを挿入するには、それぞれのチェックボックスをオンにします。

## 文字列テーブル

**Edit**メニューでcharacter-string editorにアクセスします。

文字列テーブルでは、固有の識別子が各文字列に付いています。データの処理時に、**Basic**スクリプトは識別子を識別子に対応する文字列に置き換えます。

マッピング内で文字列を使用するには、**PifStrVal**関数の後に、ダブルクォーテーションマークと括弧で囲まれた文字列の識別子を入力します。

次の例は、**Desktop Discovery - Asset Management**シナリオで使用されている、**Category.str**文字列テーブルの一部です。

```
CAT_UNIX, "/Hardware/Unix Workstation"  
CAT_SERVER, "/Hardware/Server"  
CAT_WORKSTATION, "/Hardware/PC"  
CAT_MAC, "/Hardware/Mac"  
CAT_TERMINAL, "/Hardware/Terminal"  
CAT_PORTABLE, "/Hardware/Portable"
```

---

例：

"/Hardware/UNIXワークステーション"の値を取得するには、マッピングスクリプトで次のコード行を使用します：PifStrVal("CAT\_UNIX")

---

このテーブルでは、識別子CAT\_UNIXは"/Hardware/UNIXワークステーション"の値に対応しています。このため、文字列内で名前を変更すると、シナリオはこの変更事項を考慮に入れるため、この識別子を使用するBasicスクリプトを再びコンパイルする必要はありません。また、各言語ごとの文字列テーブルを複数使用することもできます。例えばfrcategory.strをフランス語用に、grcategory.strをドイツ語用に使用することなどが可能です。

### 文字列を結合する

演算子&では文字列を結合できます。

文字列でないオペランドが1つでもあると、文字列への変換が自動的に行われません。

### 例

```
RetVal = "Current date: " & Date()
```

このスクリプトは日付を以下のフォーマットで表示します。

```
Current Date : 2002/12/26
```

### 文字コードから文字列を作成する

関数**Chr()**では、Connect-Itが使用するコードページに応じて文字を生成できます。

この関数は、特に以下の型の文字を生成する際に便利です。

- 一重引用符：Chr(39)
- 二重引用符：Chr(34)
- キャリッジリターン：Chr(13)
- ラインフィード：Chr(10)

### 例

```
Dim IVal As Long
```

```
IVal = 5
```

```
RetVal = "Value: " & Chr(39) & IVal & Chr(39)
```

このスクリプトは以下の値を戻します。

```
Value: '5'
```

## UNIX/Windows文字列

UNIXとWindowsで、改行は別の方法で管理されています。

Windowsにおいて改行は文字Chr(13)とChr(10)で管理されます。UNIXでは文字Chr(10)のみが使用されています。

## 例

```
RetVal = Replace([WindowsText], Chr(13) & Chr(10), Chr(10))
```

このスクリプトは、ソースドキュメントの*WindowsText*要素内で取得される文字列内で、Windowsの全ての改行をUNIXの改行に置換します。

## マップテーブル

**Scenario**メニューでmactableエディタにアクセスします。

マップテーブルはテーブルの形を取っており、第1列目にはキーが、それ以降の列には値が含まれています。1つの列の中で、各キーは1つの値に対応します。

マッピング内で列の値を取得するには、**PifMapValue()**関数と、キーのパラメータ、キーがマップテーブルで定義されていない場合はデフォルト値、マップテーブルの名前、と列番号を使用します。

データの処理時に、スクリプト内でキーが見つかると、キーはスクリプト内で指定された列の値に置き換えられます。

以下の**Brand**マップテーブルでは、**Apple**キーと**Macintosh**キーは、スクリプト内で列1番が指定されていると、"Apple"という値を戻します。

```
{ MapTable Brand  
Compaq | Compaq  
IBM -Lexmark | IBM - Lexmark  
Hewlett Packard | Hewlett Packard  
HP-UX | Hewlett Packard  
Toshiba | Toshiba  
Apple | Apple  
Macintosh | Apple}
```

例：

"HP-UX"という値を取得するためには、以下のコード行をマッピングスクリプト内で使用します：**PifMapValue([マッピングでのフィールド名],"Brand",0,"DefaultValue")**

マップテーブルに関連付けられた関数に関する詳しい説明は、『プログラム用参考ガイド』の以下の関数を参照してください。

- PifCreateDynaMactableFromFmtName
- PifIsInMap

- PifMapValue
- PifMapValueEx
- PifMapValueContaining
- PifMapValueContainingEx

### 複数の言語用にマップテーブルを作成する

様々な言語の文字列を戻すマップテーブルを作成するには：

- 1 文字列ファイルを作成します。ファイル内の各行では、1つの識別子が1つの外国語の文字列（英語、フランス語、など）に、[識別子],[外国語の文字列]の形で関連付けられます。例：category.strファイルには、英語用のCAT\_UNIX, "UNIX Workstation")という行が含まれており、fcategory.strファイルには、フランス語用のCAT\_UNIX, "Station de travail UNIX")という行が含まれています。
- 2 このファイルをマップテーブルのファイルに含むには、次のシンタックスを使用します：#include\_str "[ファイル名]" 例：#include\_str "category.str"
- 3 [dollar]([識別子])のシンタックスで識別子に各文字列に関連付けると、文字列をマップテーブル内で参照できます。

```
#include_str "category.str"
{MapTable Category
[$](IDS_CAT_UNIX) | workstation}
{ MapTable Sc2AcCat
[$](IDS_CAT_UNIX) | workstation}
```

### グローバル関数と変数

**Scenario**メニューで、グローバル関数と変数のエディタにアクセスします。

マッピングスクリプトは、スクリプト内の数箇所関数や変数を使用します。これら複数のグローバル関数と変数は、同一の.basファイル内で保存することができます。保存された後、関数と変数はマッピングスクリプト内で呼び出されます。マッピングボックスは、データの処理中にシナリオに付属した.basファイルにある関数と変数を使用します。

グローバル関数**CPUSpeed()**は、gen.basファイルに含まれています。この関数はマップテーブル**CPUSpeed()**を参照しており、CPU速度の汎用値を指定します。

```
-----
' Returns the generic CPU speed frequency
' Use the generic mactable
' CPUSpeed'
Function CPUSpeed(ByVal strValue As String) As Integer
Dim iTmp As Integer
iTmp = CInt(strValue) / 10
```

```
CPUSpeed = CInt(PifMapValue(CStr(iTmp * 10), "CPUSpeed", 1, strValue))
End Function
```

### グローバル変数

マッピングスクリプト内に変数が宣言されている場合、変数の使用範囲はローカルです。

フィールドに関連付けられたスクリプト内で、ある変数を宣言すると、この変数をドキュメントの別の要素へ使用することはできません。

同じ変数の名前が、別の要素で実行されるマッピングスクリプト内で使用されると、新規のローカル変数が作成されます。第1スクリプトの変数の値は、第2スクリプトでは取得できません。

## グローバル変数を宣言する

変数の使用範囲がグローバルになるためには、ドキュメントタイプのルートの **Additional scripts** タブで変数を宣言しなければなりません。これによって変数は、同一マッピングの複雑要素に使用される異なるスクリプトで、計算/使用されるようになります。

### 注意:

ローカル変数とグローバル変数を識別しやすくするために、グローバル関数に接頭辞 `g_` を追加することをお勧めします。

例

```
Dim g_1Counter As Long
```

グローバル変数の宣言は、Basicスクリプトの定義の前に実行する必要があります。変数は、セッションの開始時 (**OpenSession()**) または終了時 (**CloseSession()**) に使用します。

例

```
Dim g_1Counter As Long
(...)

Sub OpenSession()
rem add your code here
End Sub

Sub CloseSession()
rem add your code here
End Sub
```

## ドキュメント数のカウンタを作成する

ドキュメント数のカウンタを作成するには、「グローバル変数 [ 献 133 ]」の節に説明されているように、グローバル変数をまず宣言する必要があります。

この変数のデフォルト値はゼロです。

---

### 例 4.1. カウンタ

```
g_lCounter = g_lCounter + 1
PifLogInfoMsg(g_lCounter)
```

ソースコネクタがドキュメントを生成するたびに、カウンタは増分され、スクリプトはカウンタの値をドキュメントログに返します。

シナリオが実行される限り、カウンタは初期化されません。

新規セッションの開始ごとにカウンタ値を初期化するには、追加スクリプトを実行する必要があります。

```
Dim g_lCounter As Long
```

```
Sub OpenSession()
g_lCounter = 0
End Sub
```

ドキュメントタイプのルートにカウンタの増分スクリプトを保存することにより、グローバル変数の値は以下ようになります。例：

```
Session 1
1
2
3
...
Session 2
1
2
3
...
```

## ファイルにグローバル変数を保存する

シナリオがサービスモードで実行されている時に停止すると、グローバル変数の現在の値は消失します。

グローバル変数の現在の値を保存するには、ファイルに保存し、必要に応じてこのファイルから読み込まなければなりません。

---

## 例 4.2. グローバル変数

### 本例の概要

- カウンタは処理されたドキュメント数を数えますが、初期化はされません。
- アプリケーションが停止した場合、カウンタはファイルから読み込まれます。
- ルート要素でグローバル変数が0であると、追加スクリプトは "C:/tmp/counter.txt" ファイルが存在しデータを含むかどうかを確認した上で、ファイルを読み込みます。  
グローバル変数が0であると、これは以下の状況を意味します。
  - シナリオは第1回目に実行された。
  - シナリオは中断された。

```
Dim g_lCounter As Long

Sub OpenSession()
' Counter equals to 0, means that it has not been initialized.
' The application has been stopped and we reload the counter
' value
If g_lCounter = 0 Then

' If the file does not exist, it must be the first run. Check the
' existence of the file to avoid error on opening.
If FileExists("c:/tmp/counter.txt") Then

' Open the file in read mode
Open "c:/tmp/counter.txt" For Input As #1

' Check the file contains data and read the first line of the file.
If Not Eof(1) Then
Line Input #1, g_lCounter
End If
Close #1
End If
End If
End Sub
```

次のスクリプトは、ルート要素上のカウンタが増分されるたびに、ファイル内にカウンタの値を保存します。

```
g_lCounter = g_lCounter + 1
Open "c:/tmp/counter.txt" For Output As #1
Print #1, g_lCounter
Close #1
```

```
PifLogInfoMsg(g_lCounter)
```

このスクリプトは、ドキュメントタイプのどの要素にも適用可能です。

## 定数

マッピングスクリプト用に定数を定義することができます。

これらの定数は、**Scenario/ Script constants**メニューによってアクセスできるファイル内に宣言および保存されます。このファイルには拡張子.scpが付きます。

以下のように、定数を宣言します。

```
constant = <value of the constant>
```

定数は、Basicスクリプトの前処理時にその値に置き換えられます（CまたはC++の#defineマクロの宣言に似ています）。

定数の宣言は、型によって異なります（整数、文字列など）。

例：

- 例えば、二重引用符 ("" ) は文字列に使用する必要があります。

```
login = "Maggie Smith"
```

- 数値の定数は、以下のように宣言する必要があります。

```
idmax = 5
```

定数は、宣言**PifConstant(定数の名前)**によって特定されます。

### 注意:

定数は、Basicスクリプトの処理時に置き換えられます。**PifConstant**は、Basic関数ではなく単純なマーカーと見なされます。

例：

```
RetVal = PifConstant(login)
```

このスクリプトは、実行時に以下のように変換されます。

```
RetVal = "Maggie Smith"
```

これは、**Script constant editor**が以下のように入力されていることが前提です。

```
login = "Maggie Smith"
```



## プログラム用参考ガイド

スクリプトの作成には、Connect-Itにあるオンラインの『プログラム用参考ガイド』が便利です。

以下の場所にポインタが位置する時に**F1**キーを押すと、『プログラム用参考ガイド』が表示されます。

- Edit mappingウィンドウ内の**Mapping script**フィールド
- エディタの入力ゾーン

## セッションのオープン/クローズ時のスクリプト実行

セッションのオープン時にスクリプトを実行するには、関数を使用して**Additional scripts**タブで実行対象コードを宣言する必要があります。

```
Sub OpenSession()  
rem add your code here  
End Sub
```

セッションのクローズ時にスクリプトを実行するには、関数を使用して**Additional scripts**タブで実行するコードを宣言する必要があります。


```
Sub CloseSession()  
rem add your code here  
End Sub
```

## ユーザフォーマット

ユーザフォーマットとは、ユーザがマッピングスクリプト内で使用するために定義する日付型または数値のフォーマットを指します。フォーマットは、**PifUserFmtVarToStr**関数と**PifUserFmtStrToVar**関数と共にのみ使用されます。使用に関する詳細は、オンラインの『プログラム用参考ガイド』（Connect-Itでのスクリプト作成中に**F1**キーを押すと表示されます）を参照してください。

### 日付型のユーザフォーマットを作成する


日付型のユーザフォーマットを作成するには：

- 1 **Scenario**メニューの**User formats**を選択します。
- 2 表示されるウィザードのページで、**Next**をクリックします。  
このページに表示される日付型のフォーマットを、ユーザが定義することはできません。
- 3 表示されるウィザードの2ページめで、をクリックします。
- 4 既存フォーマットのリスト内で、リスト最後のフォーマット名の下（**Name**の列）をクリックします。

- 5 表示される編集用ゾーンにフォーマットの名前を入力します。  
名前にスペースを使用することはできません。
- 6 入力した名前に対応する**Format**列をクリックします。
- 7 **Date-type format symbol**枠内の属性を用いて、公式を入力します。
- 8 ✓をクリックします。  
作成したフォーマットの例が、**Result of date-type format**フィールドに表示されます。

### 数値のユーザフォーマットを作成する

数値のユーザフォーマットを作成するには：

- 1 **Scenario/User formats**メニューを選択します。
- 2 表示されるウィザードのページで、**Next**をクリックします。  
このページに表示される数値のフォーマットを、ユーザが定義することはできません。
- 3 ウィザードの2ページめで、をクリックします。
- 4 既存フォーマットのリスト内で、リスト最後のフォーマット名の下 (**Name**の列) をクリックします。
- 5 表示される編集用ゾーンにフォーマットの名前を入力します。  
名前にスペースを使用することはできません。
- 6 入力した名前に対応する**Format**列をクリックします。
- 7 **Numeric-type format symbol**枠内の属性を用いて、公式を入力します。
- 8 ✓をクリックします。  
作成したフォーマットの例が、**Result in numeric format**フィールドに表示されます。

### フォーマット作成に使用するシンタックス

フォーマットの作成時には、以下の規則を守る必要があります。

- 日付型または数値のフォーマットに使用する記号は、Windowsオペレーティングシステムに使用されている記号と同一にします。
- フォーマット内に現れる文字列ファイルは、シングルクォーテーションマークで囲みます。
- 2つの値の間のスペースも、文字列と同様にシングルクォーテーションマークで囲みます。

表 4.2. 日付型フォーマットの例

フォーマット	例
yyyy'-mm'-'dd	2002-02-07
hh':nn':ss	11:55:29

フォーマット	例
h':nn':ss	11:55:41
hh':nn	14:18
hh" 'h' "nn	15:54:53
h t' 'nn' 'tt	2 29 pm
dd'/'mm'/'yy	07/02/02
dd'.'mm'.'yy	07.02.02
dd'-'mm'-'yy	07-02-02
dd'/'mm'/'yyyy	07/02/2002
dddd' 'd' 'mmmm' 'yyyy	2002年02月07日木曜日

表 4.3. 数値のユーザフォーマットの例

フォーマット	例
n' 'n','dd-'USD'	1 0 2 0 3,41-USD
-'USD'n'.'nnn','ddd	-USD10.203,408
-n'.'nnn','dd'USD'	-10.203,41USD
-n'.'nnn','ddd'USD'	-10.203,408USD

## スクリプトの例

本節では、使用する各種要素に従って並び替えられたサンプルスクリプトを示します。

### Basic関数

If、Then、Else、Else If、End If

## シンタックス

**If** <条件> **Then**

<命令>

**Else If** <条件> **Then**

<命令>

**Else**

<命令>

**End If**



注意:

論理フィールドについて（ブーリアン）：

論理フィールドは、8ビット整数で表します。Basicの"true"は-1と同等です。

論理フィールドに関する特定スクリプトは、問題が発生する可能性があります。

```
if [logicalfield] = true Then
```

データベースに定義された値"true"が1であり、"false"が0の場合、このスクリプトでは戻される値が1になり、Basicで解釈される"false"になります。

## 例

```
Dim strVal As String  
(...)  
If strVal = "" Then  
RetVal = "Empty"  
ElseIf strVal = "Default" Then  
RetVal = "Default"  
Else  
RetVal = "Unknown"  
End If
```

このスクリプトは以下の値を戻します。

- 生成されるドキュメントのテキストフィールドに、情報が含まれていない場合は*Empty*。
- 生成されるドキュメントのテキストフィールドに、デフォルト情報が含まれている場合は*Default*。
- 生成されるドキュメントのテキストフィールドに、全く別の情報が含まれている場合は*Unknown*。

## Forループ

この関数ではループを作成できます。

## シンタックス

**For** <カウンタ変数> = <開始> **to** <終了>

<命令>

**Next**

## 例

```
For i=0 To 10 Step 2  
PifLogInfoMsg(i)  
Next
```

このスクリプトは、ドキュメントログ内に値*i*を戻します。  
ドキュメントログ内での表示内容は以下の通りです。

```
0  
2  
4  
6  
8  
10
```

## Whileループ

この命令ではループを作成できます。

## シンタックス

### While loop

**While** <条件>

<命令>

**WEnd**

## 例

```
Dim i As Integer  
i = 0  
While i < 10  
i = i + 2  
PifLogInfoMsg(i)  
WEnd
```

このスクリプトは、値*i*が10よりも小さい場合にこの値をドキュメントログに戻します。

ドキュメントログ内での表示内容は以下の通りです。

```
0  
2  
4  
6  
8  
10
```

## Return

このスクリプトでは、この関数の前に定義された条件が満たされていないと、残りのスクリプトは無視されます。

## シンタックス

<条件>

### **Return**

<条件>

## 例

```
If [MacAddress] = "" And [IPAddress] = "" Then
PifIgnoreNodemapping
Return
End If

If [MacAddress] <> "" Then
RetVal = [MacAddress]
Else
RetVal = [IPAddress]
End If
```

このスクリプトは、生成用ドキュメントの**MacAddress**および**IPAddress**フィールドが空の値を取得していないかテストします。この条件が満たされると、以下のようになります。

- 現在のノードが無視される
- スクリプトの最後が実行されない

## Select

この関数は、変数の値に応じて命令のブロックを実行します。

## シンタックス

**Select Case** <テストする変数>

**Case** <変数1>

命令ブロック

**Case** <変数2>

命令ブロック

**Case** <変数3>

命令ブロック

...

### Case <変数>

命令ブロック

### Case Else

### End Select

## 例

```
Select Case [seStatus]
Case 0
RetVal = "Opened"
Case 1
RetVal = "Closed"
Case Else
RetVal = "Unknown status"
End Select
```

本例の概要

- ソースドキュメントの**seStatus**フィールドは、チケットのステータスに相当します。
- チケットのステータスを以下に示します。
  - 0 = オープンのチケット
  - 1 = クローズドのチケット

このスクリプトは、チケットのステータスを記述する文字列をソースフィールドの数値へ関連付けます。ステータスが不明な場合は、値*Unknown Status*が戻されます。

## Pif関数

**Pif**関数は、Connect-Itのマッピングスクリプト用に特別に開発されたものです。

全関数は、Connect-Itのインストール先フォルダのdocサブフォルダにある、オンライン『プログラム用参考ガイド』内で説明されています。

### PifIgnoreDocumentMapping

この関数では、ドキュメントの処理を無視できます。

## シンタックス

<条件>

**PifIgnoreDocumentMapping("<message>")**

<条件>

**("message")**を使用すると、無視された要素についてエラーメッセージがドキュメントログ内に表示されます。

*retval*関数の仕様は、照合更新キーとして選択されたフィールド上で*PifIgnore*関数が実行されることを示します。

## 例

```
If [MacAddress] = "" Then
PifIgnoreDocumentMapping("Missing MAcAdress")
End If
RetVal = [MacAddress]
```

**MacAddress** フィールドを照合更新キーとして使用します。このフィールドが値を含まない場合、ドキュメントは無視されます。メッセージ **Missing MacAddress** フィールドがドキュメントログ内に表示されます。

### PifRejectDocumentMapping

この関数は、ソースドキュメントを拒否し、ターゲットコネクタにドキュメントを送信しないことが可能になります。

これは、ドキュメントの要素に適用されます。

- ルートノード
- 構造体
- コレクション
- フィールド

## シンタックス

<命令>

**PifRejectDocumentMapping("message")**

<命令>

**("message")**を使用すると、無視された要素についてエラーメッセージがドキュメントログ内に表示されます。

*retval*関数の仕様は、照合更新キーとして選択されたフィールド上で*PifReject*関数が実行されることを示します。

## 例

```
If [MacAddress] = "" Then
PifRejectDocumentMapping("Missing MAcAdress")
End If
RetVal = [MacAddress]
```

**MacAddress** フィールドを照合更新キーとして使用します。このフィールドが値を含まない場合、ドキュメントは無視されます。メッセージ **Missing MacAddress** フィールドがドキュメントログ内に表示されます。



## PifIgnoreNodeMapping

この関数では、ドキュメントタイプの要素を無視できます。

この要素を以下に示します。

- ドキュメントのルートノード
- 構造体
- コレクション
- フィールド

*PifIgnoreNodeMapping*関数の動作は、コレクションを対象とするかどうかによって変わります。

この命令がコレクションを対象にしている場合、コレクションの現在の要素のみが無視されます。コレクションの全要素を無視する場合は、命令 *PifIgnoreCollectionMapping* を使用します。

## シンタックス

```
(...)  
PifIgnoreNodeMapping("Message")  
(...)
```

("message")を使用すると、無視された要素についてエラーメッセージがドキュメントログ内に表示されます。

## 例

```
If [MacAddress] = "" Then  
PifIgnoreNodeMapping  
End If  
RetVal = [MacAddress]
```

このスクリプトを使用すると、**MAC address**フィールドを含むフィールドまたは構造体が空である場合に、この空の文字列で更新することを回避できます。フィールドに値が入力されていると、更新が実行されます。

```
If Left([Software.Name], 7) = "Windows" Then  
PifIgnoreNodeMapping  
ElseIf Left([Software.Name], 5) = "SunOS" Then  
PifIgnoreDocumentMapping  
End If
```

このスクリプトを使用すると、要素の**Software.Name**フィールドが*Windows*または*SunOS*に設定されている場合に、コレクションのこの要素を無視できます。

## PifIgnoreCollectionMapping

この関数では、コレクションからコレクションへのマッピングの実行時に、生成用ドキュメントタイプの1コレクションを無視できます。

コレクションからコレクションへのマッピングの詳細については、「コレクションからコレクションへのマッピング [ 献 113]」の節を参照してください。

## シンタックス

<命令>

### PifIgnoreCollectionMapping

<命令>

## 例

```
Dim i As Integer
Dim iCount As Integer
Count = PifGetItemCount("Logs")
For i=0 To iCount - 1
If [Logs(i).LogType] = 1 Then
Return
End If
Next
PifIgnoreCollectionMapping
```

処理レポート用のこのスクリプトでは、エラーメッセージがない場合は、**logs**コレクションの全構成要素が無視されます。

ドキュメントにエラーがまったくない場合は、このようなスクリプトを使用する必要はありません。**ErrorNumber**フィールドには、ドキュメントに関連したエラーの数が含まれます。

上記のスクリプトの代わりに以下のスクリプトを使用することもできます。

```
If [ErrorNumber] = 0 Then
PifIgnoreCollectionMapping
End If
```

## コレクション

本節では、コレクション処理に関する各種のスクリプトの例を紹介します。

### 値のリストに基づいてコレクション内に構成要素を作成する

本節では、ソースドキュメントの値のリストに基づいて、あるコレクション内に構成要素を作成するスクリプトの例を説明します。

本例の概要

- **Software** ソースフィールドは、値のリストを含んでいます。

- 値は区切り文字で区切られています。
- スクリプトの役割
- ソフトウェア名を1つずつ抽出します。
  - ターゲットコレクション**SoftInstalled**内に1構成要素を作成します。
  - 抽出されたソフトウェア名を使って、**Name**要素に値を入力します。

```

Dim iCount As Integer
Dim iIndex As Integer
Dim strSoft As String
Dim lDummy As Long
Dim strPath As String

' ソースフィールド "Software" 内で値の数を数えます。
' ソフトウェア名はカンマの (',' ) で区切られます。例："Excel, Connect-It,
' AssetCenter"
iCount = CountValues([Software], ",")

' リストの全要素から1つずつ抽出するために、全要素上で巡回して繰り返します。
For iIndex = 0 To iCount - 1

strSoft = GetListItem([Software], ",", iIndex+1)

' ソフトウェア名前後のスペースの削除
strSoft = Trim(strSoft)

' ルート要素からターゲットコレクションのパスを作成。
' 例えば、第3番目のソースソフトウェアにはパス "SoftInstalled(3).Name" が作成されます。
strPath = "SoftInstalled" & iIndex & ").Name"

' 関数PifSetStringValを使用して、パスに文字列ソフトウェアの現在の値を割り当てます。
'
' 関数PifSetStringValは、パスが有効でない場合はエラーコードを返します。
' 変数に関数の戻り値を割り当てる必要があります。割り当てられていないと
' 関数は適用されません。
lDummy = PifSetStringVal(strPath, strSoft)

Next iIndex

```

このマッピングスクリプトは、ターゲットドキュメントタイプのどの要素にも適用可能です。

マッピングを読みやすくするために、構成要素の追加先のコレクションに、このスクリプトを実行することをお勧めします。

 **警告:**

Basic関数PifSetStringValの呼び出し内にパスで指定されている要素は、ターゲットドキュメントタイプ内に存在しなければなりません。現在の例では、ユーザは**SoftInstalled**コレクションの**Name**要素を、取り込み用ドキュメントタイプ内に追加しなければなりません。

### コレクションの複数の構成要素を1フィールド内に結合する

本例の概要

- ソースドキュメントは、値のコレクションを含んでいます。
- このコレクションの要素は、ターゲットドキュメントタイプのフィールドへマップされています。

ソースは、あるコンピュータにインストールされたソフトウェアのコレクションを含んでいます。ソフトウェアの名前は、カンマ (',' ) で区切られたソフトウェアのリストを含むフィールド内に書き込まれなければなりません。

```
Dim iCollectionCount As Integer
iCollectionCount = PifGetItemCount("SoftInstalled")

Dim strList As String
Dim iItem As Integer

各コレクションの要素ごとに、ソフトウェアの名前を取得し、 ("SoftInstalled"
コレクションの "Name" 要素) 現在のリストに結合します。
For iItem = 0 to iCollectionCount - 1

' リストが空でない場合は名前の区切り文字を追加します。
If strList = "" Then
strList = strList & ", "

' 現在のリストにソフトウェア名を追加します。
' コレクション内の構成要素の番号を指定するには、直接変数を使用できます。

' 例えばiItemの変数の値が3である場合、パス
' [SoftInstalled(3).Name] は、iItemの値から自動的に作成されます。
? strList = strList & ", " [SoftInstalled(iItem).Name]
Next iItem

' 変数strListをターゲット要素に割り当てます。
RetVal = strList
```

## コレクション内で複数のフィールドをマップする

### 本例の概要

- ソースドキュメントには複数の異なったフィールドが含まれています。フィールド`Address1`と`Address2`は、クライアントの2つのアドレスを含んでいます。
- これらのフィールド値は、ターゲットコレクションの構成要素に関連付けられなければなりません。本例ではターゲットコレクションは`Address`です。

### 例

以下の操作を実行しなければなりません。

- ターゲットコレクション内に2つの構成要素を作成し、"`Adress1`"と"`Adress2`"フィールドに関連付ける。
- コレクションの複製機能を使用する。
  - 1 ターゲットドキュメントタイプ内に`Address`コレクションを追加します。
  - 2 このコレクションを複製します。  
`Address#1`コレクションが、ターゲットドキュメントタイプ内に表示されません。
  - 3 マッピングスクリプト [`Adress1`] と [`Adress2`] は、それぞれ `Adress.Adress`と`Address#1.Adress`フィールドに適用されます。

## コレクションからコレクションへのマッピングで、コレクションの一部の構成要素を無視する

コレクションの一部の構成要素を無視するには、`PifIgnoreCollectionMapping`と`PifIgnoreNodeMapping`命令を使用しなければなりません。

これらの命令の詳細については「`PifIgnoreCollectionMapping` [ 献 146]」の節を参照してください。

## マッピングに含まれないコネクタに関するスクリプト

以下の例では、`AssetCenter`データベースのシナリオ（データベースと`ServiceCenter`データベース間のデータ複製に関する）における統合を説明します。スクリプトは、従業員をインポートします。インポート時に、スクリプトは従業員が`AssetCenter`内に存在しているかどうかを確認して、それによってマッピングを変更します。

- 1 `Asset Management`コネクタをシナリオに追加します。このコネクタはマッピングボックスまたは別のコネクタにリンクする必要はなく、スクリプト内で使用するため、そのタイトルのみが重要です（コネクタの`configuration`ウィザードの`Connector name`フィールド）。ここで、コネクタは`Asset Management`と呼ばれます。
- 2 `Asset Management`コネクタによって生成される新しいドキュメントタイプを作成します。部署と従業員のテーブル（`amEmplDept`）を選択して、生成されたドキュメントタイプ（`Document type`フィールド）

**amEmplDeptForMapping**を呼び出します。この名前はスクリプトで使用されます。



**注意:**

WHEREまたはORDER BY句を定義する場合、これらはサンプルのスクリプトでは使用されていません。

- 3 マッピングボックスで、以下のようにスクリプトフィールドを入力します。

```
dim hQuery as long
dim iRc as long

hQuery = pifNewQueryFromFmtName("Asset Management", "amEmplDeptForMapping", "Name like 'A%'")

Dim strValue as string

while (iRc = 0)
iRc = pifQueryNext(hQuery)
if iRc = 0 then
strValue = pifQueryGetStringVal(hQuery, "Name")
piflogInfoMsg strValue
end if
wend

iRc = pifQueryClose(hQuery)
```

### pifNewQueryFromFmtName関数のシンタックス

この関数は、リソースによって生成されたドキュメントのリストに最初に定義されたドキュメントタイプについて、クエリを作成します。

関数のパラメータを以下に示します。

- **strCntrName** : このパラメータには、リソース（クエリの実行対象）の名前が含まれます。
- **strFmtName** : このパラメータには、ドキュメントタイプ（生成されたドキュメントタイプとして定義済み）の名前が含まれます。
- **strLayer** : このパラメータには、生成用ルール（WHERE句など）が含まれます。

関数はハンドルを戻します（ここでは**hQuery**パラメータ）。このハンドルは、戻されたレコードのリストを検索するために、**PifQueryNext**へのパラメータとして受け渡す必要があります。

以下の関数のいずれかを使用して、現在のドキュメントのデータを取得できます（フィールドタイプに応じて）。

- pifQueryGetStringVal
- pifQueryGetDateVal
- pifQueryGetDoubleVal
- pifQueryGetLongVal
- pifQueryGetIntVal

これらの関数には、それぞれ2つのパラメータがあります。

- 使用するクエリのハンドル (**hQuery**) (32ビット長の整数)
- 値を取得する要素のパス。このパスには、ドキュメントタイプのルート要素の名前を含まないでください (この例では**amEmplDept**)。

この例で、関数は従業員の名前を返します。

```
strValue = pifQueryGetStringVal(hQuery, "Name")
```

## pifNewQueryFromFmtName関数の生成用ルール (ディレクティブ)

**pifNewQueryFromFmtName**関数は、単純なパラメータを使用します。ただし、XMLフォーマットで複雑なクエリを定義することもできます。

生成用ルール (ディレクティブ) は、以下のシンタックスを使用してXMLで指定できます。

```
strLayer = "<Directives>"
strLayer = strLayer + "<Where>Name = 'Taltek'</Where>"
strLayer = strLayer + "<OrderBy>BarCode</OrderBy>"
strLayer = strLayer + "<Where Path='ItemsUsed'>AssetTag like 'A%'</Where>"
strLayer = strLayer + "</Directives>"

hQuery = pifNewQueryFromFmtName("Asset Management", "amEmplDeptForMapping", strLayer)
```

## XMLシンタックス

&、<、および>文字は許可されません。それぞれ&amp;、&lt;、および&gt;に置き換える必要があります。Basic関数**GetXmlElementValue**はこれらの文字の置換を処理します。

例：

```
strLayer = strLayer + "<Where Path='ItemsUsed'>" + GetXmlElementValue("AssetTag like 'A%'") + "</Where>"
```

## ピリオドまたはカンマを含むフィールドへのクエリ

コメントが付きの以下の例では、クエリにOpenView Network Discovery - ServiceCenterシナリオの要素**mac.address**および**logical.name**が含まれます。スクリプトは、INDコネクタによって提示されるMACアドレスを検証した後でそれに更新キーを割り当てます。MACアドレスが検証されると、**mac.address**フィールドではなく**logical.name**フィールドの情報が取得されません。

```
dim hQuery as long
dim iRc as long
dim strQuery as String

strQuery = "mac.address = " & chr(34) & [MACAddress] & chr(34)
"PDIドキュメント内のMACアドレス

hQuery = pifNewQueryFromFmtName("ServiceCenter", "pc1", strQuery)
"pc1はServiceCenterコンピュータのテーブル用に生成されたドキュメント

Dim strValue as String
strValue = [MACAddress]
"strValue by default

iRc = pifQueryNext(hQuery)
if iRc = 0 then      "
"iRc=0であるために完了したクエリ

strValue = pifQueryGetStringVal(hQuery, "logical.name")
"一重引用符はパラメータlogical.nameをパスではなくフィールドとして定義

pifLogWarningMsg("Matched Asset using query: " & strQuery)
"ドキュメントログに書き込む

pifLogWarningMsg("Updating Asset " & strValue)
"strValueはドキュメントログに書き込まれない
else
pifLogWarningMsg("Could not locate existing asset using MAC address " & [
MacAddress])
end if

iRc = pifQueryClose(hQuery)

If strValue = "" then
"このコードはpifQueryNextが0を戻すときに実行される
```



```
pifLogWarningMsg("pifQueryGetStringVal returned no data. Logical.name will be " & [MACAddress])
RetVal = [MACAddress]
Else
RetVal = strValue
End If
```

## マッピングスクリプト作成の手引き

本節では、マッピングスクリプトの作成に役立つ基本概念について説明します。

### マッピングスクリプトの処理順序

特定のドキュメントタイプの場合、複数のマッピングスクリプトがあり、以下の順序でスクリプトが処理されます。

- 1 フィールドに関連付けられたスクリプト
- 2 構造体に関連付けられたスクリプト
- 3 コレクションに関連付けられたスクリプト

この処理順序を利用すると、エラー処理が速くなります。

### 固定値をターゲット要素に関連付ける

固定値（日付、文字列、数値など）をターゲットフィールドへ関連付けるには：

- 1 作業枠にターゲットフィールドをドラッグします。
- 2 **apping script**フィールドに固定値を入力します。

例：

Desktop Discovery - Asset Managementシナリオでは、スキャンされた各コンピュータは、**amAsset**テーブルに新規の資産を作成します。デフォルトでは、このテーブルの各資産にはカテゴリ名がなければなりません。マッピング定義では、固定値**"/Hardware/Desktop computer/"**を**amAsset**ドキュメントタイプの**FullName.Category**フィールドにマップします。

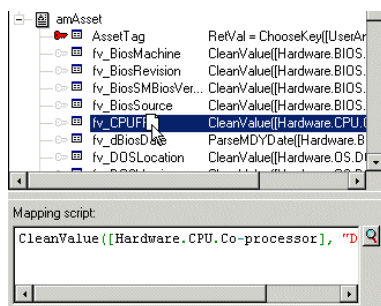
### 複数のフィールドをドラッグ&ドロップで移動させる方法

Basicスクリプトでは、Basic関数を用いて複数のソースフィールドを連結させることなどが可能です。

複数のフィールドをドラッグ&ドロップで移動させるには：


- 1 第1のソースフィールドをターゲットフィールドにマップします。
- 2 **Shift**キーを押したまま他のフィールドをドラッグします。フィールドはリストとして**Mapping script**枠内に表示されます。これらのフィールドを使用してスクリプトを再作成します。

## 図 4.19. 複数のフィールドをドラッグ&ドロップで移動させる



### ソース要素とターゲット要素の位置を見つける

作業枠内にあるターゲット要素が、ターゲットドキュメントタイプ内のどこに位置していたかを調べる場合、以下の操作を実行します。

- 1 要素を作業枠内で選択します。
- 2  をクリックします。

この操作を行うと、ターゲットドキュメントタイプ枠内にある元のターゲット要素が選択されます。この機能は、ターゲットドキュメントタイプに多数の要素がある場合に便利です。


また、マップされたソース要素（青で表示されています）を作業枠内で見つけることもできます。

見つけるためには、ソースドキュメントタイプ枠内のソース要素をダブルクリックします。するとこのソース要素に関連するターゲット要素が、作業枠内で緑色になります。

### ターゲット要素を複製する

複数のソース要素に1つのターゲットフィールドを関連付けるためには、ターゲットフィールドを複製する必要があります。例えば、ソースフィールドXとYをあるコレクション内のフィールドAに関連付けるとします。この場合、フィールドAが含まれているコレクションを複製してから、フィールドXを元のコレクションのフィールドAにマップし、フィールドYを複製されたコレクションのフィールドAへマップします。

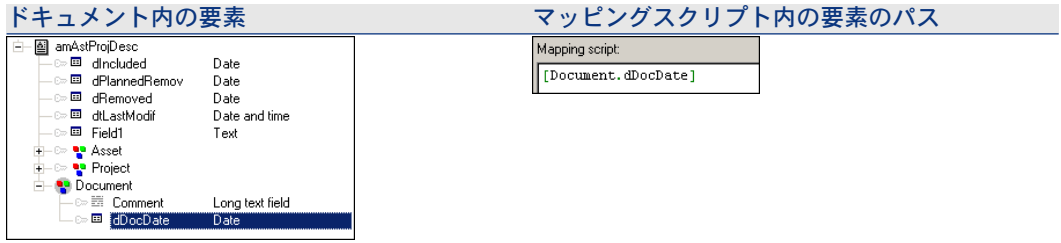
要素を複製するには：

- 1 作業枠内にある要素を選択します。
- 2  をクリックします。

複製された要素には番号が付けられます。元の要素には番号0が付いており（これは表示されません）、最初に複製された要素には番号1、2つ目の複製には番号

2がついています。この番号の付け方はConnect-Itで強制されており、変更は不可能です。

## 要素のパスをコピーする



マッピングスクリプトでは、使用する要素の完全なパスを指定しなければなりません。例えば次の図では、フィールド**dDocDate**の完全パス名は**Document.dDocDate**です。

ドキュメントタイプの要素のパスを取得するには：

- 1 要素を選択します。
- 2 右クリックして、ショートカットメニューから**Copy path**を選択します (**Ctrl+C**)。
- 3 ポインタを**Mapping script**フィールド内に置きます。
- 4 右クリックして、ショートカットメニューから**Paste**を選択します (**Ctrl+V**)。

## スクリプトのシンタックスの確認

マッピングスクリプトで、拡大鏡アイコンをクリックし、テキストエディタにアクセスします。このエディタを使用すると、マッピングスクリプトを記述してそのシンタックスを確認することができます。

マッピングスクリプトのシンタックスを検証するには：

- 1 **Tools**メニューで、**Options**を選択します。
- 2 表示される設定ウィンドウで、使用コネクタに従ってスクリプトテンプレートを選択します (**Template**フィールド)。
  - AQLクエリ記述用の**aql**
  - Visual Basicスクリプト用**bas**
  - ServiceCenterスクリプト用**sc**
  - その他
- 3 スクリプトの入力が完了したら、**OK**をクリックします。

## Basicスクリプトの検証

**Mapping**、**Additional scripts**、または**Reconciliation scripts**タブに入力したスクリプトが解析され、有効でなければエラーメッセージが表示されます。この場合、スクリプトをコピーすることができますが、検証はできません。

## Basicスクリプトの先行入力

関数入力時に先行入力機能を使用できるダイアログ ボックスにアクセスするには、CTRL+Spacebarを押します。

## マッピングスクリプトのショートカットメニューを使用する方法

マッピングスクリプト内で右クリックすると、ショートカットメニューが表示されます。

このショートカットメニューでは以下の操作を実行できます（括弧内はショートカットキーです）。

- Undo Keystroke
- Repeat Keystroke
- Cut (*Ctrl+X*キー)
- Copy (*Ctrl+C*キー)
- Paste (*Ctrl+V*キー)
- Select all (*Ctrl+A*キー)
- Filter unused document types
- Show source
- Show destination

## Edit mapping ウィンドウのショートカット（コンテキスト）メニュー

Edit mapping ウィンドウでは、4つのショートカットメニューのコマンドを、マッピングスクリプトを作成する際に使用できます。

ソースコネクタに発行された使用可能なドキュメントタイプの要素上に、ポインタが位置する時

コマンド	機能
Copy this XML DTD	ソースコネクタの生成用ドキュメントタイプのDTDをコピーします。
Copy path	コンピュータのクリップボードに、選択した要素のパスをコピーします。
Show nodes mapped to the selection	選択された要素に関連する（直接マッピングまたはスクリプト使用のマッピング）マッピングノードを緑色で表示します。
View data	ソースドキュメントタイプのデータを確認するためのウィンドウを表示します。

コマンド	機能
Edit a document type to preview data	コネクタの生成用ドキュメントタイプを作成するためのウィンドウが表示され、生成用ドキュメントタイプのデータを確認できるようになります。
Filter unused document types	現在のマッピングで使用されていないドキュメントタイプにフィルタを適用します。
Show source	ターゲットドキュメントタイプ枠を表示／非表示にします。
Show destination	ターゲットドキュメントタイプ枠を表示／非表示にします。

ターゲットコネクタに発行された使用可能なドキュメントタイプの要素上に、ポインタが位置する時

コマンド	機能
Copy this XML DTD	ターゲットコネクタの取り込み用ドキュメントタイプのDTDをコピーします。
Copy path	コンピュータのクリップボードに、選択した要素のパスをコピーします。
Add this element	作業枠内に要素を置きます。
View data	ターゲットドキュメントタイプのデータを確認するためのウィンドウを表示します。
Filter unused document types	現在のマッピングで使用されていないドキュメントタイプにフィルタを適用します。
Show source	ソースドキュメントタイプ枠を表示／非表示にします。
Show destination	ターゲットドキュメントタイプ枠を表示／非表示にします。

作業枠にポインタが位置する時

コマンド	機能
Copy this XML DTD	ターゲットコネクタの取り込み用ドキュメントタイプのDTDをコピーします。
Copy path	選択した要素のパスをクリップボードにコピーします。
Edit the mapping	テキストエディタでマッピングスクリプトを編集できます。
Describe mapping	選択されたマッピングノードを説明するためのウィンドウを表示します。
Reconciliation key	ターゲットコネクタがデータベース型の場合、選択された要素が照合更新キーとして使用されていることを示します。
Remove this element	作業枠内から選択した要素を取り除きます。
Copy mapping	マッピングの一部または全体をクリップボードにコピーします。

コマンド	機能
Paste mapping	現在のマッピング内に、クリップボードのマッピングまたはマッピングの一部を貼り付けます。
Filter unused document types	現在のマッピングで使用されていないドキュメントタイプにフィルタを適用します。
Show source	ソースドキュメントタイプ枠を表示／非表示にします。
Show destination	ターゲットドキュメントタイプ枠を表示／非表示にします。

## Mapping scriptの編集用ゾーンにポインタが位置する時

コマンド	機能
Undo Keystroke	一番最後のキー入力を取り消します。
Repeat keystroke	一番最後のキー入力を繰り返します。
Cut	選択したテキストを切り取ります。
Copy	クリップボードに選択したテキストをコピーします。
Paste	編集用ゾーンにクリップボードの内容を貼り付けます。
Select all	編集用ゾーンのテキストを全て選択します。
Filter unused document types	現在のマッピングで使用されていないドキュメントタイプにフィルタを適用します。
Show source	ソースドキュメントタイプ枠を表示／非表示にします。
Show destination	ターゲットドキュメントタイプ枠を表示／非表示にします。

## グローバル変数の定義

マッピングスクリプト用にグローバル変数を定義することができます。

グローバル変数は、ドキュメントタイプのルートに定義された変数であり、ドキュメントタイプの複雑要素（コレクション、構造体、フィールド）に関連付けられたスクリプトに呼び出される変数です。

グローバル変数の宣言は、**Basic**スクリプトの定義の前に実行されなければなりません。変数はセッションの開始または終了時に使用されます。

使用する関数の詳細については、「[Basic関数 \[ 献 139\]](#)」の節を参照してください。

グローバル変数は**Additional scripts**タブで定義されます。

**Additional scripts**タブの詳細については「[Additional scripts \[ 献 159\]](#)」の節を参照してください。

また、関連するBasicファイルでも宣言できます。

## Additional scripts

追加スクリプトは、特定ドキュメントタイプの**Additional scripts**タブで定義されます。

このタブは、ドキュメントタイプのルート要素でのみ使用可能です。

このタブでは以下の操作を実行できます。

- グローバル変数を定義する
- 各セッションの開始時にBasicコードを実行する
- 各セッションの終了時にBasicコードを実行する

---

### 注意:

追加スクリプトの例は、作成されたすべてのドキュメントタイプ用として示されます。

---

---

## 管理モニタの定義

シナリオモニタリング機能は、モニタシステムによって処理されます。モニタによって、アプリケーションとそのコネクタによって提示される情報の流れと処理履歴データを有効化および管理します。

### モニタ - 動作

モニタは、有効化または無効化される監視ツールであり、シナリオ処理に関連する情報の表示および保存を可能にします。

シナリオ作成時にモニタは有効化されます。

シナリオのモニタリングには、以下の処理が含まれます。

- ドキュメントログのグラフィックトレースを管理します。
- ソースコネクタおよびターゲットコネクタを通過したドキュメントにリンクされる情報を管理します。
  - 処理エラー（部分的または完全な警告、拒否）を含むドキュメントまたはドキュメント自体
  - ドキュメントログ
  - Connect-Itログ
  - 親ドキュメント
- ドキュメント処理の実行結果の管理

## 警告:

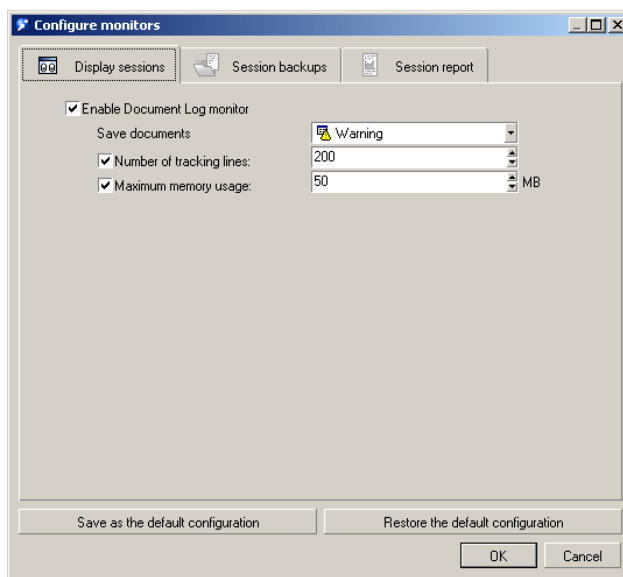
新しいシナリオを作成するときに、デフォルト設定が使用されます。最初のテストを開始してシナリオを生成する前に、モニタ設定を検証することをお勧めします。

各シナリオには、.scnシナリオファイルに保存された専用のモニタ設定があります。さらに、Connect-Itにはconit.iniファイルに保存されたデフォルト設定があります。このデフォルト設定は、Connect-Itが開始して新しいシナリオを作成するときに使用されます。

## モニタの設定

モニタは、**Monitors/Configure monitors**メニューによって使用可能になります。

シナリオモニタリング設定は、各タブで定義されます。



モニタリングは、以下のタブで有効になります。

- **Display sessions** : **Document log**タブに示す情報を表示および設定します。
- **Session backups** : セッション関連情報（ログ、ドキュメント、実行結果）をファイルまたはConnect-Itデータベースに保存します。
- **Session report** : セッションレポートを電子メール、Windowsイベント、またはAssetCenterイベントのフォーマットで処理します。



各タブは、1つ以上のモニタを表し、有効化の有無または依存性の有無を指定します。

各モニタの有効化は、すべてのモニタのセッションごとに有効化される一般的なオプションによって決まります。

 **注意:**

モニタを有効にした場合のアプリケーションの性能は、生成されて取り込まれてモニタに保存されたドキュメントの数によって決まります。

## Display sessionsモニタ

このモニタは、**Document log**タブに情報を表示するために使用します。このモニタを有効にすると、コネクタの性能に影響があります。有効化は、**Session backups**ログ内の**Session backups / Keep the logs linked to documents**オプションと別個のものとして考えます。

モニタを有効化するには、**Display sessions**タブで**Enable Document Log monitor**オプションを選択します。

このモニタは、設定可能です。以下を設定できます。

- ドキュメント表示条件
- ドキュメントログ内に表示するトラッキング項目数
- 512 KBから20 MBまでの割り当てメモリサイズ

このモニタの内容は、シナリオエディタの**Document log**タブで確認できます。

## セッションオプション

このタブ内のオプションを使用すると、アプリケーションによって処理してファイルまたはConnect-Itデータベースに保存する履歴の項目を定義します。



**Sessions backup**タブで、各モニタによって処理されるオプションを選択します。

- Save the Connect-It log
- Save documents
- Save statistics

## モニタによって処理されるセッションオプション

選択したモニタのタイプに応じて、セッション処理に定義されたオプションは使用可能または使用不可能になります。

	Display sessions モニタ	Fileモニタ	Databaseモニタ	E-mailモニタ
アプリケーション ログ	利用不可	なし	あり	なし
ドキュメント	あり	あり	あり	なし
ドキュメントログ	あり	あり	あり	なし
実行結果	なし	あり	あり	あり

### Save the Connect-It logsオプション

このオプションを使用すると、Connect-Itログが有効になります。

詳細については、「統合シナリオの管理 [ 献 199]」の章の「Connect-Itログ [ 献 222]」の節を参照してください。

### Save documentsオプション

このオプションでは、以下の内容を設定できます。

- シナリオエディタの**Document log**タブに表示する情報。
- **File**および**Database**モニタに保存される情報。

保存するドキュメントの設定は、以下の作業で構成されます。

- 保存するドキュメントのフィルタ適用

このフィルタは、**Save documents**オプションに使用できるドロップダウンリストを使用して行われます。

保存するドキュメントのフィルタ適用によって、以下を保存できます。

- ドキュメント自体 (**normal processing**フィルタ)
    - このオプションは、主にシナリオのテストに使用します。
  - ドキュメントに関連付けられた警告 (**Warnings**フィルタ)
  - 部分的な拒否
  - 完全な拒否
- 保存したいドキュメントに関連付けられたログのフィルタ適用

このフィルタは、**Keep the logs linked to documents**オプション内のドロップダウンリストで行われます。

ドキュメントログの詳細については、「ドキュメントログ [ 献 223]」の節を参照してください。

### Save statisticsオプション

このオプションを使用すると、実行結果の生成が有効になります。

以下の実行結果が生成されます。

- **Document statistics** : 生成されたドキュメントと取り込まれたドキュメント
- **Time statistics** : セッションの長さ、コネクタによる処理の長さ

これらの実行結果は、シナリオ内の主要な要素を強調表示します (ドキュメントの挿入、削除、または更新)。

これらの実行結果には、以下の特色があります。

- ポインタをマッピング要素のいずれかの上に置くと、Scenario Builderに表示されます。

<b>Name:</b> Asset Management
<b>Description:</b> ACDemo44fr
<b>Statistics:</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>• Total time: 00.438s</li><li>• Durée des selections: 00.172s (Nb:2, Min:00.016s, Max:00.156s)</li><li>• Durée des mises à jour: 00.140s (Nb:2, Min:00.031s, Max:00.109s)</li><li>• Document(s) consumed successfully: 2</li><li>• Basic script(s) evaluated: 2</li><li>• Connection test(s): 1</li><li>• Record(s) read: 2</li><li>• Field(s) updated by the reconciliation script: 2</li></ul>

- **File** モニタが有効になっている場合、保存されたセッションを管理するために画面 (**Monitors/Manage saved sessions** メニュー) に表示されます。

Element	Type	Detail	Value
Connect-It monitor			
Total time	2368	05.041s	
Asset Management			
Catalog			
Total time	562	03.250s	
Document(s) consumed successfully	148		
SuccessReport1_catalogSrc	148		
Document(s) produced successfully	148		
catalogSrc	148		
Mapping			
Total time	149	00.062s	
Time in scripts	148	00.000s	
Document(s) consumed successfully	148		
catalogSrc	148		
Document(s) produced successfully	148		
amCalRefDst	148		
Retroaction			

- 要素タイプ（コネクタ、マッピングボックス）および値（期間、成功、失敗）によってソートされます。

### Limit data backed up for scenario オプション

このオプションを使用すると、以下のように、モニタの最大運用値（時刻、数）を設定できます。

- シナリオの各実行に対して、アプリケーションを開始する時刻から終了する時刻までを設定します。
- 各セッションに対して、シナリオを起動する回数を設定します。

最も新しいセッションが最も古いセッションに代わります。

### 一般的なオプションの保存

モニタリングツールの設定は、各シナリオに対して保存されます。デフォルト設定が保存可能であり、**conit.ini**ファイルに保存できます。この設定は、アプリケーションを起動するたびに読み込まれます。

設定を保存するには、**Save the default configuration**をクリックします。

デフォルト設定は、作成するすべての新規シナリオに適用されます。また、**Connect-It**に付属するすべてのシナリオにも適用されます。

#### 注意:

デフォルト設定は、以前のバージョンの**Connect-It**を使用して作成または更新されたシナリオには適用されません。この場合、以前のバージョンの**Connect-It**で定義されたシナリオ設定が保存されます。

この設定は、**Restore the default configuration**をクリックすることによっていつでも復元できます。このボタンを使用すると、編集しているシナリオにデフォルト設定を適用できます。

### Sessionオプション - Fileモニタ

このモニタは、ドキュメントの内容と関連ドキュメントログをファイルに保存します。

このモニタを有効にするには、**File**タブの**Enable monitor**オプションを選択します。

このモニタを使用すると、以下を指定できます。

- 一般的な設定を保存するフォルダ。

#### 注意:

**Backup directory**フィールドにはファイル用の完全パスまたは相対パスを入力できます。例えば、

- 
- 

このフォルダには、**Limit data backed up for scenario**オプションに定義されたすべてのセッションが含まれます。各セッションには、対応する番号があります。

#### 注意:

このフォルダは、保存されたセッションをインポートするために使用されます (**Monitor**メニュー)。

実行されたセッションと同じ数のセッションフォルダがあります。各シナリオのセッションフォルダの最大数は、**Sessions to keep**フィールドによって設定されます。各セッションフォルダには、セッション番号があり、シナリオの名前を持つフォルダに保存されます。

シナリオセッションを含むメインフォルダは、自由に名前を付けることができます。これにより、特定シナリオに関係するセッションを新しいフォルダに保存できます。ただし、セッションは同じメインフォルダに保存することをお勧めします。

すべてのセッションがseslist.xmlファイルに一覧表示され、すべてのシナリオがscnlist.xmlファイルに一覧表示されます。

各セッションフォルダには、複数ファイルの形式で処理履歴が含まれます。

- xmlフォーマットによるdoclogおよびdocumentファイル
- テキストフォーマットによるdoctraceおよびstatファイル



**警告:**

**Save documents**オプションを**Normal processing (no filter)**に設定した場合、処理されたすべてのドキュメントがデータベースに保存されます。この場合、性能に影響が生じてバックアップメディアが飽和状態になる危険を冒す可能性があります。

## Sessionオプション - Databaseモニタ

このモニタを有効にするには、**Database**タブの**Enable monitor**オプションを選択します。

このモニタを使用すると、以下を指定できます。

- 処理履歴の保存に使用するConnect-Itデータベース (**Connection**フィールド)  
データベース接続は、データベースマネージャ内で最初に宣言する必要があります。  
接続が存在しない場合、データベース管理ツールを使用して作成できます。
- データベースログイン
- データベースパスワード
- トラッキング項目の履歴を一時的に無効にする



**注意:**

**Test**をクリックすることによって、接続の有効性をテストできます。

Connect-Itデータベースの管理については「モニタデータベース管理 [ 献 271]」の章を参照してください。



### 警告:

**Save documents**オプションを**Normal processing (no filter)**に設定した場合、処理されたすべてのドキュメントがデータベースに保存されます。この場合、性能に影響が生じてデータベースが飽和状態になる危険を冒す可能性があります。

エラーの発生したドキュメントを保存することをお勧めします。

データベース構造を変更したため、Connect-Itバージョン3.4より前のセッションを読み込むことができません。

### トラッキング項目グループの一時的な無効化

オプション**Disable temporarily if the number of tracking-line groups to save exceeds:**を使用すると、トラッキング項目グループを保存する上限を定義できます。このオプションは、明らかにマッピングエラーの結果であるエラーが大量に発生した場合に特に役立ちます。

トラッキング項目グループは、ドキュメントの処理に関する一連の情報に相当します。この情報は、ソースコネクタによって生成されたドキュメント、マッピングボックスによって生成されたドキュメント、ターゲットコネクタによって取り込まれたドキュメント、およびドキュメントの元にある親ドキュメントです。

オプションに定義された値を超えると、残りのセッションでモニタが無効になり、エラーがConnect-Itログに入力されます。

### Session report - E-mailモニタ

このモニタを使用すると、各セッションの最後で、セッションに関するフォーマットされた実行結果を含む電子メールを送信できます。

このモニタを有効にするには、**E-mail**タブの**Enable monitor**オプションを選択します。

このモニタを使用すると、処理履歴を取得してフォーマットすることができます。

以下を指定できます。

- 電子メールを送信する必要がある場合：
  - Normal processing (no filter)
  - Warning
  - Partial rejection
  - Total rejection
- メッセージングプロトコル：MAPI、SMTP、VIM
- メッセージングサーバの名前、そのポート番号
- メッセージに関連する情報：返信アドレス、受信者、件名  
メッセージの件名は、以下の変数を使用して自動設定できます。

表 4.4. E-mail/変数モニタ

%Status%	セッションのステータス
%StatusDesc%	セッションのステータスの説明
%DocAll%	処理されたドキュメントの合計数
%DocOk%	正常に処理されたドキュメントの数
%DocWarning%	処理され警告が発生したドキュメントの数
%DocError%	処理されエラーが発生したドキュメントの数
%DocRejected%	処理され拒否されたドキュメントの数
%DocIgnored%	処理され無視されたドキュメントの数
%DocConsumed%	取り込まれたドキュメントの数
%DocConsumedOk%	正常に取り込まれたドキュメントの数
%DocProduced%	生成されたドキュメントの数
%DocProducedOk%	正常に生成されたドキュメントの数
%DocConsumedWarning%	取り込まれて警告が発生したドキュメントの数
%DocConsumedError%	取り込まれてエラーが発生したドキュメントの数
%DocConsumedRejected%	取り込まれて拒否されたドキュメントの数
%DocConsumedIgnored%	取り込まれて無視されたドキュメントの数
%DocProducedWarning%	生成され警告が発生したドキュメントの数
%DocProducedError%	生成されエラーが発生したドキュメントの数
%DocProducedRejected%	生成され拒否されたドキュメントの数
%DocProducedIgnored%	生成され無視されたドキュメントの数
%ScnName%	シナリオ名
%ScnFullName%	シナリオの完全パス
%SessionLength%	セッションの長さ
%StartTime%	セッションの開始時刻
%EndTime%	セッションの終了時刻

変数の名前は、大文字小文字が区別されません。

- メッセージのフォーマット (**E-mail type** フィールド) : *Text*、*HTML*、または *XML*。フォーマットは、**Modify** ボタンによって定義されます。

テキストファイルの場合、行ごとの文字数を指定します (**Maximum text width** フィールド)。

HTMLフォーマットの場合、デフォルト以外のスタイルシートを使用するときは、**Use a custom stylesheet** オプションを選択します。

デフォルトテンプレートを以下に示します。

```
BODY {
FONT-FAMILY: helvetica;
BACKGROUND-COLOR: #ffffff
}
H1 {
PADDING-RIGHT: 5px;
PADDING-LEFT: 5px;
FONT-WEIGHT: bold;
```

```
FONT-SIZE: 150%;
PADDING-BOTTOM: 5px;
COLOR: #ffffff;
PADDING-TOP: 5px;
BACKGROUND-COLOR: #000066
}
TD.ItemDesc {
FONT-WEIGHT: bold
}
SPAN.ItemDesc {
FONT-WEIGHT: bold
}
P.NotAvailable {
FONT-STYLE: italic;
TEXT-ALIGN: center
}
TR.Header {
FONT-WEIGHT: bold;
COLOR: #ffffff;
BACKGROUND-COLOR: #000066
}
TD.Group {
FONT-WEIGHT: bold;
FONT-SIZE: 125%
}
TR.GraphDoc {
BACKGROUND-COLOR: #e0e0e0
}
TD.GraphDoc {
BACKGROUND-COLOR: #000066
}
TR.GraphTime {
BACKGROUND-COLOR: #e0e0e0
}
TD.GraphTime {
BACKGROUND-COLOR: #000066
}
TD.DocOK {
BACKGROUND-COLOR: #00e000
}
TD.DocWarning {
BACKGROUND-COLOR: #e0a800
}
TD.DocError {
```



```

BACKGROUND-COLOR: #e07000
}
TD.DocRejected {
BACKGROUND-COLOR: #e07000
}
TD.DocIgnored {
BACKGROUND-COLOR: #0000e0
}

```

XMLフォーマットの場合、メッセージ本体が以下のタグによってXMLで記述されます。

```

<Report><Section><Start><End><Status><Docs><Time><TotalTime><Group>

```

- 電子メールメッセージの内容：
  - 実行レポート
  - シナリオ内のドキュメントの実行結果
  - シナリオの時刻関連の実行結果
  - 要素によってソートされた実行結果のリスト
  - 値タイプによって並べられた実行結果のリスト

電子メールのメッセージ内容は、オプション形式で有効または無効にすることができます。このオプションは、設定の順番でソートできます (**Move up** および **Move down** 矢印)。選択されたオプションの数は、**E-mail** タブ内の **Contents of the e-mail** フィールドに表示されます。

### Session report - ServiceCenter モニタ

このモニタを使用すると、ServiceCenter Incidents テーブルにレコードを作成できます。

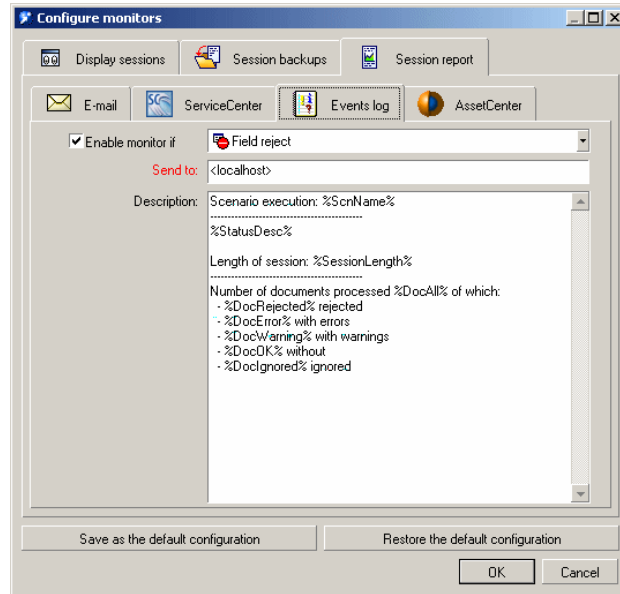
モニタパラメータを以下に示します。

- **Connection** フィールド：ServiceCenter データベース。Test:12670 など。
- **Login** フィールド：接続識別子
- **Password** フィールド：ユーザパスワード
- **Category**：インシデントカテゴリ
- **Severity** フィールド：インシデント重大度
- **Problem type**：インシデントを生じた問題のタイプ
- **Description** フィールド：ServiceCenter 作業指示の **Description** フィールドに示すようなセッションの説明

テンプレートのシンタックスは E-mail モニタに使用するものと同じです (**E-mail / 変数モニタ** [ 献 167])。

## Session report - Events log モニタ

このモニタを使用すると、Windowsのイベントビューアで確認できるイベントを作成できます。



このモニタを有効にするには、**Session report**タブの**Enable monitor if**オプションを選択して、このモニタに関連付けられたフィルタを定義します（Normal processing、Field reject、Warning、Reject）。

モニタパラメータを以下に示します。

- **Send to** フィールド：イベントを受け取るコンピュータ（またはコンピュータのグループ）の名前
- **Description** フィールド：Windows イベントの**Description** フィールドに示すようなイベントの説明

デフォルトテンプレートを以下に示します。

```
Scenario execution: %ScnName%
-----
%StatusDesc%

Length of session: %SessionLength%
-----
Number of documents processed %DocAll% of which:
- %DocRejected% rejected
```

- %DocError% with errors
- %DocWarning% with warnings
- %DocOK% without errors
- %DocIgnored% ignored

テンプレートのシンタックスはE-mailモニタに使用するものと同じです (E-mail/変数モニタ [ 献 167]) 。

### Session report - AssetCenterモニタ

このモニタを使用すると、AssetCenter作業指示 (amWorkOrder) テーブルにレコードを作成できます。

Connect-Itによって挿入されたレコードを処理および分類するために、AssetCenterに特定の作業指示モデルを作成することをお勧めします。

このモニタを有効にするには、**Session report**タブの**Enable monitor if**オプションを選択して、このモニタに関連付けられたフィルタを定義します (Normal processing、Field reject、Warning、Reject) 。

モニタパラメータを以下に示します。

- **Connection**フィールド：DBMSに宣言されたAssetCenterデータベース
- **Login**フィールド：接続識別子
- **Password**フィールド：ユーザパスワード
- **Model**フィールド：性質**作業指示**の既存モデルの名前
- **Title**フィールド：作業指示テーブル内の**Label**フィールドに入力するシナリオの名前
- **Group**フィールド：部署と従業員のテーブルのグループの名前 (amEmplDept)
- **Problem**フィールド：AssetCenter作業指示の**Problem**フィールドに示すようなセッションの説明
- **Status**フィールド (表示されない)：このフィールドは、作業指示の**Status** (seStatus) フィールドに値0 (Notified status) を戻します。

テンプレートのシンタックスはE-mailモニタに使用するものと同じです (E-mail/変数モニタ [ 献 167]) 。

接続の有効性をテストするには、**Test the connection**をクリックします。

### 保存されたセッションの管理

各セッションの履歴は、セッションマネージャで確認できます。

保存された各セッションには、宣言されたモニタごとにタブがあります。

セッションをクリックして、その履歴を各タブ内に表示します (実行結果、期間、ドキュメント、データベース、電子メールのリスト) 。

選択された各セッションには、以下の操作が可能です。

- 新しいシナリオエディタで開く (**Open**ボタン) : シナリオがログ (Connect-It ログ、ドキュメントログ) と共に表示されます
- シナリオの現在のウィンドウに読み込む (**Load**ボタン) : 現在のシナリオがログ (Connect-Itログ、ドキュメントログ) と共に表示されます
- 削除する (**Delete**ボタン) : セッション履歴が削除されます。
- 閉じる (**Close**ボタン) : セッション管理ウィンドウが閉じます。

## セッションオプション

セッションオプションは、モニタ設定時 (**Monitors/ Configure monitors** メニュー、**Session backups**) に定義され、保存するデータに影響を与えます。

例えば、ステータスが**Warning**のドキュメントのみの保存を選択する場合は、セッション読み込み時 (**Monitors/ Managed saved sessions**メニュー)、通常に処理されたドキュメントが表示されません。

## 保存されたセッションの設定

表示する数を減らすために、表示フィルタをセッションに適用できます。セッションは、以下の条件に従って表示されます。

- シナリオ名
- セッションの変更日
- セッションのステータス
- 表示するセッションの数

フィルタパラメータにアクセスするには、**Configure**をクリックします。表示されるウィンドウでは、以下の作業を実行できます。

- 新しいフィルタを作成する
- 既存フィルタを変更する
- 既存フィルタを削除する



### 注意:

既存システムのフィルタは、編集できません。

## セッションフィルタ条件

各フィルタは、有効にすることも無効のまま残すこともできるオプションです。

- **Filter name : Manage saved sessions**ウィンドウの**List of available sessions**フィールドで使用可能なリストに表示されるフィルタの名前。名前を指定しないと、使用するオプションを表す名前が自動的に割り当てられません。
- **Display the sessions of the scenario** : このオプションを選択してシナリオ名を指定すると、シナリオに関連するセッションのみが表示されます。



#### 注意:

このオプションを選択するがシナリオ名を指定しない場合は、現在のConnect-Itシナリオセッションのみが表示されます。

- **Display the sessions modified since :**
  - オプションを選択しない：セッションの最終変更日がフィルタで使用されません。
  - オプションを選択する：フィルタで期間を選択できます。例えば、12時間の場合、12時間以内に変更または終了したセッションのみが表示されます。
- **Display the sessions with the status :** このオプションでは、セッションのステータスによるフィルタ適用が可能です。このオプションを選択すると、フィルタが階層順に従って適用されます。**Warning**ステータスにフィルタを適用することは、ステータス**Warning**、**Field reject**、および**Reject**の全セッションが表示され、表示されないのはエラーなしのセッションのみです。
- **Maximum number of session displayed :** このオプションでは、表示するセッションの最大数を定義できます。



#### 注意:

最大数を超えた場合、最新のセッションは表示できません。

### 保存されたセッションの読み込み

**Load**ボタンを使用すると、セッションを読み込んでそれにフィルタを適用することができます。**Document log**タブで使用できる情報が特定フィルタに従ってフィルタ選択されます。

- Normal processing (no filter)
- Warning
- Partial rejection
- Total rejection

セッションは以下から読み込まれます。

- セッションのバックアップフォルダ
- Connect-Itデータベース

最初または最後のN個のトラッキング項目のみを表示することを選択できます (**Only reload a portion of the tracking lines** オプション)。

ドキュメントのステータスに従ってフィルタを実行し、トラッキング項目の数を制限することによって、表示する項目の処理にかかる時間を削減できます。



注意:

読み込むドキュメントの数が多いと（ファイルモニタの場合は500、データベースモニタの場合は1000）、警告メッセージが表示されます。

## 保存されたセッションのインポート

現在のシナリオに他のシナリオのセッションファイルをインポートできます（**Monitors/ Import saved sessions**）。

これは、ワークステーション間で情報を転送する場合に役立ちます。以下に方法を示します。

- 1 最初のワークステーションのセッションフォルダと関連ファイル（.scn、.dat、.xml、.dtd、.iniなど）を.zipファイルにアーカイブします。
- 2 このフォルダをターゲットワークステーション上のc:\tmp\testなどのフォルダにコピーおよびunzipします。関連ファイルがそれらの本来の場所（.iniの場合はユーザ設定、シナリオの場合はセッションフォルダと同じレベルなど）にコピーされます。
- 3 Connect-Itを開始して、シナリオを読み込みます。
- 4 **File**フォルダを有効にしてunzipされたセッションフォルダのパスを入力します（**Monitors/ Configure monitors**、タブ**Session backups**、サブタブ**File**）。



注意:

セッションパスの入力に誤りがあると、セッションがインポートされず、エラーメッセージが表示されます。

- 5 セッションのインポートを使用します（**Monitors/ Import saved sessions**）。

元のワークステーション上のセッションを結び付けるリンクが復元されて、新しいセッションが指定フォルダに保存されます。

## Connect-Itサービスの定義（Windows環境）

Connect-Itでは、Windows上のサービスをシナリオに関連付けることができます。このサービスにより、Connect-Itサーバはバックグラウンドジョブとしてデータ処理を実行できます。データ処理は、シナリオに関連付けられたスケジュールに応じて起動されます。



### 警告:

シナリオ内の1つのコネクタがODBC接続を使用している場合、この接続はシステムデータソース（システムDNS）を使用しなければなりません。この接続がユーザデータソース（ユーザDNS）を使用していると、接続はシナリオに関連付けられたサービスの管理下に置かれなくなります。

Windows下のサービスでは、バックグラウンドジョブとして実行されるアプリケーションを使用できます。Connect-Itでは、シナリオと同じ数だけのサービスを作成、起動できます。

サービスを作成、開始、終了、または削除するには、Windowsのローカル管理者権限が必要です。



### 注意:

Windows 32ビットでは、環境変数（例えば検索パスなど）を変更しても、コンピュータを再起動しない限りこの変更事項はサービスに適用されません。



### 重要項目:

コネクタが他のコンピュータのフォルダやファイルを指定する場合は、マップされたディスク名は使わずに、遠隔のコンピュータ名を直接指定します。例えば、

```
\\XSFStore\Scan
```

が正しい指定方法で、

```
Z:\Scan
```

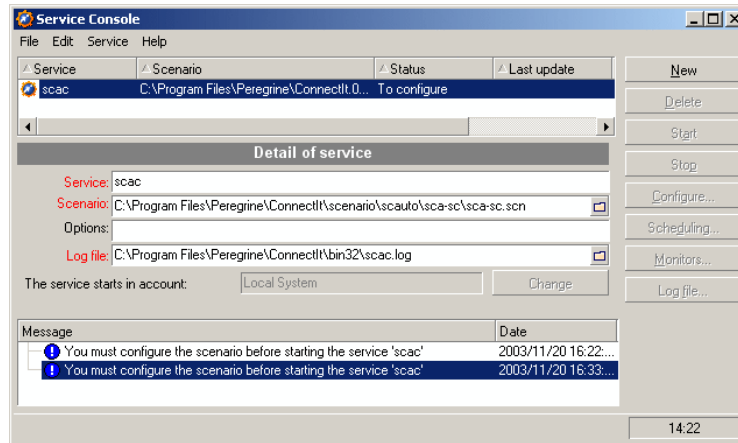
ではありません。

Zドライブが\\XSFStoreにマッピングされる場合でも、正しい指定方法ではありません。

## Service Console

Service ConsoleはConnect-Itのコンポーネントです。コンソールのグラフィカルインタフェースでは、シナリオを管理し、シナリオに関連付けるサービスを作成することができます。

## 図 4.20. Service Console



consoleを起動するには、**Service Console**を、HP Software\ Connect-Itプログラムグループから選択します。または、Connect-Itインストール先フォルダのbinフォルダ内の、console.exe実行可能ファイルを起動することもできます。

### メニュー

consoleには4つのメニューがあります。

#### Fileメニュー

コマンド	機能
Exit	Connect-Itコンソールを終了します。

#### Editメニュー

コマンド	機能
Cut, copy, paste	コンソール用の標準の編集機能
Delete messages	コンソールに表示されるメッセージとアラートを削除します。
Refresh	サービスのリストを更新します。

#### Serviceメニュー

コマンド	機能
New	新しいConnect-Itサービスを作成します。
Delete	Connect-Itサービスを削除します。



コマンド	機能
Install	Connect-Itサービスをインストールします。
Uninstall	Connect-Itサービスをアンインストールします。
Start	Connect-Itサービスを起動します。
Stop	Connect-Itサービスを停止します。
Configure	<b>Configure the connector</b> ウィザードを起動し、シナリオのコネクタの設定を可能にします。
Scheduling	サービスに関連付けられたシナリオ内で使用されているスケジューラを変更できるようにします。
Monitors	Scenario Builderを起動し、 <b>Connect-Itログ</b> と <b>Document log</b> タブを表示します。
Log file	Connect-Itの各サービスに付属するログファイルを表示します。

## Helpメニュー

コマンド	機能
About...	<b>About</b> ボックスが表示されます。
Online help	オンラインヘルプが表示されます。

## WindowsでConnect-Itサービスを作成および使用するステップ

サービスコンソールによってWindowsサービスを作成しても、必ずそのサービスを使用するわけではありません。

以下のステップに従う必要があります。

- 1 サービスの作成
- 2 サービスの設定
- 3 サービスのインストール
- 4 サービスの開始

## WindowsでConnect-Itサービスを作成する

以下のツールを使用してConnect-Itサービスを作成できます。


- サービスコンソール
- コマンドライン

### コマンドラインからConnect-Itサービスを作成する

- 1 **Connect-It**インストール先フォルダ内の**bin**のコマンドプロンプトを開きます。

- 2 「コマンドラインからのConnect-It [ 献 201]」の章で定義されたシンタックスを使用して、`csvctool`コマンドを実行します。

### サービスコンソールでConnect-Itサービスを作成する

- 1 サービスコンソールを起動します。
  - 2 **New**をクリックします。
  - 3 **Service**フィールドにサービスの名前を入力します。
  - 4  をクリックして、シナリオの名前とパスを指定します。
  - 5 必要であれば、コマンドオプションを指定します (**Options**フィールド)。例えば、自動再接続が必要な場合は**Forcecnx**オプションを指定できます。
  - 6 アプリケーションログファイルを入力します (.log)。このフィールドは、ログファイルを指定しないと、自動的に入力されます。
  - 7 **Create**をクリックします。
- コンソールの上部枠に、作成されたサービスが表示されます。そのステータスは**To configure**です。



#### 注意:

サービスは、各シナリオコネクタが設定された後にのみ、適切に作成されません (**Configure**ボタン)。

### サービスの接続プロパティ

場合によっては、Windowsでサービスの接続プロパティを変更して別のユーザアカウントを使用し、サービスが正常に機能するようになる必要があります。

サービスに対するデフォルト接続のプロパティは、**LocalSystem**アカウントに保存されます。

#### 例

- サービスに関連するシナリオのソースコネクタが、ネットワークドライブ上にあるフォルダ内のファイルを読み取ることになっているが、サービスのローカルアカウントはこのネットワークドライブにアクセスできない。
- シナリオの**E-mail**コネクタはある特定のアカウントでしか機能しない。

上記の2つの例では、サービスの接続プロパティ内で特定のアカウントを指定しなければなりません。

アカウントは、オペレーティングシステムで直接指定するか、Connect-Itサービスコンソールの**Change**オプションを使用して指定できます (**The service starts in account**フィールド)。

### Windows XP上サービスの接続プロパティを変更する

- 1 Windows XPを起動します。

- 2 **Start/ Settings/ Control Panel/ Administrative Tools/ Services**を選択します。
- 3 リスト内のサービスをダブルクリックします。
- 4 表示されるダイアログボックスの**Log On**タブを選択します。
- 5 **This account**オプションを選択します。
- 6 サービスに関連したシナリオを正しく使用できるように、適切な値を**This account**と**Password**フィールドに入力します。
- 7 **Apply**をクリックします。

#### サービスコンソールでサービスの接続プロパティを変更する

- 1 **Change**をクリックします。
- 2 使用する新しいアカウントを選択して (**This account**オプション)、**Password**フィールドに入力します。
- 3 **Validate**をクリックします。

#### シナリオのパス

**Scenario** フィールドにシナリオのパスを入力する場合は、以下の規則に従います。

- 1 シナリオはConnect-Itサーバに保存されている。  
シナリオが、ネットワークドライブのフォルダ内にある場合は、ネットワークドライブの文字を**Scenario**フィールド内に入力しないでください。  
例：シナリオscenario\myscenario.scnは、ネットワークドライブR:に関連付けられたフォルダC:\Program Files\ConnectIt内に位置します。この場合、**Scenario**フィールドには、C:\Program Files\ConnectIt\scenario\myscenario.scnを指定し、R:\scenario\myscenario.scnとは入力しないでください。これは、サービスがローカルシステムアカウントまたは特定のアカウントを使用しているためです。これらのアカウントでは、C:\Program Files\ConnectItフォルダは、ネットワークドライブR:に関連付けられていません。
- 2 シナリオはネットワーク上にインストールされている。  
サービスが、**Scenario**フィールド内に指定されているネットワークパスを使用できるかどうか、確認してください。  
サービスがネットワークパスを使用できるようにするには、このネットワークパスを使用できるユーザ名とパスワードに、サービスに関連付ける必要があります。

#### Connect-Itサービスの起動または停止

Connect-Itサービスを起動するには：

- 1 Connect-Itコンソールを起動します。
- 2 Connect-Itコンソールのメイン枠内で、サービスを選択します。
- 3 **Start**をクリックします。

 **注意:**

サービスを起動するには、シナリオを事前に設定する必要があります。

Connect-Itサービスを停止するには：

- 1 Connect-Itコンソールを起動します。
- 2 Connect-Itのメイン枠内で、サービスを選択します。
- 3 **Stop**をクリックします。

## Connect-Itサービスの削除

Connect-Itサービスを削除するには：

- 1 Connect-Itコンソールを起動します。
- 2 Connect-Itのメイン枠内で、サービスを選択します。
- 3 **Delete**をクリックします。

---

## コマンドラインサービスの定義

### コマンドラインからのサービスの作成

コマンドラインからサービスを作成するには：

```
csvctool -create [サービス名]
```

コマンドラインの詳細については、「[コマンドラインからのConnect-It \[ 献 201\]](#)」の章の「[使用コマンドオプション \[ 献 202\]](#)」の節を参照してください。

### コマンドラインからのサービスの起動

コマンドラインからサービスを起動するには：

- 1 Connect-Itのインストール先フォルダのbinフォルダに移動します。  
例：C:\HP Software\Connect-It\bin\
- 2 コマンドラインで以下の行を実行します。  
net start <サービス名>

---

例:

**Asset Management-ServiceCenter**サービスを起動する場合のコマンドラインは以下の通りです。

```
net start Asset Management-ServiceCenter
```

---

## コマンドラインからのサービスの削除

以下のコマンドラインを使用して、Connect-Itサービスを削除することもできます。

```
csvctool -delete [サービス名]
```

コマンドラインの詳細については、「コマンドラインからのConnect-It [ 献 201]」の章を参照してください。

---

## スケジュールの作成

スケジュールにより、ドキュメントを生成するコネクタがいつ起動するのかを指定できるようになります。スケジュールのないシナリオは不完全です。

スケジュールを作成するには、コネクタの生成用ドキュメントタイプをスケジューラに関連付けます。

スケジューラは、コネクタを"wakes up" (起動) するタイマの役割を果たしています。

- タイマはある時間帯内または時間帯外に、定期的にコネクタを起動します。
- ある日時に1回のみ (例えば2003年3月6日) 起動します。

規則を作成すると、スケジューラを変更できます。例えばあるスケジューラがコネクタを毎日起動するとします。別の規則を作成すると、ある1日のスケジューラの機能を変更できます。

---

例:

Desktop Discovery - Asset ManagementシナリオのDesktop Discoveryコネクタは、**inventory**ドキュメントタイプを、毎日午前9時から午後10時まで5分おきに生成します。この時間帯以外は、Desktop Discoveryコネクタは1時間おきにドキュメントを生成します。選択する期間にこれらのパラメータを変更する規則を追加できます。

---

## スケジューラの編集

**Scenario/Schedulers**を選択すると、scheduler editorが表示されます。

変更不可能なスケジューラが2つ提供されています。

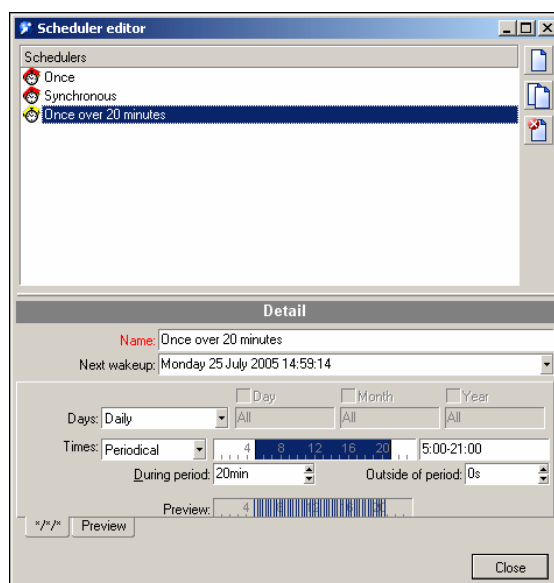
- **Once**スケジューラ

このスケジューラは、ドキュメントの作成を一回起動します。生成用ドキュメントタイプが作成されると、デフォルトでこのスケジューラに関連付けられます。

- **Synchronous**スケジューラ

このスケジューラは、0時から24時まで毎秒ドキュメントの生成を起動します。

## 図 4.21. Scheduler editor



アイコン	機能
	新規スケジューラの作成を起動します。
	選択したスケジューラを複製します。
	選択したスケジューラを削除します。

### Daysフィールド

このフィールドでは、ドキュメントタイプが生成される日を指定します。このフィールドには以下のオプションがあります。

- **Daily**

年間を通じて毎日、例外なく実行します。

- **Day of the year**

Day、Month、Yearチェックボックスをオンにすると、1日または複数の日を選択できます。（例：2002年1月6日）

- **The first, second, third, fourth, next to last, last day**

Dayフィールドを使って、1週間の中のある一日を指定すると、レギュラーベースで適用されるか、または、適用する月と年を指定できます。

例：毎月第1金曜日

## Timesフィールド

このフィールドには2つのオプションがあります。

- **Periodical**

このオプションを選択すると、1日の中のある時間を設定できます。**During period**フィールドで間隔を指定します。

例：朝4時から夜10時までの期間で、5分おきの実行。

この期間外の実行の間隔は**Outside of period**で設定できます。

時間範囲を定義するには、テキストフィールドに値を入力します。以下のシNTAXを使用する必要があります。

<Start> -  
<End>, <Start> - <End>, etc.

時間入力用のフォーマットは、例えばWindowsコントロールパネルでの地域オプションなどにより変化します。[AM|PM] オプションパラメータが指定されていないと、時間は24時間制で入力されているものと見なされます。例：18と入力すると、6:00 PMという値が確認後に自動的に表示されます。

### 注意:

グラフィカルエディタを使う場合は、30分単位で指定できます。直接に時間を数値で入力する場合は、1分単位で指定できます。

時間 (h)、分 (min)、および秒 (s) の頻度を**During period**フィールドおよび**Outside of period**フィールドで定義します。例えば、以下のようになります。

5min 30s  
1h 20min 10s  
30s

- **Itemized list**


時間のリストをセミコロンで区切って入力します。これにより、コネクタを選択した時間に起動することが可能になります。

5:00AM;8:00PM;...

## スケジューラの作成（例）

本節ではコネクタ起動用のスケジューラの作成方法を説明します。

- 毎日
- 朝8時から夜10時の間は10分おき、この期間外では1時間おきに起動  
これにドキュメントの生成用の以下の規則を追加します。
  - 毎月の第1曜日
  - 朝6時から夜10時の間は10分おき、この期間外では30分おきに起動

スケジュールを作成するには、 をクリックします。

スケジューラの詳細下に表示されるタブのフィールドに入力します。

### Daily

**Days**フィールドで**Daily**オプションを選択します。

### 朝8時から夜10時の間は10分おき、この期間外では1時間おきに起動

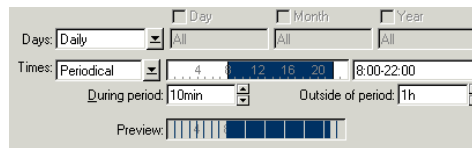
**Times**フィールドで、**Periodic**オプションを選択します。

朝8時から夜10時の期間を選択するには、以下の方法があります。

- テキストフィールドに直接入力します。（8:00 AM-10:00 PMまたは8-22）
- 24時間を表すグラフィカルエディタを使って入力します。

次に、**During period**と**Outside of period**フィールドに"10 min"と"1 h"を入力します。このフィールドは、選択した期間内と期間外での起動の頻度を設定します。

以上の手順に従うと、タブの内容は以下のようになります。



このタブはDaysフィールドに入力されたデータにより自動的に名前が付けられます。

**Create**をクリックし、スケジューラを確定します。

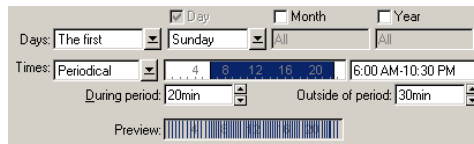
## 規則の作成

規則を作成するには、scheduler editorのタブ上で右クリックします。ショートカットメニューで**Add a rule**オプションを選択します。

新規のタブが表示されます。スケジュールに追加する規則を入力します。



この例（毎月の第1日曜日、朝6時から夜10時の間は10分おき、この期間外では30分おきに起動）では、タブの内容は以下のようになります。



**Create** をクリックして規則を確定します。

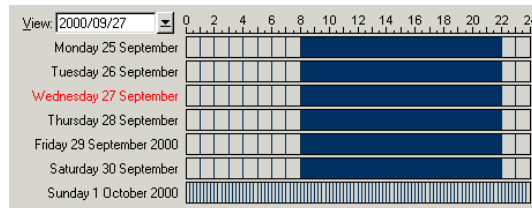
### 規則の削除

規則を削除するには、規則のタブ内で右クリックします。ショートカットメニューで **Delete rule** を選択します。

### プレビュー

**Preview** タブでは、現在の週のスケジューラの予定が表示されます。

**View** フィールドの日付を選択すると、カレンダーは選択した日付の週のスケジューラを表示します。




### スケジューラの変更

スケジューラを変更するには：

- 1 リストから1つのスケジューラを選択します。
- 2 タブ内でパラメータを変更します。
- 3 **Modify** をクリックして変更事項を確定します。

### スケジューラの削除

スケジューラを削除するには：

- リストから1つのスケジューラを選択します。
- **Delete** を押すか、または  をクリックします。

## スケジュールの編集

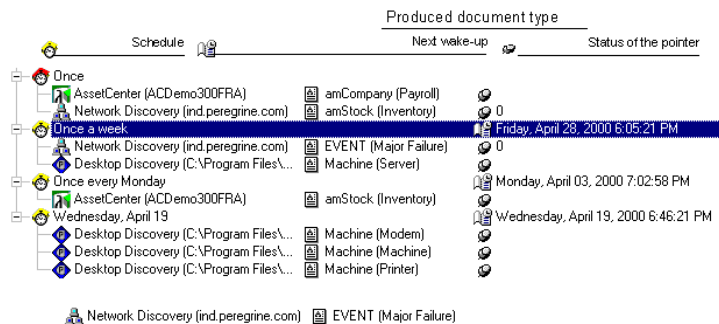
スケジュールを編集するには、**Scenario/Scheduling**メニューを使用します。シナリオのデフォルトのスケジュールは、生成用ドキュメントタイプを**Once**スケジューラに関連付けています。

生成用ドキュメントタイプをスケジューラに関連付けるには：

- 生成用ドキュメントタイプをクリックし、選択したスケジューラにドラッグします。  
または
- 生成用ドキュメントタイプを選択し、editウィンドウの右側にある矢印を使って移動させます。

スケジューラは、editウィンドウにアルファベット順に表示されます。スケジューラを、シナリオの生成用ドキュメントタイプに関連付けます。

### 図 4.22. Schedule editウィンドウ



### スケジュール内の生成用ドキュメントタイプの順番

#### 生成用ドキュメントタイプを別のスケジュールへ移動させる

- ▲ 前のスケジュールへ移動する
- ▼ 後のスケジュールへ移動する

#### 同じスケジューラ内でドキュメントタイプを移動させる

- ▲ 上に1行移動する
- ▼ 下に1行移動する

データの処理方法は以下の2つの要因に左右されます。

- スケジュール内の生成用ドキュメントタイプの順番
- 同じ生成用ドキュメントタイプ内のマッピングの順番

ドキュメントタイプが並べられている順番により、生成の順番が決定されます。

Connect-Itメインウィンドウの**Mappings**タブ内のマッピングの順番も重要です。同じソースドキュメントタイプに複数のマッピングがある場合、Connect-Itはここで指定したのと同じ順番でマッピングを行います。

マッピングを並べ替えるには：

- Scenario diagram内でマッピングボックスを選択します。
- **Mappings**タブを選択します。
- リスト内で生成用ドキュメントタイプを選択します。
- リスト内でドキュメントタイプを移動させて、マッピングの順番を変更します。

例：あるシナリオでは、**Machine** [Machine] ドキュメントタイプに6つのマッピングがあります。

図 4.23. マッピングの順番



アイコン	機能
	マッピングの作成を起動します。
	選択したマッピングを編集できるようになります。
	選択したマッピングを削除します。
	マッピングを上へ1行移動させます。
	マッピングを下へ1行移動させます。

シナリオを起動する際、Connect-Itは同一のスケジューラ内では以下の順番で優先度を決定します。

- 生成用ドキュメントタイプの順番
- 同じ生成用ドキュメントタイプ用のマッピングの順番

### ポイントのステータス

多くの場合、ポイントのステータスは特定の時間を指しています。ポイントに提供されるこの情報は非常に大切です。これにより、外部アプリケーションのデータ処理の進み具合を確認できます。

ポイントのタイプは関連する外部アプリケーションにより変わります。

- Asset Managementコネクタ

テーブルの場合、ポインタの値はマッピングの最終起動日です。次回の起動時には、このポインタよりも、最終変更日（**sysmodtime**フィールド）が後のレコード全てが処理されます。

 **注意:**

Connect-Itがインストールされているコンピュータと、AssetCenterサーバ間の時間差は自動的に補正されます。

■ ServiceCenterコネクタ

このコネクタのポインタは、ソースアプリケーションから来るデータの性質により変化します。

- イベントの場合、ポインタは連続番号（**evsysseq**）に当たります。  
ポインタは、シナリオの各マッピングの最終の起動時に処理されたイベントの連続番号に当たります。次回の起動時には、このポインタ値よりも高い連続番号のイベント全てが処理されます。
- テーブルの場合、ポインタの値はマッピングの最終起動日です。次回の起動時には、このポインタよりも、最終変更日（**sysmodtime**フィールド）が後のレコード全てが処理されます。

 **注意:**

ServiceCenterコネクタの設定により、Connect-Itがインストールされているコンピュータと、ServiceCenterサーバ間の時間差は以下の方法で処理されます。

- 時間差は自動的に補正されます。
- ユーザの入力した時間差に応じて補正されます。

■ Databaseコネクタ

使用するポインタは、ユーザが定義します。

■ NT Securityコネクタ

スケジューラが起動するたびに、コネクタは補足情報だけではなく、検索するドメインの全情報を取得します。

 **注意:**

新規スケジューラを作成し、そのスケジューラをNTドメインに割り当てる場合、スケジュールのポインタは表示されません。

■ Delimited textコネクタ、XMLコネクタ

使用するポインタは、既に処理されたファイルの最新作成日付です。

■ E-mail（受信）コネクタ

使用するポインタは、電子メールの受信日付です。

- **Network Discovery**コネクタ

使用されるポインタはイベントの番号です（EVENTドキュメントタイプの場合）。

各ポインタのステータスをダブルクリックすると、.fsfファイルの別の日付、または**Network Discovery**の別のイベント番号を強制できます。

例

**Network Discovery**は数万個のイベントを記憶します。ポインタのステータス（スケジュールの最初の起動前の値は「0」です）を20000にすると、番号が20000より大きなイベントのみがシナリオで処理されます。

### schedulingウィンドウ内でのポインタを更新する

シナリオを起動する時にschedulingウィンドウが開いていると、ポインタのステータスは更新されません。schedulingウィンドウのポインタのステータスを更新するには、一度このウィンドウを閉じてから新たに開く必要があります。


### シナリオの起動

シナリオを起動するには：

- **Scenario**メニューから、**Start all schedulers**を選択します。  
または
-  をクリックします。

### スケジュールの停止

シナリオを停止するには：

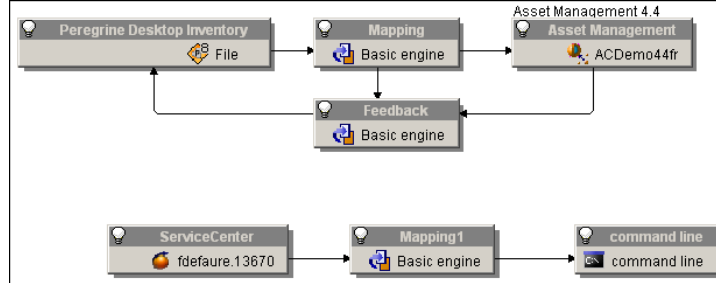
- **Scenario**メニューから**Stop**を選択します。
-  をクリックします。

## コマンドラインからのスケジューラの使用

本例の概要

- 使用するシナリオは、pdiシナリオフォルダにあるpdiac.scnです。
- シナリオは変更され、ServiceCenterシナリオが含まれます。
- 複数のドキュメントタイプが処理されます。
- シナリオは1回実行されます。

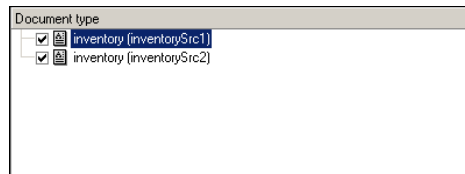
- `-once`コマンドおよび`-scheduler`コマンドが使用されます。



## -onceコマンド

ドキュメントの生成順序は、生成用ドキュメントタイプとそれらのコネクタへのマッピングを定義する順序に対応します（**Document type**タブで選択したコネクタに対して表示可能）。

例えば、2つのドキュメントタイプ`Inventory(inventorySrc1)`および`Inventory(inventorySrc2)`を生成するソースコネクタの場合、ドキュメント`Inventory(inventorySrc1)`が最初に生成されます。



コマンドラインを以下に示します。

```
conitsvc -once 'D:\Program Files\HP Software\Connect-It 3.80 fr\scenario\pdia.scn'
```

複数のコネクタが複数のドキュメントタイプを生成する場合、生成の順序がコネクタの作成順序になります。

### 注意:

同じシナリオ内の複数のコネクタがドキュメントを生成する場合、`-once`コマンドを使用しないことを推奨します。


スケジューラで定義されたドキュメントタイプの生成順序は無視されます。`-once`コマンドは、単体で使用され、GUIの▶コマンドに相当します。

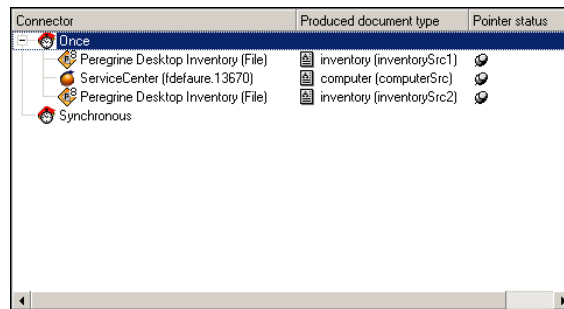
シナリオのパスをパラメータとして定義する場合、**-once**（または**-scheduler**）オプションをパラメータとして定義する必要があります。それ以外の場合、シナリオを読み込んだ後にConnect-Itが終了します。

#### -once -schedulerコマンド

**-once**オプションと**-scheduler**オプションは、同時に実行することはできません。

#### -schedulerコマンド

ドキュメントタイプの生成順序は、**Once**スケジューラで定義されます。-スケジューラコマンドは、GUIのコマンドに相当します。



例えば、ドキュメントタイプは、**inventorySrc1**（PDIコネクタ）、**computer**（ServiceCenterコネクタ）、**inventorySrc2**（PDIコネクタ）の順番で処理されます。ドキュメントを生成するコネクタが複数ある場合は、**-scheduler**オプションのみが各種コネクタのドキュメントタイプの生成順序を制御します。スケジューリングポイントは、シナリオ実行後に使用および更新されます。

コマンドラインを以下に示します。

```
conitsvc -once -scheduler 'D:\Program Files\HP Software\Connect-It 3.80\scenario\pdiaac.scn'
```

コマンドラインを実行するときに、スケジューラに定義されたパラメータに従って、前回から変更または挿入されたレコードのみを取得します。

#### 注意:

スケジューリングオプションは、スケジューリングポイントを利用します。単独で使用する**-once**オプションと同じ動作を行うために、接続設定ウィザードでスケジューリングポイントの使用を無効化することが可能です。この場合、生成されるドキュメントの順序が異なります。


-schedulerオプションをパラメータとして使用する場合、セッション実行後にスケジュールポイントの値が使用および更新されます。スケジューラの定義に応じて、2つの異なる動作があります。

- ドキュメントタイプがOnceスケジューラに関連付けられている場合、シナリオ実行後にConnect-Itが終了します。これは、-onceオプションと同じ動作であり、スケジュールポイントを使用します。
- ドキュメントタイプがスケジューラに関連付けられている場合、Connect-Itは終了することなく、スケジューラによって定義された間隔で起動します。

---

## シナリオを保存する

### シナリオの保存

- 1 以下の操作のいずれかを実行します。
  - **File/Save**を選択します。
  -  をクリックします。

別の名前を付けてシナリオを保存するには：

- 1 **File/ Save as**を選択します。

### シナリオのバックアップコピー

シナリオを保存すると、シナリオのフォルダ内にバックアップコピーが自動的に作成されます。このコピーの拡張子は.bakです。

このオプションを無効にするには：

- 1 **Edit/ Options**を選択します。
- 2 **Confirmation**ノードを開きます。
- 3 **Keep a backup copy of the scenario** オプションの値をNoにします。
- 4 **OK**をクリックします。

### シナリオの移動

シナリオをあるフォルダから別のフォルダへ移動させる場合、以下の操作のいずれかを必ず実行してください。

- シナリオの関連ファイルを移動させる
- シナリオスクリプト内の相対パスを変更する  
.bas、.str、.usr、.scp、および.mptファイルのパスを確認してください。



---

## シナリオ文書

Scenario Builderでは、現在のシナリオに関する各種情報を含む文書を表示または作成することができます。

シナリオ文書の情報は、シナリオの.scnファイルから動的に抽出されるため、常に更新された内容になっています。

### シナリオ文書の内容

文書には以下のセクションが含まれています。

- 一般情報
  - このセクションには、シナリオについての以下の情報が含まれています。
    - 名前
      - シナリオ名の前にはコンピュータ上の完全パスがあります。
    - 最終変更日
    - シナリオの最終変更時に使用したConnect-Itのバージョンとビルド番号
    - シナリオの最終履歴にユーザが入力した全情報（**File/Scenario history**メニュー）。
- scenario diagramsに関する情報
  - このセクションには、シナリオについての以下の情報が含まれています。
    - ビューに関する情報
      - 各ビューに関連するマッピングが列挙されます。
    - ビューに関連付けられた図
      - .bmp形式の画像で、シナリオのビューのプレビューが表示されます。
- コネクタの設定
  - このセクションには、シナリオのコネクタの設定パラメータが含まれています。コネクタの設定に関する詳細については、マニュアル『コネクタ』の「**コネクタの設定**」の章を参照してください。
- ドキュメントタイプごとのWHERE句とORDERBY句のリスト
  - このセクションには、ドキュメントタイプごとにWHERE句とORDER BY句が列挙されています。これらの句は、シナリオのソースコネクタの生成用ルールの一部を成します。
- ユーザ定義のドキュメントタイプ
  - このセクションはユーザが定義する各ドキュメントタイプの要素をまとめています。
    - 各ドキュメントタイプごとに以下の情報が表示されます。
      - ドキュメントタイプ名
      - 各要素の名前

- 要素の属性
  - フィールド (ATTRIBUTE)
  - 構造体 (STRUCT)
  - コレクション (ARRAY)
- フィールドのデータ型 : String、Short、Double、Timestamp、など  
ドキュメントタイプの作成に関する詳細は、「統合シナリオのインプリメンテーション [ 献 59]」章の「生成用または取り込み用ドキュメントタイプの定義 [ 献 78]」の節を参照してください。
- ユーザ定義のマッピング  
このセクションは、ユーザが定義するドキュメントタイプをリンクするマッピングの詳細をまとめています。  
各マッピングごとに以下の情報が表示されます。
  - マッピングの名前  
マッピングの名前の後に、コネクタによって使用可能になるソースドキュメントタイプとターゲットドキュメントタイプの名前が括弧内に表示されます。
  - ソースドキュメントタイプの名前
  - ターゲットドキュメントタイプの名前
  - 各マッピングノードごとに以下の要素が表示されます。
    - ターゲット要素
    - マッピングスクリプト
    - ソース要素
    - マッピングの説明 (必要に応じて)

マッピング作成の詳細については、「ドキュメントタイプのマッピングの定義 [ 献 96]」を参照してください。
- 関連するスケジューラとファイル  
このセクションの内容は以下の通りです。
  - シナリオのスケジューラ  
スケジューラの以下の情報が記載されます。
    - 名前
    - 周期
    - コネクタと関連するドキュメントタイプ
  - マップテーブルファイル
  - Basicスクリプトファイル
  - 文字列ファイル
- シナリオ変更の履歴

このセクションには、各シナリオごとに、全変更事項の情報が表示されます。これらの情報は、**Scenario history**ウィンドウ（**File/Scenario history**メニュー）でシナリオ作成者が入力する情報に相当します。

## HTMLフォーマットによるシナリオ文書の表示

Scenario Builderを使用すると、現在のシナリオの文書をインターネットブラウザ内（HTMLフォーマット）に表示できます。

### HTML形式によるシナリオ文書の表示

- 1 Scenario Builderでシナリオを開くか、または作成します。
- 2 **File/View scenario documentation**を選択します。
- 3 インターネットブラウザが起動し、文書が表示されます。

 **注意:**

**View scenario documentation**機能を使用するには、オペレーティングシステムで、HTMLファイル名の拡張子がインターネットブラウザ（例えばMicrosoft Internet ExplorerやNetscape Navigator）に関連付けられている必要があります。

## シナリオ文書の作成

Scenario Builderでは、文書を以下のフォーマットで作成できます。

- HTMLフォーマット
- DBKフォーマット

### シナリオ文書の作成

- 1 Scenario Builderでシナリオを開くか、または作成します。
- 2 **File/Create a documentation**を選択します。
- 3 文書ファイルに名前を付けます。
- 4 **Type**フィールドで文書のフォーマットを選択します。
- 5 **Save**をクリックします。

 **注意:**

シナリオ文書は、デフォルトでシナリオのSCNファイルと同じフォルダ内に保存されます。

### DBKフォーマットの文書

DBKフォーマットの文書を作成すると、DocBook DTDでXMLファイルが作成されます。

DocBook DTDの情報については、<http://www.docbook.org> のWebサイトを参照してください。

## シナリオ文書のプロパティ

シナリオ文書の作成には以下の要素を使用します。

- XSLプロセッサ

Connect-It付属のプロセッサはXalanプロセッサです。



警告:

Xalanプロセッサは、Java RunTime Environment 1.1と互換性がありません。Java RunTime EnvironmentまたはJava Development Kit version 1.2以降をインストールする必要があります。

- HTMLフォーマットでの表示に使用するCSSスタイルシート
- SCNファイルをDBKフォーマットに変換するXSLスタイルシート
  - SCNファイルからDBKフォーマットへ
  - DBKファイルからHTMLフォーマットへ

SCNファイルのDBKフォーマットへの変換は、SCNファイルのXMLフォーマットへの変換を経由してから実行されます。

SCNファイルをHTMLフォーマットへ変換する場合、XMLフォーマットへの変換を経由してから、HTMLフォーマットへ変換されます。

シナリオ文書のフォーマット	変換順
DBK	1 SCN
	2 XML
	3 DBK
HTML	1 SCN
	2 XML
	3 DBK
	4 HTML

### シナリオ文書のプロパティを編集する

シナリオ文書を編集するには、**File/ Documentation properties**を選択してウィザードを起動します。

### XSLプロセッサの設定

このページでは、SCNファイルをDBKフォーマットとHTMLフォーマットに変換するために使用するXSLプロセッサを設定できます。

Xalanプロセッサは、Connect-Itに付属するデフォルトのプロセッサです。

このファイルのパスは [Connect-Itインストール先フォルダ]  
\datakit\doctrans\xalan\xalan.batです。

他のXSLプロセッサを使用することも可能です。例：MicrosoftのWebサイトで無料ダウンロード可能なMSXSLプロセッサなど。

## XSLプロセッサの実行可能ファイル

このフィールドにXSLプロセッサの完全パスを指定します。デフォルトのパスは、[Connect-Itインストール先フォルダ]/datakit/doctrans/xalan/xalan.batです。

## XSLプロセッサのパラメータ

このフィールドのデフォルトのパラメータは以下の通りです。

- %IN  
この変数は変換するSCNファイルの完全パスに相当します。
- %XSL  
この変数は、DBKまたはHTMLフォーマットへの変換に使用するXSLファイルの完全パスに相当します。
- %OUT  
この変数は、DBKまたはHTMLの出力ファイルの完全パスに相当します。

## Use a CSS style sheet to preview in HTML

CSSスタイルシートを使用するシナリオ文書をHTMLフォーマットで表示するには、このオプションを選択します。

デフォルトで使用されるCSSスタイルシートのパスは、[Connect-Itインストール先フォルダ]\datakit\doctrans\css\default.cssです。

### 既製XSLスタイルシートのリスト

このページでは、以下の変換に使用するスタイルシートが表示されます。

- XMLファイルからDBKフォーマットへの変換
- DBKファイルからHTMLフォーマットへの変換

**Description**と**Alias or XSL style sheet**の列の値を変更するには、値を直接クリックします。

スタイルシートのエイリアスは**Extension**の列で入力する値です。スタイルシートの完全パスの前にセミコロンで区切ってエイリアスを入力すると、XSLプロセッサが最初に使用するスタイルシートはこのエイリアスのスタイルシートになります。


HTM拡張子用の場合、値DBK;C:\Program Files\HP Software\Connect-It\datakit\doctrans\xsl\dbk2htm.xmlが意味するのは、XSL

プロセッサがシナリオのXMLフォーマットをDBKフォーマットに変換してから、次にHTMフォーマットに変換することです。

### ユーザ定義のXSLスタイルシートのリスト

このページでは、ファイルのフォーマットを変換するための新規XSLスタイルシートを指定できます。

## ユーザ定義のXSLスタイルシートを指定する方法

- 1  をクリックします。
- 2 **Extension**の列にファイルの拡張子を入力します。
- 3 同じ行の**Description**の列をクリックして、説明を入力します。
- 4 同じ行の**Alias or XSL style sheet**の列をクリックして、XSLスタイルシートのパスを入力します。

他のXSLスタイルシートのエイリアスを指定すると、最初のフォーマットと最終フォーマットの間の中間の変換を必要なだけ指定できるようになります。

## 5 統合シナリオの管理

### 既存シナリオを開く

Scenario Builderでは、拡張子.scnのファイルを開くことができます。

#### 既存のファイルを開く

- 1 以下の操作のいずれかを実行します。
  - Scenario Builderを起動し、**File/ Open**を選択します。
  - エクスプローラで.scnファイルを選択し、ダブルクリックします。  
Scenario Builderが起動しシナリオが開きます。
  - エクスプローラで.scnファイルを選択し、Scenario Builderのメイン画面にドラッグアンドドロップします。



**注意:**

別のシナリオが開いていると、このシナリオを保存してから新規シナリオを開くかどうかを選択するための、ダイアログボックスが表示されます。

#### コネクタのオープンに関連するオプション

**Open all the current scenario's connectors when starting a connector**  
オプションを使用すると、1つのコネクタを開始するときにシナリオ内の全コネ

クタを自動的に開くことができます。これは、多数のコネクタを使用するシナリオで非常に便利です。

## シナリオの導入 (UNIX)

UNIXの既存のシナリオを導入するには、以下の作業を行います。

- Windowsの場合：
  - 1 シナリオを開いて、必要な設定および変更を実行します。
  - 2 `-df`コマンドを使用して、プロパティファイルを作成します。
  - 3 `-export`コマンドを使用して、シナリオ設定をプロパティファイルにエクスポートします。  
例えば、`myScenario`という名前のシナリオの場合、エクスポートコマンドは以下のようになります。

```
conitsvc -export myScenario.scn
```

- 4 `.prop`プロパティファイルを編集して、UNIX用に変更します。

- UNIXの場合：  
シナリオを変更しないで、その代わりに以下のコマンドを使用して動作を変更します。
  - シナリオをテストするには：

```
conitsvc -df:<シナリオ名>.prop [<シナリオプロパティのオプション>] <シナリオ名>.scn
```

### 注意:

シナリオのパスをパラメータとして定義する場合、`-once`（または`-scheduler`）オプションをパラメータとして定義する必要があります。それ以外の場合、シナリオを読み込んだ後にConnect-Itが終了します。

- Connect-Itサービスを起動するには：

```
conitsvc -svc <サービス名>
```

- Connect-Itサービスを作成するには：

```
csvctool -create -scn:<シナリオ名>.scn -svclg:<シナリオ名>.log -options:"-df:<シナリオ名>.prop" <サービス名>
```

- このUNIXデーモンを起動するには、以下のコマンドラインを実行します。

```
conitsvc -svc indsc &
```

コマンドラインの詳細については、本章の「コマンドラインからのConnect-It [ 献 201]」の節を参照してください。



## コマンドラインからのConnect-It

Connect-Itの実行には、グラフィカルインタフェースの使用と、コマンドラインからの使用という2種類の方法があります。

本節では、コネクタのオープンやシナリオの生成など、特定タスクをコマンドラインから実行するために使用する各種オプションとシンタックスを示します。

コマンドラインからConnect-Itを開始するには：

- 1 コマンドプロンプトを開きます。
- 2 Connect-Itインストール先フォルダ内のbinフォルダに移動します。

### 使用コマンド

以下のコマンドを使用します。

- **conitsvc** : 非グラフィカルモードのConnect-It。このアプリケーションは、サービスコンソールから作成されたサービスによって実行されます。
- **conitgui** : グラフィカルモードのConnect-It
- **csvctool** : Connect-Itサービス管理ユーティリティ

### 使用シンタックス

- Connect-Itの非グラフィカルバージョンには、以下のコマンドラインパラメータがあります。

```
conitsvc [-verbose] [-? | h | H]
[-log:<ログファイル名>]
[-d:<connector.property=value>]
[-dc:<connector.property=value>]*
[-dm:<(section | monitor).property=value>]*
[-df:<プロパティファイル>]*
[-once] [-scheduler]
[-port:<ポート>] [-activate:<アクティブにするドキュメントタイプ>]
[-updatescn:<更新されるシナリオファイルの名前>]
[-gendoc:<生成する文書ファイルの名前>] [-openconnectors] [-svc] [-showstatus]
[-sleep:<中断の長さ>]
[-export:<プロパティファイルの名前>] <scn | svc>
[-forcecnx:<接続の名前>]
```

- Connect-Itのグラフィカルバージョンには、以下のコマンドラインパラメータがあります。

```
conitgui [-verbose] [-? | h | H]
[-log:<ログファイル名>]
[-d:<connector.property=value>]
[-dc:<connector.property=value>]*
```

```
[-dm:<(section | monitor).property=value>]* [-df:<プロパティファイル>]* [-once] [-scheduler]
[-port:<Port>] [-activate:<アクティブにするドキュメントタイプ>]
[-updatescn:<更新されるシナリオファイルの名前>]
[-gendoc:<生成する文書ファイルの名前>] [-openconnectors] [-configscheduler] [-configconnectors]
[-export:<プロパティファイルの名前>] <scn>
```

- サービスコンソールには、以下のパラメータがあります。

```
csvctool-<オプション><パラメータ>:<パラメータの値>]*[-y]<svc>
```

**-y** : このオプションは、変更の確認を無効にします。

### conitsvc.ini

このファイルには、Connect-ItのWindowsまたはUNIXバージョンに宣言されたすべてのサービスが含まれます。

このファイルの場所 :

- バージョン3.7以前のバージョン (Windows) :

```
C:\Document and settings\All users\Application Data\Peregrine
```

- バージョン3.7以前のバージョン (UNIX) :

```
~/Peregrine
```

- バージョン3.7以上のバージョン (Windows) :

```
C:\Document and settings\All users\Application Data\HP OpenView\conf
```

- バージョン3.7以上のバージョン (UNIX) :

```
~/ov/conf
```

## 使用コマンドオプション

各コマンドは、1つ以上のオプションと共に指定できます。

以下の表は、**conitsvc**および**conitgui**のコマンドオプションを示します。

オプション	値	conitgui	conitsvc	説明
once		あり	あり	すべてのコネクタを1回のみ開始します。 このオプションは、 <b>-scheduler</b> オプションと同時に使用しないでください。 コマンドラインからスケジューリングポインタを使用する方法については、「スケジュールの作成 [ 献 181]」の章を参照してください。
scheduler		あり	あり	スケジューラを開始します。 このオプションは、 <b>-once</b> オプションと同時に使用しないでください。 コマンドラインからスケジューラを使用する方法については、「スケジュールの作成 [ 献 181]」の章を参照してください。
openconnectos		あり	あり	すべてのコネクタを開きます。 グラフィカルモードで、実行された操作に関するメッセージを含むウィンドウが開きます。
forcecnx		なし	あり	コネクタを開くときに自動再接続を強制的に実行します。 デフォルトで、シナリオを開くときに接続が失敗すると、Connect-Itが終了します。このオプションを選択すると、シナリオを開くときであっても自動再接続の処理が実行されます。
verbose		あり	あり	メッセージと警告を有効にします。
gendoc	文書ファイルの名前 (オプション)	あり	あり	シナリオ文書を生成します。 文書ファイルを指定しないと、文書DBKがシナリオと同じ場所に同じ名前で作成されます。

オプション	値	conitgui	conitsvc	説明
svc		なし	あり	シナリオを使用するのではなく、使用するConnect-Itサービスを指定します。  Connect-Itサービスは、 <b>csvctool</b> プログラムまたはサービスコンソールを使用して定義された組み合わせ（名前/シナリオ/ログファイル/オプション）です。  <b>svc</b> オプションを使用するコマンドの例については、「コマンドの例 [ 献 208]」の節を参照してください。
<b>confscheduler</b>		あり	なし	スケジューラの設定を開始します。
<b>confglobals</b>		あり	なし	コネクタの設定を開始します。
port	ポート番号	あり	あり	<b>conitgui</b> または <b>conitsvc</b> と <b>cntrsrv</b> 間の通信ソケットにポート番号を割り当てます。ポートを指定しないと、番号が自動的に割り当てられます。
sleep	秒単位の値	なし	あり	生成前にアクティビティが停止する秒単位の時間の長さ
log	ログファイル名	あり	あり	ログファイルの名前を指定します。
activate	アクティブにするドキュメントタイプのコンマで区切られたリスト。	あり	あり	シナリオ起動前にアクティブにするドキュメントタイプのリスト。  <b>-updatescn</b> オプションと共に使用され、シナリオ内の活動を保存します。
d	非推奨オプション	あり	あり	このオプションは、互換性の理由から保持されます。  このオプションは、 <b>-dc</b> オプションに置き換えられました。
dc	<コネクタ名>.<コネクタプロパティ>=<プロパティの値>	あり	あり	コネクタ設定プロパティに値を割り当てます。  宣言された値は、現在のシナリオに有効であり、保存されません。変更を保存するには、 <b>-updatescn</b> オプションを使用します。
dm	<section   monitor>.<パラメータ>=<値>	あり	あり	モニタ設定プロパティに値を割り当てます。  宣言された値は、現在のシナリオに有効であり、保存されません。変更を保存するには、 <b>-updatescn</b> オプションを使用します。

オプション	値	conitgui	conitsvc	説明
updatescn	更新されるシナリオファイルの名前（オプション）	あり	あり	宣言されたすべての値でシナリオを更新します。バックアップファイルを指定しないと、新しいシナリオが以前のシナリオを置き換えます。
configure	更新されるシナリオファイルの名前（オプション）	あり	あり	プロパティをエクスポートし、エクスポートされた値でシナリオを更新します。
df	プロパティファイル	あり	あり	コネクタを更新して設定をモニタするために、プロパティファイルを指定します。  宣言された値は、現在のシナリオに有効であり、保存されません。変更を保存するには、 <b>-updatescn</b> オプションを使用します。
showstatus		なし	あり	ドキュメントの処理ステータスを表示します。
export	プロパティファイルの名前（オプション）	あり	あり	シナリオ設定をプロパティファイルにエクスポートします（ <b>-df</b> コマンドオプションによって呼び出します）。  プロパティファイルを指定しないと、使用する名前はシナリオの名前になり、拡張子 <b>.prop</b> が追加されます。
enablecache	コネクタキャッシュ	なし	あり	コネクタに関連付けられたキャッシュをアクティブにして、データ処理時の性能を向上します。

以下の表は、**csvctool** のコマンドオプションを示します。

オプション	UNIX	確認の要求	説明
list	あり		<b>Connect-It</b> サービスをリストします。
info	あり		サービスに関する情報を取得します。それらは、名前、シナリオ、オプション、警告およびメッセージファイル、設定済みまたは未設定のサービス（ <b>Windows</b> のみ）、インストール済みまたは未インストールのサービス（ <b>Windows</b> のみ）です。
create	あり		新しいサービスを作成します。
update	あり	あり	サービスを更新します。
delete	あり	あり	サービスを削除します。
install			<b>Windows</b> サービスをインストールします。

オプション	UNIX	確認の要求	説明
uninstall		あり	Windowsサービスをアンインストールします。

Paramètre	値	UNIX	オプション	説明
name	サービスの新しい名前	あり	update	サービスの名前
scn	シナリオ名	あり	update / create	サービスに関連付けられたシナリオ
svclog	ログファイル名	あり	update / create	サービスに関連付けられたログファイル
c			update / create	設定済みとして定義されるサービス
options	追加のサービスパラメータ	あり	update / create	追加のサービスパラメータ
account	ユーザアカウント		update / create	Windowsサービスを開始するユーザアカウント
password	ユーザパスワード		update / create	ユーザアカウントパスワード
log	csvctoolログファイルの名前	あり		ログファイル

## プロパティファイル

シナリオの設定パラメータを.propファイル拡張子付きのプロパティファイルにエクスポートできます。

このファイルは、-dfコマンドラインオプションで呼び出すことができます。

設定プロパティには、以下の操作を行います。

- コネクタおよびモニタでソートします。
- 先頭に簡単な説明を付けます。
- コメントにします。

シナリオ設定の変更は、プロパティ値を変更することです。

### プロパティファイルのシンタックス

プロパティ名は、以下のシンタックスに従います。

```
<タイプ>.<オブジェクト>.<名前>
```

- タイプは、更新する値に相当します。値は、**Monitor**および**Connector**です。
- オブジェクトは、プロパティを更新するオブジェクトの名前に相当します。
- 名前は、更新するプロパティの名前に相当します。

コネクタの設定プロパティを更新する場合のシンタックスを以下に示します。

```
Connector.<コネクタの名前>.<設定プロパティの名前> = <設定プロパティの値>
```

例えば、"My AC connector"という名前のコネクタを変更する場合、コマンドラインは以下の通りです。

```
Connector.My AC connector.Server = MyProductionServer
```

モニタの設定プロパティを更新する場合、シンタックスは以下の通りです。

```
Monitor.<モニタの名前>.<パラメータの名前> = <パラメータの値>
```

例えば、SMTPサーバの名前の場合、以下のようになります。

```
Monitor.MailMonitor.SMTPServer = smtp.myserver.com
```

### プロパティファイルの例

プロパティファイルは、以下のように構成されます。

```
# コメント
! コメント
# 空白行は無視されます

# コネクタ設定プロパティは、以下のシンタックスで定義します。
# Connector.<コネクタの名前>.<プロパティの名前>
# '!'および'='文字は、プロパティの名前と値を区別するために使用します。
Connector.MyCntr.Property = 値
Connector.MyCntr.Property2 : 値
Connector.MyCntr.Property3= 複数行に分かれた \
長い値
Connector.MyCntr.Property4= 新しい行と表は、 \
\tおよび\nパラメータを使用して挿入します。

# コネクタの名前に'='または'!'文字が含まれる場合、'\='および'\!'としてエスケープします。
# 'My cntr := test'コネクタの例
Connector.My cntr \:\= test.Property=値

# 文字の名前にピリオドが含まれる場合、追加のピリオドを追加する必要があります。
# 'My.cntr'コネクタの例
Connector.My.cntr.Property=値

# 以下のシンタックスを使用して、モニタを設定します。
# Monitors.<セクションまたはモニタの名前>.<プロパティ名>
```

```
Monitor.ApplicationLogs.Capture=false  
Monitor.MailMonitor.TextPassword = test
```

## コマンドの例

本節では、コマンドラインの例をいくつか示します。

- -dc

**test**という名前のDatabaseコネクタのODBC接続を初期化します。

```
conitsvc.exe -dc:test.Odbc_Dsn=AC43fr database_sc.scn
```

- -dc

暗号化されていないパスワードを使用します。

```
conitsvc -dc:assetmanagement.textpassword=b42var9
```



**注意:**

'password'コマンドオプションを使用すると、入力するパスワードが暗号化されます。

- -openconnectors

すべてのコネクタを開きます。

```
conitsvc -openconnectors mail_sc.scn
```

- -forcecnx

サービスへの自動再接続を強制的に実行します。

```
conitsvc -svc -forcecnx myService
```

- -dm

Mailモニタを無効にします。

```
conitsvc -dm:MailMonitor.Active=false ldap_sc.scn
```

- -dm

ドキュメントログサイズを増やします。

```
conitgui -dm:MemoryMonitor.MaximumTraceItems=2000 ldap_sc.scn
```

- サービスとして開始します。

```
conitsvc -svc testqa
```





#### 注意:

サービスの名前は、conitsvc.iniファイルに保存された名前です（Windows内のc:\Documents and Settings\<ユーザーアカウント>\Application Data file下にあります）。

- 生成するドキュメントタイプの仕様

```
conitsvc -activate:amAssetSrc,amEmplDept test.scn
```

- シナリオのプロパティファイルの使用

```
conitsvc -once -df:myPropFile.prop test.scn
```

## Connect-It Webの使用

Webコンソールは、一連のConnect-Itサービスを集中して管理するために使用します。

サービスおよびスケジューラの定義とモニタ情報は、固有のデータベースに保存されます。

### Connect-It Webの機能

Webインタフェースにアクセスするには：

- 1 Tomcatサーバを開始します。
- 2 Tomcatサーバ上でサービスを開始します。
- 3 インターネットブラウザを開いて、以下のアドレスを入力します。

```
http://<サーバアドレス>:<サーバポート番号>/<.warファイルの名前>
```

例：

```
http://localhost:8080/ovcit
```

- ▶ [Connect-It Webのインストール](#) [ 献 20].

### ログイン

Connect-It Webの使用には、ログインおよびパスワードが必要です。

- ▶ [Connect-It Webのインストール](#) [ 献 20].

### シナリオの場所

シナリオは、物理的な配置された場所に応じて、Webインタフェースによる表示および実行が可能です。

シナリオは、Tomcat Webサーバによってアクセスできるファイルシステムに配置する必要があります。

## サービスの定義

サービスは、シナリオインスタンスです。

各シナリオインスタンスは、以下によって定義されます。

- 識別子または名前
- 関連付けられたシナリオファイル

Connect-It Webにアクセスすると、定義されたシナリオのリストがページの右側に表示されます。

サービスに関する詳細情報にアクセスするには、リスト内のサービスをクリックします。情報が**Information about the service**枠に表示されます。

### 新しいサービスの定義

- 1 Connect-Itページで、**Services**メニューをクリックします。
- 2 **New**をクリックします。
- 3 **Service name**フィールドを入力します。  
サービスの名前は一意である必要があります。
- 4 サービスの説明を入力します。このフィールドはオプションです。
- 5 シナリオファイルのパスを入力します。  
パスは、サーバのローカルパスである必要があります。



#### 注意:

パスは、UNIXおよびLinuxの場合、大文字小文字が区別されます。

- 6 **Validate**をクリックします。  
新規に作成されたサービスがサービスのリストに表示されます。

### サービスの削除

サービスを削除するには、リスト内でチェックボックスによってサービスを選択し、**Delete**をクリックします。

一度に複数のサービスを削除できます。

### サービスの設定

Connect-It Webを使用すると、パラメータを定義して、シナリオのコネクタの設定を変更できます。

パラメータの定義はオプションです。

これらのパラメータは、シナリオ内で定義されたパラメータの代わりに使用されます。

パラメータは、**Information about the service** 枠のサービスの**Parameters** タブでアクセスできます。

パラメータを追加するには：

- 1 サービスを選択します。
  - 2 **Parameters** タブをクリックします。
  - 3 **New** をクリックします。
  - 4 以下の項目を入力します。
    - コネクタの名前
    - パラメータの名前
    - パラメータの値
- 例：
- コネクタ名：AssetManagement
  - パラメータ名：Server
  - パラメータ値：ACProd
- 5 **Validate** をクリックします。
  - 6 この操作を必要回数繰り返します。

#### ヒント：

シナリオで使用されるパラメータを明らかにするには、**conitsvc** コマンドの **-export** オプションを使用してパラメータをエクスポートします。

例えば、*catalog* シナリオのパラメータをエクスポートするには：

```
..\..\..\bin\conitsvc.exe -export catalog.scn
```

作成されるプロパティファイルは、シナリオと同じフォルダにあります。

パラメータを削除するには：

- 1 チェックボックスを使用して削除するパラメータを選択します。
- 2 **Delete** をクリックします。

## サービスのスケジューリング

Connect-It Webでは、サービスのスケジューリング方法を完全に制御することができます。

スケジューリング機能は、シナリオと別個のスケジューラに基づきます。

スケジューラは、複数のサービスに関連付けることができます。

スケジューラのリストにアクセスするには、ナビゲータで**Schedulers**メニューを選択します。

## スケジューラの機能

スケジューラには、以下の機能があります。

- 関連付けられた1つまたは複数のサービスをいつ実行するかを定義します。
- 実行頻度の時間範囲を1つまたは複数定義します。
- 時間範囲以外の実行頻度を定義します。

サービスに関連付けられたシナリオを正確に操作するためには、コネクタによって生成されるドキュメントタイプを以下のように設定する必要があります。

- 生成用ドキュメントタイプは、Connect-It Scenario Builder内で**Once**スケジューラに関連付ける必要があります。
- 生成用ドキュメントタイプは、生成する順序で設定する必要があります。
  - ▶ スケジュールの編集 [ 献 186].

### 注意:

使用する日付は、サーバの日付です。

## スケジューラの定義

スケジューラを定義するには：

- 1 Connect-Itページで、**Schedulers**メニューをクリックします。
- 2 **New**をクリックします。
- 3 **Scheduler name**フィールドを入力します。
- 4 スケジューラの説明を入力します。このフィールドはオプションです。
- 5 スケジューラの次回の起動日付を定義します。  
次回の起動日付は、スケジューラの実行後に更新されます。
- 6 以下に示すスケジューラの動作を入力します。
  - 頻度：スケジューラの実行頻度を定義するために使用します（毎日、1週間に1回など）。
  - 時間範囲：
    - 1 時間範囲のフィールドを入力します（**Start**および**End**フィールド）。  
時間範囲の間隔基準は1時間です。
    - 2 **Add**をクリックします。
  - **Every**フィールドを入力して、スケジューラに関連付けられたサービスを実行する間隔を定義します。  
例えば、E-Mailコネクタを使用するシナリオの場合、1秒ごとの頻度を定義できます。inventoryシナリオでは、午前7時と7時59分の間に実行される1時間（3600秒）ごとの頻度を定義できます。  
必要ならば、特定の時間範囲以外にサービスをいつ実行するかを定義します。
  - この操作を必要回数繰り返して、**Validate**をクリックします。

## スケジューラの削除

スケジューラを削除するには：

- 1 チェックボックスを使用してスケジューラを選択します。
- 2 **Delete**をクリックします。
- 3 **OK**をクリックします。

### 注意:

スケジューラを削除すると、そのスケジューラへのサービスの関連付けがなくなります。

## スケジューラをサービスに関連付ける

スケジューラを以下の方法で関連付けることができます。

- サービスからの**Scheduling**タブによる方法：
  - 1 サービスを選択します。
  - 2 **Scheduling**タブで、**Configure**をクリックします。
  - 3 ドロップダウンリストから割り当てるスケジューラを選択します。
  - 4 **Validate**をクリックします。
- スケジューラからの**Assigned services**タブによる方法：
  - 1 スケジューラを選択します。
  - 2 **Associated services**タブで、**Modify**をクリックします。
  - 3 サービスのリストから割り当てるサービスを選択します。
  - 4 **Validate**をクリックします。

## 内部スケジューリング

コンソールのスケジューラは、シナリオで定義されたスケジューリング情報を置き換えます。

ただし、シナリオの元のプログラミング情報を保持できます。そのためには、以下の方法を行います。

- サービスを選択します。
- **Scheduling**タブで、**Configure**をクリックします。
- **Internal scheduling**を選択します。
- **Validate**をクリックします。

### 注意:

これらの2つのスケジューリングモードは排他的です。

## イベント駆動コネクタ

Connect-It 3.70で開始すると、ソースコネクタがXMLリスニングコネクタなどのイベント駆動コネクタであるシナリオは、スケジューリングの必要がなくなります。シナリオは、イベント受信時に自動でトリガが実行されます。

このタイプのシナリオの場合、スケジューラをサービスに割り当てる必要がありません。

## サービスの開始

サービスを開始または終了するには、チェックボックスによって選択し、**Start** または**Stop**をクリックします。

サービスを開始すると、関連付けられたシナリオが開き、以下の処理を行います。

- コンソールスケジューリングモードで、シナリオは関連付けられたスケジューラからのイベントを待機します。
- 内部スケジューリングモードで、内部スケジューリングを開始します。

コンソールスケジューリングモードで、関連付けられたスケジューラも開始する必要があります。サービスは、スケジューラが開始するまで待機します。

スケジューラを開始または終了するには、チェックボックスによって選択し、**Start**または**Stop**をクリックします。

### 注意:

サービスの開始および終了は、スケジューラの開始および終了とは切り離されています。

## サービスのモニタ

Connect-It Webでは、サービスの実行に関連するアクティビティを表示できます。

- ログ
- セッション
- 実行結果

## サービスモニタリングの設定

Connect-It Webでは、サービスごとに必要なモニタリングレベルを設定できます。

- 1 サービスを選択します。
- 2 **Monitoring**タブで、**Configure**をクリックします。
- 3 適切なオプションを選択します。

- **Save service execution log** : このオプションを選択すると、ログ情報（デバッグ、情報、警告、エラー）をConnect-It Webデータベースに保存できます。
- **Session information** : このオプションでは、各セッションの開始日付および終了日付を表示できます。
- **Save execution statistics** : このオプションでは、シナリオのセッションの実行結果を保存できます。動作は、Connect-Itドキュメントログについて記載された動作と同じです。
  - ▶ **Connect-Itログ** [ 献 222].
- **Limit persistence of monitoring information** : このオプションでは、サービスに関する情報の保存期間を定義できます。

## モニタリング情報の表示

**Monitoring**タブでは、シナリオの最終セッションとログの最後の20行を表示できます。

 **注意:**

**Page size**フィールドの値を変更して、ログを何行表示するかを指定します。

**Monitoring**タブの内容は、シナリオ項目の処理方法によって異なります。

**Monitoring**タブでは、以下の作業を実行できます。

- ログ情報の更新
- モニタリングの設定
- すべての監視要素の表示（セッション履歴とサービスログ）
- すべてのモニタリング情報の削除（セッション履歴とサービスログ）

**Display all**をクリックすると、ログ全体を表示できます。このボタンを使用すると、セッション履歴およびサービスログにアクセスできます。

これらの要素に対して、以下の操作を実行できます。

- セッション履歴：
  - 更新
  - 履歴のクリア

 **注意:**

履歴をクリアしても、サービスログの内容に影響を与えません。

- サービスログ：
  - 更新
  - ログのクリア



#### 注意:

サービスログの内容をクリアしても、セッション履歴に影響を与えません。

## お気に入り

「お気に入り」とは既に設定されたコネクタのことを指します。これは、Scenario BuilderのToolboxの**Favorites**タブ内に表示されます。

シナリオで（ドラッグアンドドロップして）お気に入りを使用すると、このお気に入りに関連付けられたコネクタのインスタンスが作成されます。後で、このコネクタのインスタンスとお気に入り間の関連付けを削除することもできます。

お気に入りが1つまたは複数のコネクタに関連付けられている場合、

- お気に入りを再設定すると、このお気に入りに関連付けられているコネクタは、すべてのシナリオ内で自動的に再設定されます。



#### 警告:

お気に入りの名前と説明は、お気に入りでのみ使用されます。設定ウィザードでお気に入りの名前や説明を変更しても、関連付けられたコネクタの設定内容は変更されません。

この設定更新を有効にするには、Scenario Builderを使って新たにシナリオを開く必要があります。

- 関連付けられたコネクタを再設定すると、このコネクタに関連付けられたお気に入りと他のコネクタが、再設定されることがあります。  
コネクタの再設定が終了すると、ダイアログボックスに以下の選択肢が表示されます。
  - 関連付けられたお気に入りを更新する
  - お気に入りとの関連付けを削除してから、コネクタの設定を更新する
  - コネクタとお気に入りの再設定をキャンセルする

## お気に入りの編集

お気に入りを使うと、コネクタの設定を保存し、他のシナリオで再利用することが可能になります。

### コネクタに関連付けされたお気に入りを作成する

- 1 Scenario Builderを起動します。



- 2 既存シナリオを開くか、または新規にシナリオを作成します。
- 3 コネクタを選択して、どのコネクタ用にお気に入りを作成するかを指定します。
- 4 右クリックします。
- 5 **Favorites/ Add to the favorites with association**をショートカットメニューから選択します。

**Toolbox**の**Favorites**サブタブ内にお気に入りが表示されます。



**注意:**

コネクタがお気に入りに関連付けられている場合、シナリオ図内のコネクタの上にお気に入りの名前が表示されます。

### コネクタに関連付けられないお気に入りを作成する

- 1 Scenario Builderを起動します。
- 2 既存シナリオを開くか、または新規にシナリオを作成します。
- 3 コネクタを選択して、どのコネクタ用にお気に入りを作成するかを指定します。
- 4 右クリックします。
- 5 **Favorites/ Add to the favorites without association**をショートカットメニューから選択します。

**Toolbox**の**Favorites**タブ内にお気に入りが表示されます。

### シナリオ内でお気に入りを使用する

- 1 シナリオを開くかまたは新規作成して、どのシナリオでお気に入りを使用するかを指定します。
- 2 **Toolbox**の**Favorites**タブ内にマウスポインタを置きます。
- 3 お気に入りを選択します。
- 4 以下の操作のいずれかを実行します。
  - このお気に入りを、Scenario diagram部分へドラッグアンドドロップします。
  - ダブルクリックします。

このお気に入りに自動的に関連付けられたコネクタのインスタンスが、Scenario diagram内に作成されます。

### コネクタとお気に入り間の関連付けを削除する

- 1 お気に入りに関連付けられたコネクタを、シナリオ内で選択します。  
コネクタがお気に入りに関連付けられていると、お気に入りの名前がScenario diagram内に表示されます。
- 2 右クリックします。

- 3 ショートカットメニューから**Favorites/Break association with the favorite**を選択します。

お気に入りとの関連付けが削除されると、Scenario diagramのコネクタの上に表示されていたお気に入りの名前が消えます。


#### お気に入りを使ってコネクタを再設定し、関連付けを作成する

- 1 お気に入りを選択します。
- 2 以下の方法で、お気に入りに類似するコネクタにドラッグします。  
例：XMLお気に入りをXMLコネクタへドラッグする
- 3 表示されるダイアログボックスで、お気に入りの設定でコネクタを更新し同時に関連付けを作成することを選択します。
- 4 **OK**をクリックします。

#### お気に入りを使ってコネクタを再設定するが、関連付けは作成しない

- 1 favoriteを選択します。
- 2 以下の方法で、お気に入りを類似するコネクタへドラッグします。
  - マウスの左ボタンを押したままにします。
  - **Shift**キーを押したままにします。
- 3 マウスボタンから指を離します。
- 4 表示されるダイアログボックスで、関連付けを作成せずにお気に入りの設定でコネクタを更新することを選択します。
- 5 **OK**をクリックします。

#### Favoritesサブタブでお気に入りを再設定する

- 1 Scenario Builderを起動します。
- 2 **Toolbox**の**Favorites**タブを選択します。
- 3 再設定するお気に入りを選択します。
- 4 以下の操作のいずれかを実行します。
  - お気に入りのツールバーでをクリックします。
  - 右クリックして、ショートカットメニューから**Reconfigure the favorite**を選択します。
  - **Favorites/Reconfigure the favorite**を選択します。
- 5 起動する設定ウィザードで、お気に入りの設定を変更します。  
このお気に入りを使用するシナリオを読み込むと、関連付けられているコネクタは自動的に再設定されます。

#### 関連付けられているコネクタでお気に入りを再設定する

- 1 Scenario Builderを起動します。

- 2 再設定するお気に入りに関連付けられているコネクタを使用するシナリオを開きます。
- 3 関連付けられているコネクタを選択します。
- 4 以下の操作のいずれかを実行します。
  - 右クリックして、ショートカットメニューから**Configure the favorite**を選択します。
  - **Tools/ Configure (F2)** を選択します。
- 5 configure設定ウィザードで、お気に入りの設定を変更します。
- 6 表示されるダイアログボックスで**Yes**をクリックします。


このダイアログボックスで**No**をクリックすると、お気に入りとの関連付けが削除されてから、コネクタの設定が更新されます。

このお気に入りを使用するシナリオを読み込むと、関連付けられているコネクタは自動的に再設定されます。

 **注意:**

コネクタに関連付けられたお気入りは、シナリオを読み込んだ後のみ更新が有効になります。

### お気に入りを削除する

- 1 Scenario Builderを起動します。
- 2 **Toolbox**の**Favorites**タブを選択します。
- 3 削除するお気に入りを選択します。
- 4 以下の操作のいずれかを実行します。
  - お気に入りのツールバーでをクリックします。
  - 右クリックして、ショートカットメニューから**Delete the favorite**を選択します。
  - **>Favorites/Delete the favorite**を選択します。
- 5 **Favorites**タブからお気に入り削除されます。

 **注意:**

お気に入りが削除されると、関連付けられているコネクタは関連付けを失います。これにより、シナリオ図のコネクタの上に表示されていたお気に入りの名前も消えます。

## お気に入りのファイルを管理する


お気に入り（既定のコネクタ）のパラメータは、Connect-Itバージョン番号を含むFavorite.favファイル内に含まれています。このファイルは、Connect-Itのインストール先フォルダのbinフォルダに保存されます。例：C:\Program Files\HP\Connect-It\bin\Favorite330.fav

### 注意:

favorite.favファイルの最終バージョンは、favorite.bakファイル内に保存されます。更新時に問題が起こった場合は、このファイルの名前を変更して使用します。

このファイルを、2つのScenario Builder間でインポートまたはエクスポートすることも可能です。

## シナリオファイルをインポートする

- 1 Scenario Builderを起動します。
- 2 **Favorites**タブ内にマウスポインタを置きます。
- 3 以下の操作のいずれかを実行します。
  - お気に入りのツールバーでをクリックします。
  - 右クリックしてショートカットメニューから**Import favorites**を選択します。
- 4 Scenario Builder内にインポートするお気に入りを含むFavorite.favファイルのパスを入力します。

### 注意:

この操作をWindowsブラウザで手動で実行するには、Connect-Itインストール先フォルダのbinフォルダのFavorite.favファイルをコピーして張り付けます。

## シナリオファイルを出力する

- 1 Scenario Builderを起動します。
- 2 以下の操作のいずれかを実行します。
  - **Favorites**タブページ内にマウスポインタを置きます。右クリックし、ショートカットメニューから**Export favorites**を選択します。
  - お気に入りのツールバーでをクリックします。
  - 複数のお気に入りを選択するには、CTRLキーを押しながらお気に入りをマウスで選択します。
- 3 使用中のScenario Builderのお気に入りを含むFavorite.favファイルを、どのフォルダに保存するかを指定します。



#### 注意:

WindowsエクスプローラでFavorite.favファイルをコピーし、別のフォルダ内に貼り付けて、この操作を手動で実行することも可能です。

### 関連付けられたお気に入りとコネクタを更新する

シナリオを開くと、お気に入りの更新日と関連付けられたコネクタの更新日に応じて、2コンポーネントの同期がとられます。

より新しい更新日時のお気に入りまたはコネクタの設定が、別のコンポーネントに適用され、同期がとられます。

### Connect-Itの以前のバージョンからお気に入りをインポートする

お気に入りは、Connect-Itの使用バージョンに関連付けられます。

以前のバージョンから使用バージョンにインポートする場合、お気に入りの名前を各々チェックして使用バージョンと重複しないことを確認します。重複があれば、アプリケーションによって自動的に名前が変更されます。

### デフォルトで使用するお気に入りのファイルの定義

**Edit/ Options**メニューを使用すると、デフォルトで使用するファイルを定義できます。

**Connector/ Favorites file**オプションで使用するファイルを指定します。

---

## シナリオの履歴

シナリオの作成および変更に関するすべての情報は、**File/ Scenario history**メニューによって表示できます。

**General**タブを使用すると、ユーザの個人情報をシナリオに入力することができます。要約は、**History**タブに表示されます。新しい要約は、**Add**ボタンを使用するたびに作成されます。既存の要約は、**Update**ボタンを使用するたびに更新されます。

2つのバージョンのConnect-Itシナリオ間にあるすべての違いは、これらのタブに表示されます。

---

## 統合シナリオのテストとデバッグ

シナリオをテストすると以下の内容を確認できるようになります。

- 生成用ドキュメントタイプを作成した場合、ソースコネクタが適切にドキュメントを生成するか
- マッピングボックスがこれらのドキュメントを適切に変換するか
- マッピングボックスがドキュメントを変換した後、ターゲットコネクタがドキュメントを適切に取り込むか

 **警告:**

テストには、テスト用データ（データベースまたはデモ用ファイル）の使用をお勧めします。テストをせずにシナリオを生成モードで使用すると、実際のデータを破損する可能性があります。

## ログの使用

ドキュメントログを使用すると、ソースコネクタがドキュメントを生成している際にどのような問題が発生したかを確認できます。

問題を解決するには、処理中に問題の起こったドキュメントのみを表示するようドキュメントログを設定することをお勧めします。

Scenario Builderには2つのログがあります。


- Connect-Itログ
- ドキュメントログ

### Connect-Itログ

ユーザはConnect-Itで実行された全アクションをログ内で確認できます。

例：コネクタが開いたことを知らせるメッセージが表示されます。

Scenario BuilderのConnect-Itログタブを選択すると、Connect-Itログにアクセスできます。

ログでは各アクションがアイコンで表示されます。アクションのメッセージには、場合によってアクションの詳細を説明するサブメッセージがあります。サブメッセージには更にサブメッセージが付くこともあります。

 **注意:**

トラッキング項目をダブルクリックすると、メッセージをトリガした複雑要素（フィールド、構造体、またはコレクション）が表示されます（右ウィンドウ）。

各メッセージには、アクションが起動した日付が付きます。





ログ内で右クリックするとショートカットメニューが表示され、1レベル表示、全レベル表示または非表示を選択できます。


## 図 5.1. Connect-Itログ

Message	Date
Opening session	4/20/00 10:56:53 AM
Opening session for connector 'ServiceCenter (12670)'	4/20/00 10:56:53 AM
Cannot check insertion error for asynchronously processed event '1CMdevicepc'	4/20/00 10:56:53 AM
Event '1CMmodem' associated with document type '1CMmodem' not found in ServiceCenter	4/20/00 10:56:53 AM
Cannot check insertion error for asynchronously processed event '1CMdevicemodem'	4/20/00 10:56:53 AM
Cannot check insertion error for asynchronously processed event '1CMdeviceprinter'	4/20/00 10:56:53 AM
Cannot check insertion error for asynchronously processed event '1CMdeviceprinter'	4/20/00 10:56:53 AM
Opening session for connector 'Mapping (Basic engine)'	4/20/00 10:56:53 AM
Compiling scripts for connector 'Mapping (Basic engine)'	4/20/00 10:56:53 AM
Starting connector 'Desktop Discovery (C:\Program Files\Peregrine\ConnectIt.20U\datakit\idd\)'	4/20/00 10:56:53 AM
3 FSF file(s) to process	4/20/00 10:56:53 AM
Processing document type 'Machine'	4/20/00 10:56:53 AM
Processing file 'C:\Program Files\Peregrine\ConnectIt.20U\datakit\idd\TESTI500.FSF' (file # 1)	4/20/00 10:56:53 AM
Processing file 'C:\Program Files\Peregrine\ConnectIt.20U\datakit\idd\TESTI501.FSF' (file # 2)	4/20/00 10:56:58 AM
Processing file 'C:\Program Files\Peregrine\ConnectIt.20U\datakit\idd\SRV000014.FSF' (file # 3)	4/20/00 10:56:59 AM
File processed: 3	4/20/00 10:58:00 AM
Document created: 3	4/20/00 10:58:00 AM
Statistics for connector 'ServiceCenter (12670)'	4/20/00 10:58:01 AM
Document processed: 35	4/20/00 10:58:01 AM

Connect-Itログ内に表示するメッセージの例については、マニュアル『コネクタ』の「コネクタのルール (ディレクティブ)」の章「取り込み用ルール」の節、「照合更新」の「照合更新キーに関するエラーメッセージ」を参照してください。

### Connect-Itログ内で使用されるアイコン

トラッキング項目	意味	メッセージのタイプ	例
	アクションについての情報	Connect-Itのアクションを説明します。	コネクタの開始
	アクションの詳細	アクションを詳細に説明します。	照合更新の段階で特定のインデックスが使用されている。
	警告	データの不適切な処理を発生させる問題点を報告します。	照合更新キーとして選択されたフィールドは重複を許可している (一意性がない)。
	重大な問題	アクションが失敗した理由を説明します。	コネクタの設定が無効である。外部アプリケーションとの通信が不可能。

ログから全メッセージを削除するには、**Monitor**メニューの**Clear displayed tracking lines**オプションを選択するか、または  をクリックします。Connect-Itログを削除するとドキュメントログも削除されます。

### ドキュメントログ

ドキュメントに以下の操作が実行された後、ドキュメントログでドキュメントの詳細を参照、確認できます。

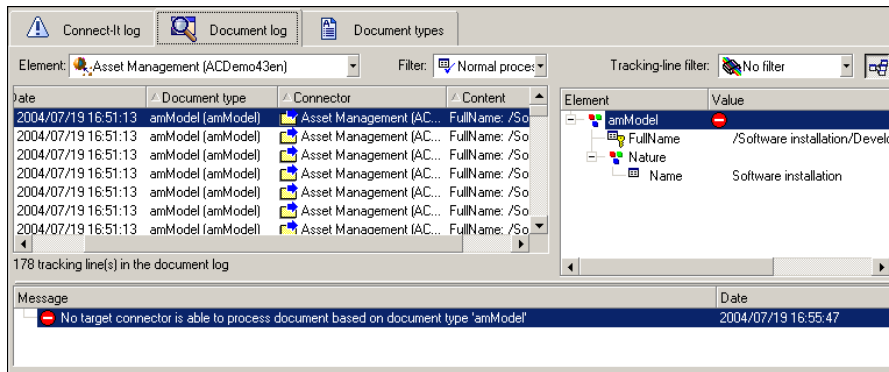
- ドキュメントがコンポーネントにより生成される、または取り込まれる。
- ドキュメントがリンクにより送信される。

Scenario Builderで**Document log**タブを選択すると、ドキュメントログが表示されます。

このタブは3つの部分から成っています。

- 1ドキュメントにつき1つのトラッキング項目が表示される部分
- 選択したドキュメントの詳細項目が表示される部分
- ドキュメント内の要素が残したトラッキング項目の、詳細メッセージが表示される部分

## 図 5.2. Scenario Builder - Document logタブ



### Document logの設定

ドキュメントログを設定するには、**Monitors/ Configure monitors**で**Document log**タブを選択します。

このメニューを使用すると、ドキュメント、ドキュメントのトラッキング項目に加えて、シナリオの構成要素によって残されたトラッキング項目を保存できます。

ドキュメントログの設定の詳細については、「**Ergonomics [ 献 41]**」の章の「**管理モニタの定義 [ 献 159]**」の節を参照してください。

**Edition/Options**メニューによって、ドキュメントログの一部のオプションにアクセスできます。

- **Display**項目
- **Connector**項目
- **Logs**項目

ドキュメントログのオプションについては、「**シナリオオプションの編集 [ 献 64]**」の章を参照してください。



## メモリのクリア

**Monitors**メニューに削除コマンドがあります。

### ■ Clear displayed tracking lines

このコマンドはScenario Builder内（Connect-Itログとドキュメントログ）のログ項目を削除します。トラッキング項目を含むファイルは、このコマンドでは削除されません。

## トラッキング項目の更新

**Monitors**メニューの**Refresh tracking lines**コマンドにより、トラッキング項目全てを、**Document log**タブ内に表示できます。このコマンドは、ドキュメントログ内のトラッキング項目の表示数を制限した場合に非常に有用です。この場合、このコマンドでドキュメント処理中に発生した問題点全てを表示できます。更新は、自動的に実行されます。また、**F9**を押すことによって手動で実行することもできます。

## トラッキング項目

ドキュメントログはトラッキング項目を表示します。各項目はシナリオの1構成要素に処理されたドキュメントに相当し、以下の内容を含んでいます。

- 識別番号
- ドキュメントが処理された方法を表すアイコン
- 処理の日時
- 処理されたドキュメントタイプ
- ドキュメントを生成した、または取り込んだ構成要素の名前
- ドキュメントの内容

識別番号はドキュメントの処理順に付けられています。識別番号が1のドキュメントは一番最初に処理されています。ドキュメントがメモリに保存されている場合、固有の識別番号によりドキュメントが検索しやすくなっています。

ドキュメントログの各列を昇順または降順で並べ替えるには、各列のタイトルをクリックします。

上向きの青の三角形は、並べ替えが昇順であることを示しています。下向きの三角形は並べ替えが降順であることを示しています。列が並べ替えられていない場合、三角形はグレーアウトされています。

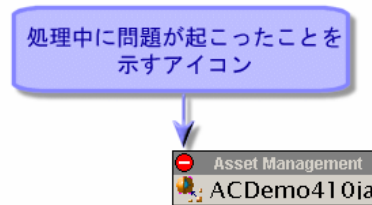
項目の一部が切れて表示されている場合、マウスポインタを項目上に置くと、項目全体がヒントの形で表示されます。

## ドキュメントログ内で使用されるアイコン

アイコンは最も重要な情報に対応しています。例えば、同じドキュメント内のあるフィールドは警告を受けただけなのに対し、他のフィールドが拒否されたとすると、●アイコンのみが表示されます。これは、ドキュメントの完全な拒否は警告よりも重要だと見なされるためです。

Scenario diagram内では、これらのアイコンが次のように表示されます。これらのアイコンは、シナリオの要素のレベルで表示されます。つまり、この要素により少なくとも1つのドキュメントが正常に処理されなかった、フィールドが拒否された、またはドキュメントが完全に拒否されたことを示しています。

## 図 5.3. 処理中に起こった問題



問題発生アイコンがコンポーネント上に表示された場合、コンポーネント上を右クリックして**Show tracking lines**をショートカットメニューから選択します。この時点で、ユーザは問題の発生を認識しているとみなされるため、アイコンは画面から消えます。

## トラッキング項目のフィルタ

ドキュメントログ内に表示されるトラッキング項目には、次の条件に従ってフィルタをかけることができます。

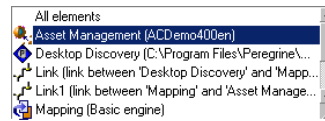
- ドキュメントを処理した構成要素
- ドキュメントの処理方法

Scenario diagram内で選択されている構成要素がないと、メモリにあるトラッキング項目全体がドキュメントログに表示されます。

ある要素により処理されたドキュメントのトラッキング項目のみを表示するには：

- Scenario diagram内でこの要素を選択します。
- **Element**フィールドで1項目を選択します。

## 図 5.4. ドキュメントログ内のトラッキング項目へのフィルタ

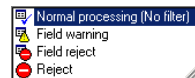


処理結果に応じてトラッキング項目を表示する場合、**Filter**フィールドで1項目を選択します。

選択した処理結果のトラッキング項目と、それよりも重要度の高い問題の項目が表示されます。

例：**Field reject**を選択すると、全体を拒否されたドキュメントも表示されます。

## 図 5.5. トラッキング項目のフィルタ



### ドキュメントの詳細枠

ドキュメントの詳細枠では、ドキュメントのフィールド値についての情報と、ドキュメントがコンポーネントまたはリンクにより処理された方法を知ることができます。

ドキュメントログ内で1つのトラッキング項目が選択されると、そのドキュメントの詳細事項がログの右側にある枠内に表示されます。

ドキュメントはツリー構造で表示されます。

このツリー構造内の各ノードは以下の内容を表しています。

- ノードに対応する要素の名前
- ドキュメント内のノードの値
- ドキュメントを処理したコンポーネントまたはリンクが残すトラッキング項目

ドキュメントの詳細枠にある各トラッキング項目にはメッセージがあります。メッセージは、ドキュメント全体が拒否された理由などを説明します。

### ドキュメントの詳細とドキュメントタイプの詳細の相違点

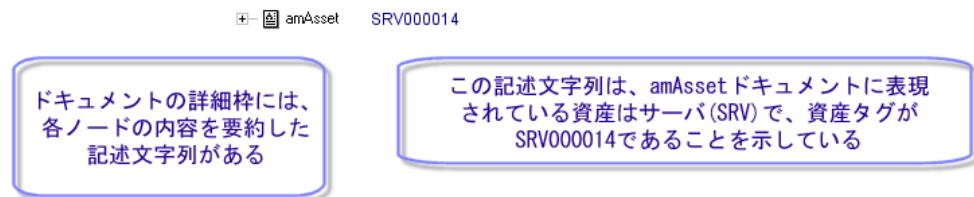
ドキュメントタイプの詳細は、生成用ドキュメントタイプ、または取り込み用ドキュメントタイプの編集時に表示されます。ドキュメントと同様に、ドキュメン

トタイプにはツリー構造があります。しかし、ドキュメントとドキュメントタイプの間には多くの相違点があります。

ドキュメントの詳細枠では、各ノードの値が表示されます。構造体またはコレクションの場合、この値は構造体またはコレクション内のフィールド値を要約した記述文字列です。例えば、AssetCenterの資産に対応するドキュメントのルートノードには、資産タグが記述（灰色で表示）されます。コレクションには、コレクション内の構成要素の数が表示されます。

ドキュメントタイプの詳細にはノードの名前だけが表示されます。

## 図 5.6. ドキュメント内の記述文字列



ドキュメントの詳細枠では、コレクション内の各構成要素はコレクションの子構造体として表示されます。これらの子ノードには、コレクションの名前と括弧で囲まれた数字が付きます。3構成要素のあるコレクションでは、第1構成要素には0、第2構成要素には1、第3構成要素には2が付きます。

ドキュメントタイプの詳細では、コレクションと、各フィールド値の性質（テキスト、整数、日付）のみが表示されます。

図 5.7. ドキュメントタイプ詳細内のコレクションと、ドキュメント詳細内のコレクション



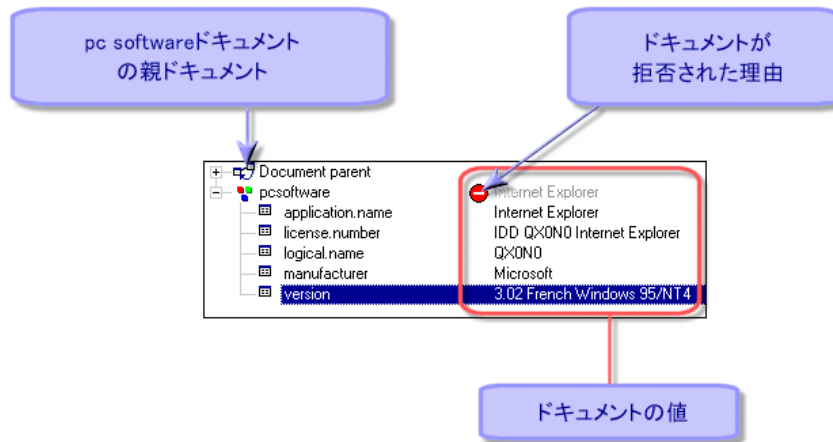
### 親ドキュメント

ドキュメントの詳細枠には「親ドキュメント」が含まれていることがあります。この親ドキュメントには、ドキュメント作成に使用されたデータが入っています。このため、マッピングボックスに生成されたドキュメントの詳細枠内の親ドキュメント下には、ドキュメント生成に使用されたソースドキュメントの詳細が含まれています。

例：pdiac.scnシナリオ内で、マッピングボックスによって生成されたドキュメントの詳細には、Desktop Discoveryコネクタによって生成されたドキュメントの詳細が含まれます。これらのドキュメントは、マッピング内に表示されるソースドキュメントタイプにあたります。

マッピングボックスがドキュメントのフィールドを拒否した場合、親ドキュメントの詳細部分で、拒否されたフィールドの値と拒否の理由を確認することができます。

図 5.8. ServiceCenterコネクタによって取り込まれた pcsoftware ドキュメントの詳細部分



## ドキュメントの詳細に対応するXML文書（ドキュメント）を取り扱う

Connect-It内で生成されたドキュメントの詳細情報はXML文書です。以下の操作が可能です。

- このXML文書をコピーする
  - 1 ドキュメントの詳細枠内にポインタを置きます。
  - 2 右クリックします。
  - 3 表示されるショートカットメニューから、**Copy this XML document**を選択します。
- このXML文書のDTD（文書型定義）をコピーする
  - 1 ドキュメントの詳細枠内にポインタを置きます。
  - 2 右クリックします。
  - 3 表示されるショートカットメニューから、**Copy this XML DTD**を選択します。
- このXML文書を開く
  - 1 ドキュメントの詳細枠内にポインタを置きます。
  - 2 右クリックします。
  - 3 表示されるショートカットメニューから、**Open this XML document**を選択します。



注意:

XML文書は、Connect-Itをインストールしたコンピュータで、.xmlファイルに関連付けられたアプリケーション上で開かれます。例えば、Internet ExplorerやNetscapeなどです。

## ドキュメントの詳細内で要素を検索する

検索機能を使用すると、ドキュメントログのドキュメントの詳細内で要素を検索できるようになります。

ドキュメントの詳細内で要素を検索するには：

- 1 ドキュメントの詳細で要素を1つ選択します。
- 2 右クリックします。
- 3 **Find**ショートカットメニューを選択します。
- 4 ダイアログボックスが表示されます。
- 5 **Find what**フィールドに、検索する要素の名前を入力し、以下のオプションを必要に応じて選択します。
  - Case sensitive
  - 検索方向 (upまたはdown)
- 6 **Find**をクリックします。

次の要素または前の要素を検索するには：

- 1 以下の操作のいずれかを実行します。
  - 右クリックして、ショートカットメニューから**Find next (F3)**キー)を選択します。
  - 右クリックして、ショートカットメニューから**Find prev. (Shift+F3)**を選択します。



注意:

検索の範囲は、ドキュメントの詳細に表示されている要素に制限されます。サブノード内でも検索する場合は、検索の前にサブノードを開いておく必要があります。

## ドキュメントの詳細枠内で使用されるトラッキング項目

トラッキング項目は、シナリオのツールまたはリンクがドキュメントのフィールド上に実行した処理に関する情報です。

ドキュメントの詳細枠内では、トラッキング項目にアイコンが付きます。各トラッキング項目の内容は、別の枠に表示されるメッセージで説明されます。

トラッキング項目は2つに分類されます。

- 情報を提供するトラッキング項目（フィールドに関する重要な情報、または詳細情報）
  - 処理中に発生した問題に関するトラッキング項目（警告、処理の失敗など）
- 処理エラーのトラッキング項目❶のみが、ドキュメントの完全な拒否または部分的な拒否を意味します。
- トラッキング項目、アイコンの意味と、項目を説明するメッセージのタイプは、以下の表の通りです。

トラッキング項目	意味	メッセージのタイプ	例
❶	詳細情報	データ処理に関する技術的な詳細情報	INDコネクタがドキュメントに変換するデータをダウンロードします。ファイルの大きさ(KB)やダウンロードの速度などの情報等。
❷	重要な情報	データ使用に重要な情報	ドキュメントの取り込み後にコネクタが作成したフォルダとファイルの名前。
⚠	フィールドに対する警告	フィールドが適切に処理されなかった理由	Connect-Itコネクタは、フィールドを取り込みましたが、Connect-Itデータモデルの整合性を保持するためにフィールドの一部を切り詰めました。
❸	処理の失敗	処理の失敗の理由	A field is rejected because it contains an unexpected value. This can lead to the partial or full rejection of the document.

### ノードの横に現れる灰色のトラッキング項目

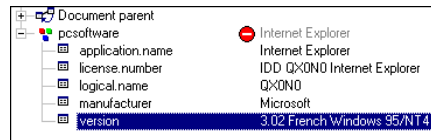
ドキュメントの詳細枠では、トラッキング項目が親ノードの横に灰色で表示されることがあります。

灰色のトラッキング項目は、ノードの子ノードの内少なくとも1つに、トラッキング項目があることを意味します。

ノード内に複数のトラッキング項目がある場合、最も重要だと見なされるトラッキング項目が、親ノードの横に灰色で表示されます。



図 5.9. ノード下にトラッキング項目があることを意味する灰色のトラッキング項目



## トラッキング項目のタイプによるドキュメントのフィルタ

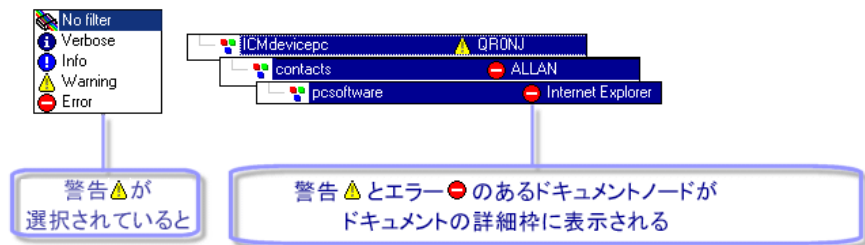
トラッキング項目のタイプに基づいてドキュメントの詳細にフィルタをかけると、選択したトラッキング項目（またはより重要なトラッキング項目）を含む要素のみが表示されます。

拒否されたノードのみを表示する場合は、ドキュメントの詳細枠の上にある**Filter tracking lines** フィールドで を選択します。

このドロップダウンリストから1項目を選択すると、選択項目より下にあるトラッキング項目アイコンを含むノードも全て表示されます。

ドロップダウンリストでは、情報の重要度の低い項目から高い項目順に並べられています。つまり重要度の低い「詳細モード」が1番上にあり、重要度の高い（処理の失敗）が1番下にあります。

図 5.10. ドキュメント詳細内のトラッキング項目用フィルタ




## トラッキング項目の説明メッセージ

ドキュメントの詳細枠内のトラッキング項目は、メッセージで説明されます。


ドキュメントの詳細枠内のトラッキング項目を1つ選択すると、項目の内容を説明するメッセージが現れます。この枠はdocument logの下部にあります。


例：Asset Managementデータベースの健全性を破壊する値を含むフィールドが、Asset Managementコネクタにより拒否されたことを説明するメッセージ。


## サブメッセージを表示する



ドキュメント詳細の親ノード下の子ノードに含まれている全メッセージを表示するには、 をクリックします。

### 例

 オプションが選択されていないと、選択したノードのメッセージのみが表示されます。


 Text value [Award Modular BIOS v4.51PG - war.Copyright (C) 1984-98, Award Software, Inc. - Award SoftwareBM COMPATIBLE 486 BIOS COPYRIGHT Award Software I...

 が選択されていると、子ノードの全メッセージが表示されます。

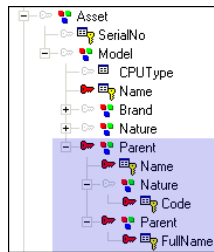
 No reconciliation available for document type 'amAsset (amAsset)'. You need to define 'amAsset (amAsset)' as a consumed document type.  
 Text value [Award Modular BIOS v4.51PG - war.Copyright (C) 1984-98, Award Software, Inc. - Award SoftwareBM COMPATIBLE 486 BIOS]

## スクリプトデバッガの使用

Basicスクリプトは、マッピングボックス内の**Debug script**オプションを使用してデバッグできます。

 をクリックして、シナリオをデバッグします。

デバッグモードでシナリオを開始すると、デバッグするスクリプトを含むモデルボックスが開きます。



スクリプトの行ごとに、以下のデバッグ命令を使用します。

- **Step over** : 命令を実行します。
- **Step into** : 命令内の関数を1つずつ実行します。それらの値が表示されます。
- **Step out** : 呼び出し元の関数に戻るか、現在の場所がメイン関数である場合はデバッグモードを終了します。
- **Run to cursor** : 関数をカーソルまで実行します。

スクリプトに使用される値を表示するには、以下のショートカットを使用します。

- 変数をダブルクリックします。
- Ctrl+Shift+F9
- Shift+F9

## 処理レポートの使用

処理レポートは、ドキュメントを生成するか取り込むたびにコネクタまたはマッピングボックスによって生成することができるドキュメントです。

各処理レポートは、ドキュメントが適切に処理されたかどうかを表示します。正常に処理されたドキュメントとは、拒否された要素が全くないドキュメントのことを指します。

処理レポートには、取り込みレポートと生成レポートという2種類の異なるレポートがあります。

生成タイプ処理レポートは、ドキュメントを生成しているコネクタによって出力されます。

取り込みタイプ処理レポートは、ドキュメントを取り込んでいるコネクタによって出力されます。

処理レポートは、各コネクタおよびマッピングボックスが取り込むことができるドキュメントタイプに似ています。処理レポートに含まれる情報の詳細は、以下の表の通りです。

表 5.1. 処理レポートの内容

要素	情報	フィールドタイプ
ProcessReport	処理レポートのルートノード	
DocumentType	生成用または取り込み用ドキュメントタイプの名前	テキスト
DocumentTypeID	ドキュメントの固有識別子	テキスト
ErrorNumber	ドキュメントの処理中に発生したエラーの番号	整数 (32ビット)
Success	ドキュメントの正常な処理 (値: 1) または正常でない処理 (値: 0) 正常でない処理は、ドキュメント全体が拒否されたことを意味します。	ブーリアン

要素	情報	フィールドタイプ
▣ Pending	ドキュメントのペンディング有 無  AssetCenterユーザによるド キュメントのペンディングの検 証に相当します。	ブーリアン
▣ Ignored	無視されるドキュメント <b>(PifgnoreDocumentMapping</b> 関数)	整数 (32ビット)
▣ WarningNumber	ドキュメントの処理中に発生し た警告の番号	整数 (32ビット)
📁 Logs	ドキュメントの処理時に発行さ れるメッセージに対応するコレ クション	
▣ Date	メッセージの日付	日付と時刻
▣ LogType	メッセージのタイプ  可能な値は以下の通りです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 1 (エラー)</li> <li>■ 2 (警告)</li> <li>■ 4 (情報)</li> <li>■ 16 (追加情報)</li> </ul>	整数 (32ビット)
▣ Msg	メッセージの内容	テキスト
▣ Path	メッセージに関連する要素のド キュメントのパス	テキスト

## 処理レポート - 使用例

Connect-Itの付属シナリオでは、ソースコネクタに使用されるファイル上に実行するアクション（削除、移動など）を決定するために、処理レポートが使用される場合もあります。

処理レポートをシナリオに統合するには、処理レポートを使用している添付シナリオを理解することをお勧めします。

次節では、`pdi\pdi8ac44\pdia.scn`シナリオにおけるHP Desktop Discoveryコネクタの処理レポートの使用方法を説明します。このシナリオでは、HP Desktop Discoveryコネクタが処理する.xsfファイルに基づいて、AssetCenterデータベース内でレコードを挿入または更新できます。

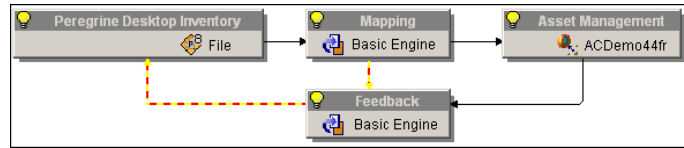
### pdi\pdi8ac44\pdia.scnシナリオでの処理レポートの使用

- HP Desktop Discoveryコネクタ
- Asset Managementコネクタ

このシナリオでは、**Feed back**という名前のマッピングボックスがMappingマッピングボックスによって生成された処理レポートを以下の送信先に送ります。

**Feedback**マッピングボックスの中には、2つのマッピングがあります。

- マッピングボックスの処理レポートと、**ProcessReportFromMapping**、およびHP Desktop Discoveryソースコネクタドキュメントタイプ、**DirectoryPoolerAction**間のマッピング



- Asset Managementコネクタの処理レポートと、**ProcessReportFromUpdate**、およびHP Desktop Discoveryソースコネクタの**SuccessReportMapping** ドキュメントタイプ間のマッピング

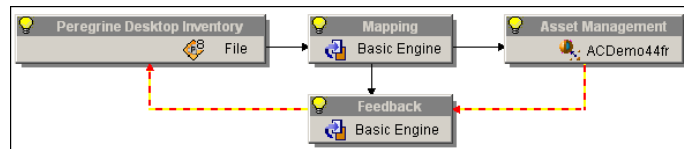


表 5.2. Mappingマッピングボックスに生成された**ProcessReportFromMapping**処理レポートと、HP Desktop Discoveryコネクタによって取り込まれる**SuccessReportMapping**ドキュメントタイプ間のマッピングの詳細

**SuccessReportMapping** ドキュメントタイプの要素 処理レポートまたはスクリプト要素

SuccessReportMapping (ルートノード)

コメント：ドキュメントは、マッピングボックスによって一部または全部拒否された場合のみ生成されます。この動作は、**Feedback**マッピングボックスの**SuccessReportMapping**生成用ドキュメントタイプのレベルで定義されます。

Path `[$ParentDoc$.UrlFileInfo.Path]`

HP Desktop Discoveryコネクタによって生成される**Inventory**ドキュメントタイプの**UrlFileInfo.Path**フィールドを取得できるようにします。このフィールドは、コネクタによって処理される.xsfファイルの名前に一致します。

```
Success
    if [ErrorNumber] = 0 then
        RetVal = [Success]
    else
        RetVal = 0
    end if
```

## SuccessReportMappingドキュメントタイプまたはスクリプト要素

Comment: プーリアンフィールド

- 値'0'は、ドキュメントの一部または全部がマッピングボックスにより拒否されたことを意味します。
- 値'1'は、ドキュメントがマッピングボックスにより正常に処理されたことを意味します。

表 5.3. ProcessReportFromUpdate Asset Managementコネクタによって生成される処理レポートと、HP Desktop Discoveryコネクタによって取り込まれるSuccessReportMappingドキュメントタイプ間のマッピングの詳細

## SuccessReportUpdateドキュメントタイプまたはスクリプト要素

SuccessReportMapping (ルートノード)  
if [Pending] = 1 then  
PifIgnoreDocumentMapping  
end if

Path [\$ParentDoc\$. \$ParentDoc\$.UrlFileInfo.Path]

コメント: HP Desktop Discoveryコネクタにより生成されるInventoryドキュメントタイプのFileInfo.FileNameフィールドを取得できるようにします。このフィールドは、コネクタによって処理される.xsfファイルの名前に一致します。

Success if [ErrorNumber] = 0 then  
RetVal = [Success]  
else  
RetVal = 0  
end if

Comment: プーリアンフィールド

- 値'0'は、ドキュメントの一部または全部がAsset Managementコネクタにより拒否されたことを意味します。
- 値'1'は、ドキュメントがAsset Managementコネクタにより正常に処理されたことを意味します。

### 注意:

#### \$ParentDoc\$変数の使用

- 表記法 [\$ParentDoc\$. field] により、処理されるドキュメントの親ドキュメント内のフィールド値を、取得できるようになります。
- 表記法 [\$ParentDoc\$. \$ParentDoc\$. フィールド] により、処理されるドキュメントの親ドキュメントの親ドキュメント内のフィールド値を、取得できるようになります。
- その他

## HP Desktop Discoveryコネクタによって処理された.xsfファイルへの処理レポートの影響

各処理レポートにより、HP Desktop Discoveryコネクタは、処理レポートに関するドキュメントに対応する.xsfファイルに特定のアクションを実行できるようになります。処理される各ドキュメントの**FileInfo.FileName**フィールドを使用すると、ドキュメントに対応するFSFファイルを識別できます。

この特定アクションは、HP Desktop Discoveryコネクタの設定時に選択されません。

---

例：

.xsfファイルの管理オプションは以下の通りです。

- ドキュメントの処理に成功した場合、ドキュメントに対応する.xsfファイルは元のフォルダから削除されます。
- ドキュメントの処理に失敗した場合、ドキュメントに対応する.xsfファイルは、**Failure**フォルダに移されます。

シナリオによってドキュメントの処理を実行した後は、**Failure**フォルダを開くことによって.xsfファイルを取得できます。これらのファイルには、**Asset Management**アプリケーションに適切に転送されなかったデータを含みます。

ドキュメントの一部または全部が拒否される時に起こった問題を確認するには、**Scenario Builder**のドキュメントログを参照してください。

対応するドキュメントが**Asset Management**コネクタによって適切に処理された（**Success**フィールドの値が"1"）.xsfは、HP Desktop Discoveryによって元のフォルダから削除されます。

---

### 処理後のアクション

特定のコネクタの場合、エラーまたは成功の管理について事前に定義されたポリシーがあります。

このエラー管理ポリシーは、**Define post-processing actions**という名前のコネクタ設定ページと、**Manage process reports**ウィザードでアクセスできます。

すべてのコネクタでこの機能が有効になっているとは限りません。

ソースコネクタが処理レポートを使用するために、ソースコネクタが**SuccessReport**ドキュメントタイプを使用可能にする必要があります。

**ProcessReport**処理レポートと、**SuccessReport**ドキュメントタイプ間のマッピングにより、ソースコネクタは、自分がドキュメントに転換したデータの抽出元のファイルに、特定のアクションを実行することができます。

**Manage processing reports**ウィザードでは、処理レポートとソースコネクタの**SuccessReport**ドキュメントタイプ間のマッピングを、自動的に作成できます。

## 処理レポートと処理後のアクション

コネクタが処理レポートを使用するためには、以下の条件が満たされていなければなりません。

- コネクタは、**SuccessReport**を使用可能なドキュメントタイプとして発行する。

このドキュメントタイプは、処理レポート（**ProcessReport**ドキュメントタイプ）内に含まれる要素をマップする役目を果たします。

**SuccessReport**ドキュメントタイプを使用できるコネクタは以下の通りです。

- XMLコネクタ
  - Textコネクタ
  - SAP IDOCコネクタ
  - HP Desktop Inventoryコネクタ
  - E-mailコネクタ（受信）
  - MQSeriesコネクタ
- コネクタの設定ウィザード内に**Define post-processing actions**ページが含まれている。

このページでは、コネクタが**SuccessReport**ドキュメントを取り込んだ後の、ドキュメント処理後のアクションを指定できます。

**例**：**Define post-processing actions**ページでは、ターゲットコネクタが拒否した全ドキュメントを、**error**フォルダ内に移動させるようにコネクタを設定できます。

---

### 注意:

上記の2つの条件を満たさないコネクタも、処理レポートを使用できます。しかし、**Manage processing reports**ウィザードを使用することはできません。

---

## SuccessReportドキュメントタイプの内容

**SuccessReport**ドキュメントタイプの内容はコネクタに応じて変化します。

ドキュメントタイプの詳細は以下の表の通りです。



コネクタ	要素	情報	フィールドタイプ
■ XMLコネクタ	☒ SuccessReport	処理レポートのルート ノード	
	☒ Success	ファイルの処理ステータス（成功または失敗）	ブーリアン
	🌈 UrlFileInfo	処理されたドキュメントの情報を含む構造体	
	☒ Path	ファイルのパス	テキスト

コネクタ	要素	情報	フィールドタイプ
■ E-mailコネクタ (受信)	☒ SuccessReport	処理レポートのルート ノード	
	☒ MailInfo	処理されたメッセージの情報を含む構造体	
	☒ UniqueID	メッセージのID	テキスト

コネクタ	要素	情報	フィールドタイプ
■ MQSeriesコネクタ	☒ SuccessReport	処理レポートのルート ノード	
	☒ Success	ファイルの処理ステータス（成功または失敗）	ブーリアン
	🌈 MessageInfo	処理されたメッセージの情報を含む構造体	
	☒ MsgID	メッセージのID	整数
	☒ PutDate	メッセージ処理の日時	日付

### Define post-processing actionsページを使用する

処理レポートは、ファイルからドキュメントを生成するコネクタが、ファイル処理の成功または失敗時にアクションを実行できるようにします。

- ファイルを元のフォルダに保存する
- ファイルを元のフォルダから削除する
- ファイルを別のフォルダに移動させる

例：**error**フォルダ

全コネクタ用に、以下の処理後のアクションがあります。

### Define post-processing actionsページを表示する

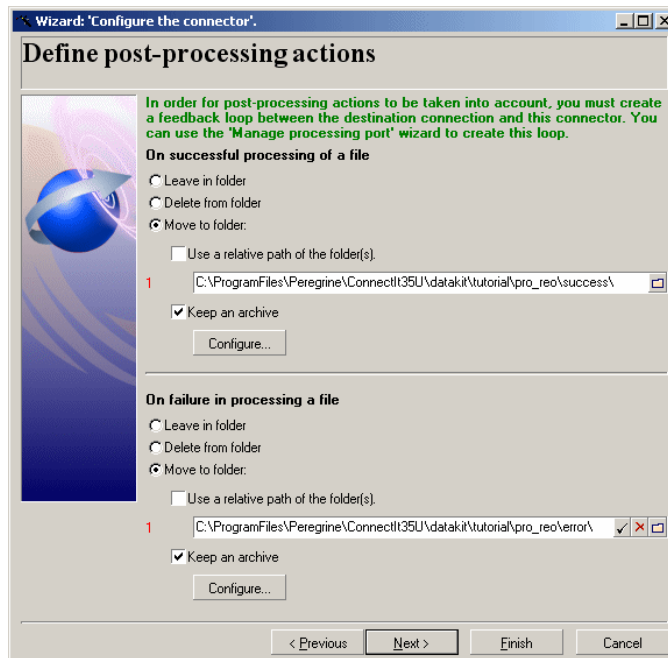
- 1 このページを使用できるコネクタを選択します。

例：**Delimited text**コネクタ

- 2 **Tools/Configure (F2)** を選択し、設定ウィザードを起動します。

- 3 **Define post-processing actions** ページが表示されるまで、**Next** をクリックします。

次のスクリーンショットはXMLコネクタの**Define post-processing actions** ページです。



### 処理レポートの取り扱いに関する基本方針

処理後のアクションは、コネクタのセッションを閉じるときにすべて適用します。以下のように、処理を行います。

- 1 セッション中に、コネクタによって取り込まれるドキュメントタイプ **SuccessReport** ドキュメントの情報が徐々に保存および更新されます。
- 2 セッションを閉じるとき、処理後のアクションは1つ以上の**SuccessReport** ドキュメントが受信されたリソースすべて（ファイル、電子メール、メッセージなど）に適用されます。

不完全な**SuccessReport** ドキュメントが生成されると、そのドキュメントを取り込むときにエラーが出力されます。冗長モードの場合、リソースに対して行われたアクションがログファイルに記録されます。 **Scenario Builder** は冗長モードがデフォルトで有効であり、**conitsvc**（非グラフィックモードのConnect-Itアプリケーション）は非冗長モードがデフォルトです。

## Manage processing reportsウィザード

**Manage processing reports**ウィザードでは、ソースコネクタの生成用ドキュメントタイプ用に以下の内容を作成します。

- このドキュメントタイプを取り込むターゲットコネクタと、ソースコネクタ間のフィードバックループ  
このフィードバックループは、ターゲットコネクタによって生成される処理レポートの情報と、ソースコネクタの**SuccessReport**ドキュメントタイプの間をマップします。
- マッピングボックスとソースコネクタ間のフィードバックループ（場合による）

## Manage process reportsウィザードを使用する

- 1 Scenario Builderを起動します。
- 2 ソースコネクタが**SuccessReport**ドキュメントタイプを発行するシナリオを開きます。  
このドキュメントタイプを使用可能にするコネクタを見つけるには、マニュアル『コネクタ』の「処理後のアクション [献 239]」の節を参照してください。
- 3 フィードバックループを作成したいドキュメントタイプを生成するソースコネクタを選択します。
- 4 **Tools/Wizard/Manage processing reports**を選択します。
- 5 **Select a source document type**ページで、どのドキュメントタイプ用にフィードバックループを作成するかを指定します。
- 6 **Select a destination connector**ページでは、前ページで選択されたソースドキュメントタイプの処理レポートを、どのターゲットコネクタ用に取得するかを指定します。
- 7 **Force the production of a processing report from a mapping box linked to the source connector**オプションを、必要に応じて選択します。
- 8 **Finish**をクリックします。

## 入門プログラム

本節の入門プログラムでは、XMLソースコネクタとAsset Managementターゲットコネクタを使用するシナリオで、**Manage processing reports**ウィザードを使用する方法を説明します。

この入門プログラムに必要なデータは、「[Connect-Itインストール先フォルダ]\datakit\tutorial\pro\_rep」フォルダ内にあります。

### 前提条件

この入門プログラムを使用するには以下の条件を満たさなければなりません。

- 入門プログラムのフォルダにあるpro\_rep.scnシナリオを開く

- AssetCenter 4.1または4.2のテスト用データベースにアクセスできる

## 入門プログラム用シナリオの説明

入門プログラム用シナリオでは：

- 入門プログラムフォルダのfilesサブフォルダにある.xmlファイルを基に、XMLソースコネクタはドキュメントを生成します。
- マッピングボックスはこれらのドキュメントを取り込み、Asset Managementコネクタが取り込めるようにドキュメントを生成します。
- Asset Managementコネクタは、AssetCenterのテスト用データベースの**amAbsence**テーブル内にレコードを作成します。

## XMLコネクタとAsset Managementコネクタ間のマッピング

XMLコネクタの**amAbsence**ドキュメントタイプと、Asset Managementコネクタの**amAbsence**ドキュメントタイプ間のシナリオのマッピングは、以下の表の通りです。

ターゲットドキュメントタイプの要素	ソースドキュメントタイプの要素	マッピングスクリプト
amAbsence	amAbsence	<pre>if [Nature] = "" then   PifRejectDocumentMapping("   Document rejected: missing nature") end if</pre> <p>このスクリプトによって、XMLコネクタが生成するドキュメントの<b>Nature</b>フィールドが空の場合、ドキュメントを拒否できるようになります。</p>
AccountingType	AccountingType	AccountingType
Nature	Nature	Nature (照合更新キー)
PhoneContact	PhoneContact	PhoneContact (照合更新キー)

## 入門プログラム用ファイル

入門プログラム用フォルダのfilesサブフォルダには、以下の.xmlファイルが含まれています。

- success.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<amAbsence>
<AccountingType>Convention</AccountingType>
<bArchived>1</bArchived>
```

```
<dtBack>2002-06-14 18:00:00</dtBack>
<dtLastModif>2002-07-12 05:30:32</dtLastModif>
<dtOut>2002-06-14 09:00:00</dtOut>
<dtValidation>2002-01-15 18:00:00</dtValidation>
<fDays>1</fDays>
<Field1>Test</Field1>
<Nature>Meeting</Nature>
<PhoneContact>06.12.11.81</PhoneContact>
<Reason>San Diego Convention</Reason>
<seValidated>1</seValidated>
</amAbsence>
```

シナリオの全コンポーネントはこのファイルの処理に成功するはずですが、またシナリオのテスト後、このファイルはsuccessフォルダに移されます。

- src\_fail.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<amAbsent>
<AccountingType>Convention</AccountingType>
<bArchived>1</bArchived>
<dtBack>2002-06-14 18:00:00</dtBack>
<dtLastModif>2002-07-12 05:30:32</dtLastModif>
<dtOut>2002-06-14 09:00:00</dtOut>
<dtValidation>2002-01-15 18:00:00</dtValidation>
<fDays>1</fDays>
<Field1>Field1</Field1>
<Nature>Meeting</Nature>
<PhoneContact>06.12.11.81</PhoneContact>
<Reason>San Diego Convention</Reason>
<seValidated>1</seValidated>
</amAbsent>
```

このファイルはXMLコネクタに拒否されます。これは**amAbsent**構造が、コネクタに使用されるpro\_rep.dtdDTD内で定義されている構造に一致しないためです。

シナリオのテスト後に、このファイルはerrorフォルダに移されます。

- map\_fail.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<amAbsence>
<AccountingType>Convention</AccountingType>
<bArchived>1</bArchived>
<dtBack>2002-06-14 18:00:00</dtBack>
<dtLastModif>2002-07-12 05:30:32</dtLastModif>
<dtOut>2002-06-14 09:00:00</dtOut>
<dtValidation>2002-01-15 18:00:00</dtValidation>
```

```
<fDays>1</fDays>
<Field1>Test</Field1>
<Nature></Nature>
<PhoneContact>06.12.11.81</PhoneContact>
<Reason>San Diego Convention</Reason>
<seValidated>1</seValidated>
</amAbsence>
```

このファイルはマッピングボックスに拒否されます。**<Nature>**要素が空であるためです。

シナリオのテスト後に、このファイルはerrorフォルダに移されます。


- dest\_fail.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?>
<amAbsence>
<AccountingType>Convention</AccountingType>
<bArchived>1</bArchived>
<dtBack>2002-06-14 18:00:00</dtBack>
<dtLastModif>2002-07-12 05:30:32</dtLastModif>
<dtOut>2002-06-14 09:00:00</dtOut>
<dtValidation>2002-01-15 18:00:00</dtValidation>
<fDays>1</fDays>
<Field1>Test</Field1>
<Nature>Meeting</Nature>
<PhoneContact></PhoneContact>
<Reason>San Diego Convention</Reason>
<seValidated>1</seValidated>
</amAbsence>
```

このファイルはAsset Managementコネクタに拒否されます。照合更新キー（コネクタの取り込み用ルール）として選択された**<PhoneContact>**要素が空であるためです。

シナリオのテスト後に、このファイルはerrorフォルダに移されます。

### 手順1 - 用例シナリオのXMLコネクタの設定

- 1 シナリオのXMLコネクタを選択します。
- 2 connector configurationウィザードを起動します。
- 3 **Select a processing mode**ページで**Read**オプションを選択します。
- 4 **Select a connection protocol**ページで**Local/network file(s)**オプションを選択します。
- 5 **Choose a file or folder**ページで、
  - 1 **Read files**オプションを選択します。
  - 2  をクリックし、入門プログラム用フォルダのfilesサブフォルダの場所を指定します。

- 6 **Define post-processing actions** ページで、**Move to folder** オプションを選択します。  
On successful processing of a file には、success サブフォルダのパスを入力します。  
**On failure in processing a file** には、error サブフォルダのパスを入力します。
- 7 **Choose a DTD/XSD** ページでは、入門プログラム用フォルダの pro\_rep.dtd DTD のパスを指定します。
- 8 **Finish** をクリックします。

#### 手順2 - 用例シナリオの Asset Management コネクタの設定

- 1 シナリオの Asset Management コネクタを選択します。
- 2 Start the connector configuration ウィザードを起動します。
- 3 **Define the connection parameters** ページで、AssetCenter テスト用データベースの接続パラメータを入力します。
- 4 **Finish** をクリックします。

#### 手順3 - Manage processing reports ウィザードの使用

- 1 XML コネクタを選択します。
- 2 **Tools/Wizard/Manage processing reports** を選択します。
- 3 **Select a source document type** ページで、**amAbsenceSrc** ソースドキュメントタイプを選択します。
- 4 **Next** をクリックします。
- 5 **Select a destination connector** ページで、Asset Management コネクタを選択します。
- 6 **Advanced options** ページで、**Force the production of a processing report from a mapping box linked to the source connector** を選択します。
- 7 **Finish** をクリックします。

ウィザードは、XML コネクタと Asset Management コネクタ間にマッピングボックスを作成します。このマッピングボックス内ではマッピングが作成されます。マッピングは以下の表の通りです。

XMLコネクタの取り込み用ドキュメントタイプ      Asset Managementコネクタが生成する処理レポートの要素

### SuccessReportの要素

```
Success                    if [ErrorNumber] = 0 then  
                          RetVal = [Success]  
                          else  
                          RetVal = 0  
                          end if
```

コメント：ブーリアンフィールド

- 値 '0' は、ドキュメントの一部または全部がAsset Managementコネクタにより拒否されたことを意味します。
- 値 '1' は、ドキュメントがAsset Managementコネクタにより正常に処理されたことを意味します。

UrlFileInfo                    [\$ParentDoc\$. \$ParentDoc\$. UrlFileInfo.Path]

XMLコネクタの生成用ドキュメントタイプ **amAbsence**の **UrlFileInfo.Path** フィールドを取得できるようにします。このフィールドは、XMLコネクタに読み取られる.xmlファイルの名前に当たります。



#### 警告:

Manage process reportsウィザードを使用する場合、*\$ParentDoc\$*関数で参照されるフィールドは、生成用ドキュメントタイプに自動的に追加されます。ソースコネクタによって生成されるドキュメントタイプを編集して、*\$ParentDoc\$*関数で使用される構成要素に追加する必要があります。

#### 手順4 - Manage processing reportsウィザードで作成されたフィードバックループのテスト

- 1 XMLコネクタを選択します。
- 2 ▶をクリックします。  
scenario diagramでは、🔴アイコンがシナリオのコンポーネント上に表示されるはずですが、このアイコンは、.xmlファイル処理の失敗を意味します。Scenario BuilderのDocument logタブを選択し、生成されたエラーメッセージを確認してください。
- 3 successサブフォルダを開き、success.xmlファイルがあるかどうか確認します。
- 4 errorサブフォルダを開き、dest\_fail.xml、map\_fail.xmlとsrc\_fail.xmlファイルがあるかどうか確認します。



#### 注意:

Manage process reportsウィザードで作成されたフィードバックループを使用する場合、フィードバックマッピング内で使用されたすべての要素（処理後に移動する処理済みファイルの名前）は、生成用ドキュメントタイプに自動的に追加されます。



## 処理レポート - 機能概要

すべてのコネクタは、処理レポートをドキュメントタイプとして生成してその動作を選択できます。このレポートは、コネクタによって生成されるか取り込まれるドキュメントを分析します。

例えば、Asset Managementソースコネクタは、**amAsset**と**ProcessReport**という2つの生成用ドキュメントを生成します。生成された処理レポートが生成レポートの場合、レポートはAsset Managementコネクタによって生成されたドキュメントを分析します。

反対に、Asset Managementソースコネクタがドキュメントタイプ**amBudget**を取り込んで、**ProcessReport**ドキュメントを生成します。生成された処理レポートが取り込みレポートの場合、レポートはAsset Managementコネクタによって取り込まれたドキュメントを分析します。

## 処理レポートのフィルタ実行

コネクタによって生成されるか取り込まれるドキュメントタイプに従って、処理レポートによって生成されたデータにフィルタを実行できます。

Element	Type
Date	Date and time
DocumentType	Text
DocumentTypeD	Text
ErrorNumber	Integer (32-bit)
Ignored	Integer (32-bit)
Pending	Integer (32-bit)
Success	Integer (32-bit)
WarningNumber	Integer (32-bit)

**Processing report type**

Consumption  Production

**Processing report production parameters**

Filter on document type SuccessReportDst

Filter on parent document type SuccessReportDst

Filter condition on document status: No filter

**Message filtering**

Filtering condition for messages:

フィルタは、**Processing report production parameters**枠で使用できます。

ドキュメントタイプでフィルタを実行するには：

- 1 **Filter on document type**を選択します。
- 2 ドロップダウンリストで、フィルタ実行対象の取り込み用または生成用ドキュメントタイプを選択します。

この場合、処理レポートは、選択したドキュメントタイプの取り込み時または生成時にのみ生成されます。

- 3 必要であれば、**Warning, Field reject, Reject**のドキュメントステータスでフィルタ条件を選択します。

**Filter on parent document type**オプションは、生成タイプ処理レポートに対してのみ有効になります。このオプションが特に役立つのは、ドキュメントを取り込み時に生成するコネクタ（Web Service、SAP BAPI）に対してです。この場合、フィルタは生成用ドキュメントタイプを対象としませんが、ドキュメントの生成を引き起こす取り込み用ドキュメントタイプは対象とします。

ドキュメントタイプに適用されるフィルタに加えて、ドキュメントログに表示されるメッセージにフィルタを適用できます。

メッセージにフィルタを適用するには：

- 生成用処理レポートに**Logs**コレクションを追加します。
- コレクションを選択します。
- **Message filtering**枠で、選択可能なフィルタからフィルタを選択します（**Filtering condition for messages**フィールド）。

フィルタ条件の意味については、「ドキュメントログ [ 献 223]」の節を参照してください。

## シンタックス

リモートドキュメントに加えてマッピングスクリプトのコネクタに含まれる情報を使用する場合は、以下に示す2つの変数を選択できます。

- `$ParentDoc$`
- `$LinkedDoc$`

`$ParentDoc$`変数は、取り込み用親ドキュメントの参照に使用できます。この変数の詳細については、本章の「処理レポート - 使用例 [ 献 236]」の節を参照してください。

`$LinkedDoc$`変数は、取り込み用処理レポートにリンクされたドキュメントの参照に使用できます。処理レポートは、ドキュメントの処理時に生成されます。この変数によって呼び出される、リンクされたドキュメントは、処理レポートの生成を引き起こすドキュメントです。

## 生成用ドキュメントタイプのテスト

1つのシナリオ内でコネクタが複数の生成用ドキュメントタイプを使用する場合、各生成用ドキュメントタイプをテストすることをお勧めします。

ソースコネクタの生成用ドキュメントタイプをテストするには：

- 1 ソースコネクタを開きます。
- 2 **Document types**タブを選択します。
- 3 テストするドキュメントタイプ以外の、生成用ドキュメントタイプのチェックボックスを全てオフにします。

複数のドキュメントタイプをテストする場合は、ドキュメントタイプを複数選択したまま次の手順に進みます。

- 4 ▶をクリックして、または**Tools**メニューの**Produce**メニューを選択してドキュメントタイプの生成を起動します。
- 5 ドキュメントログの内容を読み、ソースコネクタがドキュメントを生成する際にどのような問題が発生したかを確認します。

#### 注意:

Scenario Builderのオプションの、(Edit/Options) **Number of documents to produce in a test production of documents**オプションで、テスト時に生成するドキュメントの数を指定できます。

このオプションは、生成用ドキュメントタイプをテストする際に自動的に使用されます。しかし、シナリオがWindowsのサービスとして実行されると、このオプションは自動的に無効になります。

## マッピングスクリプトのデバッグ

Basicスクリプトのシンタックスエラーの場所を見つけるのが困難な場合もあります（マッピング、関連する要素）。このため、全スクリプトを記述してまとめてテストするのではなく、1つずつスクリプトをテストすることをお勧めします。

## キャッシュファイルを使用する

コネクタ用のキャッシュファイルには、コネクタの使用可能なドキュメントタイプの情報が含まれています。

例:

データベース型のコネクタを開くと、コネクタは設定で指定したデータベースの全テーブルの詳細を取得します。キャッシュファイルを使用すると、最後にコネクタを開いた際に作成されたキャッシュファイル内のデータ記述を使用するため、データ記述を新たに取得する必要がなくなります。

シナリオのテストやデバッグ段階でシナリオのコネクタを頻繁に開閉する場合、この機能は非常に便利です。

キャッシュファイルは以下のコネクタで使用できます。

- Action Request Systemコネクタ
- Asset Managementコネクタ
- ServiceCenterコネクタ
- HP Network Discoveryコネクタ
- LDAPコネクタ

- データベースコネクタ
- Lotus Notesコネクタ
- 全てのインベントリコネクタ

コネクタが外部アプリケーションに接続せずに、キャッシュファイルを使用するように設定するには：

- 1 **Configure the connector**ウィザードの**Configure cache**ページで、**Use cache file**を選択します。
- 2 コネクタの使用可能なドキュメントタイプの詳細を、キャッシュファイルに含めるために、コネクタを開きます。  
注意：コネクタを最初に開く際に、キャッシュの使用を示すアイコンは、コネクタのボックス上には表示されません。
- 3 コネクタを一旦閉じてから、再び開きます。  
この時点で、コネクタは外部アプリケーションには接続せず、キャッシュファイルから使用可能なドキュメントタイプを発行します。

#### 注意:

キャッシュファイルを使用するコネクタを開くと、黄色の電球のアイコンのかわりに、データベースを表すアイコンが表示されます。

## 図 5.11. コネクタ - キャッシュ使用を示すアイコン



### キャッシュファイルの内容を消去する

キャッシュファイルの内容を消去するには：

- 1 コネクタを開きます。
- 2 **Scenario**メニューで、**Delete the caches**を選択します。

1つのみのキャッシュファイルの内容を削除するには、**Tools**メニューの**Cache/Delete the cache**を選択します。

コネクタを次回開くと、コネクタは外部アプリケーションに接続し、キャッシュファイルの内容と外部アプリケーション内の情報の同期をとります。

#### 警告:

キャッシュファイルの同期をとるには、Scenario Builderのオプションで**Work offline**を**No**にする必要があります。

## キャッシュファイルの内容と外部アプリケーション内の内容の同期をとる

キャッシュファイルの内容と、外部アプリケーション内の内容の同期をとるには：

- 1 シナリオのコネクタを開きます。
- 2 **Scenario**メニューで、**Synchronize the caches**を選択します。  
1つのキャッシュファイルの同期をとるには、**Tools**メニューで**Cache/Synchronize the cache**を選択します。
- 3 **Connect-It**がコネクタの使用可能なドキュメントタイプを取得するのを待ちます。  
同期化が終了すると、コネクタの発行する使用可能なドキュメントタイプは、外部アプリケーションの内容に一致ようになります。




**警告:**

キャッシュファイルの同期をとるには、Scenario Builderのオプションで**Work offline**を**No**にする必要があります。

## オフラインで作業する

オフラインモードを使用すると、シナリオのコネクタをそれらの外部アプリケーションに接続せずに作業することができます。

オフラインモードを使うには、コネクタを初めて開いた後にをクリックします。モードが変更されたことがダイアログボックスに表示されます。

オフラインモードは、シナリオのコネクタ用にキャッシュファイルを自動的に作成します。

「ワークオフライン」モードがまだ有効である間にコネクタを閉じて再度開くと、コネクタではそれらのキャッシュファイルの内容が使用され、ドキュメントタイプが使用可能になります。



**注意:**

オフライン作業中にコネクタを開くたびに、コネクタキャッシュが有効になり、消えた電球のアイコンの横に、データベースを表すアイコンが表示されます。

## 図 5.12. コネクタ - オフラインセッションを示すアイコン



### 重要項目:

オフラインモードでは、ソースからデータを取得することはできません。また、生成用ドキュメントタイプのeditウィンドウでのソースデータのプレビュー機能も、使用できません。このモードはマッピングを定義するためには使用できません。

## テストモードの有効化

- ターゲットコネクタがトランザクションをサポートする場合、データがテストモードで挿入されても、トランザクションのロールバック（データ挿入前の状態への回帰）が実行されます。これにより、ターゲットアプリケーションのデータを変更することなく、ドキュメントの取り込みをテストできるようになります。
- ターゲットコネクタがトランザクションをサポートしない場合、データはターゲットアプリケーションへは送信されません。このためドキュメントの生成とマッピングのテストは実行できますが、ドキュメントの取り込みをテストすることはできません。

### 注意:

テストモードが有効であることがダイアログボックスに表示されます。


## シナリオのトラッキングをServiceコンソールで管理する

サービスコンソールを使用すると、シナリオのトラッキング管理用の以下の操作を実行できます。

- コネクタの設定を変更する
- シナリオのスケジューラを編集する
- Connect-Itログを参照する
- サービスに関連するLOG（ログ）ファイルを参照する

## コネクタの設定の変更

作成したサービスに関連するシナリオのコネクタの設定を変更するには：

- 1 シナリオに対応するサービスを選択します。
- 2 **Configure**をクリックします。
- 3 リスト内で、設定するコネクタをダブルクリックするか、をクリックします。

- 4 各コネクタの**Configure the connector**ウィザードの各ページに変更事項を入力し、**Validate**で検証します。  
最後のコネクタの設定を終了すると、**Scenario Builder**は自動的に終了します。

## スケジューラの編集

作成したサービスに関連するシナリオのスケジューラを編集するには：

- 1 シナリオに対応するサービスを選択します。
- 2 **Scheduling**をクリックします。
- 3 **Connect-It**の起動と**Edit scheduling**ウィンドウの表示を待機します。
- 4 **Edit schedulers**をクリックして、シナリオスケジューラを設定します。  
**Edit scheduling**をクリックして、各コネクタに関連付けられたスケジューリングを定義します。  
コネクタの編集の詳細については、本章の「スケジュールの作成 [ 献 181]」の節を参照してください。

## Connect-Itログの参照

**Scenario Builder**では2つのログを参照できます。

- **Connect-Itログ**  
このログは、シナリオの起動時に**Connect-It**で実行された全アクション（シナリオの非シリアル化、外部アプリケーションへのコネクタの接続、など）を記述します。
- **ドキュメントログ**  
このログでは、シナリオ内のツールによって生成されたか取り込まれたドキュメントの詳細を確認できます。また、ドキュメントの処理中に発生する可能性がある特定の問題の原因を突き止めることができます。

**Scenario builder**のログ用のタブを表示するには：

- 1 シナリオに対応するサービスを選択します。
- 2 **Monitors**をクリックします。

**Scenario builder**が、シナリオの**diagram**と**Manage saved sessions**タブと共に起動します。



**注意:**

読み取り専用のセッションのリストは変更しないでください。

## ログファイルの調査

Connect-Itサービスが起動するたびに、LOGファイルが使用可能になります。デフォルトで、このファイルにはサービス名が付けられています（例：test.log）。LOGファイルを調査するには、以下の手順に従います。

- 1 シナリオに対応するサービスを選択します。
- 2 **Log file**をクリックします。

シナリオのログファイルは、オペレーティングシステムで.logファイルに関連付けられたアプリケーション内で開きます。



### 注意:

サービスのログファイルに別の名前を指定できます（**Log file**フィールド）。

サービスの設定に関する情報は、cit.svcファイルに保存されます（*SvcLogFile*設定）。

---

## シナリオの性能を最適化する

本節では、シナリオのツールがドキュメント処理に費やす時間を短縮することによって、シナリオの性能を最適化する方法を説明します。

### 実行結果を使ってドキュメント処理の時間を評価する

Scenario BuilderのグラフィカルインタフェースのConnect-It logs、またはログファイルでは、以下の内容に関する実行結果を取得できます。

- ソースコネクタがドキュメントの生成に費やした時間
- マッピングボックスがドキュメントの変換に費やした時間
- ターゲットコネクタがドキュメントの取り込みに費やした時間
- 拒否されたドキュメントの数

例：Asset Managementコネクタの実行結果は、製品のテーブルのレコードに対応するドキュメントが処理されなかったことを示します。

実行結果とモニタ内で実行結果を表示する方法については、「統合シナリオのインプリメンテーション [ 献 59 ]」の章の「管理モニタの定義 [ 献 159 ]」の節を参照してください。

### コンポーネントのデータ処理の実行結果を取得する

- 1 シナリオを開きます。
- 2 モニタを設定します（**Monitors/ Configure monitors**メニュー）。
- 3 シナリオの全コネクタを開きます（**Ctrl+F4**）。



- 4 シナリオのソースコネクタを選択します。
- 5 ▶をクリックします (**F5**)。
- 6 ソースコネクタ、ターゲットコネクタ、またはマッピングボックス上にマウスのポインタを置きます。

**Statistics**セクションを含む状況依存ウィンドウが表示されます。



**注意:**

これらのデータは、scenario diagramの下にあるConnect-It logタブ内にも表示されます。

### 実行結果の分析

Connect-Itログ内に表示される以下のデータは、Action Request Systemコネクタをソースとして使用し、LDAPコネクタをターゲットとして使用し、マッピングボックスを使用するシナリオの実行結果です。

```
Statistics for the 'Action Request System (fdcitrv01)' connector (session: 26m
in 57.310s / API: 26min 04.550s)
Document(s) consumed: 7143
Document(s) rejected: 1
Records(s) inserted: 1199
Records(s) updated: 5943
Statistics for the 'LDAP (mail-sd.HP.com)' connector (session: 47.628s / API: 3
5.765s)
Document(s) produced: 7143
Statistics for the 'Mapping (Basic engine)' connector (Session: 01.404s)
Script(s) analyzed: 14286
Document(s) consumed: 7143
Document(s) produced: 7143
```

作成された実行結果は以下のように分析されます。

- Action Request Systemコネクタによるドキュメントの処理 = 27分、または1秒につき4.4ドキュメント  
処理時間のうち、Action Request Systemに関連するAPIにかかった時間が26分で、Connect-Itでの処理にかかった時間は1分です。  
APIは、ネットワークの応答時間、'commits'の実行、データベースの健全性の管理などを含みます。
- LDAPコネクタによるドキュメントの処理 = 48秒、または1秒につき150ドキュメント  
処理時間のうち、LDAP APIでかかった時間が36秒で、Connect-Itでの処理にかかった時間は12秒です。
- マッピングボックスによるドキュメントの処理 : 2秒、または1秒につき5100ドキュメント

この時間は、Connect-Itでのドキュメント処理の時間に相当します。

### ドキュメント処理の速度の例

ドキュメント処理の速度の例は以下の通りです。

- データベースコネクタ  
1500から2000ドキュメント/秒
- ServiceCenterコネクタ  
450ドキュメント/秒
- AssetCenterコネクタ  
400ドキュメント/秒

## ドキュメントの生成を改善する

コネクタのドキュメント生成を改善するには、ソースアプリケーションから来るデータをより迅速に取得することが必要です。

本節では、ドキュメント生成にかかる時間を短縮する方法を説明します。

### ソースデータサーバの最適化

ドキュメント生成の性能は、ソースデータサーバの使用方法与サーバの接続方法に左右されます。

Connect-Itでは、生成用に大量のリソースを使用しません。生成時に実行する転換またはデータ処理は多くありません。

結果を改善するためには、以下の内容を確認する必要があります。

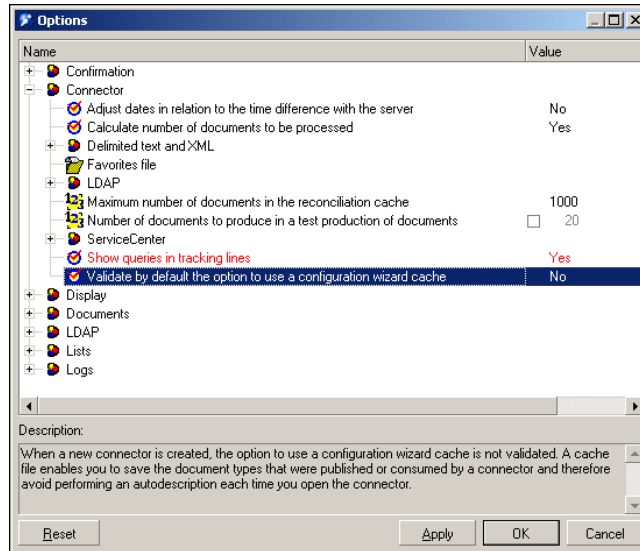
- サーバのデータソースの読み込み時間  
読み込み時間はサーバの技術的な性能（プロセッサ、使用可能なメモリなど）に左右されます。
- ネットワーク接続（WAN、LAN）

### コネクタが実行するクエリの検証

ソースデータベースへ伝達されるクエリをトラッキングするには：

- 1 Scenario Builderを起動します。
- 2 **Edit/ Options**を選択します。
- 3 **Connector**ノードを全レベル表示します。
- 4 **Show queries in tracking lines**オプションで、**Yes**を選択します。

5 **OK**をクリックします。



このオプションが選択されると、シナリオのソースコネクタが実行するクエリに対応するメッセージが、ドキュメントログ内に表示されます。

例：

```
SELECT AcctCode,AssetTag,BarCode,dDispos,DisposProfit,dtListPriceCv,Field2,FullName FROM amAsset
```

この情報により、以下の操作が可能になります。

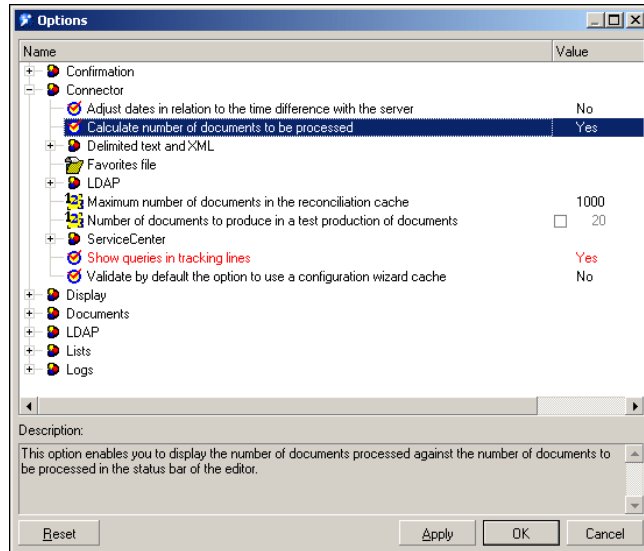
- 指定したドキュメントタイプと生成用ルールに従って、クエリが生成されているかどうかを確認する
- 別のツールを使ってクエリを再起動し、クエリ実行に必要な時間を監視する

### 生成するドキュメント数の計算

ソースコネクタが生成するドキュメントの数を計算するには：

- 1 Scenario Builderを起動します。
- 2 **Edit/ Options**を選択します。
- 3 **Connector**ノードを全レベル表示します。
- 4 **Calculate number of documents to be processed**オプションで、**Yes**を選択します。

5 **OK**をクリックします。



このオプションを使用すると、ソースコネクタが処理するドキュメントの数を表示する進行状況バーが、Scenario Builder内に表示されます。

図 5.13. ドキュメントの処理 - 進行状況バー



Asset Managementコネクタで、このオプションはSELECT COUNT型のクエリを起動します。

```
SELECT COUNT(AcctCode) FROM amAsset
```

例：

**警告**

このクエリの実行には時間がかかるため、シナリオの生成モードでは、このオプションをオフにしてください。

**コネクタのキャッシュオプションの使用**

データベース型のコネクタでは、生成用ドキュメントタイプ（メタデータ）の構造にキャッシュを使用することが推奨されています。

キャッシュを使用すると、生成用ドキュメントタイプ（メタデータ）の記述の読み込みが、ローカルコンピュータで実行されるため、コネクタがより速く開くようになります。

コネクタのキャッシュ使用の詳細については、マニュアル『コネクタ』の「コネクタの設定」の章の「キャッシュを設定する」の節を参照してください。

キャッシュを使用しない場合、コネクタは、コネクタを開く度にソースデータベースの記述に対応するデータ全体を取得します。

データベース型コネクタでは、データベース記述は次のデータに当たります。

- テーブルのリスト
- フィールドのリスト
- 書式のリスト
- インデックスのリスト
- リンクのリスト
- 結合のリスト
- その他

上記のデータが多数であるほど、コネクタを開く際に時間がかかります。

#### 注意:

コネクタを開く時に使用可能な帯域幅が低い場合、かかる時間は長くなります。これはネットワークの接続（WAN、LAN）の性能に左右されます。

#### 警告

シナリオの生成モードでは、キャッシュの使用が推奨されています。

しかし、ソースデータベースの記述内容が変更した場合は、コネクタのキャッシュの同期をとらなければなりません。

コネクタのキャッシュの同期をとるには：

- 1 **Scenario Builder**を起動します。
- 2 シナリオを開きます。
- 3 キャッシュの同期をとる必要があるコネクタを選択します。
- 4 コネクタを開きます（F4）。
- 5 **Tools/Cache/Synchronize the cache**を選択します。

キャッシュの同期をとった後、ソースデータベース記述の新規データに存在しない要素が、マッピングに含まれていないかどうか確認します。

#### 自動再接続

データソースとして遠隔のサーバを使用するコネクタでは、サーバへの自動再接続のオプションを選択する必要があります。

自動再接続のオプションは、ネットワークでの待ち時間（データパケットの伝達）に多大な影響を与えます。

自動再接続のオプションについては、マニュアル『コネクタ』の「コネクタの設定」の章の「再接続のパラメータを設定する」の節を参照してください。

再接続に関する情報は、Connect-Itログ内に表示されます。

Action Request Systemコネクタの再接続試行の例

```
Connecting to the server...
Using the dynamic library 'arapi50.dll'.
(ARS ERROR 90) Cannot establish a network connection with the AR System
server. fcitsrv01: RPC: Name to address translation failed - No such hostnam
e
The next attempt to reconnect is in 4 s
Attempting to reconnect...
Using the dynamic library 'arapi50.dll'.
(ARS ERROR 90) Cannot establish a network connection with the AR System
server. fcitsrv01 : RPC: Name to address translation failed - No such hostnam
e
The next attempt to reconnect is in 8 s
Attempting to reconnect...
Using the dynamic library 'arapi50.dll'.
(ARS ERROR 90) Cannot establish a network connection with the AR System
server. fcitsrv01 : RPC: Name to address translation failed - No such hostnam
e
The next attempt to reconnect is in 16 s
```

ネットワークへの接続が不安定な場合、待ち時間は長くなります。

一定期間以上経った接続を切断するルータ／ファイヤウォール／サーバ型の接続設定には、注意が必要です。この種のパラメータについては、ローカルネットワークの担当部署で確認してください。

### 各セッション毎の再接続（Asset Managementコネクタ用）

Asset Managementコネクタ専用の設定オプションを使用すると、シナリオの各セッションの終了時に接続を切断し、新規セッションの開始時のみに接続を再開するように設定できます。

実際に、Connect-Itサーバが使用するリソースが減ると、サーバへの再接続作業が速くなります。

このオプションの詳細については、マニュアル『コネクタ』の「HPコネクタ」の章の「Asset Managementコネクタ」の節、「Asset Managementコネクタの設定」を参照してください。

#### 警告

シナリオの実行頻度が高い場合（5分おきなど）は、このオプションを無効にする必要があります。

このオプションは、シナリオを頻繁に（例：5分ごと）実行する場合は、選択をはずす必要があります。スケジュールを使ったシナリオ実行の頻度については、

「統合シナリオの管理 [ 献 199 ]」章の「スケジュールの作成 [ 献 181 ]」の節を参照してください。

## WHERE句の使用の最適化

データベース型コネクタの生成用ルールでは、WHERE句を使用できます。

WHERE句作成に関する詳細は、マニュアル『コネクタ』の「コネクタのルール (ディレクティブ)」の章、「生成用ルール」の節の「WHERE句とORDER BY句」を参照してください。

WHERE句の使用を最適化するには、句の適用先のフィールドがインデックス化されている必要があります。WHERE句がインデックス化されていないフィールドに適用されると、句を実行する際にテーブルの全レコードが検索されることになります。

## スケジュールポイントの管理

シナリオが処理するデータ量を少なくするために、ポイントを使用することも可能です。

ポイントがレコードの最終変更日である場合、コネクタは最後の起動以降に作成または更新されたレコードのみを処理します。

**例：**ソースコネクタは、**Employees**テーブルのレコードのうち、企業の新入社員に対応するレコードのみを処理します。

ポイントの使用方法については、マニュアル『コネクタ』の「コネクタの設定」章の「スケジュールのポイントを設定する」の節を参照してください。

一般的に、ポイントのステータスは特定の日時を指します。日時は、**scenario's scheduling**ウィンドウ (**Scenario/Scheduling**メニュー) で変更できます。

シナリオのポイントがインデックス化されていないフィールドを使用すると、データの処理にかかる時間は長くなります。処理時間を短縮するには、ポイントとして使用するフィールドを、インデックス化することが推奨されています。

## ドキュメントの取り込みを改善する

コネクタのドキュメント取り込みを改善するには、ターゲットアプリケーションでデータをより迅速に処理することが必要です。

本節では、ドキュメントの取り込みにかかる時間を短縮する方法を説明します。

### 照合更新キーの選択

照合更新は旧データと新規データの比較に当たります。データベース型のコネクタ (**Asset Management**) では、コネクタが作成または更新するテーブルレコードを一意な方法で識別するためのフィールドを定義することが、照合更新に相当します。

照合更新キーとしてどのフィールドを選択するかは、ターゲットコネクタのドキュメントの取り込みに大きく影響します。

ドキュメントの取り込みには、次の2つのアクションが含まれます。

- 1 照合更新キーとして選択されたフィールドを使ってクエリを送信し、ターゲットアプリケーションにレコードが存在するかどうかを確認します。
- 2 レコードの挿入または更新のアクションが実行されます。

照合更新キーとして選択されたフィールドが、インデックス化されない場合、ドキュメントの取り込みに時間がかかります。例：**memo**または**FeatParam**フィールドが**Asset Management**コネクタの照合更新キーとして選択される場合、ドキュメントの取り込みは非常に非効率なものとなります。

照合更新キーの詳細については、本章の「照合更新キー [ 献 120]」の節を参照してください。


## トランザクションの管理

データベース型コネクタは、1ドキュメントを取り込むたびに、デフォルトで 'commit' を実行します。

使用する帯域幅が狭い場合、ドキュメントのグループごとにコミットを実行することも可能です。

何個のドキュメントごとにコミットするかを指定するには：

- 1 **Scenario Builder**を起動します。
- 2 シナリオを開きます。
- 3 トランザクションのパラメータを変更する必要があるコネクタを選択します。
- 4 **connector configuration**ウィザードを起動します (F2)。

**注意：**コネクタの高度な設定が有効になっている (ツールバーの  アイコンがオンになっている) かどうか確認します。

- 5 **Next**を数回押して、**Manage transactions**ページを開きます。
- 6 **Commit by group of documents**オプションを選択します。
- 7 ドキュメント数を記入して、いくつのドキュメントごとにコミットするかを指定します。

莫大な量のドキュメントを取り込む場合は、多数のドキュメントグループごとのコミットが推奨されています。

シナリオ `ldap\ac\complete.scn` の性能向上の例

- 1 各ドキュメントごとのコミット (デフォルトのオプション)  
性能：6000ドキュメント用に4分 (25ドキュメント/秒)
- 2 500ドキュメントのグループごとのコミット  
性能：6000ドキュメント用に3分 (33ドキュメント/秒)

## 同期処理と非同期処理 - ServiceCenterコネクタ

**ServiceCenter**コネクタによって取り込む各ドキュメントは、ターゲットアプリケーションに送信されるクエリに相当します。

ドキュメントの取り込み速度を上げるには、以下のどちらかを選択する必要があります。



- データの同期処理  
取り込まれる各ドキュメントは、ターゲットアプリケーションが前のドキュメントを処理した後に送信されます。
- データの非同期処理  
取り込まれる各ドキュメントは、ターゲットアプリケーションが前のドキュメントを処理していなくても送信されます。

## Connect-Itエンジンをを使ってドキュメント処理時間を改善する

本節では、Connect-Itエンジンをを使ってドキュメント処理の時間を短縮する方法を説明します。

### ドキュメントログの設定

Connect-Itのドキュメントログの設定では、以下を指定できます。

- ドキュメントログ内に表示するエラーの種類 (**Filter** フィールド)
- Connect-Itのメモリに保存されるトラッキング項目の最大数
- ドキュメントログのメッセージを保存するテキストファイル

データ処理にかかる時間を短縮するには：

- 1 Scenario Builderを起動します。
- 2 **Monitors/ Configure monitors/ General settings**を選択して、優先順を無効にします。
  - Database
  - Files
- 3 **Save documents**のサブオプションで1項目を選択し、ドキュメントログ内に保存するエラーの種類を限定します。  
例：拒否
- 4 保存するトラッキング項目の数を制限します (**Document log** タブ)。

### 非グラフィカルモードの使用

シナリオ実行中にScenario Builderを表示すると、コマンド（更新、ドキュメントログの調査、新規オプションの入力など）を選択するたびにConnect-Itエンジンの反応が遅くなります。

### スケジュールの設定

Connect-Itのスケジューリング機能の設定は、シナリオによって生成されるドキュメントタイプに1つまたは複数のスケジューラを関連付けることです。例：スケジューラがAsset Managementコネクタを1時間ごとに起動します。コネクタは、起動するたびに、調べるAsset Managementアプリケーションのレコードに対応するドキュメントを生成します。

コネクタが起動するたびに、Connect-Itは処理するデータの量を計算し、データ全体が処理されるまで停止しません。処理するデータ量に応じて、シナリオのスケジューラを調整する必要があります。大規模なデータベースのマイグレーションの場合は、稼働率が低い時期（夜間のスケジュールなど）にソースコネクタの起動をスケジュールすることが推奨されています。少量のデータを処理する統合シナリオの場合は、既製の**Synchronous**スケジューラの使用が推奨されています(ソースコネクタが毎秒起動)。

スケジュールの詳細については、本章の「スケジュールの作成 [ 献 181]」の節を参照してください。

## シナリオの並行起動

1つのシナリオが多数のデータを移行する場合、シナリオを複数のシナリオに分割し、各シナリオを別々のサービス（Windows）またはデーモン（UNIX）で起動させる方法が推奨されています。

サービスとデーモンの詳細については、本章の「Connect-Itサービスの定義（Windows環境） [ 献 174]」の節を参照してください。

### 例

データベースに記録された従業員のリストを、別のデータベースにシナリオがインポートするとします。

移行にかかる時間を縮小するには、以下の2つのシナリオを作成します。

- 1番目のシナリオは、姓のイニシャルがAからJである従業員のリストを移行します。
- 2番目のシナリオは、姓のイニシャルがKからZである従業員のリストを移行します。

従業員を選択するには、2つのシナリオのソースコネクタで生成用ルール（WHERE句）を作成します。

WHERE句作成に関する詳細は、マニュアル『コネクタ』の「コネクタのルール（ディレクティブ）」の章、「生成用ルール」の節の「WHERE句とORDER BY句」を参照してください。

## Asset Managementコネクタを使用するシナリオの性能を向上させる

本節では、Asset Managementコネクタを使うシナリオで、ドキュメントの処理にかかる時間を短縮する方法をいくつか紹介します。

### dtLastModifフィールドのインデックス化

Asset Managementコネクタを使用するシナリオでは、シナリオに関連するAssetCenterの全テーブルのdtLastModifフィールドにインデックスを追加する必要があります。Connect-Itはこのフィールドを一貫して使用して、最終セッション後に作成または変更されたレコードを確認します。

資産のテーブル (amAsset)、製品のテーブル (amProduct)、従業員と部署のテーブル (amEmplDept) でインデックスを作成するには、以下のコマンドを実行します。

```
CREATE INDEX Ast_dtLastModif ON amAsset (dtLastModif)
GO
CREATE INDEX Prod_dtLastModif ON amProduct (dtLastModif)
GO
CREATE INDEX EmplDept_dtLastModif ON amEmplDept (dtLastModif)
GO
```

**dtLastModif**フィールドがインデックス化されているかどうかを確認するには、実行可能ファイルadblogを使用します。このファイルを使用すると、**WHERE**句で**dtLastModif**フィールドにフィルタを適用するSQLクエリの実行を検証できます。

### Asset Managementデータベース用の調整 - Sybase ASEエンジン

クエリのFROM部分に多数のテーブルがあるため、クエリの実行に時間がかかるという内容がLOGファイルに表示される場合は、**Sybase Query Optimizer**アプリケーションを使用して、処理時間を短縮することが推奨されています。

#### amdb.iniファイルの変更

SQLクエリの処理方法を改善するには、**Asset Management**アプリケーションのamdb.iniファイルに以下の行を追加することも可能です。

```
PostConnectSql= set forceplan on
```

以下の行は、**DB ASE COPPER**データベース用のamdb.iniファイルの設定です。

```
[DB ASE COPPER]
PostConnectSql=set forceplan on
stmtcache=500
LongDesc=
Engine=Sybase
Location=COPPER
EngineLogin=itam
EnginePassword=78C6143D43925F46F924205FBB42F0FED21594428DDCA
C641ED76CDAA17050EA1A124254200200
ReadOnly=0
CacheDir=
CacheSize=5120000
Base=EDS
Owner=
TableSpace=
TableSpaceIndex=
```

```
AmApiDll=aamapi35.dll
UseNTSecurity=0
```

これらのパラメータは、Asset Managementデータベースサーバのamdb.iniファイル内で設定されなければなりません。

Asset Managementアプリケーションのクライアント部分がConnect-Itサーバにインストールされている場合は、同じSybaseデータベースに関連付けられた2つの異なる接続を確立できます。

- 1番目の接続はオプション「PostConnectSql=set forceplan on」と「stmtcache=500」を使用します。

```
[DB ASE ConnectIt]
PostConnectSql=set forceplan on
stmtcache=500
LongDesc=
Engine=Sybase
Location=COPPER
EngineLogin=itam
EnginePassword=78C6143D43925F46F924205FBB42F0FED21594428DD
CAC641ED76CDAA17050EA1A124254200200
ReadOnly=0
CacheDir=
CacheSize=5120000
Base=EDS
Owner=
TableSpace=
TableSpaceIndex=
AmApiDll=aamapi35.dll
UseNTSecurity=0
```

- 2番目の接続はこれらのパラメータを使用しません。

```
[DB ASE COPPER ACGUI]
LongDesc=
Engine=Sybase
Location=COPPER
EngineLogin=itam
EnginePassword=78C6143D43925F46F924205FBB42F0FED21594428DD
CAC641ED76CDAA17050EA1A124254200200
ReadOnly=0
CacheDir=
CacheSize=5120000
Base=EDS
Owner=
TableSpace=
TableSpaceIndex=
```

```
AmApiDll=aamapi35.dll  
UseNTSecurity=0
```

従来のAssetCenterクライアント（Sybase ASEクライアント以外）で、オプションstmtcache=500を使用しないでください。

従来のAssetCenterクライアントでの処理性能に問題がある場合は、以下のオプションのいずれかを使用できます。

- PostConnectSql=set forceplan on
- PostConnectSql=set table count 3
- PostConnectSql=set table count 2

## データベース型コネクタを使用するシナリオの性能を向上させる

Sybaseネイティブ接続を使用するデータベース型コネクタの場合、「PostConnectSql=set forceplan on」オプションを詳細オプションで入力すると、SQLクエリ実行の性能が向上する可能性があります。

詳細オプションについては、マニュアル『コネクタ』の「コネクタの設定」の章、「高度な設定」の節の「詳細オプション」を参照してください。



---

## 6 モニタデータベース管理

データの処理に関連する情報は、データベースに保存できます。  
モニタに定義されるパラメータに従って、データがバックアップされます（このマニュアルの「管理モニタの定義 [ 献 159]」の節を参照してください）。  
このデータベースは、空のシェルの形式で作成する必要があります。  
MSDEフォーマットのデモ用データベースがアプリケーションに添付されています。

---

### サポートされるDBMS

以下のDBMSがConnect-Itデータベース用にサポートされます。

- Microsoft SQL Server
- Oracle Workgroup Server
- Sybase Adaptive Server
- IBM DB2 UDB

---

### Connect-Itデータベースを設定するステップ

以下のステップに従って、情報をデータベースに保存します。

- 空のシェルをデータベース用に作成します。

- このデータベースへの接続を宣言します。
- Connect-Itデータベースを作成します。
- ユーザを追加します。

 **注意:**

Connect-Itのデモ用データベースは、Connect-Itインストール先フォルダのdbbフォルダにあります。管理者はパスワードなしで宣言されます。

▶ MSDEモニタデータベース [ 献 18]

## 空のシェルの作成


このステップは、使用データベースエンジンによって異なります。DBMSのマニュアルを参照してください。

## 接続の宣言

接続を宣言するには：


- 1 データベースマネージャレベルで接続を宣言します。
- 2 データベース管理コンソールを使用します (**Administration/ Monitors database administration**) 。
- 3 **Connection** フィールドに既存の接続をリストから入力します。

 **注意:**

宣言された接続がない場合は、 をクリックすることによって、新しい接続を作成できます。

## 接続の作成

データベースへの接続を作成するには：


- **Connection** フィールドで、 をクリックします。
- 接続エディタで、**New** をクリックします。
- 接続を宣言するために必要なフィールドを入力します。
- **Create** をクリックします。

### .iniファイルまたはODBCのレベルで宣言された接続

新しい接続を作成する場合 (**New** ボタン) 、 **Connection** タブのフィールド (**Name**、 **Description**、 **Engine**) に含まれる情報がcitdb.iniファイルに保存さ



れます。このファイルは、Connect-Itによって使用される接続について記述します。

物理的なデータベース接続は、**Data source**（または**Server**）、**Database**、**User**、および**Owner**フィールドで宣言されます。データソースが使用可能な接続のリストにない場合は、新しい接続を宣言できます（ボタン）。

#### 注意:

接続を編集する場合、パスワードフィールドが空白になっています。接続の編集時には、ODBC接続のパスワードを知る必要があります。

### System connection

このオプションを使用すると、接続の動作を定義できます。

- オプションを選択する場合：接続がWindowsフォルダのcitdb.iniファイルに作成されます。
- オプションを選択しない場合：接続がユーザ設定フォルダのcitdb.iniファイルに作成されます。

このオプションを選択しないと、動作は以下の通りです。

- ユーザBがユーザAによって使用されるシナリオを使用する場合、ユーザAは再度同じ接続を宣言する必要があります。理由は、ユーザAのcitdb.iniファイルがユーザ権限のために読み取ることができなくなるからです。
- シナリオをサービスモードで実行する場合、サービスはデフォルトでシステムモードで宣言されます。このモードでは、サービスがシステム接続を読み取ることのみ可能です。

#### 注意:

特定ユーザとしてサービスをログオンすることができます（Windows Servicesユーティリティ）。

### .iniファイルの場所

データベース管理ウィンドウに作成されたすべての接続がcitdb.iniファイルに保存されます。

システム接続は、Windowsフォルダのcitdb.iniファイルに保存されます。

ユーザ接続は、Windowsのユーザ設定フォルダのcitdb.iniファイルに保存されます。

#### 注意:

.iniファイルの場所の簡単な説明については、アプリケーション用の情報を参照してください。（**Help/ About**メニュー、**Plus**ボタン）。

## データベースの作成

Connect-Itデータベースの作成は、コネクタによるドキュメントの処理に関連付けられた情報を格納するテーブルを空のシェルに入力することです。

Connect-Itデータベースを作成するには：

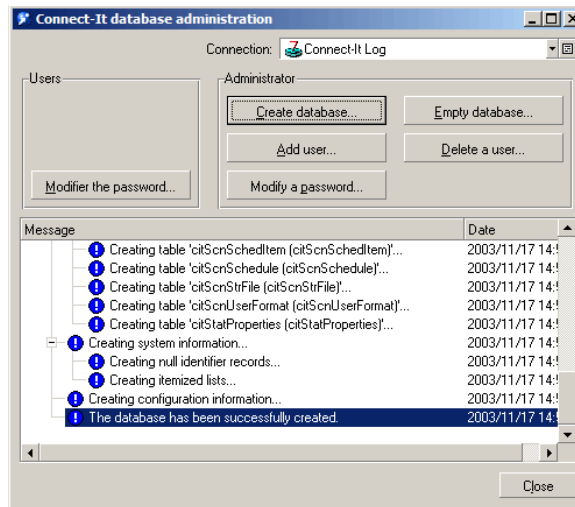
- 1 データベース管理コンソールを使用します (**Administration/ Monitors database administration**)。
- 2 **Create database**をクリックして、以下のフィールドを入力します。
  - **Administrator password**：データベースの管理者パスワードを入力します。



注意:

このフィールドは、空白のまま残さないでください。

- **Confirm administrator password**：パスワードを再度入力します。管理者を最初のユーザとして、データベースを作成します。



## ユーザの追加

データベースにユーザを追加するには：

- 1 データベース管理コンソールを使用します (**Administration/ Monitors database administration**)。
- 2 **Add user**をクリックして、以下のフィールドを入力します。

- **Administrator password** : データベースの作成時に定義したパスワードを入力します。
  - **User** : 新しいユーザの名前
  - **New password** : 新しいユーザのパスワード
  - **Confirm password** : パスワードを確認します。
- 3 **Add**をクリックして、このユーザを追加し、**Close**をクリックします。

 **注意:**

作成されたユーザには、データベースの管理者権限がありません。

---

## ユーザの管理

データベースユーザに関するすべての操作は、**Administration/ Monitors database administration**メニュー項目によって実行されます。

データベースユーザの管理には、以下が含まれます。

- ユーザの追加
- パスワードの変更
- ユーザの削除

### ユーザの追加

本章の「ユーザの追加 [ 献 274]」の節を参照してください。

### ユーザのパスワードの変更

ユーザのパスワードを変更するには :

- 1 **Modify password**をクリックします。
- 2 リストからユーザを選択します (**User**フィールド)。
- 3 新しいパスワードを入力します。
- 4 パスワードを確認します。
- 5 **Modify**をクリックします。

### ユーザの削除

ユーザを削除するには :

- 1 **Delete a user**をクリックします。

- 2 管理者パスワードを入力します。
- 3 リストからユーザを選択します (**User**フィールド)。
- 4 **Delete**をクリックします。

## ユーザが実行する操作

ユーザをデータベース内で宣言した後に、以下の作業を実行できます。

- ユーザのパスワードの変更

ユーザのパスワードを変更するには：

- 1 データベース管理コンソールを使用します (**Administration/ Monitors database administration**)。
- 2 **Users**枠で、**Modify password**をクリックします。
- 3 以下のフィールドを入力します。
  - **User**：ユーザの名前
  - **Previous password**：ユーザの現在のパスワードを入力します。
  - **New password**：新しいパスワードを入力します。
  - **Confirm new password**：新しいパスワードを再度入力します。
- 4 **OK**をクリックします。

---

## データベースの操作

Connect-Itデータベースへのユーザ管理操作と異なり、データベース内のすべての情報を削除することもできます。

この機能は、データベース管理者のみが使用できます。

Connect-Itデータベースからデータを削除するには：

- 1 **Empty database**をクリックします。
- 2 管理者パスワードを入力します。  
データが消去されます。

---

## 後方互換性

バージョン3.5以降のデータベースは互換性がありません。

# A 問題点の報告方法

弊社製品の品質を常に改善するためには、ユーザであるお客様に、製品の使用時に発見された問題点をHPの顧客サポートに報告していただくことが非常に大切です。問題点が迅速に識別され解決されるためには、問題点に関する詳細な情報が必要になります。しかし弊社に提供される情報が不完全なために、問題を再現できないことも多々あり、よって、問題点の解決も不可能なことがあります。本章では、報告に必要な情報の集め方や最も有効な報告の仕方について説明します。

---

## 一般的な情報

顧客サービスに必ず報告しなければならない情報は以下の通りです。

- 機能に関する情報 [ 献 277]
- 技術的な情報 [ 献 278]

### 機能に関する情報

以下の情報により、問題点の分類が可能になります。

- お客様の会社名
- 問題が発生する製品名
- 問題が発生する機能・場所（例えば、Connect-ItのScenario Builder、AssetCenterの調達、など）

- 問題が発生する頻度（問題は毎回発生するか、または問題の発生はある一定の要因やデータにより左右されるのか、など）

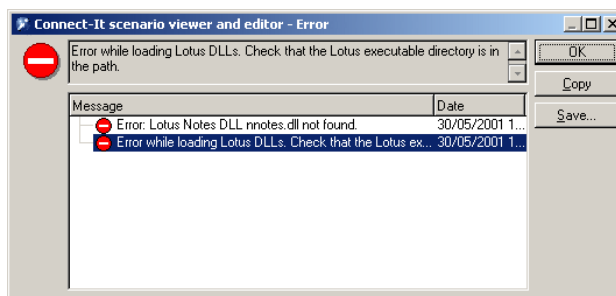
## 技術的な情報

重要な技術的な情報の一部は、以下の手順に従って製品内で得ることができます。

- 1 ソフトウェアで、**Help/About**メニューを選択します。
- 2 表示されるダイアログボックス内で**More**をクリックします。システムと製品に関する技術的な情報が表示されます。
- 3 **Copy**ボタンをクリックします。情報はWindowsのクリップボードにコピーされます。
- 4 新規ファイルにこの情報を貼り付け、HPの顧客サポートまで御送付ください。

問題発生時にアプリケーション内でエラーメッセージが表示される場合は、以下の手順に従って問題点を報告してください。

- 1 エラーメッセージが発生したら**Copy**ボタンをクリックします。これにより、情報はWindowsのクリップボード内にコピーされます。



### 注意:

上記の画面は例にすぎません。エラーメッセージの内容やソフトウェア名は、発生する問題により異なります。

- 2 新規ファイルにこの情報を貼り付け、HPの技術サポートまで御送付ください。

## 問題固有の情報

弊社のサポートが問題を再現するためには、まず、問題発生に至るまでの状況と過程の詳細なリストが必要になります。問題の発生は様々な要因に左右されるため、例えば以下の様に詳細に説明してください。

- 1 資産「HP Prosigma 850」をAssetCenterの資産のテーブルで選択します。この資産は、製品付属のデモ用データベースに含まれているものです。
- 2 この資産の詳細画面で**Acquis**タブをクリックします。
- 3 **Acquis**タブの**Procurement**サブタブをクリックします。
- 4 **Purchase value**フィールドの値を123.45に変更します。
- 5 **Modify**をクリックします。
- 6 ...

### ヒント:

原則として、問題発生の状況はできる限り詳細に記述してください。

## その他の情報

問題のより適切な識別のために、スクリーンショットやその他のファイルをサポートに送付することも可能です。

### 注意:

Eメールで大型サイズのファイルを送るのはお控えください。添付ファイルのサイズは500 KBまでに制限してください。必要であれば、ペレグリンのサポートは、500 KB以上のファイルを受信するためにFTPサイトを開くことも可能です。

送信するファイルのサイズを縮小するには：

- 圧縮ツールを使用します。多くの場合、ファイルのサイズが大幅に縮小されます。
- 画像の場合は、色数を16に制限します。これで画像のサイズは大幅に縮小されます。

## Connect-Itに関する問題を報告する場合

Connect-Itはドキュメントログ、アプリケーションログと、サービスログにデータを常時記録しています。これらのファイル内の情報は、問題の再現に非常に有用です。

これらのファイルは以下のフォルダに格納されています。

- bin\conitgui.log：アプリケーションログファイル

- bin\<サービス名>.log: Connect-Itログファイル



Connect-Itの問題点を報告する際には、上記のファイルとシナリオファイル (.scn) をサポートまで御送付ください。



## B 用語解説

以下の用語解説では、Connect-Itで使用される主要用語の定義を説明します。また、データベース、Basicスクリプト、Java、および外部アプリケーションに関連する用語リストも示します。

---

### Connect-It用語

#### 処理後のアクション

OpenView Desktop Discoveryコネクタなどの特定コネクタは、生成したドキュメントを操作できます。この場合、コネクタ設定ウィザードのページで、生成されるドキュメントの処理後のアクションを選択できます。例えば、Connect-Itで処理に成功した後にソースデータを削除するなどのアクションがあります。

#### 外部アプリケーション

外部アプリケーションは、コネクタの接続先であるアプリケーションやデータソースを指します。例えば、AssetCenterアプリケーション、XMLファイル、メッセージシステムなどです。

## 処理レポート

処理レポートは、コネクタやマッピングボックスがドキュメントを処理するたびに生成するドキュメントのことです。このレポートによりドキュメントの処理に成功したか、または問題が起こったか、またConnect-It内で問題がおきているかが分かります。

---

例：

E-mailコネクタはシナリオの処理レポートを取り込み、メッセージの形でConnect-Itの管理者へ処理レポートを送信することができます。

---

## 認証証明書

認証証明書は、ベースコネクタと、選択したConnect-Itパッケージに含まれているオプションコネクタと追加コネクタを、使用可能にするテキストファイルです。

証明書は、Connect-Itを使用するために必要です。

## ツール

ツール（またはコンポーネント）は、**Scenario Builder**で定義される要素です。マッピングボックスやデータジェネレータなど、コネクタまたは内部ツールに当たります。

## 照合更新キー

照合更新は、コネクタが作成または更新するテーブル内のレコードを一意に識別できるようにするフィールドを定義することで成り立ちます。

データの照合更新に使用するフィールドは、照合更新キーというキーで印を付けることによって特定できます。

## コネクタ

コネクタにより、Connect-Itは、外部アプリケーションからまたは外部アプリケーションへデータを処理することができます。コネクタ間でデータを交換するために、コネクタはデータをドキュメントに転記し、ドキュメントの生成または取り込みを実行します。

コネクタは、複数のカテゴリに分かれます。

- インベントリコネクタ

インベントリコネクタは、企業の資産、特にIT資産をスキャン（走査）するデータベースのデータを処理します。コネクタにはIntel LanDeskコネクタ、SMS 1.xコネクタとSMS 2.xコネクタなどがあります。

- **HP Softwareコネクタ**  
これらのコネクタは、HP Softwareアプリケーション用に設計されたコネクタです。（Asset Managementコネクタ、ServiceCenterコネクタ、OpenView Desktop Discoveryコネクタ、Action Request Systemコネクタなど。）
- **Applicationコネクタ**  
アプリケーションコネクタは、外部のデータアプリケーション用のコネクタです。Lotus Notesコネクタ、NTセキュリティコネクタなどがあります。
- **プロトコルコネクタ**  
これらのコネクタは、特定のプロトコルを使用して外部アプリケーションによってフォーマットされたデータを処理します。XMLコネクタ、テキストコネクタ、データベースコネクタ、**E-mail**コネクタなどがあります。
- **ERPコネクタ (Enterprise Resource Planning)**  
これらのコネクタを使用すると、Enterprise Resource Planningアプリケーションのデータを処理できます。

コネクタの役割は以下の通りです。

- コネクタは、コネクタの接続先のアプリケーションで使用可能なデータ集合に対応する、使用可能なドキュメントタイプを発行します。

---

例：

E-mailコネクタ（受信）が使用可能なドキュメントタイプを発行する場合、この使用可能なドキュメントタイプの内容は、**From**（送信者）構造体、**Carbon Copy**（CC）コレクションと**Attachment**（添付ファイル）コレクションなど、Eメール内の全データに相当します。

---

- **ドキュメントの生成と取り込み**

ドキュメントを生成するために、コネクタは、ある特定の統合シナリオ用に作成された「生成用ドキュメントタイプ」テンプレートを使用します。コネクタはこのテンプレートに基づいてドキュメントを生成します。

---

例：

付属の**Enterprise Discovery to Asset Management**各シナリオ

（scenario/pdiフォルダ）で、Enterprise Discoveryコネクタは、**Devices**ドキュメントタイプをテンプレートとして使用するドキュメントを生成します。このドキュメントタイプは、Enterprise Discoveryによって実行されるIT資産スキャン時に取得する値に相当します。

---

ドキュメントを取り込むために、コネクタは、マッピングボックスから送られてくるドキュメントの値を抽出し、外部アプリケーション用にデータ値を転換します。

▶ **取り込み** [ 献 284].

データが、外部ソースアプリケーションから外部ターゲットアプリケーションに転送される場合、コネクタは、ソースコネクタとターゲットコネクタと呼ばれます。ソースコネクタはドキュメントを生成し、ターゲットコネクタはドキュメントを取り込みます。

## コレクション

ドキュメントタイプ内で、コレクションは1つまたは複数の要素と、別の複数の要素間の関係を表しています。

例：データベーステーブル用のドキュメントタイプ内にコレクションがある場合、このコレクションはデータベース内の別のテーブルを指しています。コレクションでは、2つのテーブル間のリンクは1対N、またはN対Nです。1番目のテーブルの1つのレコードは、2番目のテーブルの1つまたは複数のレコードにリンクされており、2番目のテーブルのレコードも、1番目のテーブルの1つまたは複数のレコードにリンクされています。

---

例：

送信されたEメールメッセージに対応するドキュメントタイプでは、コレクションがメッセージ受信者に相当します（メッセージには、複数の受信者を指定できません）。

---

## サービスコンソール

Connect-Itコンソールは、グラフィカルユーザインタフェースであり、シナリオの管理とシナリオへのサービスの関連付けを実行できます。

## 取り込み

取り込みとは、ターゲットコネクタが外部アプリケーションにドキュメントを書き込んだり送信したりするプロセスを指します。

▶ コネクタ [ 献 282].

## DBK

DBKファイルは、シナリオ文書に対応するXMLファイルです。これらのファイルはDocBook DTDに準拠しています。DBKファイルの詳細については、「シナリオ文書 [ 献 193]」の章を参照してください。

## ルール (ディレクティブ)

ルール (ディレクティブ) は、Connect-Itのツールがドキュメントを生成し、取り込むために使用する情報のことです。これには生成用ルールと取り込み用ルールがあります。

---

例:

データベース型のコネクタでは、ソースデータベースにフィルタを適用するWHERE句とORDERBY句が取り込み用ルールです。

---

ルールの詳細については、マニュアル『コネクタ』の「コネクタのルール (ディレクティブ)」の章を参照してください。

## ドキュメントとドキュメントタイプ

ドキュメントはConnect-It内でデータを伝達する媒体です。各ドキュメントは、外部アプリケーションの1つのデータ集合に対応します。外部アプリケーションの機能に応じて、1データ集合 (データコンテナ) は以下の内容になります。

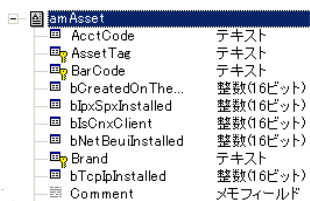
- データベーステーブル
- Eメールメッセージ
- インベントリ情報を含むファイル
- 区切り文字で区切られたテキストファイル
- XMLファイル
- セキュリティ情報
- その他

Scenario Builderでコネクタが開かれると、コネクタは使用可能な全てのドキュメントタイプのリストを発行します。使用可能な全ドキュメントタイプのリストは、外部アプリケーションで使用可能なデータ集合全体を指します。

### 生成用ドキュメントタイプと取り込み用ドキュメントタイプ

コネクタがドキュメントを生成し取り込むために、コネクタは、生成用ドキュメントタイプと取り込み用ドキュメントタイプを使用する必要があります。生成用ドキュメントタイプ、または取り込み用ドキュメントタイプを作成する場合、Connect-Itのユーザは、コネクタが発行する使用可能なドキュメントタイプから要素を選択します。例えば、データベース型コネクタの生成用ドキュメントタイプには、外部ターゲットアプリケーションにインポートする必要のあるフィールドのみを選択します。

## 使用可能なドキュメントタイプ 生成用または取り込み用ドキュメントタイプ 生成されるドキュメントタイプ



コネクタは使用可能なドキュメントタイプを発行します。上記の図は、Asset Managementコネクタに発行される使用可能なドキュメントタイプamAssetの抜粋です。

生成用、または取り込み用ドキュメントタイプを作成するには、使用可能なドキュメントタイプから必要な要素を選択します。

コネクタが、ドキュメントの生成または取り込みを実行します。

## DSC

書式設定ファイル（ファイルの拡張子.dsc）は、テキストファイル内のデータがどのように構成されているかを説明するファイルです。ファイル内のデータは、データベースのテーブル内のフィールド値に当たります。

Delimited-textコネクタの使用可能なドキュメントタイプは、書式設定ファイル内で作成されたドキュメントタイプです。

例：ある書式設定ファイルでは以下の内容を指定します。

- テキストファイルは1つのテーブル（従業員のテーブル）のデータを含みません。
- テキストファイルの1行目では、列のタイトルを指定します（各列はテーブルのフィールド1つに対応します）。
- 値は"~"で区切ります。

▶ Connect-Itマニュアル - コネクタ、プロトコルコネクタ、Delimited-Textコネクタ、説明ファイルの作成

## 文書

シナリオから動的に抽出されるすべての情報は、ユーザがカスタマイズすることができます。

## Scenario Builder

Scenario Builderは、統合シナリオ作成用のグラフィカルインタフェースです。シナリオは、ファイルの拡張子SCNで識別されます。

### 要素

ドキュメントタイプは、以下の要素で構成されます。

- 構造体
- コレクション
- フィールド

この要素は、ドキュメントタイプの端末要素に当たります。

これらの要素は、複雑要素とも呼ばれます。

- ▶ ドキュメントタイプの要素 [ 献 79].
- ▶ コレクション [ 献 284].

### お気に入り

お気に入りは、事前に設定されたコネクタです。

- ▶ お気に入り [ 献 216].

### 設定ファイル

各コネクタは、データベース構造の解釈方法である.xmlフォーマットでドキュメントタイプを使用可能にします。このドキュメントは、設定ファイルと呼ばれ、インベントリコネクタおよびDatabaseコネクタのために編集できます（設定ファイルエディタを使用します）。

### ユーザフォーマット

ユーザフォーマットとは、ユーザがマッピングスクリプト内で使用するために定義する日付型または数値のフォーマットを指します。フォーマットは、**PifUserFmtVarToStr**関数と**PifUserFmtStrToVar**関数と共にのみ使用されます。使用に関する詳細は、オンラインの『プログラム用参考ガイド』（Connect-Itでのスクリプト作成中にF1キーを押すと表示されます）を参照してください。ユーザフォーマットの詳細については、「マッピングスクリプトの定義 [ 献 124]」の章の「ユーザフォーマット [ 献 137]」の節を参照してください。

## データジェネレータ

データジェネレータは、静的に定義されたデータをコネクタに送信するツールです。

▶ データジェネレータの使用 [ 献 87].

## 履歴

シナリオの作成および変更に関するすべての情報

▶ シナリオの履歴 [ 献 221].

## ドキュメントログ

**Scenario Builder**内のタブにある**Document log**タブでは、**Connect-It**のコネクタやその他のコンポーネント（リンクやマッピングボックスなど）が生成した、または取り込んだ全ドキュメントの内容を確認できます。

コネクタがドキュメントを拒否すると、ドキュメントログは拒否されたドキュメントをアイコンと共に表示します。ドキュメントログは更に、コネクタまたはマッピングボックスが不完全にドキュメントを生成したり、取り込んだりした場合にも警告を発します。

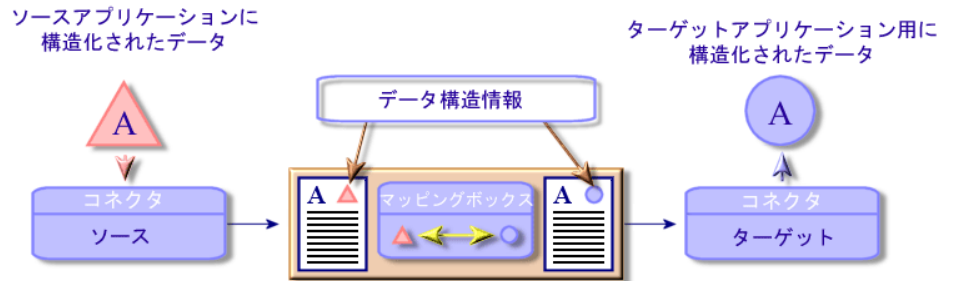
## マッピング

マッピングは、ソースコネクタの生成用ドキュメントタイプの要素群と、ターゲットコネクタの取り込み用ドキュメントタイプの要素群を一致させ、データを変換します。

**Connect-It**のマッピングボックスにより、ターゲットコネクタは、ソースコネクタが生成したドキュメントを取り込むことができます。マッピングボックスは内



部ツールで、他のコネクタのようにドキュメントの生成や取り込みを行います  
が、外部アプリケーションには接続しません。



▶ ドキュメントタイプのマッピングの定義 [ 献 96].

## モニタ

モニタは、シナリオに関連付けられた監視ツールです。モニタによって、アプリケーションとそのコネクタによって提示される情報の流れと処理履歴データを有効化および管理します。

▶ 管理モニタの定義 [ 献 159].

## スケジュールのポインタ

スケジュールのポインタを使用すると、シナリオが処理するデータの量を少なくすることができます。

ポインタがレコードの最終変更日である場合、コネクタは最後の起動以降に作成または更新されたレコードのみを処理します。

シナリオがスケジュールモードで起動していると、生成用ドキュメントタイプのポインタのステータスにより、コネクタは前回のセッションで処理されなかったデータのみを処理できます。

例：

**Asset Management**コネクタは、最後のセッションで9時00分00秒に資産のテーブルのレコードを読み取ったとします。次のセッションでは、コネクタは9時00分00秒の後に作成されたレコード全てを読み取ります。

## 生成

生成とは、データをドキュメントに転換するために、ソースコネクタが外部アプリケーションからデータを読み取ったり受信したりするプロセスのことを指します。

▶ コネクタ [ 献 282].

## スケジューラ

スケジューラは、シナリオのソースコネクタの1つまたは複数の生成用ドキュメントタイプに関連付けられたタイマです。

シナリオのスケジューラを編集するには、**Scenario/Schedulers**メニューを選択します。

**Scenario Builder**には2つの既製スケジューラが付属しています。

- **Once**スケジューラ

このスケジューラは、シナリオのすべての生成用ドキュメントタイプにデフォルトで関連付けられています。

- **Synchronous**スケジューラ

このスケジューラにより、コネクタは毎秒ドキュメントを生成します。

▶ スケジュールポイント [ 献 77].

## スケジュール

**Connect-It**のスケジュールでは、統合シナリオのソースコネクタがいつドキュメントを生成するのかを設定できます。スケジュールを作成するには、ドキュメントを1つまたは複数のスケジューラに関連付けます。

スケジューラはタイマの役割を果たしており、コネクタが特定の日時に（例：2002年10月4日）、または定期的に（例：一定の期間内で2時間おき）ドキュメントを生成するように設定します。

▶ スケジュールの作成 [ 献 181].

## 照合更新

照合更新は、ソースアプリケーションから来る入力データの統合です。このデータは、ターゲットアプリケーション内の既存のデータよりも新しいと見なされています。

- 既存しない場合データは挿入されます。
- 答えが「いいえ」の場合、入力データが挿入されます。答えが「はい」の場合、入力データに含まれる情報に応じて既存のデータが更新されます。

処理は、「照合更新する情報がターゲットシステムに既に存在するか」という質問に基づいて行われます。

ターゲットアプリケーションが空である場合は、このプロセスは照合更新ではなく「インポート」になります。

## 統合シナリオ

統合シナリオにより、異種アプリケーション間で情報を伝達できるようになります。

シナリオを作成するには以下の手順に従います。

- 1 ソースコネクタとターゲットコネクタを選択します。  
原則として、使用するコネクタの数に制限はありません。
- 2 コネクタを設定します。
- 3 コネクタをリンクします。
- 4 ソースコネクタでは、生成用ドキュメントタイプを作成し、ターゲットコネクタでは取り込み用ドキュメントタイプを作成します。
- 5 ソースドキュメントタイプとターゲットドキュメントタイプ間のマッピングを作成します。
- 6 スケジュールを選択します。  
スケジュールは、シナリオのソースコネクタがドキュメントを生成する頻度を設定します。

Connect-Itは用例シナリオと共に提供されています。



### 警告:

用例シナリオは、多くの場合ユーザの特定の事例には当てはまりません。

## サービス

Windows下のサービスでは、バックグラウンドタスクとして実行されるアプリケーションを使用できます。Connect-Itを使用すると、シナリオごとに別のサービスを作成および起動できます。

## 実行結果

各セッション後に、Scenario Builderは、シナリオの各コンポーネントが処理したドキュメントの数に関する実行結果を取得します。例えば、Asset Managementコネクタが1セッション中に処理したドキュメントの数などです。

コネクタごとに実行結果を取得するには、ポインタをシナリオ図のコネクタの一番上の部分に置きます。

## 構造体

ドキュメントタイプ内の構造体は、この構造体を含むノードと1対1の関係であることを表しています。構造体を含むノードは、ドキュメントタイプのルートノード、構造体またはコレクションです。

---

例：

データベース内のテーブルに対応するドキュメントタイプでは、各構造体が別のテーブルに対応します。構造体は、2つのテーブル間のリンクが1対1であることを示しています。このタイプのリンクは、1番目のテーブルのレコード1つが別のテーブルのレコード1つにのみリンクされています。

---

## マップテーブル

マップテーブルは、あるコンテナの要素を別のデータコンテナの要素に対応させるテーブルです。

▶ マップテーブル [ 献 131].

## ビュー

シナリオ図のビューは、シナリオを見やすくするために使用されます。例えば、数十もの異なるツールを含むシナリオでは、これらのツールの一部のみを表示するビューを作成できます。

ビューの詳細については、「[Ergonomics \[ 献 41\]](#)」の章の「[Scenario Builder \[ 献 41\]](#)」の節、「[Scenario-diagramのビュー \[ 献 46\]](#)」を参照してください。

---

## 主要用語

### AQL

AQL ("Advanced Query Language") は、AssetCenterデータベースのデータにアクセスするために、AssetCenterが使用する言語です。これはSQLに匹敵します。クエリの実行時に、AQLはデータベースエンジンのSQL言語に自動的に変換されます。

### Blob

Blob (Binary Large Object) タイプのフィールドはバイナリデータ (サウンド、ビデオ、画像ファイル) のフィールドです。

## DSE

DSE (Directory Entry Service) は、LDAPディレクトリのツリー構造を構成するエントリです。これらの情報は、ツリー形式で表現されます。

LDAPディレクトリの各エントリは、抽象オブジェクトまたは実際のオブジェクト（人、物品、パラメータなど）に対応します。

## JCA

Sunによって完成され、JCAがインタフェース"Java Connector Architecture"を説明する一連のJava仕様をまとめ直します。

その主な目的は、サードパーティの技術に基づいたアプリケーションとJavaサーバが対話できるようにする規格の層を定義することです。

JCAは、接続インタフェースと標準コネクタの強化を目的とします。

## XMLスキーマ

XMLスキーマとは、XMLドキュメント内で使用される内容の定義です。XMLスキーマは、SGML規格のスキーマであるDTDのスーパーセット（上位集合）に当たります。

DTDと異なり、XMLスキーマは、DTDよりも冗長なXMLシンタックスで記述されます。

XMLスキーマは、全XMLツールで作成可能です。

## トランザクション

トランザクションは、情報の要求と応答など、コンピュータとユーザ間または2つのコンピュータ間のダイアログの要素です。

## グローバル変数

グローバル変数は、定義したモジュールのみでなく、あらゆるプログラム命令によって値をアクセスおよび変更できる変数です。

## XSL

XSL (eXtensible StyleSheet Language) は、XML用に特別に開発されたスタイルシート言語で、拡張できます。オフィシャルの基準とはみなされません。



# 索引

- .cfg, 72
- .ini
  - 宣言された接続, 272
- \$LinkedDoc
  - 処理レポート, 250
- \$ParentDoc
  - 処理レポート, 250
- \$ParentDoc\$
  - マッピングスクリプト, 247
  - 変数の使用, 238
- activate, 209
- dc, 208
- df, 209
- dm, 208
- forcecnx, 208
- openconnectors, 208
- svc, 208
- インストール, 15
  - UNIX, 19
  - Windows, 16
  - インストールされるプログラム, 37
  - インストールされるベースコネクタ, 32
  - インストール先フォルダのファイル, 31
  - オプションコネクタ, 33
  - データキット, 34
  - メンテナンスバージョン, 30
  - 追加コネクタ, 35
  - 内容, 31
- インストールされるファイル, 31
- インタフェース
  - Scenario Builder, 41
  - メニュー, 48
- オプション
  - Connector, 67
  - Display, 64
  - Documents, 70
  - Lists, 71
- オフライン, 253
- お気に入り, 216
  - 管理, 220
  - 再設定, 218
  - 削除, 219
  - 定義, 287
  - 編集, 216
- キャッシュ, 251
- キャッシュファイル, 251
- クエリ, 152
- グローバル変数, 132
  - カウンタ, 134
  - スクリプト, 133

- マッピングスクリプト, 158
- 宣言, 133
- 定義, 293
- 保存, 134
- コネクタ, 39
  - Asset Managementコネクタ - 各セッション毎の再接続, 262
  - Asset Managementコネクタ - 性能の向上\n, 266
  - Configurationウィザード, 59
  - Databaseコネクタオプション, 70
  - Delimited textコネクタオプション, 70
  - LDAPコネクタオプション, 69
  - ServiceCenterコネクタオプション, 69
  - XMLコネクタオプション, 70
  - オプションコネクタ - インストール, 33
  - オフラインで作業する, 253
  - お気に入り, 216
  - キャッシュオプションの使用, 260
  - キャッシュファイル, 251
  - サービスに関連付けられたコネクタを変更する, 254
  - スケジュール, 181
  - データベース型コネクタ - 性能の向上, 269
  - ドキュメント処理の改善, 265
  - ベースコネクタ - インストール, 32
  - リンク, 61
  - 機能概要, 39
  - 再設定, 60
  - 削除, 62
  - 自動再接続, 261
  - 実行されるクエリの検証, 258
  - 生成するドキュメント数の計算, 259
  - 定義, 282
  - 認証証明書, 30
- コマンドオプション, 202
- コマンドライン, 201, 180
  - once, 190
  - once -scheduler, 191
  - scheduler, 191
  - オプション, 202
  - スケジューラ, 189
- コレクション
  - コレクションからコレクションへのマッピング, 113
  - コレクションからドキュメントへのマッピング, 115
  - サブコレクションのマッピング, 114
  - データジェネレータ, 88
  - ドキュメントタイプの要素, 79
  - フィールドからコレクションへのマッピング, 116
  - 構成要素の結合 - 例, 148
  - 構成要素の作成 - 例, 146
  - 定義, 284
  - 複数のフィールドをマップする - 例, 149
  - 複製, 88
  - 例, 146
- サービス, 174
  - Windowsでサービスを作成する, 177
  - コマンドラインからのサービスの作成, 180
  - スケジューリング, 255
  - ログファイル, 256
  - 削除, 180
  - 接続のプロパティ, 178
  - 定義, 291
- サービスコンソール
  - メニュー, 176
  - 定義, 284
- サポートされる動作環境, 15
- シナリオ
  - Implementationウィザード, 59
  - インプリメンテーション, 59
  - キャッシュファイル, 251
  - コンソール, 254
  - コンポーネント, 60
  - テストとデバッグ, 221
  - バックアップコピー, 192
  - 関連サービス, 255
  - 処理レポートの使用, 236
  - 性能の最適化, 256
  - 生成モード, 199
  - 定義, 291
  - 保存, 192
- シナリオの履歴, 221
- シナリオ文書, 193
  - DBKフォーマット, 195
  - HTMLフォーマット, 195
  - XSLプロセッサの設定, 196
  - プロパティ, 196



- プロパティの編集, 196
- 既製XSLスタイルシート, 197
- 作成, 195
- 内容, 193
- 表示, 195
- スクリプトの例, 139
  - Basic関数, 139
- スクリプト定数, 136
- スケジューラ, 181
  - Web, 212
    - 定義, 290
    - 編集, 255
- スケジューリング
  - Web, 211
- スケジュール, 181
  - 定義, 290
- スケジュールのポインタ
  - 定義, 289
- スケジュールポインタ
  - ポインタの定義, 77
- セッション
  - セッション - オープン, 137
  - セッション - クローズ, 137
  - モニタ, 161
  - 管理, 171
  - 追加スクリプトの実行, 107
- セッションオプション, 161
- ダイナミックライブラリ
  - AIX, 20
  - Solaris/Linux, 19
  - 情報, 35
- ツール
  - リンク, 61
  - 削除, 62
  - 定義, 282
- ツールバー, 42
  - アイコン, 42
- テストモード, 254
- データ
  - プレビュー, 110
- データジェネレータ, 87
  - 定義, 288
- データベース, 271
  - 管理, 271
  - 作成, 274
- 情報の削除, 276
  - 設定, 271
  - 操作, 276
- ドキュメント
  - XML, 230, 79
    - アイコンの種類, 225
    - ドキュメントログ, 222
    - トラッキング項目, 231
  - パス, 106
  - 実行結果, 256
  - 取り込み, 263
  - 処理, 82
    - 詳細, 227
  - 詳細 - 検索, 231
  - 親ドキュメント, 229
  - 生成するドキュメント数の計算, 259
  - 生成の改善, 258
  - 定義, 285
- ドキュメントタイプ, 78
  - DTD, 87
  - Editウィンドウ, 82
  - Editウィンドウ - ショートカットメニュー, 95
  - データジェネレータ, 88
  - データを表示する, 93
  - ドキュメントタイプの要素, 79
  - パス, 105
  - マッピング, 96
  - 作成, 85
  - 自己生成, 84
  - 新しいドキュメントタイプのカスタマイズ, 74
  - 新しいドキュメントタイプの作成, 74
  - 親ノードと子ノード, 81
  - 生成用ドキュメントタイプのテスト, 250
  - 定義, 285
  - 分類, 108
    - 要素を検索する, 94
- ドキュメントログ, 222 (参考 Web)
  - モニタ, 161
  - 設定, 265
- トラッキング項目
  - Web, 214
    - 詳細, 233
    - 定義, 231

- トラッキング項目グループ, 166
- トランザクション
  - 管理, 264
  - 定義, 293
- パスワード
  - コマンドオプション, 208
  - ユーザ, 276
  - ユーザ (管理), 275
  - 管理者, 274
- ビュー, 46
  - 定義, 292
- フィールド
  - ドキュメントタイプの要素, 79
- フォーマット, 137
  - シンタックス, 138
  - 数値のユーザフォーマット, 138
  - 定義, 287
  - 日付型のユーザフォーマット, 137
- プログラム用参考ガイド, 137
- プロパティファイル, 206
- マッピング, 96
  - Actions - アイコン, 101
  - Blobタイプのフィールドのマッピング, 118
  - Editウィンドウ, 100
  - PIF関数, 143
  - コピー/貼り付け, 109
  - コレクションからコレクションへのマッピング, 113
  - コレクションからドキュメントへのマッピング, 115
  - ショートカットメニュー, 56
  - シンタックスエラー, 251
  - スクリプト, 124
  - スクリプト作成の手引き, 153
  - デバッグ, 251
  - データのプレビュー, 110
  - フィールドからコレクションへのマッピング, 116
  - フィールドからフィールドへの直接マッピング, 112
  - マッピングスクリプト内で要素を置換する, 111
  - マッピングの種類, 111
  - マッピングボックス, 97
  - マッピングボックスの設定, 97
  - 作成, 103
  - 削除, 105
  - 照合更新キー, 263
  - 説明, 108
  - 定義, 288
  - 非アクティブ化, 104
  - 複雑要素の自動識別, 105
  - 分類, 108
  - 文字列テーブル, 129
  - 編集, 99
  - 要素を検索する, 110
- マッピングスクリプト, 124
  - Additional scripts, 159
  - Edit mapping ウィンドウのショートカットメニュー, 156
  - カウンタ, 134
  - グローバル変数, 133
  - ソース要素とターゲット要素の位置を見つける, 154
  - ターゲット要素を複製する, 154
  - マッピングスクリプトのショートカットメニューを使用する, 156
  - 関連ファイルの作成, 125
  - 関連ファイルの編集, 124
  - 固定値をターゲット要素に関連付ける, 153
  - 作成の手引き, 153
  - 複数のフィールドをドラッグ&ドロップする, 153
  - 要素のパスをコピーする, 155
- マッピングの種類, 111
- マップテーブル, 131
  - 作成, 132
  - 定義, 292
- モニタ, 159
  - Databaseモニタ, 165
  - E-mailモニタ, 166
  - Filesモニタ, 164
  - MSDEデータベース, 18
  - ログ, 159
  - 設定, 160
  - 定義, 289
- モニタリング, 159
- ユーザ
  - パスワード (管理), 275
  - 管理, 275

- 削除, 275
- 追加, 274
- ユーザアカウント - サービス, 178
- ルール (ディレクティブ)
  - 定義, 285
- ローカル変数, 133
- ログ, 222
  - Events log, 170
  - ディスクストレージ, 225
  - トラッキング項目, 225
  - トラッキング項目 - 更新, 225
  - メモリを削除する, 225
  - モニタ, 159
  - 参照 (閲覧), 255
  - 設定, 224
  - 説明, 223
  - 定義, 288
- ログファイル, 256
- 外部アプリケーション
  - 定義, 281
- 関連ファイル
  - スクリプトの認証, 126
  - テキストエディタの設定, 127
  - テキストを編集する, 126
  - 開く, 126
  - 作成, 125
  - 削除, 126
- 構造体
  - ドキュメントタイプの要素, 79
  - 定義, 292
- 実行結果, 256
  - 定義, 291
  - 有効化, 162
- 取り込み, 263
  - 定義, 284
- 処理レポート, 235
  - フィードバックループ, 248
  - 機能概要, 249
  - 使用法, 236
  - 処理後のアクション, 240
  - 定義, 282
  - 入門プログラム, 243
  - 変数, 250
- 処理レポートの取り扱い, 242
- 処理後のアクション, 239
  - アクションの定義, 241
  - 定義, 281
- 処理履歴, 159
- 照合更新, 263
  - 定義, 290
- 照合更新キー, 263
  - フィルタ, 121
  - 機能概要, 120
  - 照合更新キーの重み, 122
  - 定義, 282
- 性能, 36
- 生成, 258
  - 定義, 290
- 生成用ドキュメントタイプのテスト, 250
- 接続
  - 作成, 272
  - 宣言, 272
- 設定ファイル
  - 編集, 72
- 認証証明書
  - 定義, 282
  - 入力, 30
- 文字列
  - Blobへの変換, 119
  - 結合, 130, 130
- 文字列テーブル, 129
- 文書
  - 定義, 286
- 変数
  - E-mailモニタ, 167
- 要素, 105
  - マッピングスクリプト内で要素を置換する, 111
  - 検索, 110
  - 定義, 287
- 履歴
  - 定義, 288

**A**

- Additional scripts, 159
- AIX, 15
  - ダイナミックライブラリ, 20
- AQL
  - 定義, 292

## B

Blob  
エクスポート, 119  
マッピング, 118  
定義, 292  
変換, 119

## C

Chr(), 130  
CloseSession(), 107  
Configuration file editor  
インタフェース, 72  
Confirmation - オプション, 66  
conitsvc, 202  
Connect-It Web, 20  
Connector - オプション, 67  
Contextファイル, 28

## D

DBK, 195  
定義, 284  
DBMS, 271  
Display - オプション, 64  
Documents - オプション, 70  
DSC  
定義, 286  
DSE  
定義, 293  
DTD  
コピー, 87  
定義, 79

## E

Else, 139  
Else If, 139  
End If, 139  
Ergonomics, 41

## F

For, 140

## I

If, 139

## Integration Pack

アンインストール, 18  
インストール, 16  
更新, 17

## J

JAAS, 26  
Java仮想マシン (JVM) , 63  
JCA  
定義, 293  
JDBC, 23  
JMV  
設定, 63  
JRE, 63

## L

Linux, 15  
ダイナミックライブラリ, 19  
Lists, 71  
Logs - オプション  
オプション, 71

## M

Manage processing reportsウィザード, 243

## O

OpenSession(), 107  
Options, 64  
Confirmation, 66  
Logs, 71

## P

PifIgnoreCollectionMapping, 146  
PifIgnoreDocumentMapping, 143  
PifIgnoreNodeMapping, 145  
PifRejectDocumentMapping, 144  
Pif関数, 143  
ProcessReport, 249

## R

Return, 142

## S

Scenario Builder, 48, 41  
Administrationメニュー, 53  
Displayメニュー, 50  
Editメニュー, 49  
Favoritesメニュー, 50  
Fileメニュー, 48  
Helpメニュー, 53  
Javaメニュー, 53  
Monitorsメニュー, 52  
Scenarioメニュー, 51  
Toolsメニュー, 52  
インタフェース, 42  
オプション, 64  
ショートカットメニュー, 54  
ツールバー, 42  
ビュー, 46  
ビュー - 使用上の規則, 48  
メニュー, 48  
ログ, 222  
定義, 287  
枠, 45  
Schedule pointer, 187  
Select, 142  
Service Console, 175  
Solaris, 15  
ダイナミックライブラリ, 19  
SuccessReport, 240  
System connection, 273

## T

Then, 139

## U

UNIX  
インストール, 19  
サポートされる動作環境, 15  
シナリオの導入, 200  
プロパティファイル, 206  
文字列, 131

## W

Web, 209, 20  
Webコンソール, 209

WHERE, 263  
While, 141  
Windowsイベント, 170

## X

XML  
定義, 79  
XMLスキーマ  
定義, 293  
XSL, 196  
定義, 293

